

偽装の結婚 第一部

琴乃つむぎ / WordsWeaver

## 第一章 契約

もう日が沈んで暫く経つというのに、屋敷の周囲が妙に騒々しい。

敷地を囲む塀の向こうから、人が動き回る気配が伝わってくる。

時折、衛士と思しき人たちの走り回る音や、笛の音、互いに呼び交わす声なども聞こえてくる。

何かあったのだろうか――屋敷のこの部屋にいてもこれだけ感じるのだから、何かあったのだろう。

アイオナは手許の台帳から顔を上げた。

台帳を照らしていた燈りに、その顔が浮かび上がる。白い肌と、癖のない濡れたような黒髪をしている。年はまだ若い。いまだ少女らしさを残した面立ちである。

しかしその青い瞳には強い輝きがある。確固たる己自身を持つ者の輝きだ。しっかりとした教育を受けた者の目と言ってもいい。

部屋の中は暗かった。手許の燈り一つだけでは、この広い部屋の隅々まで照らすには至らない。

燈りには油燈ではなく蠟燭を使っていた。

しかもアイオナが使っているのは蜜蠟の蠟燭である。蠟燭自体、ここらではあまり見ないのに、蜜蠟製の高級品を使っているのだった。

ここは南国である。燈火用の油が簡単に手に入るこの地域では、燈りと言えば一般的には火皿に油と燈芯を載せただけの油燈を意味する。

油燈に使われる油には、一般にはアルサムという植物の実から絞り出した物を使う。

アイオナが今居る都市よりもっと南の方に行けば、<sup>こうゆ</sup>鋤油とか、その仲間の<sup>でいゆ</sup>泥油といった油を使うことが多くなるが、ほとんどの地域では油燈の燃料にはアルサム油を使う。

アルサム油は燃料以外にも食料薬用美容用と、生活に欠かせない重要なものであるが、北の方ではアルサムの木を育てること自体が不可能な為、そうした地域では代わりに蠟燭が使われている事が多い。

だから今、蠟燭を使っているのはあくまでアイオナの趣味だと言える。

蠟燭には獣脂を使った物と蜜蠟を使った物とがあるが、アイオナが使っているのは蜜蠟の物だ。これは獣脂の物に比べて贅沢品で、広くは使われていない。

獣脂の物に比べて嫌な臭いが立ちにくく、油燈よりも火の管理がし易いという長所があるが高級品なのだ。普通は神殿や宮殿、富豪の屋敷などで使われる。

それ以外の、この部屋の燈りは全て油燈だった。

それらは壁にいくつも据え付けられた小さな台の上に置かれている。

燈芯に火を点じれば、壁に掛けられた精緻な綴れ織りや、棚に並べられた色とりどりの瑠璃細工、棘だらけの観葉植物などが浮かび上がるだろう。

家の商売柄、まったく見馴れていないわけではないが、それでもローゼンディア人たるアイオナには異国情緒が感じられたり、物によっては不可思議にさえ思える、南国アウラシールの品々である。

だが壁の油燈に火を点すことなど滅多に無い。この部屋の調度や装飾に比べたら、何ほどのものかと思われるかも知れないが、アルサム油はあらゆる用途に使う為、十分売り物になるのである。しかも使えば無くなる。

吝嗇をしているつもりは無いが、不必要なことはすべきではないし、無駄は極力省くべきだと思っているのだ。

そもそも燈りを使わねばならぬ時間というのは、本来、床に就いているべき時間である。燈りを点して夜更かした挙句、朝寝をしようものなら、太陽神アクシオンの恵みを蔑ろにする罰当たりと罵られても、文句は言えない。

アイオナとて普段ならば、もう寝ている時間である。しかし今日は店に大規模な納品があった。

いくら遊びに来ているからといって、皆が忙しく働いているところに、ひとりのほほんとしているわけにもいきまい。アイオナは納品物の確認作業を手伝い、そして今、台帳に目を通していているところなのだった。

……と言えは聞こえはよいが、実際のところは興味本位である。この店では、酒、塩、油、香辛料、壺や皿などの器物、そして織物、細工物など、様々なものを取り扱っている。

その中には見るだけでも興味深い、珍しいものも少なくない。

日中の確認作業でいくつか目にしていたが、すべての納品物を確認したわけではなかった。まだ何かあるはずだと台帳を調べていたら、こんな時間になってしまったのだ。

外から聞こえてくる音の中には、かなり遠くと感じるものもま雑ざっていた。

どうも市内でなにかあったようだ。外の様子が気になってアイオナは立ち上がった。

するとは お羽織っていた衣がずり落ちかけて、あわ慌てて掻き合わせた。

その下は、たけ丈の長い薄手のかんとうい貫頭衣である。ローゼンディア人の女性の衣装としては一般的なものだった。

日中ならばそれだけでよいが、日が落ちたら何かを羽織らなければさすがに寒い。

それでもアウラシール特有の、日干し煉瓦<sup>れんが</sup>造りの重厚な家の中では、まだ一定の温度が保たれている。

外はこんなものではない。季節にもよるが、概して昼は暑く夜は寒い。一日の温度差が激しいのだ。

アイオナの故郷のような判り易い四季はなく、季節は雨期と乾期の二期で区別するのが普通らしい。

アウラシールは広いので一概には言えないが、大体どこでも夏の暑さは想像を絶する。

対して冬の寒さは夏に比べれば地域差がある。

アイオナが今居る都市アンケヌでは冬の寒さはそこそこだが、やはり冷え込みが急激に来るので、かなり寒くなったと感じる事が多い。

ローゼンディアでも穏やかな気候の地域である、カプリア地方で育ったアイオナにとっては、まったく信じがたい気候である。

部屋の扉が<sup>たた</sup>叩かれた。

アイオナはどきりとした。

「……お嬢さん？」

扉の向こうから、<sup>ためら</sup>躊躇いがちに声がかかる。聞き慣れた声だ。

「どうぞ」

「失礼します」

扉が僅かに開き、小さな灯りと共に、茶色い髪の男が顔を覗かせた。

この屋敷と店を切り盛りしている、ヒスメネスである。

アイオナより五つほど年上の二十二歳、若いながらもアイオナの父の片腕で、この異国に開いた出店を任されている。

商売人だが、客に媚び諂うような下品さはどこにも無い。ものの価値を正確に見定めるような、ともすれば冷たくも見える目をしている。

その涼やかな顔付きからは、相変わらず何も窺えないが、用も無しにアイオナの居室にやってくるようなことはない。おそらくは外の騒ぎのことだろう。

「何かあったの？」

「区内に、アウラシール人の強盗殺人犯が逃げ込んだとのことですよ」

アイオナは息を呑み、僅かに身を顫わせた。

ヒスメネスは顔色も変えず、落ち着いた様子である。とはいえ事の重大さを理解していないわけではないのだろう。顔に出さない男なのだ。

「屋敷内の警備を強化しましたので、大丈夫かと思いますが、一応、部屋からお出にならないように」

「ええ」

アイオナは<sup>うなず</sup>頷いた。

辺りを強盗殺人犯が徘徊<sup>はいかい</sup>しているというのは良い気分ではないが、押し入られることはまずないだろう。大きな商家ならどこでもそうだが、この屋敷も例に漏れず、幾人もの屈強な傭兵たちに常時<sup>まも</sup>衛られているのだ。

アイオナの頷きを認めたヒスメネスは、一瞬、机の上の台帳に視線を飛ばした。

アイオナはそれを察して、

「大丈夫よ。約束通り、明日には返すから」

台帳はヒスメネスが管理している。他の者がおいそれと見られるものではない。が、アイオナは店主の娘である。無理を言ってみさせてもらっているのだ。

ヒスメネスは小さく頷き、扉を閉めて去っていった。

アイオナは机に向かい、再び台帳を調べ始めた。後少しで終わる。さっさと終わらせて寝てしまおう。

そして<sup>ほど</sup>程もなく調べものを終わらせると、アイオナは床に就いた。

目を閉じて眠りの訪れを待つ。

その間、明日のことを考えた。



明日はヒスメネスにお願いして、台帳で目星を付けたものを見せてもらおう。

一つ目猫<sup>レ ム</sup>の毛皮、大蜥蜴<sup>ジビルアヌ うろこ</sup>の鱗、タムタラット鉱山の貴石タムシャラン、伝説の悪龍ヴァヤオーンが描かれている壺<sup>つぼ</sup>……と、目星を付けたものを頭の中で確認していく。すると妙に昂奮<sup>こうふん</sup>してきて、眠りは一向にやってくる風もない。何も考えないようにすると、今度は外の騒めき<sup>ざわ</sup>がいやに耳に入ってきて、神経<sup>さかな</sup>を逆撫でする。

アイオナはぱちりと目を開いた。

辺りは真っ暗闇である。

まったくの夜である。

それなのに……

——眠れない。

夜に眠れぬとは間抜けな話であった。夜は寝るべき時間なのだ。

おそらく台帳調べに精を出しすぎたからだろう。まだ気持ちがいっしょに働き続けているのだ。

アイオナはむくりと起き上がり、手探りしながら蝋燭に火を点け、上着を羽織って部屋の外に出た。

——部屋からお出にならないように。

ヒスメネスの言葉が脳裏をかすめたが、何も夜の散歩をしようというのではない。向かうのは屋敷の台所だ。台所はこの家の広さに合わせて結構広く作

られており、むしろ調理場と呼ばれることが多いが、つまりは食事を作る場所だ。水場の近くにある。

そこで果実酒を飲んだらすぐに戻るのだ。果実酒を飲めばきつと眠れるに違いない。

部屋のすぐ外は、中庭とひと続きになっている廊下である。まだ寒さを感じる時季ではないはずだが、やはり昼間に比べて急激に気温が落ちているためか寒く感じる。

それとも温かい寢床から出てきたばかりだからだろうか。

それとも……ヒスメネスの言葉が怖気を感じさせているのか。

いくつかの考えが過ぎるが、とにかく廊下は真っ暗であった。手持ちのあか灯りがあまりにも頼りない。

闇の中、人気のない中庭は不気味だった。皆寝静まっているか、でなければ部屋でじっとしているのだろう。静かなのは当然だった。

民話や古代の記録に出て来るような、怪異の類にでくわ出遇したとて、不思議はない気がした。もちろん出来るだけ出遇したくないものであったが。

アイオナは闇の中を足早に突っ切り、台所へ向かった。

これも当たり前だが、台所には誰もいなかった。

そして広いだけに寂しい感じがして、少し不気味でもある。

後片づけもきちんとされていて調理の際に出るゴミなどもない。

これはと思って戸棚を調べたが、果実酒どころか、食べ物ひとつ見当たらない。

どうやらこの屋敷では、屋敷内の人間に対する警備も怠りないようである。

当然と言えば当然だ。管理しているのはあのヒスメネスなのだ。

となれば食糧貯蔵庫にも鍵はかかっているはずで……と、アイオナは、台所の奥にある食糧貯蔵庫を恨めしげに見遣った。

そして目を見張った。

食糧貯蔵庫の鍵が開いている。

アイオナは身体を硬張らせた。

途端、大きな力に襲われた。

口を塞がれ、後ろから抱き付かれた。いや拘束するように締め付けられた。

まずいと思った。とにかく暴れようと思った。しかし突然の事態に混乱して体が思うように動かない。

<sup>あか</sup>灯りは落としてしまったらしい。だが落としたという記憶がない。

真っ暗で何も見えない。

急に恐怖が全身を包み込んだ。心臓がどくどくと激しく脈打っている。

「危害を加えるつもりはない」

耳許でささやかれた。ローゼンディア語だった。少しアウラシール風の<sup>なまり</sup>訛がある。おそらく、この男が普段使っている言葉はイデラ語であろう。

——アウラシール人……。

思った途端に、ヒスメネスの言葉が<sup>いなづま</sup>稲妻のように<sup>よみがえ</sup>甦った。

——アウラシール人の

——強盗殺人犯が

「大人しくするならば危害は加えぬ。お前<sup>しだい</sup>次第だ」

イデラ語とはアウラシール語の一種であり、この都市アンケヌの公用語である。

広大なアウラシールでは大別して三つの言語が話されている。

西部のイデラ語、東部のハルジット語、そして南方アウラシール語である。

これら三つの言葉の母体となったのはアウラシール語であるものの、それぞれの地域性はかなり大きく、互いの意思疎通には通訳が必要になる。

そしてこのアンケヌはイデラ語圏に入る都市である。

付け加えるならば、アンケヌの言葉はイデラ語のアンケヌ方言である。

それにはダルメキアやローゼンディアの言葉もかなり影響している。ダルメキアはここから西に進んだ先にある国で、ローゼンディアと同じくミスタリア海に面した国である。

言葉の影響は交易都市という性質からくるものであるが、市民の中には複数の言葉を操れる者も珍しくはない。

アイオナ自身、ダルメキア語とイデラ語を話すことが出来る。

だが今は、相手のことを考えて言葉を選択出来る余裕はなかった。

恐慌状態にある頭の中に、男の言葉が冷たく入ってくる。

「お前らの神、ヴァリアは、契約の神だったな？  
ヴァリアに誓え。叫ばない、暴れない、人を呼ばないことを誓え。誓うのなら頷け」

取り敢えず、男の言葉に従った方がよいだろう。  
というかそれしかない。

アイオナは頷いた。

「誓いを破ったら<sup>くび</sup>頸を<sup>へ</sup>押し折るからな」

アイオナは何度も頷いた。

すると体を締め付けていた腕が弛<sup>ゆる</sup>み、口を塞いでいた手が離れた。

アイオナは息を吐いた。

取り敢えず頸<sup>つな</sup>が繋がったのだろうか？

そう考えていると、口を塞いでいた手が今度は頸に添えられた。

大きな手だった。力を籠<sup>こ</sup>めれば、本当に自分の頸など押し折ることが出来るかも知れない。

「悪いが、完全に信用したわけではないのでな。このまま話を聞いてもらおうか」

どうやら信用されてはいないらしい。

腹立たしいことではあるが、そんな気持ちにはならなかった。それどころではないのだ。

アイオナは静かに深呼吸した。

とにかく落ち着かなくては。頭を働かせなくては。

男はすぐさま自分を殺さなかった。容易にそう出来たのにそうしなかった。

それはつまり、今のところ自分を生かしておかねばならぬ理由があるのだ。

男がこれから話すことはそれに関係しているに違いない。慎重に受け答えしなければならない。

「俺は今、追われている」

案の定だ。ヒスメネスが言っていた強盗殺人犯に  
違いない。

おおかた かくま  
大方、**匿**えとでも言うのだろう。

アイオナの居る都市、アンケヌは、ナバラ砂漠の  
真ん中に位置する交易都市である。

都市の支配者はアウラシル人であるが、交易都  
市という性質上、外国人の数が多く、また長期に  
わた  
**互**って留まる者も多い。

自然、外国人居留区が形成されることになる。

すでにそうなってより二百年。アンケヌではダル  
メキア人居留区、ローゼンディア人居留区がそれぞ  
れ存在し、それなりの自治権を与えられているの  
だった。

都市の王としても、これら外国人居留区にはおい  
それと手は出せない。無理に圧力を掛ければ、富を  
もた  
**齎**らす交易商人たちが、他の都市に逃げ出してしま  
おそれ  
う**虞**があるからだ。

アンケヌの地位を狙うオアシス都市は、ナバラ砂  
漠の中だけでも他に幾つもある。これらの都市もま  
た**交易**でうるお潤っており、そして**更**さらなる富を常に求めて  
いる。

ナバラ砂漠中最大の交易都市であるアンケヌは、  
目標であり、最大の好敵手というわけなのだった。

この男がここに逃げ込んだのは偶然であろうが、

ローゼンディア人居留区に逃げ込んだのは、偶然ではないだろう。

ローゼンディア人の誰かに手蔓<sup>てづる</sup>があるのかも知れない。

なんらかの保護を取り付けられれば、都市の警吏<sup>けいり</sup>とてそう簡単には手が出せない。その際に逃げ延びようという魂胆<sup>こんたん</sup>ではないだろうか。

とはいえ強盗殺人犯だ。国や民族<sup>かかわ</sup>に拘らず、危険人物であることには変わりない。ローゼンディア側とて、そんな人間を区域に野放しにしておけないだろう。アウラシール側に要請されるまでもなく、犯人捕縛に力を入れているに違いない。

尤も<sup>もっと</sup>、ローゼンディア人居留区の自警団は、交易商人の傭兵たちが主体だ。

あくまで手の空いている護衛たちの片手間なので、自分たちの利害に絡むのでもない限りは、本腰を入れて搜索はしないだろう。

してみると、この区域には男の知己<sup>ちき</sup>、それも交渉可能なローゼンディア人の誰かが居ることになる。

かくま  
「匿<sup>かくま</sup>ってもらいたい」

アイオナは無言で頷いた。

迷惑な話だが、今は頷くしかない。こんな状況で否<sup>いな</sup>と言えるはずがない。否と言えれば殺されるに決まっているのだ。



今はこの状況を切り抜けることだけを考えればよい。この男を警吏<sup>けいり</sup>に突き出すのは、自分の生命<sup>いのち</sup>の確保が出来てからでよい。

「無論、十分な見返りは用意してある。匿う振りをして警吏に突き出されては、堪らんからな」

アイオナは頷き、ささやいた。

「……誰に話を伝えればいいの？」

「何のことだ？」

男は不思議そうに尋ねてきた。

「当てがあるんでしょ？ その人物にあなたのことを話せばいい——違うの？」

「……なんでそう思う？」

「でなければ、あなたがここにいる理由が無いわ。おそらくその屋敷まで辿り着けず、我が家に避難した——そんなところじゃない？」

男は答えなかった。アイオナは不安になった。余計なことを言ってしまったのだろうか。

不意に男の手が頸を離れた。押し殺したような小さな含み笑いが聞こえた。背中に押しつけられた男の体が震えている。笑いを堪えているようだった。

「何が可笑しいの？」

戸惑いながら聞いた。

「すまん……お前があんまりおもしろいことを言うものだからな」

「おもしろい？ ……わけがわからないわ」

「声が硬いな。俺が恐いか？」

何を言っているのだろう、この男は。

アイオナは戸惑いつつも、苛立ち<sup>いらだ</sup>を感じ始めた。

「いきなり拘束されて、頸を押し折るとまで言われたのよ。恐くないわけじゃない」

「そうだな。悪かった」

アイオナは我が耳を疑った。

——悪かった？

なんだそれは。強盗殺人犯が言うことじゃない。

「恐がらせたくはなかったが、こういう手段を取らざるを得なかった。見ず知らずの人間が夜中に家に居たら、明らかに怪しいだろう？」

「実際は怪しくないとでも言いたげな口振りね」

男はまた小さく笑った。

「俺のこと、なんだと思っている？」

「強盗殺人犯だって聞いたわ」

「ふん。そうらしいな」

「違うの？」

「違うと言えば信じるのか？」

なんだかいちいち癩<sup>かん</sup>に障<sup>さわ</sup>る男だ。

「わたしに危害を加えないのなら、なんだっていいわ」

男は笑った。

「ローゼンディアの女は女のくせに生意気だと聞  
が……お前、おもしろいな」

アイオナはむっとした。

——女のくせに。

ローゼンディア以外の男は、その言葉をよく使  
う。どうも彼らには、女よりも男の方が偉いと思っ  
ているような<sup>ふし</sup>節がある。なんでそう思えるのか、理  
解不能だが。

「なあ……」

男はおもむろに口を開いた。

「俺と結婚しないか？」

アイオナは目が点になった。

この男は今なんと言った？

けっこん……？

結婚——!?

そんなこと初めて言われた——いや、そうではな  
くて——ついさっき初めて出逢った、それもやけに  
<sup>ぶっそう</sup>物騒な出逢い方をした男と、なんで結婚しなければ  
ならないのか——とか思いつつ、なんで自分はこん  
なにどきまぎしているのだろう。わけがわからな

い。

とまれ、何かしら裏があるに違いない。

「……ど、どういうつもり？」

なんとか声が出た。

男はアイオナの耳許に口を寄せ、その印象的な声でささやいた。

「お前が気に入った」

アイオナはどきりとした。

ローゼンディア語ではなく、アンケヌ方言のイデラ語だった。

「かつ……<sup>からか</sup>擲揄わないで！」

「別に擲揄ってはいないさ。気に入らなければこんな提案はしない」

と、今度はローゼンディア語でぬけぬけと言う。

状況に応じて言語を使い分けている辺り、確信的にやっているに違いない。腹立たしいことだ。

「お前、結婚してないよな？」

ローゼンディアでは一夫一婦制だが、アウラシールでは地方によって一夫多妻制が認められている。どちらであれ、女性は複数の夫を持つことが出来ない。アイオナが既婚者なら男とアイオナは結婚出来ない。

「……どうかしら」

「<sup>とぼ</sup>呆けるなよ」

男は苦笑した。

アイオナは羞恥しゅうちを感じた。

呆とぼけるだけ無駄らしい。完全に見抜かれている。

「俺にとってもお前にとっても悪い話ではないと思う。お前の読みでは、この近くに俺の身を護まもってくれそうな人物の当てがあるんじゃないかってことだったが、そいつは深読みってもんだ。俺にはなんの当ても無い」

アイオナは驚いた。

「そう。随分ずいぶんと無謀ね」

男は苦笑したようだった。

「……俺もそう思う」

なにやら自嘲的である。

「ともかくそういうわけで、俺はお前を当てにするしかないんだ」

「当てにされても困るんだけど……拒否したら殺すんでしょ？」

男は咽のどの奥で低く笑った。

「物分かりがよくて助かるが、俺としてはお前を殺したくはない。かと言って無理強いもしたくはない。しかし、状況が決めたことには逆らえない」

つまり、この男の意思も、アイオナ自身の意思も、ふたりを取り巻く状況とは関係が無いのだ。その状況に従うより外無いのだ。

アイオナが男に協力しなければ、男はアイオナを殺さざるを得ない。

それは変えられない。

今夜のことは他言禁止ということで、見逃してもらえばよいという問題ではない。

見ず知らず、赤の他人のふたりには、なんの繋がりも無い。相手を信用出来るだけのものが何も無い。それでも信用出来るというのは、よほどのお人好しか、ただの馬鹿だ。

——利害の無い関係なんて、ありませんよ。

とは、ヒスメネスの言葉だ。

さすがにそこまではどうかと思うが、ヒスメネスらしい考え方だ。

ともあれ状況に従うより外無い。外は無いのだが、そこに自由意思を参加させることは可能だ。

無理強いはしたくない——と、この男は言った。それはつまり、アイオナの自発的な協力を求めているのだ。無論、双方にとってその方がよいに決まっている。

となれば取り引きだ。

「それで、わたしにどんな得があるっていうの？」

「お前の身を<sup>まも</sup>護ってやろう」

アイオナは鼻で<sup>わら</sup>嗤った。

「そのどこが得なの？ 夫が妻を護るのは当たり前」

前じゃない。愛してもいない、どこの馬の骨とも判らない、それどころか強盗殺人犯な男と、わたしは結婚しなきゃなんないのよ？ それに見合うだけのものを用意してもらわないと、話にならないわ」

「あのな……」

溜息ためいき混じりに、男は呆あきれたような声を出した。

「何も本気で結婚しようってんじゃないんだ。アウラシール人の俺が、ローゼンディア人のお前と結婚すれば、ローゼンディア人の夫という立場を手に入れられる。そうなればこの居留区に居られるし、アンケヌの奴らは俺に手を出しづらくなる。それだけのことだ。俺の身の安全が確保出来たら、すぐに解消してやる」

「そんなことは解ってるわよ。でも形式とはいえ、結婚は結婚よ。世間的にはわたしが既婚者になることに変わりはないわ。あなたとの偽装結婚の所為せいで、わたしの未来の本当の結婚に差し障りさわが出ないとも限らないわ」

我ながら相手の足許を見ている言い分だと思う。しかし、女なら誰もがそうであるように、自分とて結婚には思い入れがあるのだ。愛する男と結婚して、幸せな家庭を築きたいと願っているのだ。拘束されて、偽装結婚させられて、その上本当の幸せまで踏み躪にじられるなんて冗談じゃない。

「そこまでの面倒は見切れんな……と、言いたいところだが、まあよかろう。お前の本当の結婚相手くらい、世話してやってもいい。——それで満足か？」

「……そうね」

「何やらまだ不満げだな。——いいか？」

男は低い声を出した。

「この取り引きで、俺はお前に絶対に損はさせない。絶対だ」

やけに力の籠<sup>こ</sup>もった言葉である。

いい男の当てでもあるのだろうか。

それならそれで願ってもない。

大伯母や父が見つげてくる男には、<sup>ことごと</sup>悉くうんざりしていたところだ。

あの二人は知性もあり、人を観<sup>み</sup>る目も確かなはずなのに、どうしてああ、妙な男ばかりを紹介してくるのだろうか？ アイオナにとって全くの謎だった。

アウラシールに遊びにやってきたのは、そんな見合いから逃げてきたというのものもあるし、ここなら良い出逢いがあるかも知れないという期待もあつてのことである。

「……まあいいわ」

「これで取り引き成立ってことでいいか？」



「待って。その前に顔くらい見せてよ。名前すらまだ聞いてないわ」

「そうだったな」

そこで<sup>ようや</sup>漸く、男はアイオナから離れた。

何やらごそごそやっていたかと思うと、石を打ち付けるような音と共にぱっと火花が飛び散った。それから<sup>しばら</sup>暫くして、<sup>ろうそく</sup>蝋燭に火が<sup>とも</sup>点された。アイオナが持ってきた燈りである。落として消えていたのを男が拾ったのだ。

蝋燭の<sup>ひ</sup>燈とはいえ、暗闇に慣れた目には充分に<sup>まぶ</sup>眩しい。幾度か目を<sup>しばたた</sup>瞬いてから、光に浮かび上がった男の顔を見遣った。

アイオナは息を呑んだ。

さぞかし品の無い、<sup>あくらつ</sup>悪辣な顔をした男だろうと思っていたのだが――

美形だ。

アウラシール人らしい、すっきりとした目鼻立ちをしている。黒い<sup>まつげ</sup>睫毛に縁取られた目はくっきりとしており、その奥に黒曜石の輝きを<sup>たた</sup>湛えている。全体どこか<sup>けだる</sup>気怠げな感じで、黒く長い髪は、さも<sup>うっとり</sup>鬱陶しげにぞんざいに束ねられている。年の頃はヒスメネスと同じくらいに見えた。

しかし、その姿を目の当たりにしても、いまいち<sup>すじょう</sup>素性の窺えぬ男だった。戦士という感じはしない

し、商人という感じもしない。

「惚れたか？」

男は<sup>からか</sup>擲うように言い、意地の悪そうな笑みを浮かべた。

アイオナは我に返って頬を朱に染めた。

「なんなら、本当に結婚してやってもいいぞ。妻の一人や二人養えるだけの<sup>かいしょう</sup>甲斐性はあるつもりだ」

アウラシール人らしい<sup>いいぐさ</sup>言種である。

アイオナは男を<sup>にら</sup>睥んだ。

「<sup>うぬぼ</sup>自惚れないで！ それから勘違いしてもらっては困るんだけど、結婚してやるのはわたしの方なんだからね」

「解っているさ」

男は不敵な笑みで<sup>こた</sup>応える。アイオナの反応を<sup>たの</sup>愉しんでいるのだ。アイオナはますます不機嫌になった。

「俺の名はダーシュ。ダーシュ・ナブ・アザル・ナブ・イシュク・アヌン＝ダナンだ。お前の名は？」

アウラシール人の名前を聞くたびに毎回思う事だが、どうしてこう名前が長いのか。

しかも規則性は一応あるものの、ある程度の自由度があり外国人には判りにくい。

無論アイオナは名前それぞれに来る単語の意味を知っている。一度にずっと全体を把握出来るほどに

この文化に慣れていない。

知ってはいるが少し考えないといけないのだ。

まずこの地域の人々には五種類の名前がある。

最初に本人の名前を表すアクル。これは親に付けられた名前であり、アウラシール人は親から付けられたその名前を一生名告って生きる。

幼名と成名を持つローゼンディア人とはそこが違う。ローゼンディア人は生まれた時に親から幼名を与えられるが、成人すると自分で好きな名前を名告るのが普通だ。

次に親子関係を表すウルグとケザム。ウルグは自分が誰の親かを示すものであり、ケザムは逆に自分が誰の子供であるのかを示す。

アウラシール人の名前ではケザムはかなり重要である。若い男ともなれば尚更だ。

だからアイオナはケザムの位置に来る人名を注意深く聞き取るように心掛けた。

そして出身地や部族、家名を表すルタリ。最後に尊称とも言うべきクメニがある。

一般的には、アクル・ウルグやケザム・ルタリ、という順番で名告<sup>な</sup><sup>の</sup>られる。

今の例で言えばダーシュがアクルで、ナブ・アザルはアザルの息子、ナブ・イシュクはイシュクの息子という意味であり、順序から言ってアザルが父

で、イシュクは祖父である。

最後のアヌン＝ダナンはダナン族を表す。アヌンは冠詞である。

「さあ俺は名告ったぞ。お前の名を聞かせて貰おうか」

「アイオナ。アイオナ・リリア・メルサリス。トリュネイヘーレイよ」

アイオナが成人名、リリアが幼名になる。ローゼンディアでは成人の場合、自己紹介で幼名は省略されることが多いのだが、アイオナは状況を考えて正式に名告ったわけである。メルサリスは家名であり、氏族名ではない。

ローゼンディア人は一部の高位貴族を除いて、通常は家名の方を名告り、氏族名は名告らない。

これは氏族名を軽んじているのではなく逆である。

氏族の始まりには必ずその出現に関わった神が<sup>いま</sup>坐す。その神の名こそを誇るのである。

「トリュネイヘーレイよ」

アイオナはもう一度言った。

トリュネイヘーレイとは『トリュナイアの子ら』という意味のローゼンディア語であり、自分の血の深源がいかなる神であるのかを示すのは、ローゼンディア人として当たり前のことであった。

「トリユネいへーレイ？」

男、ダーシュは不思議そうに首を傾げた。

「トリユネいへーレイ……そうか、お前たちローゼンディア人は氏族神の名を冠するのだったな」

思ったより教養のある男のようだ。強盗殺人犯の割には見識があるのかも知れない。

普通はトリユネいへーレイと名告<sup>な</sup>つても、何も知らない外国人には理解出来ないのだ。

アイオナの母国、ローゼンディアは神々に守護された王国である。

全てのローゼンディア人が何らかの神の血を引いていると言っている。

特に神々の血を色濃く受け継いでいるのが王族を含めた貴族たちであるが、そうではない平民たちもまた、自分の血を溯<sup>さかのぼ</sup>れば何れかの神に辿<sup>い</sup>り着くことを知っている。

そしてそのことを誰もが誇りにしている。

メルサリスは海の女神トリユナイアの系譜に連なる一族だ。

アイオナの祖父の代までは貴族でもあり、神殿への奉仕なども受け持っていたが、父の代からは貴族の籍から外れている。

正確に言えばアイオナの父ファナウスは準貴族という身分なのだが、その子供であるアイオナは完全

に平民である。

ただし母方の家系で言えばアイオナ自身が準貴族になる。

つまりアイオナの母は貴族、父は準貴族ということである。

ローゼンディアでは慣習上も法律上も、父系も母系も同一に扱うので、その子供が二つの身分を所有するという事が起こりうる。

この場合どちらかの身分を選ぶということはない。状況に応じて身分が定まることになる。

普段は父方の姓で暮らすアイオナは、平民ということになるわけだが、母方の一族の集まりでは準貴族として扱われることになるわけである。

そして普段平民として暮らしているからといって、神々を敬<sup>うやま</sup>う心が薄れることなどあり得ない。

そこで外国人を前にしても、いつものように海の<sup>トリユ</sup>女神の末裔と名告ってしまったわけだった。

「待て……するとお前は何の神の末裔なんだ？」

「海神よ」

「海神？ お前たちの海神はゼーフルではないのか？」

海神ゼフルは広くミスタリア海を中心とした地域で知られている。

だからその信仰はローゼンディア人にとどまらな

いとはいえ、こんな内陸の、しかもアウラシール人が名前を知っているというのも少し妙な気がした。

商人でもない限り、普通、他国の宗教になど人は興味を持たないものだ。

この男、元は商人なのだろうか？

少し興味が出てきたが、アイオナは尋ねるということはしなかった。こんな状況で要らぬ好奇心を見せるのは、とても危険なことだし、馬鹿げた行為だと思う。

「……海には多くの神々が<sup>いま</sup>坐すのよ」

「そういうものか」

ダーシュはそれ以上興味が無いらしい。納得したように頷いた。

「では、神の御名の<sup>もと</sup>下に誓いを立てよう」

ダーシュは威儀を正してアイオナと正対し、腰には<sup>は</sup>佩いた剣を抜いた。蝋燭の淡い光を<sup>は</sup>撥ね返し、刃は鋭く輝いた。

アイオナは息を呑み、思わず<sup>あとずさ</sup>後退りそうになった。

この男は強盗殺人犯なのだ。

本当にそうなのかは判らないが、もし本当だとしたら、今夜この剣で人を殺してきたということになる。

そう考えたら、血の気がすうっと足の方へ<sup>ひ</sup>退けて

いく感じがした。

でも――

本当に？

肉を断ち、血を吸った刃にしては、綺麗な<sup>きれい</sup>のではないか？

いくら丹念に拭<sup>ぬぐ</sup>っても、血の汚れはそうそう綺麗に落ちるものではない。鯉口<sup>こいくち</sup>の辺り、柄<sup>つか</sup>の装飾の辺りには、絶対に残る。

「どうした？」

訝<sup>いぶか</sup>しげなダーシュの声で、アイオナは我に返った。どうやらダーシュの剣に見入っていたらしい。

アイオナはダーシュを見つめて言った。

「あなた、本当に強盗殺人をしたの？」

ダーシュはアイオナを見つめ返し、小さく笑みを浮かべた。

「そうか。それでやけに熱心にこの剣を見ていたわけだな」

ダーシュは剣の柄をアイオナに向け、差し出した。

「見たいのなら見てみればいい」

アイオナは剣とダーシュを交互に見た。

「まだ契約前よ。わたしに武器を渡してしまってもいいの？」

ダーシュは鼻を鳴らした。



「女如きに遅れは取らん」

女如きとはまた聞き捨てならぬことを言ったが、それは無視して、アイオナは差し出された剣を見つめた。

——人を殺したかも知れない剣。

そんなものに触るのは気持ち悪いが、そうも言うてはいられまい。

アイオナは意を決して剣を受け取った。ずしりとした重みが両腕にかかった。

取り立てて長大な剣というわけではない。よく目にするほどのものだ。それでも女のアイオナには充分に重い。こんなもの、よくもまあ振り回せるものだと思う。

蝋燭に近づけてよくよく調べる。綺麗なものだった。どこにも血の跡は見られない。

アイオナは確信した。

この剣はまだ人の血を吸っていない。

この男は強盗殺人犯なんかじゃない。

アイオナの心に暖かなものが満ちた。

「もういいわ」

アイオナは剣を返した。

ダーシュは無言で剣を受け取ると、剣先を天に向けて翳<sup>かざ</sup>した。

「我、ダーシュ・ナブ・アザル・ナブ・イシュク・

アヌン＝ダナンは、アルシャンキ、シャル、ナイに誓う」

アルシャンキは都市アンケヌの主神、シャルは太陽神、ナイは月神である。

「<sup>かりそ</sup>仮初めの結婚の見返りに、アイオナ・リリア・メルサリスの身を護ること、その本来の結婚相手を世話することを誓う」

アイオナは胸に手を当てた。

「我、アイオナ・リリア・メルサリスは、ヴァリアに誓う。ダーシュ・ダナンと仮初めの結婚をし、それによりその身を護ることを誓う」

長い名前をすぐには憶えきれないので、アイオナは最後の氏族名だけを口にした。

父系の伝統を誇るアウラシール人だけに不快さを示すかと思われたが、別段男にそんな様子は見られなかったのでアイオナはほっとした。

誓いを立て合うと、契約成立を確認し合うように、ふたりは見つめ合った。

「さて妻よ」

言いながらダーシュは剣を<sup>おさ</sup>収め、

「夜も<sup>ふ</sup>更けたことだし、<sup>やす</sup>寝させてもらえぬかな？」

早くも<sup>ていしゅづら</sup>亭主面をする。

そんなダーシュにアイオナは不快感を<sup>あら</sup>露わにしつつ、

「<sup>っ</sup>従いて来て」

さっと背を向けると、足早に台所を出た。

## 第二章 朝

言い争うような声、ばたばたと廊下を走り回るような音がする。

——ああもう、うるさいなあ……。

アイオナは不快げに呻き、毛布を頭から被った。

もう少し寝かせて欲しい。昨夜は遅かったのだ。

契約を交わし、商家の娘たる自分の立場をダーシュに説明するなどして、偽装結婚の口裏を合わせた後、どこで寝るかで揉めた。

「俺たちは夫婦だぞ？ 一緒の部屋でよいだろう」

などと、ダーシュはいけ洒々しゃあしゃあと言ったのけたが、無論アイオナは断乎だんことして反対した。

ダーシュはきっぱりと言った。

「同室でなければ駄目だ。俺の目の届く範囲に居てもらわなければ困る」

「それって、わたしを信用してないってこと？ さっき契約を交わしたばかりなんだけど？」

「察しろよ。俺の立場の方が弱いんだぞ？」

確かにそうなのだ。ダーシュはアイオナの助けを必要としているが、アイオナはダーシュの助けを必要としていない。

客観的に見れば、それでもアイオナが従わざるを得ないのは、ダーシュに監視されているという状況

ゆえである。アイオナとしては神の御名の下での契約を重視しているが、世間には神をも<sup>おそ</sup>恐れぬ不屈き者がいることも承知している。だから、ダーシュの不安も理解出来なくはない。

「……わかったわ。同室でもいいわ。ただし、わたしは自分の寝台で寝るから、あなたはわたしから最も離れた床で寝ること。それから剣も<sup>よこ</sup>寄越して」

「剣は渡せんな」

「大丈夫よ。部屋には鍵を掛けるし——」

そこでアイオナは人の悪い笑みを浮かべてダーシュを見た。

「女如きに遅れは取らないんでしょ？」

「む」

ダーシュは言葉に詰まったような顔をした。あの顔は実に<sup>みもの</sup>見物だった。

ダーシュが<sup>しぶしぶ</sup>澁々と剣を差し出し、アイオナが受け取ると、ふたりはそれぞれの場所で眠りに<sup>っ</sup>就いた。

とはいえアイオナは、剣を抱いて横になっただけだった。同じ部屋に男がいるのだ。眠れるわけがない。

そう眠れるわけがない。

それなのに——

なんで自分は眠ってしまっているのか！

と思ったところで、すぐに飛び起きることは出来なかった。眠くて<sup>けだる</sup>気怠いのだ。

それでもなんとか毛布から顔を出し、<sup>ねぼまなこ</sup>寝惚け眼でダーシュの姿を探した。

朝とはいえ部屋の中は薄暗い。窓を開けていないからではなく、窓自体が極端に小さく少ないからだ。これはアウラシールの建築物の特徴で、寒暑の激しい外気を出来るだけ<sup>しゃだん</sup>遮断するための工夫である。

寝床となっていたはずの場所には、ダーシュの姿は無かった。抜け<sup>がら</sup>殻のような毛布だけがある。

アイオナは驚き、慌てた。

——わたしが起きるまで絶対に動くなと言っておいたのに……！

<sup>いらだ</sup>苛立ちながら見回すと、部屋の出入口でその姿を見つけた。召使いと何やら言い合っている。

そこに来て<sup>ようや</sup>漸く、アイオナの目は覚めた。

ぱっと飛び起きて、出入口に向かって駆けた。召使いとダーシュの間に割り込むと、扉を閉じて鍵を掛けた。扉の向こうから聞こえる召使いの声を無視して、アイオナはダーシュを見上げた。

「あ、あなた……いったい……!!」

動転していてうまく口が回らない。

「やっと起きたか」

ダーシュは平然としたもので、気怠げに髪を掻き上げたりしている。

アイオナは食ってかかった。

「いったいどういうつもり!? 動くなって言ったでしょ!?!」

「そんなこと言ったってお前、召使いが部屋の前に来てるし、起こしてもお前は起きないしで——」

「起こしてもって……わたしを起こしたの？ それってつまり……」

アイオナは青冷めた。

ダーシュは無言で意味深な笑みを浮かべた。

アイオナは一転、顔をあから赧めた。

——寝顔を見られた！

いや、それだけならまだよいけれど……寝相は悪い方ではないけれど……変なことをされてなければいいけれど……

どうなのか？

って、そんなこと、聞けるわけもない。

自業自得だ。

己の迂闊うかつさに眩暈めまいがした。

「召使いとは何を話していたの？ 余計なことは話していないでしょうね？」

「お前の夫として挨拶したまでだ」

他に名告りなのようもなからうが、召使いはさぞかし

驚いたことだろう。アイオナお嬢様しか居なかったはずの部屋から、見知らぬ男が出てきただけでなく、そう名告られては。

アイオナは溜息<sup>ためいき</sup>を吐いた。眩暈と合わさって足許まで怪しくなってくる。

当初の予定では、召使いがやってくる前にダーシュの身を隠させ、あたかも朝早くに外からやってきたように見せかけるつもりだった。それからヒスメネスにだけはすべてを打ち明けて、使用人らに結婚の報告をするつもりだった。

無論、今まで影も形も無かった男との唐突な結婚報告をすることに変わりはないのだから、どうしたところで不審さは拭<sup>ぬぐ</sup>えない。

しかしそれでも、朝っぱらに見知らぬ男が部屋から出てくるよりはましだろう。

これでは初めて夜這<sup>よば</sup>いに来たような相手に熱を上げ、細かい考えもなしに結婚してしまう馬鹿女ではないか!?

だいたい、結婚の段取り自体まるで踏んではいない。父母もこのことを知らないし、これからどうやって穏便に報告を済ませようかと思っていたのだ。

それをこの男はすべてぶち壊しにしてしまったわけだった。



ローゼンディアの国教であるヴァリア教においては、子供は結婚している男女の間で<sup>な</sup>為されるものであるとされており、それ以外の為され方は認められていない。それゆえ、結婚する気がなかったとしても、子供が出来たら普通は結婚する。信心深い者ならばそれ以前、性交渉を持ったところで結婚する。

そういった事情から、唐突な結婚自体はローゼンディアでは珍しくはない。問題になるのは、唐突に現れた男の存在である。

こればかりはどうしようもない。どうあっても奇妙なことこの上ない。

屋敷の者たちが何を考えるかと思うと、アイオナは頭が痛くなってきた。氷砂糖をたっぷり入れた茶が欲しい。最近は香草茶ばかり飲んでいるから、気分を変える為にトラナ茶がいい。紅のトラナ茶だ。痺れるように甘い紅トラナ茶が欲しい。

朝から飲むような物ではないが、砂漠から帰った男たちが天幕の中で<sup>うま</sup>旨そうに飲んでいるあれだ。あれは香草茶だけれども。

問題は砂漠から帰ってきたのではなく、今が砂漠の真ん中だと言うことだった。

「なあ、開けてやらないのか？ 召使いに冷たくすると、後が難しいぞ」

「難しくしたのはあなたでしょっつ!!」

「さっきから何を怒っているんだ？」

ダーシュは肩を<sup>すく</sup>竦めた。

アイオナは再び<sup>ためいき</sup>溜息を吐いた。

ダーシュを責めることは出来ない。自分さえ起きていれば回避出来たことだった。

「お嬢さん」

どきりとした。

<sup>よくよう</sup>抑揚の無いひやりとした声が、扉の向こうから針のように突き抜けてきた。

ヒスメネスだ。

召使いが呼んできたのだろう。

ヒスメネスはこの家の管理者である。不審な報告を受けたら確認にやってくるのは当然だ。

アイオナは素早く<sup>みなり</sup>身形を整え、鍵を外して扉を開けた。

扉の向こうには、相変わらずのヒスメネスが居た。召使いから報告を受けているだろうに、いつも通りに落ち着き払った様子である。少なくともそう見えた。

一方ヒスメネスの後ろには、幾人かの召使いと護衛士が緊張した面持ちで控えている

ヒスメネスはアイオナを見、そしてダーシュを見た。

落ち着いて見えるのはいつも通りだが、何だか少

し様子が違った。

物柔かたで、商人にしては優雅ささえ感じさせるヒスメネスが、とても真面目というか硬質な顔をしていた。

「どういうことなのか、説明していただけますか？」

＊

卓上には干したなつめやし棗椰子と、氷砂糖と牛乳を入れた茶が用意されている。いつもの香草茶だ。

朝食はと摂る気になれなかった。

「ではダーシュ殿、あなたはお嬢さんの夫であると、こう御主張なさるわけですね？」

「ああ、そうだ。俺たちは昨夜、神の前で結婚した。ダーシュは――」

言いかけて、アイオナの方を見た。

「お前、なんて言う名前だったかな？」

アイオナは天を見上げた。自室の天井があり、青い空は見えなかった。見たかったのに。

「あなたは御自身の妻の名前を把握されておられない？ これはまたずいぶん随分とおか奇妙なことですな」

「なに、これからお互い、よく知ればいい。時間はいくらでもあるさ」

ヒスメネスの皮肉を気にも留める風もなく、棗椰子を食べている。意外と上品な食べ方だと思った。

顔立ちといい、雰囲気といい、この男にはどこか<sup>あか</sup>垢抜けた感じがある。

一体どういう出自の男なのだろう？

「私が不思議なのは、一体どうしてお嬢さんがあなたとの結婚を承諾したかということなのです」

「女心は<sup>きまぐ</sup>気紛れなものさ。気にしない方がいい。俺たちは昨日知り合って、そして結婚することになった。ただそれだけだ」

<sup>すね</sup>臍に軽い接触感があった。ダーシュが卓の下から合図してきたのだ。

「ええ。そう。女心は気紛れなものなのよ」

特に<sup>いのち</sup>生命が懸かっている時は、という言葉は胸の中で付け加えた。

「さすがは我が妻。俺の顔を立ててくれる」

ダーシュが<sup>おおげさ</sup>大袈裟に喜んで見せた。<sup>いやみ</sup>嫌味だろうか？

「なるほど……そういうことですか」

ヒスメネスは考え込むように目を閉じた。また冷たい、静かな表情になる。彼はカサントス地方の出身だが、そうと感じさせない落ち着きがある。

一般にローゼンディアでは、イオルテスやカサントスといった地域の人間は、<sup>ひょうかん</sup>剽悍を以て知られてい

る。そういう印象を持たれている。

そこは戦神イスターリスの土地であり、戦士の国とも言われる地方だからだ。

でも彼にはそういったものは感じない。それどころか王都の神官のような知性と品位を感じさせられるのだ。

「……解りました。お嬢さんがいいと仰るおっしゃのならば、私からは何も申し上げることはございません」

ヒスメネスは頷うなずいた。

——通じた。

おそらく今ので彼は理解したはずだ。

アイオナは常日頃から軽拳妄動けいきよもうどうを慎むべきだと思っている。自分でもそうしている。少なくともそのつもりはある。

その自分が気紛れを肯定するような発言をすれば、ヒスメネスが怪訝けげんに思わないはずはない。

ダーシュの言葉尻とらを捉えての、咄嗟とっさの合図だったが、ヒスメネスにはきちんと通じたようだった。

「では早速ですが、宮殿に届け出をしなければなりませんね。早い方がよろしいでしょう」

言うが早いかヒスメネスは腰を上げた。

「今馬車を用意させます。帰りは昼になるでしょうから、それまでには祝いの席を用意させておきましょう」

「ああ、頼む」

「では参りましょうか。お二人とも御用意をお願いします」

その言葉で、ダーシュの笑顔が一瞬、固まった。

「ん、ああ、お前たちだけで行ってくれるか？」

「何故です？ <sup>しんろうしんぶ</sup> 新郎新婦が揃<sup>そろ</sup>って届け出るのが結婚の通例。何か他に御予定でもあるのでしょうか？  
でしたら何なりと私どもに申し付けてください。屋敷の者で務まるようなものならば私が命じて遣<sup>や</sup>らせておきます」

「いや……すまんが俺は屋敷を出るわけにはいかんのだ」

<sup>あ</sup> 明け透<sup>す</sup>けな物言いだった。

「だからお前が行って来てくれ」

「なるほど。解りました」

ヒスメネスは頷いた。

「ではお嬢さんと私で行って参りましょう」

「いや、それは困る」

「何故です？」

「妻と離れたくないのだ。そこは察してくれ」

「そういうわけにはまいりません。旦那様に御報告申し上げねばなりません。それはお嬢さんが御自分でなさるべき事柄です。本来は――」

そこでヒスメネスは言葉を切り、静かにダーシュ

を見据えた。

「あなたもそこに行くべきなのですよ。ダーシュ殿」

ヒスメネスの反撃は見事だと思った。というか、反撃されていることをダーシュは気付いているのだろうか。

あくまで正論で攻めながら、ダーシュの身の上を探っているのだ。

それに父はアンケヌには居ない。遠くローゼンディア<sup>あ</sup>に在る。

ヒスメネスは罨を張っているのだ。

「その……義父殿にここへ来てもらうことは出来ないのか？」

「それは礼儀を欠く行為です」

ヒスメネスは戸惑ったような顔をした。無論、演技だろう。

「……失礼ですが、あなたには何か事情がおりになるのですか？」

「ああ。ある」

ダーシュはあっさりと認めた。

「俺は屋敷を離れるわけにはいかんし、妻を手放すつもりも無い。だから細々<sup>こまごま</sup>としたことはお前の方でやってくれ」

「重ねて申し上げますが、そういうわけにはまいり

ません。お嬢さんには御報告に行っていたきます。よろしいですね？」

自分の方を向いて尋ねた。目には強い光がある。きっと、もうすべて判っているのだ。

「……」

アイオナは答えなかった。何故か即答することが出来なかった。そうしてはいけない気がしたのだ。

「アイオナ」

どきりとした。ダーシュが名前を呼んだのだ。今さっきは言えなかった癖に。それともあれはわざと忘れたふりをしたのか？

「俺たちは夫婦になった。アルシャンキの名の<sup>もと</sup>下で。それを忘れるな」

言葉とは異なり、ダーシュの眼差しには<sup>ただ</sup>糾すような強さはなかった。むしろ柔らかなものを感じた。

「……連れて行け。俺は屋敷で待っている」

ヒスメネスに言い、香草茶を口に運んだ。優雅な仕草である。

「さすがにいい砂糖を使っているな」

<sup>かす</sup>微かに笑ってそう言った。



### 第三章 相談

白茶けた日干し煉瓦造りの、平たい箱形の家並みの間を、アイオナを乗せた馬車は走っていた。

日は高くなり始めている。出がけに肌を保護する油を塗ってきたし、日射し避けの布を被<sup>かぶ</sup>ってはいるのだが、砂混じりの乾いた熱風は、容赦無く肌を痛めつけてくる。

「どこに連れて行くのかしら？」

屋敷を離れて暫<sup>しばら</sup>く経ってから、アイオナは尋ねた。

隣にはヒスメネスが坐<sup>すわ</sup>っている。話しかけるのは、これが最初だった。

「取り敢えず、モダバに向かいましょう。どこかの店にでも入って、そこで事情をお聞きします」

「助かるわ」

「お嬢さんこそ災難でしたね。あれは昨夜の賊<sup>そく</sup>ですか？」

「そうよ」

ヒスメネスは溜息<sup>ためいき</sup>を吐いた。

「思ったよりも頭の回る男のようですね」

「そうかしら？」

アイオナは首を捻<sup>ひね</sup>った。どちらかということと生意気で、あとちょっと馬鹿正直なところがあると思うの

だが。

「ともあれ、どこかで食事を致しましょう。朝は咽<sup>のど</sup>を通らなかつたようですが、今なら大丈夫でしょう」

ヒスメネスはにこりともせず<sup>ぎよしゃ</sup>にそう言い、馭者に指示を出した。イデラ語だ。

いつもながら良く気が付く男だと思う。

これで微笑<sup>ほほえ</sup>みを付け加えてくれれば言うことなしなのだが。

モダバの市場はアンケヌの南西にある市場で、主に生鮮食料を中心に取り扱っている場所である。

ほぼ一日中開いてはいるが、本格的に市場が開くのは夕方からである。

日中の日射しを避<sup>さ</sup>けるためだが、ローゼンディアとは違うその慣習に、最初は随分戸惑ったものだった。

ヒスメネスが手頃な店と見定めたのは、モダバでも富裕層が利用する高級店だった。

「いいのかしら……」

「どうしてです？」

「だってあなた、いつも無駄遣いはいけないと言っているじゃない」

「そうですよ」

「これは無駄遣いにならないのかしら？」

「この時間、お嬢さんの口に合うような料理を出せるのはここしかありませんよ。お気にせずどうぞ」

さっさと中に入ってしまう。アイオナは後を追った。

日干し煉瓦<sup>れんが</sup>というものは想像以上に暑さから身を守ってくれるものだ。屋敷からの道中、馬車の中で半ば<sup>あぶ</sup>焙られていた状態だったため、店内の涼しさに生き返ったような心地がした。席に着くと日射し避けの布を外して脇に置いた。ヒスメネスは正面に<sup>すわ</sup>坐っている。

接客の娘にイデラ語<sup>ちゅうもん</sup>で注文を出すと、彼女は銅の水<sup>つ</sup>注ぎからアイオナに香草茶を注いでくれた。

口に含むとちゃんと冷えている。アルメタの香りが爽やかだ。アルメタは香草の一種で、アウラシールではパファティという。

アウラシールやダルメキアのお茶は、砂糖を必ずと言って良いほど入れる。

所に依<sup>よ</sup>っては茶器の半分が砂糖になるくらい物凄い量の砂糖を入れるが、ここは余り多く入れてなかった。

ローゼンディア人の金持ち客が来る事を想定した配慮だろう。店というものは客層や立地を勘定に入れないと商売にならないのだ。

アルメタの香りが立って、爽やかな甘さのある香草茶に仕上がっている。まるで花茶のようだ。

「では詳しい事情を話していただけますか？」

アイオナは息を吸い込んだ。順序よく話せるかどうか不安だったが、生じた出来事自体は単純である。

昨夜のことを、出来るだけ主観が入らないようにして話した。

ヒスメネスは黙って聞いていたが、剣を<sup>あらた</sup>検めた<sup>くだ</sup>件りになると、質問をしてきた。

「<sup>つか</sup>柄や装飾には血は付いていなかったのですね？」

「ええ。わたしもそう思ってよく見たんだけど…  
…」

血という物は非常に落としにくい。拭き取ったと思っても臭いが残ったりするし、おまけに水より油に近いような特徴もある。厄介なものなのだ。

だから痕跡を完全に消すには手間が掛かる。昨日見た剣にはそうした血痕の類が全く見られなかったのだ。

「解りました。続けて下さい」

アイオナは話を続けた。

すべてを聞き終わると、ヒスメネスは考え込むような顔になった。

「契約を交わしてしまったのはまずかったですね」

「でもそうしないと殺されていたのよ」

「ええ。お嬢さんの判断は間違っていない。問題は現在の状況です」

「どうしたらいいと思う？」

「方法は二つあります」

ヒスメネスは指を二本立てた。

「一つは、このまま本当に結婚をしてしまうことです。お嬢さんの夫という立場を持っている限り、彼の身は守られます。もう一つは契約の無効を申し立てることです。こちらは結果的にあの男を裏切ることになります」

「その場合どうなるかしら？」

「彼に<sup>うら</sup>怨まれるでしょうね」

アイオナは溜息を吐いた。ダーシュは無実なのだ。少なくとも自分はそう信じている。

どんな理由があるのかは知らないが、彼は追われている。

彼の味方になれるのは自分だけなのだ。

「……身の潔白が立つまで、<sup>かりそ</sup>仮初めの夫婦として過ごすのはどう思う？」

「難しいところですね」

「反対するの？」

「単純に言い切れないから難しいんですよ」

ヒスメネスは軽く笑った。

「お嬢さんが仰る通り、あの男が無実だとしたら、  
今度は別の問題が持ち上がってきます」

「というと？」

「あの男を追う理由ですよ。少なくとも都市の兵士に追われていたということは、なんらかの理由が  
あつてのことです。人殺しをしていないにせよ、彼は何かをやっているか……でなくとも何かの理由があることは間違いない」

その通りなのだった。言われてみて初めて気付いた。理由無く、都市の兵士が人を追っかけ回すことは無いのだ。

「……泥棒かしら？」

「どうでしょうね」

ヒスメネスは首を捻った。

「そういう人物には見えませんでしたし……ただ——」

「ただ？」

「いえ、私の気の所為せいかも知れませんが、どこかで会ったことがあるような気がするんですよ」

「ダーシュに？」

「はい」

奇妙な話だった。一体どこに接点があるというの  
だろう。

「以前店に来たのかしら？」

「どうでしょうね」

二人して首を捻<sup>ひね</sup>った。

「しかし、なににせよ厄<sup>やっかい</sup>介な問題に巻き込まれたことは疑いありません。どうします？」

「そんなこと言われても……あなたはどうしたらいいと思うの？」

「私はお嬢さんの判断に従います」

それが一番困るのだ。なんと云ったって、自分でもどうすればいいのか判らないのだから。

ただ……

損得勘定を抜きにして、個人的な感情に従うならば、あの男を助けたいと思う。

あの男は悪い男ではない。

直感的にそう思うのだ。

追われているのは、きっと已<sup>や</sup>むに已まれぬ事情あつてのことに違いない。そんな人間に助けを求められて、その手を振り払うことなんて出来ない。

そう、感情の部分ではもう心は決まっている。問題はそれ以外の部分、それを選択したことによってどういうことが生じるか、ということである。

そうしてよくよく考えてみれば、あの男を助けようと助けまいと何かが生じることは確かで、それはなんであれ穏便に済むようなものではないということだった。

ならば――

「わたし、ダーシュと結婚するわ」

ヒスメネスの目を見つめて、アイオナは宣言した。

ヒスメネスはアイオナを見つめ返した。

「そのお心は？」

「あの人、悪い人ではないもの。助けてあげたいわ」

「それだけですか？」

「ええ」

損得は特に考えていない。

「甘いと思う？」

「いえ、お嬢さんらしいと思います」

「ありがとう」

「問題はどうかということですね。本当に結婚なさるおつもりなんですか？」

――本当に。

その言葉にアイオナはどきりとした。<sup>わず</sup>僅かに目を伏せる。

「本当になって……本当の本当に結婚するってわけじゃないわ。あくまで形式だけよ」

「それを聞いて安心しました」

「良かった。反対されるかと思ったのよ」

「状況からの判断ではなく個人的な意見としては、



私は結婚には反対ですよ」

安心して息を吐くと、それを待っていたかのようにヒスメネスが言った。

いつもながら感情を感じさせない、冷静な口調だった。

「……どうして？」

「一言で言えば、あの男がどういう人間なのか判らないからです」

「悪い人ではないわ」

ヒスメネスは悲しそうに少し<sup>ほほえ</sup>微笑んだ。

「残念ですが、私はお嬢さんほど楽観的には考えられません」

「でも……そうだ！ あの剣！ 剣には血が付いていなかったわ！」

「人を殺すのに必ずしも剣は必要ではありません」

その言葉に驚いた。ヒスメネスをじっと見た。

「人柄というものも、これまた当てにはなりません。外見はもちろん、言葉遣いや仕草だけから、相手のすべてを判断するのは危険です。特に利害が絡む状況になると、人は相手を出し抜こうとしますからね」

「あなた……わたしが<sup>だま</sup>騙されているって言うの？」

「正直なところを申し上げれば、あの男にとって、お嬢さんに好感を持たれた方が都合がよいことは確

かです」

アイオナは怒りを感じた。どうしてヒスメネスがそんなことを言うのか理解出来なかった。

「お嬢さんが彼に善意を持つかどうかは重要です。ですがそれは彼にとって重要なのであって、お嬢さんにとって重要なものではありません。そこは間違えないようにしないとイケません」

ヒスメネスの言うことは正論だ。決して間違ったことを言っているわけではない。

アイオナは冷静になろうと思い、香草茶を口に含んだ。甘さが口内に拡がった。

「……どうしてそこまで彼を疑うのかしら？」

ヒスメネスは困ったような顔をした。

「私の方こそ疑問ですよ。自分の生命<sup>いのち</sup>を脅<sup>おびや</sup>かした相手を、たった一晩でかくも信用するようになってしまふとは理解出来ません」

ヒスメネスの言葉には特別な意味はなかったのだろう。そういう含みを持たせた物言いをする男ではない。

だがアイオナは反射的に立ち上がってしまった。

「お嬢さん？」

「……帰るわ」

「何か――」

言いかけてヒスメネスは気付いたようだった。

「申し訳ございません。決してそのような意味ではないのです」

「ええ」

そんなことは解っている。だが解っているからといって、気分が良くなるわけではない。

「とにかく帰りましょう。それと宮殿への届け出をお願い」

「結婚の、ですね」

「そうよ」

アイオナはヒスメネスを見下ろした。

「それと公開会議場の使用許可もお願い」

「何をなさるおつもりですか？」

「結婚の報告をするのよ。それと昨夜の強盗殺人事件について調べてちょうだい」

「なるほど……解りました」

ヒスメネスは納得したように頷いた。おそらくこれで理解しただろう。

「実際に犠牲者が出ているかどうか調べるというわけですね？」

「そういうこと」

アイオナは唇を少し吊り上げた。

「これではっきりするでしょう？」

誉め言葉が返ってくるかと思ったのだが、ヒスメネスは何も言わなかった。考えるような目をしてい

た。

「とにかく私の方で調べておきましょう」

それだけを言った。

前菜の皿を持った給仕の娘がこちらに歩いてくるのが目に入った。残念ながら注文は取り消しになると伝えなければならない。

もちろん前菜の分は支払わねばならないが。

## 第四章 書齋

思ったよりも広い屋敷だ。二区画あるが、両方とも同じ敷地になるらしい。ローゼンディア人の豪商と言うところだった。

二人を送り出した後、ダーシュは屋敷の中を歩いて回って、大まかな配置を頭に入れてしまっていた。

これで何かあっても、屋敷の中では混乱することはないだろう。

尤も連中が<sup>もっと</sup>警吏<sup>けいり</sup>を引き連れて戻ってくれば、すべては<sup>しま</sup>お終いだが。

そうならないことを祈るだけだった。

あのヒスメネスとかいう<sup>かさい</sup>家宰と一緒に出て行く姿を思い出した。緊張している様子だった。おそらく父親に会いに行くというのは口実だろう。

それでも二人を行かせたのは何故か。ダーシュには判らなかった。

——あいつを試したいのかも知れぬな。

そう考えてみる。らしくないと思う。

相手は女である。しかも外国人である。理解しようとする方が<sup>お か</sup>奇妙な話だ。

取り敢えず、数日間だけ<sup>かくま</sup>匿ってくればいい。

あとは自分の仕事だ。

門の方が騒がしくなった。帰ってきたのかも知れない。

ダーシュは足早に玄関に向かった。

玄関に出ると予想通りだった。異国風の盛り土を回り込んで、馬車が屋敷に寄せて停まっていた。

盛り土は車回しと言うらしい。元はローゼンディア人の様式だと言うが、アンケヌでは真似まねをしている者も多いと聞く。確かに、馬車で訪れる者が多いような屋敷では便利だろう。

丁度ちょうど召使いたちが働く中を、アイオナとヒスメネスが馬車を降りてくるところだった。

日はまだ高い。召使いが二人の上に日避けひよを翳かざしている。

本来ならば奴隷がやる仕事だが、ローゼンディア人は奴隷を持たない習慣がある。

古代ナーラキア帝国は奴隷の叛乱によって滅んだ。

その末裔を自負するローゼンディア人らしい禁忌だと思った。

アイオナと目が合った。ダーシュは手を挙げて挨拶をした。アイオナは少し微笑んだ。

何気ない仕草だったろうが、何故かその姿がダーシュの胸に迫った。

ヒスメネスが足早に近づいてきた。

「よろしいですか？」

「なんだ？」

「あなたに少しお話があるのです」

「俺の方でもお前と話したいと思っていた」

ヒスメネスは口を<sup>つぐ</sup>嚙み、じっとこちらを見てきた。理知的な青い瞳。朝の時にも思ったが、この男は切れ者だ。少なくとも彼の女主人よりも三倍は賢いだろう。

「では私の書斎に行きましょう。そこならば邪魔は入りませんから」

<sup>わか</sup>  
「解った」

書斎というのは言い過ぎだろうと思っていたのだが、案内された部屋は確かに書斎というに<sup>ふさわ</sup>相応しい部屋だった。視界に本の山が飛び込んできたのだ。

案の定、室内に入るなり独特の臭いが鼻を<sup>つ</sup>衝いた。子供の頃、書庫でよく嗅いだ臭いだ。

パラム紙の臭い、獣皮紙の臭い、<sup>テピクス</sup>紙の臭い……それらが渾然と混じり合った臭いだ。不快ではないが、心地好い類いの臭いではない。

学者や神官、法官ならばこの香りも馴染み深いものと喜ぶのかも知れないが、ダーシュはそのどれでもないのだ。

ただ、それだけ書物があっても粘土板は無かった。粘土板が無いのは、ここが単なる書斎だから

だ。

壁際には大きな本棚があり、パラム紙であろう巻物や、革で装幀された大きな本がぎっしりと詰められている。

巻物の中には木片を綴り<sup>つづ</sup>合わせた物もある。

薄い木片を板状に切って紐で繋いだ物だが、なんでもローゼンディアで昔用いられていた形式だという。ダーシュも目にするのは久しぶりだった。

とにかく本が多い。さすがに粘土板こそないものの、重厚な革表紙の本と、それと巻物がかなりある。

——今時巻物とはな。

パラム紙はアウラシールで古代から使われてきた筆記媒体である。パラム草から作られる。

アウラシールで本と言えば、元々はこの巻物形式のものを指していた。

現在の形式の、つまり装幀された冊子形式の本が登場してからまだ二千年も経っていないのだ。歴史の古さではパラム紙の巻物の圧勝である。

逆に筆記媒体としての性能となると、全ての点でパラム紙<sup>テピクス</sup>は紙に及ばない。

ローゼンディアから渡来した紙<sup>テピクス</sup>によってパラム紙は駆逐されたのだ。

アウラシール全域において、パラム紙<sup>テピクス</sup>が紙に置き



換わるまでにかかった時間は百年程度だったというから、急激に変化が進んだのだと判る。

それだけ紙は筆記媒体として優れていたということでもある。

今ではパラム紙など余り見かけることはないが、それでもこうして目にすることがあるのは、何らかの事情がある場合と思われた。

例えば何かの理由により著述者が紙を入手できなかったとか、どうしてもパラム紙を使いたい個人的な理由があるとか、その辺の事情だ。

どんな理由があるにせよ、今時パラム紙の巻物とは恐れ入る。おそらくはかなり年代物の本ではないだろうか？

脆弱なパラム紙の保護のため、巻物の外装には獣皮紙が使われる。

これは山羊や羊、あるいは牛などの皮から作られる。筆記媒体としても使えるが、容易に書き直しが可能なので公文書や契約書には使えない。

だからといってパラム紙では文書の改竄が不可能というわけではない。パラム紙も容易に改竄しうる。この点獣皮紙と変わらないが、問題は別にあった。

作成のために山羊なり羊なりを殺さなくてはならない獣皮紙と違って、パラム紙は簡単に材料が入手

でき、作成の手間も獣皮紙よりはかからない。

しかもパラム紙は紙ほどではないにせよ、獣皮紙よりかは安いのだ。

だからこそ紙が流通するまで、アウラシールではパラム紙が隆盛を極めたのである。

それにしても本が多い。これでは室内に書庫のような臭いがするのも仕方ないと思える量である。

本棚に収まりきれなかった分であろうか。大判の本が頑丈そうな台の上に平積みになっており、その高さはダーシュの胸近くにまで達していた。

これでは家宰<sup>かさい</sup>の部屋と言うより学者の部屋ではないか……そんな風に思いながら別の壁に目を転じると、そこにはナバラ砂漠を中心にした大きな地図が貼られていた。

地図上にはいくつもの目印が打っており、隊商の経路が細かく書き込まれている。

部屋には大きめの丸卓が一つと、来客用の椅子が三脚あった。

ヒスメネス自身が使うのであろう机は、ローゼンディア風の頑丈そうな木製であり、窓から少し離れたところに配置されてあった。

机の上には筆記用具が置かれてあるが書類はなかった。

商家の家宰<sup>かさい</sup>なのだから、商品の細目やら契約書類

などがあっても不思議はないのだが見当たらない。

用心深い性質たちなのだろう。おそらくは机の中に鍵を掛けて入れてあるのではないか。

そういえば粘土板にも契約用の物があったのを思い出した。

思い出したが、仮に粘土板の契約書をこの男が持っていたとしても、やはり目に付く所に置いておくとは思えない。

この用心深そうな男が、重要な物をそこらに放置する事などあるはずもない。

アウラシールでは粘土板の契約書は最高度の格式を持っている。ただし一般的ではない。

今ではアウラシールでも契約書は紙テピクスが普通で、粘土板の物は国同士の協定などに使われるのが普通だからだ。

片付いていると言うよりもむしろ、ほとんど何も置いていないその机は、壁際の本や巻物の山を考えると殺風景に過ぎる感じがした。

一応、机の角には手鉤てかぎと受け皿の付いた棚があり、古風な細工さいくを施された硝子張りの夜光燈ほどこが置かれてある。ガラス やこうとう

夜光燈とは、油燈に外装を付けた物で、火皿や蠟燭を入れる為の容器だ。

贅沢品の部類に属するので、それなりに金や身分

のある家でないと置いてない……が、この部屋の感じから察するに、これとて燈りを供給するためだけの物であるようで、殺風景には変わりがないと思えた。

そんな印象を勘定に入れても実に立派な部屋だった。家宰<sup>かさい</sup>とはいえ、使用人が使うような部屋ではない。それがまたヒスメネスの屋敷での立場を物語っていると思った。

ローゼンディア人の趣味だろうか、窓は多少大きく作ってあり、その分、光が多く入ってきている。

「そちらにお掛け下さい」

言われて示されたのはやはり来客用だと考えた椅子であった。シュリで出来ている。シュリは軽く丈夫で、加工しやすく、日用品に多く利用されている植物である。

この椅子は一見簡素な品ではあるが、丁寧な仕事が生きてあり、高級品なのは明らかだった。

「まるでお前がこの屋敷の主人のようだな」

「私は主人ではありません。この屋敷と店を預かり、切り回しているだけです」

「なるほど」

ものは言い様だと思ったが、その言葉は胸に収<sup>し</sup>まっておいた。

「それよりもあなたこそ、腰の剣はどうされたので

す？」

「部屋に置いてある。自分の家の中で剣は必要ないからな」

「確かに。ですがそれは早計というものでしょう。この屋敷は旦那様のものであり、<sup>たとえ</sup>仮令お嬢さんの夫となられたからといって、あなたの物にはなりません」

「ほほう。それがローゼンディアの<sup>しきた</sup>仕来りというやつなのかな？」

「そう考えていただいて結構です」

「それで？ お前は どうしたいのだ？ まだるっこしいのは嫌いだ。話を聞こうか」

「では単刀直入にお聞きします。お嬢さんと本当に結婚なさるおつもりなのですか？」

「それはあいつ<sup>しだい</sup>次第だな」

自分から言い出したことだ。遠回りな答え方はせずに、はっきりと言ってやるつもりだった。

それに、この男にはその方がいい。朝の時にも思ったことだが。

「あなたはお嬢さんに決して損はさせないと言ったそうですが」

「あいつはそんなことまで話したのか？」

「ええ、まあ」

ヒスメネスは苦笑するような顔になった。

「随分<sup>ずいぶん</sup>信頼されているんだな」

「付き合いが長いですからね」

「お前、この屋敷の主人の<sup>もと</sup>下で商売をしていると言ったな。かなり長いのだろうか？」

「はい。十歳の時からになります」

「なるほど、すると我が妻とは幼馴染みというわけか」

「そういうことになりますね」

ダーシュは声を出さずに笑った。

「では俺が邪魔ではないのか？ いろいろとな」

「ええ。いろいろと」

ヒスメネスは<sup>ほほえ</sup>微笑みかけてきた。なるほど、この男は<sup>やっかい</sup>厄介だと思った。

「あなたの作り出した状況はなかなか複雑ですね」

「すまん。深く考えたわけではないんだ」

「そうですね。ですが<sup>とっさ</sup>咄嗟の思い付きにしては、良い結果を生んだと言えるのではないのでしょうか」

「俺もそう思う」

「取り引きをするつもりはありませんか？」

「お前と？ なんのだ？」

ダーシュは興味を<sup>そそ</sup>惹かれた。この男が何を提案してくるのか気になった。

「あなたを無事にアンケヌから脱出させて差し上げましょう。その代わりに、あなたがお嬢さんに提供するつもりだったものがなんなのか、話していただきたい」

やはりそう来たか……この男なら当然そこに気付くだろうとは思っていたが。

「……俺はあの女の<sup>いのち</sup>生命を助けると約束したんだ。あの女が契約を守る限りにおいてな」

「では、契約は現在実行中ということですか？」

「そういうことになるな」

答えた瞬間、ヒスメネスから射るような<sup>まなざ</sup>眼差しが向けられてきた。驚くほど強い眼差しだ。

「ほう……お前ただの商人じゃないな」

「交易商人ですからね。職業柄いろいろなものを見聞きしてはいます」

「ふん」

ダーシュは立ち上がった。ヒスメネスの<sup>そば</sup>傍に行き、その腕を取った。しっかりとした腕だった。上から<sup>さはい</sup>差配している商人にしては立派過ぎる。

「戦いの経験もあるようだな」

「言ったでしょう？ 交易商人だと。道中、危険は付きものですよ」

よく言う。護衛に隠れてがたがた<sup>ふる</sup>震えているだけの者もいるのだ。

「まあいい……とにかく<sup>お</sup>怪訝<sup>か</sup>しなことは考えないことだ。生命<sup>いのち</sup>が惜しければな」

「それは<sup>おど</sup>脅しですか？」

「いや忠告だ」

ダーシュは手を放した。

「俺としてもお前たちを殺したくはない。なんと言っても<sup>いのち</sup>生命を助けられた恩があるわけだからな」

そうだ。自分がここに居れば助けることが出来る。

「安心しろ。お前たちに危害を加えるつもりは無い。信じてはもらえんかも知れぬがな」

「あなただけならば今日にでも逃がして差し上げられるのだが」

「遠慮しておく。悪いが俺の方ではお前をそこまで信用は出来ない」

本意は違うところにあるのだが、そうとしか言えなかった。

今の時点でこの男に真意を悟られるわけにはいかない。

「そうですか。そのくせ私には御自分を信じろと仰<sup>おっしゃ</sup>るわけだ」

「そうさ」

ダーシュはからからと笑った。

「<sup>あきら</sup>諦めろ。これもアルシャンキの<sup>おぼ</sup>思<sup>め</sup>し召<sup>め</sup>しただ」



ヒスメネスの書斎を出ると、ダーシュは自室に向かった。新たに割り当てられた部屋だが、客室であるらしかった。アイオナの居室ほど広くもないし、見た目も豪華ではないが、よく見れば家具や調度は良いものを使っている。落ち着いた趣の部屋である。

とはいえダーシュの感覚では、己の立場に相応しいとは思えぬ部屋であった。見窄らしいとは言わぬまでも、これではただの客人扱いである。

アイオナの夫たる自分は、それなりの扱いを受けてよいはずだった。新たな血縁として尊重されて然るべきだ。

今はこの屋敷にアイオナの父親、つまり家長は暮らしていないようであるし、どうもアイオナには男の兄弟は居ないらしい。

となると娘婿である自分が家長代理を務めるべきなのである。その責任があるのだ。これがダーシュの、アウラシール人の感覚なのである。

ローゼンディアではそうではない、ということは知っている。しかしとても理解出来るようなことではない。

奴らは男と女を同等に扱い、男の仕事を女にも任せている。女が家長を務めるだとか、女が戦場に立つだとか、まったく気狂い地味たことをしている。

女にそんな仕事が務まるわけがないだろうに。

もちろん、物事には例外が付きものであることは承知している。そういう例を幾つか聞き知ってもいる。

しかしそれと長年の仕来りしきたとは別である。ローゼンディアの仕来りはそうであるのかも知れぬが、アウラシールはそうではない。

そしてここアンケ又はアウラシールである。

今更いまさら道義常識を説くつもりは無いが、これから先のことを考えると、この屋敷の連中には不利な面が多いと考えざるを得ない。

然りさとて自己主張をする気にもなれない。主人面しゅじんづらをしたところで勘違いをされるのが落ちだ。

——大人おとなしくしている外ほか無いか。

どのみち、数日内に動きがあるだろう。そうならば否いやが応おうでも動かなければならない。

今は客分としてこの屋敷で暮らすのも、悪くないことなのかも知れなかった。

## 第五章 空回り

宮殿に出した使いが帰ってきたのは夕刻、<sup>アクション</sup>太陽神がその住まう島へと帰還する<sup>ころあ</sup>頃合いであった。昼前に出したというのに随分と遅い帰りである。宮殿でかなり待たされたらしい。

「何か問題でもあったの？」

<sup>けげん</sup>怪訝な面持ちで、アイオナは少し身を乗り出した。

アイオナの居室である。卓を囲むのは、アイオナ、ダーシュ、ヒスメネスである。

「届け出だけでは結婚は認められないそうです。両当事者がアルシャンキ神殿まで<sup>まか</sup>罷り越<sup>こ</sup>さぬ限り、結婚は認めぬと」

「なぜ？」

「ダーシュ殿がアウラシール人だからだそうです。ローゼンディア人同士ならばともかく、片方でもアウラシール人ならば、神殿まで罷り越して三神に報告し、その祝福を受けるのが<sup>しきた</sup>仕来りであると」

道理であるとアイオナは思った。アウラシールの仕来りには詳しくないが、ローゼンディアであっても、神殿に罷り越して神々に結婚を報告するのが礼<sup>かな</sup>に適<sup>かな</sup>っている。

「――しかし、妙な話です」

アイオナは不思議そうにヒスメネスを見た。妙なところはどこにも無いように思えるのだが。しかし、ヒスメネスがそう言うのなら妙であるに違いない。

「アウラシール人だからというのは理由として奇妙おかしいです。アンケヌ人だからというのはなら解りませんが」

「どういうこと？」

「我らがローゼンディアとは異なり、アウラシールでは地域によって奉ほうじている神が違います。アウラシール人だからといって、誰しもアルシャンキを奉じているわけではありません。奉じているわけでもない神の神殿に罷り越すのは奇妙おしいですから、アルシャンキ信者たるアンケヌ人でもない限り、アルシャンキ神殿に罷り越す必要は無いでしょう」

「でも――」

と、アイオナはダーシュを見た。

「あなた、アルシャンキを奉じているわよね？ アルシャンキに誓いを立てていたもの。それなら罷り越す必要があるのではないの？」

「ダーシュ殿がアルシャンキ信者であることは、宮殿には伝えていませんよ。ただ、アウラシール人であるとしたら。アンケヌに居るアウラシール人ならば、全員がアルシャンキ信者だろうというのは、あ

まりにも乱暴です。アンケ又はこれだけの交易都市  
です。余所者よそももののアウラシール人だってたくさん居  
ます」

「……それじゃあ、どういうこと？ 宮殿はダー  
シュがアルシャンキ信者であることを知っているとい  
うことなのかしら？」

「いえ、ローゼンディアと関係のあるアウラシール  
人ということで当たりを付けたのではないかと思います。  
世間では、昨夜の強盗殺人犯はローゼンディ  
ア居留区に逃げ込み、そのまま行方ゆくえを眩くらましている  
ということになっていますからね。疑わしきはすべ  
てを疑えということで、とにかく誘おびき出して直接確  
認しようというのでしょうか」

「そう……」

アイオナは不満げな顔で重々しい溜息を吐いた。

「公開会議場の方はどうなの？」

「公開会議場？ 何をするつもりだ？」

今まで黙り込んでいたダーシュが口を挟んできた。

アイオナはダーシュを見た。

「あなたの潔白を明らかにするのよ」

ダーシュは溜息ためいきでも吐くように鼻を鳴らし、薄い  
笑みを浮かべた。馬鹿にするような態度である。

アイオナはむっとした。潔白しょうめいを証明してやろうと

いうのに、その態度は一体なんなのか。

「で、どうなの？」

アイオナはヒスメネスを見た。

「結婚後に使用を許可することです」

アイオナは柳眉りゅうびを顰ひそめた。

「結婚後って……宮殿がわたしたちの結婚を認めた後ってこと？」

「その通りです。まあ、結婚報告が名目ですから、当然と言えば当然です」

アイオナの顔に怒気どきが表れた。

「どうしたって神殿に罷り越さなければならぬってわけね……」

アイオナは立ち上がった。

「いいわ。罷り越しましょう」

「御免蒙ごめんこうむる」

ダーシュが即答した。

「危険は承知の上よ。でも、宮殿に結婚を認めてもらわないと、あなたの潔白を証明できないわ」

「潔白を証明する必要は無い」

アイオナは訝いぶかしげにダーシュを見た。ダーシュは卓上の茶器をつまらなそうに見ている。

「どうして？ あなた、無実なんでしょう？ 潔白であることを証明すれば、逃げ隠れする必要は無くなるわ」

「俺は<sup>かくま</sup>匿ってくれとは言ったが、潔白を証明してくれと言った憶えは無い」

ずくん――

と、心臓を<sup>わしづか</sup>驚掴まれた気がした。

アイオナは目を見開き、かっ<sup>あから</sup>と頬を赧めた。口を開くと、わなわなと唇が<sup>ふる</sup>顫えた。何かを言おうと思ったが、言葉が出て来なかった。唇を噛み締めて<sup>うつむ</sup>俯いた。ここで何かを言えば、善意の押し付けに過ぎない。

<sup>よ</sup>善かれと思ってしたことだった。いや、しようとしたことだった。

けれど、自分ひとりだけが先走っていた。

恥ずかしくて、ひどく哀しい。

「そのような物言いはないのではありませんか、ダーシュ殿」

ヒスメネスが言った。

「仮にもあなたの妻ではありませんか」

ダーシュは戸惑い半分、<sup>きまづ</sup>氣不味さ半分、自分の言葉がそこまでアイオナを傷付けるとは思ってもいなかったという顔である。

「……悪かった」

ぼそりと<sup>つぶや</sup>呟く。

「しかし、なんであれ外に出ることは出来ない。暗<sup>おそれ</sup>殺される虞がある」

——暗殺。

不穏な言葉にアイオナは驚き、ダーシュを見た。

「今は動かない方がいい」

それだけ言うと、ダーシュはおもむろに立ち上がり、アイオナの居室を後にした。

ダーシュを見送ると、アイオナは再び<sup>うなだ</sup>項垂れた。

「思った以上に複雑な事情がありそうですね」

ヒスメネスが静かに口を開いた。

「ご依頼されていた調査の件ですが、実際には、昨夜は強盗殺人事件はありませんでした」

実際には、に力を入れてヒスメネスは言った。どうい方法を使ったのかは判らないが、おそらく確かな情報なのだろう。

——やはり。

やはりダーシュは無実だった。

喜ばしいことである。しかし、アイオナの気持ちは沈んだままだった。

「どうします？」

どうもこうも無かった。

<sup>かりそ</sup>仮初めの妻として、<sup>かりそ</sup>仮初めの夫ダーシュをこの家に置いておく。自分ができること、望まれていることは、それくらいしかない。

<sup>しばら</sup>「暫く様子を見た方がよいのかも知れませんね」

「そうね……」



アイオナは力無く返事した。

「明日、祝いの宴うたげを開きましょう」

「え……？」

驚いたように、アイオナはヒスメネスを見た。相変わらず落ち着いた顔付きをしている。

「結婚祝いですよ。まだ使用人たちには正式な結婚報告をしておりませんかでしょう？」

「……そうだったわね」

仮初めの結婚である。本来は祝ってもらうようなことなど何も無いのだから、なんだか不思議な感じがした。

「無駄な出費になってしまうわね」

アイオナは小さく溜息を吐いた。

「いえ、丁度良ちようどかったです。皆にそろそろ息抜きをさせようと思っていたところでしたから」

「そう……」

ヒスメネスからは特にこれといったものは窺うかがえないが、おそらくは気を遣ってくれているのだろうとアイオナは思った。

「いつも世話をかけるわね」

「滅相めっそうもありません」

ヒスメネスは軽く会釈をした。

## 第六章 結婚

あくまでも仮初め<sup>かりそ</sup>である。

それでも何故かどきどきしてしまう。

宴のための正装をし、ダーシュの正装を見たら、  
いよいよ落ち着かなくなった。

頭は布で覆われ、長い黒髪はそのまま垂らされて  
いた。

風通しの良い白い木綿着は変わらないが、金の首  
飾りをしている。

貴石<sup>きせき</sup>が編み込まれた、胸を覆うような平たい首飾  
りだ。これはカラヤといってアウラシールの正装に  
は欠かせない装身具だという。

腰には綺羅<sup>きら</sup>びやかな腰帯を巻き、いかにもアウラ  
シール風の刺繡<sup>ししゅう</sup>が施<sup>ほどこ</sup>された、裾<sup>すそ</sup>の長い腰布を垂らし  
ていた。

一見してまさにアウラシール人の正装であった。

いや、アウラシールのというよりも、アンケヌの  
正装であるというのが正しいのかも知れない。この  
広大なアウラシールには、様々な都市があり、様々  
な部族民がいる。それぞれの習俗もまた様々なの  
だ。

無論、ダーシュ自身が持ち込んだ衣装ではない。  
ヒスメネスが用意したのである。宴が済んだら返す

ことになっている。

妻がきちんとした<sup>かっこう</sup>恰好をするのに、夫がそれに見合わぬ恰好をするわけにもいかないからだ。

ともあれ、アウラシールの正装はダーシュに似合っていた。いや、アウラシール人なのだからそれも当然なのだろうけれど、それだけではなく、きちんとした恰好をしている方がむしろ自然に見えた。きっと、元はそれなりの身分であるに違いない。

一方アイオナは、当然ながらローゼンディアの正装であった。ローゼンディア織りの裾の長い<sup>かんとうい</sup>貫頭衣に、<sup>はばひろ</sup>幅広の綺羅びやかな腰帯をし、ローゼンディア風の刺繍が施された肩掛けをしていた。

ダーシュはそんなアイオナを品定めするように見、我が妻としてはまあ及第点<sup>きゅうだいてん</sup>とでも言うような笑みを浮かべたものだった。アイオナは腹立たしくも恥ずかしくなった。

そのまま落ち着かぬ気持ちで祝いの席に着き、結婚報告をして皆からの祝福を受けると、もしかして本当に結婚してしまったのではないかと妙な気分になった。

宴から引き上げて自室に戻ると、今までアイオナが使っていた寝台が撤去され、代わりに二人用の大きな寝台が用意されているのが、暗がりの中うっすらと見えた。

アイオナは思わず息を呑んだ。

もちろんこれは見せかけのものである。この部屋で寝るのはアイオナ一人である。万が一宮殿から警<sup>けい</sup>吏<sup>り</sup>が派遣されてきた場合に備えて用意した、言わば舞台装置である。

ダーシュがこの寝台を使うことはない。

にもか<sup>か</sup>わ<sup>わ</sup>にも拘らず緊張した。

と、急に背後で扉が閉まり、アイオナは飛び上がりそうになった。

振り返って<sup>あか</sup>燈りを<sup>かざ</sup>翳すと、ダーシュが立っていた。

別段驚くことではない。本来ならば。

本来ならば、夫婦は二人一緒に引き上げてきて、同じ部屋に入るのだ。

アイオナの緊張した顔付きを見て、ダーシュは意地の悪い笑みを浮かべた。

「お前、期待しているのか？」

アイオナの顔がぱつと<sup>あか</sup>赧<sup>あか</sup>くなった。

「そんなこと、かつ考えてないわよっ!!」

ダーシュは<sup>たの</sup>愉<sup>たの</sup>しげに笑い、肩に<sup>は</sup>羽<sup>は</sup>織<sup>お</sup>っていた上着を脱いだ。アイオナはどきりとしたが、他意は無いようだった。首飾りを外すためのようだ。

首飾りは結構な重さがあった。ダーシュは宴の間中これを着けていたのだから、肩が<sup>こ</sup>凝<sup>こ</sup>ったかも知れ

ない。金の鎖がじゃらりと鳴った。

黙って差し出すそれをアイオナは受け取った。後でヒスメネスに渡すのだ。

「すまんが俺の剣を返してくれるか？」

宴の前に、剣はアイオナの部屋に移されていた。アウラシールの慣<sup>なら</sup>わしだと言うが、夫婦は寝所を共にするものだから、結局は剣は夫の居る場所にあることになる。

本来ならば、だ。

アイオナはつつかつかと歩き、寝台の脇に立て掛けておいた剣を取ってダーシュに手渡した。

「さあ、これで用は済んだでしょ。さっさと出て行って」

「ああ」

ダーシュは剣を腰に差した。

「早速だが夫としてお前に言うておくことがある」

再び心臓がどくんと動いた。

「何よ」

つっけんどんな口調になってしまったのが腹立たしかった。ダーシュはきっと気付いただろう。そう思うと今度は恥ずかしくなってきた。

「何よ。用があるなら明日にして」

「お前、今日はもう部屋から出るな」

「どうしてよ？」

出るつもりなど元から無いが、反論するような言い方になってしまった。

「理由は後で判る」

それだけ言い置くと、ダーシュは歩き去ってしまった。

庭の篝火<sup>かがりび</sup>を受けながら遠離<sup>とおざか</sup>るその背を、アイオナはぽかんと見つめた。

ダーシュの部屋の扉が閉まる音が聞こえて、アイオナは漸く<sup>ようや</sup>我に返った。

忽ち<sup>たちま</sup>怒りが込み上げてきた。なんなのだろう。あの態度は。これが結婚初夜の妻に対する態度なのだろうか——と思ったところで、これが偽装結婚であることを思い出した。

何故だか急に気分が落ち込んだ。選択を間違ってしまったような気がした。

いや、間違っていたのは選択ではない。手順だ。

結婚自体は已む<sup>や</sup>無きことだった。問題は今夜の宴に到るまでの流れだ。その中に手続き違いがあったのではないだろうか。

そういえば、ダーシュは酒をほとんど口にしなかった。

何か気に入らないことでもあったのだろうか？

そつ無く宴の主賓<sup>しゅひん</sup>を務めていたように見えたが、内心は辟易<sup>へきえき</sup>していたのだろうか？

そう思うと悲しくなった。急に泣き出しそうになり、アイオナは寝台に倒れ込んだ。そのままじっとしていた。

努力が空回りになることには慣れているけれども、今回のはかなり<sup>こた</sup>堪えそうだった。

＊

アイオナにはちょっと<sup>かわいそう</sup>可哀相なことをしたかも知れないと思った。

状況を説明してやるべきだったかも知れぬ。だが話せば、あの女の性格からして黙っているとは思えない。何かと問題になる可能性が高い。

何より用心すべきはあの<sup>かさい</sup>家宰の男だ。奴も酒をほとんど口にしなかった。多分こちらの様子を見ての判断だろう。大した観察眼だと思う。

今夜は剣は手放せない。<sup>なにごと</sup>何事にも手違いはある。用心をしておくべきだ。

ダーシュは月を見上げた。庭には<sup>かがりび</sup>篝火が<sup>とも</sup>燈っている。今夜一晩燃やし続けられるはずだ。<sup>あか</sup>燈りがあるのは有り難いが、それだけ目立つと言うことでもある。

忙しい夜になりそうだった。

## 第七章 襲撃

人が激しく動き回る物音で目が覚めた。いつの間にか眠っていたらしい。部屋の<sup>あか</sup>灯りはもう消えていたが、庭からの明かりが<sup>わず</sup>僅かに入ってきているので、室内の様子はなんとなくなら見て取ることが出来る。

それにしても花嫁衣装を着けたまま眠ってしまったのは情けないし、みっともない話だと思う。早く着替えなくてはならない。

こんな時間に誰か呼ぶわけにもいかないから一人で着替えるしかない。装身具を外すのが多少面倒ではある。

廊下を幾人かが勢いよく駆けていった。寝ている人に対する配慮がまったく感じられない。

普通なら注意するべきところだが、それよりもアイオナは気になった。

一体、何を慌てているのだろうか？

廊下に出て話を聞こうと思った時、扉を激しく<sup>たた</sup>叩く音がした。

「お嬢様！ お嬢様！ 起きて下さい！」

召使いのエニルだった。アイオナは扉を開いた。

「どうしたの？ いったい」

「野盗の襲撃です！」



イデラ語で叫ばれた。エニルは普段ローゼンディア語を話しているから、かなり気が動転しているのだろう。

「城の守備兵はどうなの？」

アンケヌには都市に隣接する形で王の城があり、兵も居る。今までだって襲撃はあったが、すべて城壁を越えることなく撃退してきた。

しかもアンケヌには巨獣がいるのだ。巨獣というのはアウラシールに生息する巨大生物で、古代から戦争に使われてきた猛獣だ。

アウラシールとの戦争では、ローゼンディアも幾度か煮湯にえゆを飲まされている。

とにかく対抗できる兵種が無く、騎馬でも歩兵でも、まともな戦いでは相手にならないほどの戦闘力を発揮するのだ。

ゆえに市内戦ではまず使えないが、敵は野外にいるのだから、巨獣は問題なく使えるはずだ。

そう簡単に市内に攻め込まれるとは思えなかった。

「それが……奴らもう市内に入り込んでるんです！」

アイオナは耳を疑った。一体どうやって？

「お嬢さん！」

召使いを連れたヒスメネスが廊下を歩いてきた。

二人ともアウラシール風の胸甲きょうこうを着け、腰には剣を  
は  
佩はいている。

「いったいどうしたというの？」

「やられました。ダーシュ殿は？」

「自分の部屋に居ると思うけど……」

そこではっと気付いた。もしや……。

ヒスメネスは無言で頷うなずいた。アイオナの表情か  
ら、その心中を察したらしい。

「おそらくもうこの屋敷には居ないでしょう」

「誰が居ないだって？」

反対側の廊下の先、暗がりから声がした。ダー  
シュだった。

「庭の篝火かがりびを消せ。それから男たちに武器を与えて  
屋敷を守らせろ。女子供と老人は中庭に集めてお  
け」

「すでにそうしてあります」

ヒスメネスの静かな物言いに、ダーシュは微かすかに  
笑った。

「さすがだな」

「一つだけ教えて下さい。あなたが手引きしたので  
すか？」

アイオナは胸が詰まるような気がした。恐ろしい  
問いだと思った。

しばら  
暫しばらくの沈黙の後、

「……いや、俺は手引きはしていない」

ダーシュは<sup>つぶや</sup>呟くように言った。

ヒスメネスはじっとダーシュを見つめた。

「解りました。それであなたはこれからどうされるのか？」

「俺は妻を<sup>まも</sup>護る」

アイオナは驚いた。急に自分のことに話が及んだからだ。

「言っただろう？ この取り引きでお前に決して損はさせないと」

「あ、あなたはこのアンケヌが落ちると思っているのっ!？」

<sup>うわず</sup>上擦った声でアイオナは<sup>ただ</sup>問い質した。

「落ちるさ」

ダーシュの声は落ち着いたものだった。

「奴らは城の抜け道を使ってくる。何日か前からもうアンケヌに入っている者たちもいるしな。おそらく城壁前では戦いは起こっていない」

アイオナは絶句した。

「詳しい話は後で聞かせていただきます。私たちはどうするべきでしょうか？」

「どうするべきとは？」

「このまま都市を脱出するべきかどうかということです」

ヒスメネスとは思われない発言だった。店も屋敷も放り出して逃げるといのか!?

「ほう……俺が逃げろと言ったら、お前たちは逃げ出すわけか？」

「ええ。そうするつもりです。生命<sup>いのち</sup>には代えられませんから」

「ふん」

ダーシュは鼻を鳴らし、それから含み笑いをした。

「まったく大<sup>たい</sup>した男だよ。だが安心しろ。この屋敷は安全だ」

「あなたが居る限り、ということですね？」

「そうだ」

にやりとダーシュは笑った。

「だが迷い込んでくる奴がいるかも知れない。今夜一晩は用心するんだ」

「判りました」

ヒスメネスは頷き、召使いに手早く命令を伝えた。召使いが駆け足で去っていく。

「お前は部屋に居ろ」

ダーシュがアイオナに命じた。有無を言わせぬ気配があった。

アイオナは答えずに背を向け、そのまま自室に戻った。後ろ手で扉を閉めた。

不安が全身を捕らえていた。なぜ？ 一体誰が攻めてきたのか？ どの集団なのか？

このアンケヌを落とそうというのか？

ナバラ砂漠にあるオアシス都市でも、最大のこの都市を？

ダーシュは落ちると言った。信じがたいことだが、信じたくないことだが、それは真実になりそうな予感があった。

外敵ならば撃退できるだろう。アンケヌには巨獣がいるし、兵力だって十分にある。

だがいきなり内部に踏み込まれたらどうだろうか。

それもアンケヌのことをよく調べて、その防備についてよく知っている集団が相手だったら？

庭を隔てた<sup>へだ</sup>塀の向こう、通りからは物々しい雰囲気<sup>い</sup>が伝わってくる。

ときおり<sup>ときおり</sup>時折人の叫び声や馬の<sup>いなな</sup>嘶き、家畜の鳴き声などが聞こえてくる。かなり遠くだと思われるが、騎馬の<sup>とどろ</sup>轟きまで混じっている。

しばら<sup>しばら</sup>暫くの間は寝台に腰掛け、それらの音を聞いていたが、やがて<sup>た</sup>堪えられなくなった。

アイオナは通りに面した側の庭に出た。篝火は消されているが、真っ暗闇というわけではない。月明かりに、ぼんやりと物の輪郭が浮かび上がって

る。

息を殺して外の様子を窺<sup>うかが</sup>った。よもや火が放たれることはないと思うが、このようなことは初めてである。何が起こるか判らない。

「何をしているっ！」

突如側面から怒鳴られた。ダーシュだった。

つかつかと歩み寄ると乱暴にアイオナの手を取った。

「部屋で大人しくしていると言ったはずだ。流れ矢<sup>あ</sup>に中たりたいのか？」

ダーシュの顔は暗くてほとんど見えない。だが口調の割には怒っているようには感じなかった。むしろ心配されていると思った。

「外の様子が見てみたかったの。すぐに戻るわ」

「何が起こったか知りたければ後で幾らでも話してやる。安全な時に、火にでもあたりながらな」

皮肉は気に入らなかったが、言い返す気にはなれなかった。ここで意地を張っても愚かなだけだ。今は非常事態なのだ。

部屋に戻ろうとした時、召使いが駆け込んできた。玄関の方から庭を回り込んで来たのだ。

「ダーシュ様！」

「なんだ？」

「正門に賊<sup>そく</sup>が！」

「解った。すぐ行く」

声をかける間も無くダーシュは走っていった。一瞬、後を追おうかと思ったが、思い止<sup>とど</sup>まった。そんなことをしても意味が無い。それどころか有害なだけだ。

アイオナは再び部屋に戻り、しっかりと鍵を掛けた。

＊

屋敷の門前にはすでに血臭が漂<sup>ただよ</sup>っていた。切られたのは賊か？ それとも屋敷の使用人か？ 斬<sup>き</sup>り合いの音が耳に響いてくる。

ダーシュは足早に前庭に歩み入った。ここだけは<sup>かがりび</sup>篝火を残してある。視界の確保のためだ。もちろん火に呼び寄せられる虫のように、賊どもが集まってくるのは判っていた。

それでも火を残したのは暗闇の中で踏み込まれた場合には、まずお互いの姿を確認出来ないからだ。

こちらの立場を<sup>あかし</sup>證立てることが出来れば切り合いにならずに済む。

そう考えていたのだが遅かったようだった。

斬られたのは屋敷の使用人らしい。他の使用人が取り付いているが、もう意識が無いようだった。

左の方ではヒスメネスが賊を相手に斬り合っている。振るっているのは反りのあるローゼンディア式の刀剣だった。

見た感じはアウラシールの直剣に比べて細身であり、優美にさえ見えるが、そんなことはない。

実際には刀身の重ねが厚いことも多く、見た目に反して鈍に近い武器なのだ。

切るということに限って言えば、アウラシールの直剣よりも遥かに優れた殺傷力を持っているのだ。

しかし奴は事実上の屋敷の主人であるから、奴が倒れればこの屋敷はお終<sup>しま</sup>いだ。そのところを自覚しているのだろうか？

だが――

――背後に隠れて怯<sup>おび</sup>えている主人よりは、余程<sup>よほど</sup>いいか。

ダーシュは口許に微<sup>かす</sup>かな笑みを浮かべた。まったくあの女といい、この家宰<sup>かさい</sup>といい、ローゼンディアには出来た人間が多いようだった。

雄叫<sup>おたけ</sup>びをあげながら賊の一人が斬りかかってきた。

ダーシュは下方から剣を跳ね上げて男の腕を斬った。同時に横に踏み出して流れてくる剣を躲<sup>かわ</sup>した。血が左肩に降り掛かってくる。そして男の絶叫。

男の背後に回り込むと、止め<sup>とど</sup>の一撃を頸筋<sup>くびすじ</sup>に打ち



込んだ。男は千切れかけた首を揺らしながら血を撒き散らしつつ、倒れていった。

賊はあと三人残っていた。剣を構えてはいるが切りかかってくる気配は無い。おそらく逡巡しゅんじゆんしているのだろう。

ヒスメネスの剣に貫かれた賊が、呻うめくような長い悲鳴を上げた。倒れたところを屋敷の使用人が斧おので止めを刺した。

「おい、お前らの中にハダクと話せる奴はいるか？」

ダーシュはアウラシール語で話しかけた。三人はびくりと身を動かした。アウラシール語で話しかけられたことが意外だったらしい。

それはそうだ。この辺りではイデラ語が公用語だ。

一口にアウラシールと言っても、ここはその西方地域に当たる。アウラシール語はもっと南の方で使われている言葉である。

しかしだからといってアウラシール語が通じないわけではない。

東西南北にはそれぞれの呼称があるものの、地域全体を指す名称として、アウラシールが選ばれているのにはやはり理由がある。

文化も言葉も、南方地域、つまりアウラシール語

が生まれたジルバラ地域が基準になっているのだ。

よってアウラシール語を話せる者の数は少ない。

そしてハダクはアウラシール南方のジルバラ地域からやって来た男である。その手下ならば、アウラシール語を耳にすれば必ず反応するだろうと思っただけの事だった。

「俺はハダクとは知り合いだ。この屋敷は俺の屋敷だ。手を出すとお前ら後悔するぞ」

男たちは剣を構えたまま、互いの顔を見つめ合った。こそこそとささやき交わした。

「あんたの名前は？」

一人が声を張り上げた。

「ダーシュ・ナブ・アザル・ナブ・イシュク・アヌン＝ダナンだ」

それを聞くと賊たちは<sup>あとずさ</sup>後退り、屋敷の正門から通りの闇の中に消えた。駆け去る音が後に残った。

ダーシュは剣に<sup>ちぶ</sup>血振りをくれて、自分が斬り殺した男の服で<sup>ぬぐ</sup>拭いかけた。それから<sup>さや</sup>鞘に納めた。

「これからどうなりますか？」

ヒスメネスが話しかけてきた。今の会話は聞こえている。内心穏やかではないだろうが、それを感じさせること無く<sup>そば</sup>傍に立っている。

「今夜の内に誰か送られて来るかも知れんな。その

時は俺が会おう」

「いきなり攻めてくるということは無いのですか？」

「おそらく無いな」

ヒスメネスが息を吐いた。<sup>あんど</sup>安堵したらしい。

「だが警戒は怠<sup>おこた</sup>らない方がいい」

「どこへ行くのです？」

「中に入るのさ。広間に居るから用がある時は呼んでくれ」

いつまでも前庭で立ちっ放<sup>ばな</sup>しているつもりはなかった。

どのみちはっきりするのは明日の話だ。今夜中に物事が決まるとは思えない。

それにいざとなれば自分の身はどうとでもなる。逃げ出すだけなら、そう難しいことではない。だが一人で逃げるわけにはいかないのだ。

最悪の場合アイオナを連れて逃げなければならない。それを考えると気が重い。

ダーシュは屋敷の中に入った。男たちは出払っているし、女子供老人は中庭に集まっているので人<sup>ひとけ</sup>気が無い。

アイオナだけは自室に待機させてあるが、それを除けば屋内には誰も居ないのだ。

取り敢えず返り血を落としたいと思い、ダーシュ

は水場へと向かった。水場の傍には避難している者  
たちが固まって坐っていた。

「お前たち、もう屋敷に戻っていいぞ」

教えてやると、皆のろのろと屋敷へと戻り始め  
た。何人かは頭を下げてゆく。

全員が居なくなった後でダーシュは服を脱いだ。

このまま血まみれでいるわけにもいかない。井戸  
で血をぬぐおうと考えたのだ。

気温はそれほど低くはないが、服を脱ぐとさすが  
に若干の寒さを感じた。

水が冷たくなければいいがと思いつつ、上着を井  
戸の脇にかけて水を汲んだ。

期待に反して水は結構冷たかったが、布を水に浸  
して顔や肩、胸を素早く拭いた。

ふと嫌な気配を感じた。

素速く身を伏せて転がった。硬い物が井戸の石組  
みにぶつかる音がした。

——<sup>とうけん</sup>投剣！

起き上がるると同時にダーシュは剣を取った。すら  
りと抜き放つ。

目の先の暗闇に何かが居る。右手の木陰か、それ  
とも左手の植え込みか。

空気、ではなく気配が動いた。雰囲気に変化し  
た。

ダーシュは再び横に動いた。屋敷に向かって走った。己の居た場所を<sup>めが</sup>目懸けて再び投剣が飛来した。

——<sup>ガズー</sup>暗殺者。

血の気が引くのを感じた。まさか<sup>ガズー</sup>暗殺者に狙われることになるとは……。

心当たりはある。誰が差し向けたのかの見当も付く。

<sup>ガズー</sup>暗殺者とは、アウラシールでは死の使徒としてよく知られた存在である。

その組織に狙われた者は、たとえ王族であっても死を<sup>まぬが</sup>免れ得ないという。

彼らは遠く東方の山脈に<sup>ねじろ</sup>根城を持つというが、一体それがどこなのかは誰も知らない。

アウラシールの長い歴史の中で、その闇に属する部分を受け持ってきた集団である。

柱の陰に隠れたまま、ダーシュは荒い息を吐いた。胸の前に剣を構えて動かなかった。

いや動けなかった。おそらく投剣には毒が塗ってあるだろう。<sup>かす</sup>擦れば終わりだ。

——<sup>いのち</sup>生命は無い。

そう認識した途端、どっと汗が出てきた。恐怖？いや逃げ出したいとは思わない。頭は冷静だ。望ましい状況とは言えないが、<sup>おび</sup>怯えて<sup>いしゆく</sup>萎縮しているという事は無い。

「誰か！ 誰か居ないか！」

大声で叫んだ。

「誰か庭に来てくれ！」

恥ずかしいとは思わない。虚勢を張って、闇の中で暗殺者ガズーに向き合う方がどうかしている。愚かとか言い様がない。

暫しばらく待った。やがて扉が開く音がして足音が近づいてきた。

「ダーシュ……何があったの？」

アイオナだった。

再び血の気が引くのを感じた。怒鳴りつけようとした時、植え込みが鳴る音がした。猿のような影が塀に跳び乗り、通りの方へと消えていくのが見えた。

「な、何？」

「行ったか……」

思わずつぶや呟いた。安堵した。

＊

「誰か——！」

寝台に腰掛けて小さく縮こまっていたアイオナは、近場から聞こえたただならぬ叫び声に飛び上がった。

ダーシュの声だった。

一体何があったのだろうか!?

しかし、立ち上がったはよいが、そのまま立ち尽くした。

見に行きたいが、外に出るなど言われている。そもそも駆けつけたところで何が出来よう？ あしでまと 足手纏

いになるのが落ちだ。それに――

なんと言っても恐ろしかった。

アイオナは首を振り、両手に握り<sup>こぶし</sup>拳を作った。

仮初めとはいえダーシュは我が夫だ。妻として夫を護るという契約をした。危急にある夫を助けにゆかぬわけにはいくまい。

アイオナは意を決して外へ出た。

声は外の庭から聞こえた。真っ暗な廊下を手探りで進み、月明かりが届くところまでやってくると、庭と一続きになった廊下の柱の陰に、<sup>うずくま</sup> 蹲っている人影が見えた。おそらくはダーシュだろう。

「ダーシュ……何があったの？」

声をかけた途端、庭の植え込みが鳴った。そちらの方を見遣ったが、反応の遅れたアイオナには、そこから飛び出した影を見ることは出来なかった。

「な、何？」

ただひたすら驚いていると、ダーシュが安堵したような声を出した。

「行ったか……」

何が何やら判らないが、どうやら危機は去ったら  
しい。

「だいじょうぶなの？」

ダーシュの許<sup>もと</sup>へ駆けつけようとしたら、

「出てくるなと言っただろう！」

怒鳴りつけられた。

さすがに腹が立った。勇気を出してここまでやっ  
てきたというのに。それに、怒鳴りつけられるのは  
今夜二度目である。

「何よっ！ 誰か来てくれってあなたが言うから、  
来てやったんじゃないの！ わたしのお蔭<sup>かげ</sup>で助かっ  
たんじゃないの!？」

「結果的に助かっただけだ。あいつがお前も殺すつ  
もりだったら、お前を護るところか、俺もお前も死  
んでいた」

アイオナは青冷めた。

「さっきの音……やはり庭に賊が居たの？」

「お前、見なかったのか？」

「……何も」

「そうか……」

ダーシュは立ち上がって井戸の方へ向かった。ア  
イオナは何やら妙なものを感じて、ダーシュの後を  
追った。



ダーシュに近寄った途端、血の臭いがした。

「あなた、怪我でもしてるの!？」

「いや？ ……そうか、血の臭いがするか？ 俺の血ではない。返り血だ」

よく見ればダーシュは上半身裸で、井戸縁には黒ずんだ衣服が掛けられていた。衣服は白かったはずだから、おそらくは血だ。

人の血だ。

そう思うと、ぎゅっと心臓が収縮した気がした。

「恐いか？」

既視感のある言葉である。

「べ、別に恐くなんてないわよ。わたし、<sup>にわとり</sup>鶏の<sup>とさつ</sup>屠殺は得意なのよ」

ダーシュは鼻で笑った。

「そんなのと一緒にするなよ」

アイオナは<sup>つるべ</sup>釣瓶を落とし、水を<sup>く</sup>汲んだ。

「ちょっと<sup>すわ</sup>坐って。拭いてあげる」

ダーシュはまた笑った。

「優しいもんだな」

アイオナはむっとした。この男は、どうしてこういう態度しか取れないのか。

「そりゃあ、あなたの妻ですもの」

言うなり汲み上げた水をダーシュの頭にぶっかけた。

「っ——!!」

ダーシュは勢い良く飛び上がった。

「がっ……！ おっ……！」

文句を言っているようだが、あまりの冷たさに声が出ないようだ。

井戸水がそんなに冷たいとは思えないが、ダーシュはがたがたと体をふる顫わせている。

いい気味だとアイオナが思った瞬間、

「ひゃっ!!」

ダーシュに抱きつかれた。

アイオナは、予想だにできなかったその行動に驚くと同時に、ダーシュの体から伝わってきた冷たさにも驚いた。

「ちょっ……！ 何すんのっ!!」

逃げようとするが、がっちりと拘束されていて動けない。

「妻なら文句を言うな」

耳許でささやかれた。

どきりとした。

からか 揶揄われているのは判っているのに、いやおう 否応もなく胸がどきどきする。冷やされた体が熱くなっていく。

不意に持ち上げられ、足が地面から離れた。ダーシュはそのまま歩き出す。

戸惑いながら、胸を高鳴らせながら、どこに行くのだろうと思っていると、屋敷の中に入り、暗い廊下を歩き、アイオナの自室までやってきた。

しかし、部屋の中に入ってさえ解放されなかった。ダーシュは寝台に向かい、そこにアイオナをそっと横たえた。

ここに来て<sup>ようや</sup>漸く、ダーシュはアイオナから離れた。しかし、アイオナの胸の高鳴りは収まるどころか、いよいよ息苦しくなるほどだった。

息を詰めて硬直していると、ふっとダーシュの笑い声がした。

「また期待しているのか？」

アイオナはかっとなって枕を投げた。ダーシュは笑いながら<sup>やすやす</sup>易々と<sup>よ</sup>避けた。

「いいか？ 大人しくしてろよ」

と言い残すと、アイオナを置き去りにして部屋を出て行った。

## 第八章 来客

ダーシュとの戯れは扱措き、アンケヌへの襲撃、ひいては屋敷への襲撃という事態に、アイオナは眠れぬ夜を過ごした。

翌日になると、状況はダーシュが言っていた通りになっていた。

アンケヌは盗賊団に占拠されていた。

王城は落ち、王は処刑され、広場に吊されているという。盗賊団の頭が次の王になるとかいう噂である。信じられない話だった。

都市の門は閉ざされ、誰も出入り出来ず、市内は大混乱に陥っているらしい。

「ひどい有様のようです」

ヒスメネスは淡々と報告を続けた。

「そこら中、強姦、殺人、掠奪の嵐だったようで…  
…いえ、今は収束しただけで、一部ではまだ続いているようですが」

アイオナは青冷め、罪悪感を覚えた。ダーシュと馬鹿なことをしている間にも、同じ市内でそんなことが起こっていたのだろうか。

「この辺りで難を逃れているのは、この屋敷くらい  
のようですね。——あなたの御蔭なんですか？」

ヒスメネスの視線を受けて、ダーシュは無言で笑みを返した。

「――しかし、盗賊にしてはどうも様子が<sup>おか</sup>奇妙しいです」

「どういうこと？」

「話を聞いていると、整然としたものを感じます。  
<sup>てぎわ</sup>手際が良いです。第一、これだけの都市を一夜にして落とすなど、その辺の盗賊に出来ることとは思えません。少なくとも<sup>うごう</sup>烏合の衆ではないでしょう。言葉や服装、雰囲気からして、幾つもの部族が寄り集まっているようではあります。ハルジット語が聞かれるという話も耳にしましたから、背後にはかなり大きな動きがあるものと思われれます」

「ハルジット語が？」

アイオナは不思議に思った。

ハルジット語が話されているのはアウラシールの東方、大河ニスルの東側だ。そんなところからこのナバラ砂漠まで攻めてきたというのだろうか？

「私自身も彼らが固まって歩いているところを目にしましたが、どうやら傭兵団のようです。おそらく普段は都市の防衛などを受け持っている連中なのでしょう」

「そんな人たちがどうして？」

「それは判りません。そして彼らとは別に、ナバラ

砂漠に住む周辺部族の姿も多くあります。こちらは寄せ集めのようで、やはりそれぞれ同族同士で行動しているようです。全体の指導者が誰なのかは判りませんが、おそらく一人ではないでしょう」

「では合議制で動いているというのかしら？」

アイオナは首を捻<sup>ひね</sup>った。想像しにくいことだった。

盗賊というのはそのような取り決めや、約束事とは無縁の連中に思えるのだ。

「ええ。おそらくは同盟のようなものに従って動いていたのでしょう。ですがこれからはどうなるか判りません」

「どういうことかしら？」

「果実を手に入れてしまえば、仲間はむしろ邪魔になるということですよ」

嫌な意見だと思った。正しいと思えるだけにますます気が重くなる。

「本当の混乱はおそらくこの後に来ます」

「……さすがだな」

黙って聞いていたダーシュが笑みを浮かべた。

「そろそろお聞かせ願えませんか？」

「何をだ？」

「あなたの身の上と、そして今回の事件との関連です」

「ふむ」

「私たちには聞く権利があると思いますが」

「無いな」

<sup>げんか</sup>言下にダーシュは否定した。ヒスメネスが<sup>わず</sup>僅かに硬直した。意外な返答だったのだろう。

「何故、俺が事情を説明する必要がある？ 俺は差し当たっての身の安全の代わりに、お前たちの屋敷と財産、生命を<sup>まも</sup>護ってやった。それで充分だろう？」

ヒスメネスは言い返さなかった。静かに、ダーシュを見ていた。

「わたしはどうなの？」

「何がだ？」

「わたしには、事情を聞く権利は無いの？」

緊張した。ダーシュはアウラシールの、おそらくはアンケヌの人間だ。ローゼンディアの考え方が通用するとは限らない。

しかしローゼンディアでは夫婦は助け合い、共に協力するのが正しいとされる。

結婚の契約はまだ破棄されてはいない。

ならば自分には知る権利があるはずだ。

「そうか……やはりローゼンディアの女だな」

ダーシュは苦笑するような顔をして、<sup>るりざいく</sup>瑠璃細工が並んでいる棚の方に目を向けた。

「いいだろう。話してやる」

「ヒスメネスにも聞かせていいかしら？」

「禁じたところでお前が後で話すのは判っている」

凶星だった。

「俺はあいつらの集団に属している」

いきなり、重い一言が来た。判ってはいたことだったが耳にしたくない一言だった。

「だが市内に兵を導き入れたのは俺じゃない。そのことには俺は反対だった。——なんだ？ 喜ぶようなことか？」

内心が面<sup>おもて</sup>に表れてしまっていたらしい。アイオナは慌てて澄ました顔を作った。

「それであなた自身は何者なの？」

「まあ待て。その前に今アンケヌを蹂躪<sup>じゅうりん</sup>している連中について話す方が先だ。その方が助かるだろうしな。——だろう？」

ヒスメネスの方を見て言った。

「そうですね」

「周辺部族を束ねているのはハダクだ」

「あの野盗ですか？」

ハダクはナバラ砂漠に出没する盗賊である。かなりの数の手下を持ち、噂によると隠れ家のオアシスで王のように暮らしているという。

「ハルジット語を話すのはゴーサの傭兵団だ。と



言っても知らないだろうが」

「いえ。知っています。都市ゴーサを根拠地はるにしている軍ですね」

「ほう。博識だな」

都市ゴーサと言えはアンケヌからは遥か東である。

「今の將軍はフブルヤギだが、今回指揮を執とっているのはその甥おいだ。ギドウという」

「どうして彼らが協力することになったの？」

それが何より不思議だった。ナバラ砂漠の盜賊団と、東方の傭兵団。その二つが何故つな繋がるのかが解らない。

「それを結びつけた奴がいるのさ」

「お知り合いですか？」

ヒスメネスの一言にダーシュは驚いたように見えた。

「ザハトという。俺の従いとこ兄弟だ」

「あなたは反対だったのですね」

ダーシュは苦い顔をした。暫しばらく言葉を探しているように見えたが、結局何も言わずに黙り込んだ。

「それで……どうしてあなたは都市の兵士に追い回されていたの？」

「別にいいじゃないか」

「よくないわよ」

<sup>せんさく</sup>  
「穿鑿好きな女だな」

<sup>ぶっきらぼう</sup>  
打切棒な一言に、アイオナは怒りを感じた。

「この状況を考えなさいよ。知りたがるのは当たり前でしょ！」

「お嬢さん、落ち着いて下さい」

<sup>たしな</sup>  
宥められ、アイオナは浮かしかけた腰を下ろした。ヒスメネスは意味ありげな表情をダーシュに向けた。

「焦らずともおそらく今日中にはすべてははっきりしますよ。——そうでしょうか？」

「お前は嫌な奴だな」

<sup>ためいき</sup>  
ダーシュは溜息を吐いた。

「それはあなたに原因がある。私だって、誰にでもこのような態度を取るわけではありません」

ヒスメネスの言葉の意味はその日の内に明らかになった。

日が沈んで間もなく、ゴーサの傭兵団が屋敷を訪れたのだ。アンケヌに限らず、アウラシールの多くの地方では昼間活動するということはあまりない。大概が屋内や日陰で過ごし、本格的に活動するのは夕方からだ。

傭兵たちは礼装と思しき白い服を着ていた。皆、鼻から下を白い布で覆い、腰には長剣を、手には槍を持っていた。

槍は取り回しを考えてかそれほど長くなく、手槍といった長さだった。これは開けた野外戦ではなく都市内部での戦闘を考慮したものだろう。

さすがに落ち着いた感じであり、野盗とは風格が違ふ。

傭兵たちを引き連れていたのは若いアウラシール人だった。この男だけが礼装ではなく普段着だったが、皮肉なことに一番品格を感じさせた。

生地のままの亜麻布で作られた長<sup>ケス</sup>衣を着ている。

ごく普通のアウラシールの服装だったが、腰には長剣を提げていた。それも刺繍のある黒地の帯に、直に剣を提げていた。

アイオナの父親も同じようにしているので、何となく意外に思った。

父のファナウスは短めの刀を愛用していて、佩<sup>はきお</sup>緒などを使わずに腰の帯に落とし差しにしているのだ。

若いアウラシール人は腰間の長剣を鞘ごと抜き取ると、手近にいた使用人に突き出した。

一瞬の間があってから、使用人は慌てて長剣を受け取った。

入り口で武器を差し出した辺り、敵意はないという事を示したのだろうか。

傭兵たちの大半を前庭に残し、右往左往する使用

人の間を抜けて、アウラシール人は広間へと入ってきた。左右には傭兵を一人ずつ付けていた。この二人は手槍は渡したが、腰の長剣はそのままだった。

全ての武器を渡して欲しいとまでは思わないが、アイオナとしては複雑だった。

「ダーシュ。無事で何より」

「ああ」

ダーシュと、彼の<sup>いとこ</sup>従兄弟であるというザハトは、対面するとアウラシール式の挨拶を交わした。互いの頬を左右交互に触れ合わせる挨拶である。

並んでみると、二人して似たような背格好をしている。長身で、<sup>しな</sup>韌やかそうな<sup>ひきし</sup>緊縮まった体付きである。ダーシュのように長髪ではないが、ザハトの髪も瞳も黒い。肌はよく日に焼けている。ダーシュにはそこはかたない気怠さを感じるが、この男には鋭利な輝きを感じる。

「結婚したと聞いて驚いたが花嫁はどこだ」

「お前の目の前にいる」

ザハトは驚いたようにアイオナに目を向けた。ダーシュの横で二人を見守っていたアイオナは、いきなり注目されて戸惑った。

「ローゼンディア人に見えるが？」

「ローゼンディア人だ」

ザハトは目を見開き、やがて苦笑するような顔を

した。

ダーシュの従兄弟だけあってやはり目鼻立ちの整った顔をしている。

その秀麗な顔で明らかに軽侮と感じられる表情を浮かべられると、通常よりも二割増しくらいで嫌な気分になる。

「ローゼンディア人と結婚するとは随分ずいぶんと物好きだな」

アイオナはむっとしてザハトを睥にらんだ。じろじろ見た挙句あげくになんという言種いいぐさか！ ダーシュの従兄弟いとこだけはある。失礼なところも似ている。

「信じられんな。女のくせに生意気な顔をする」

アイオナの視線を受けて、ザハトは不快げな顔をした。

「妻を侮辱するのはやめてくれ」

ダーシュが打切棒ぶっきらぼうに言った。

アイオナはどきりとした。仮初めとはいえ夫なのだから当然の言葉である。そこにそれ以上のものは無いことは承知している。それなのに、思わず嬉しさで顔が綻ほころびそうになってしまった。

不思議だ。我ながらどうかしているとしか思えない情動だった。何だか自意識過剰のようで恥ずかしい。

ザハトはアイオナから目を外そらすと、一転して明

るい笑みを見せた。

「いや悪かった」

と、ダーシュに向かって言う。そしてそのまま話を続けようとする。アイオナにはなんの謝罪も無い。もはや眼中に無いといった様子である。アイオナは腹が立った。

これがアウラシールの遣り方だということは判っている。アウラシールにおいては、妻は夫の所有物でしかない。所有者に対して謝罪することは当然であっても、その所有物に対して謝罪するなどということは考えられないことなのだろう。

しかし自分はローゼンディア人だ。ローゼンディアでは夫婦はまったく対等な存在である。夫の所有物でしかない感覚など解りようもない。夫に謝罪して終わりにされては堪<sup>たま</sup>らない。侮辱されたのは他ならぬ自分なのだから、自分にこそ謝罪してもらいたい。

とはいえ、ここでそれを主張したところでどうだろう。相手はアウラシール人だし、ここはアンケヌだ。衝突しか有り得ないのは目に見えている。そしてそうなったらダーシュの手を患<sup>わずら</sup>わせてしまうかも知れない。いくら契約があるからといって、そこまで甘えるわけにはいくまい。アイオナはぐっと怒りを腹に収めた。

ダーシュは改めてザハトにアイオナとヒスメネスを紹介し、アイオナとヒスメネスにはザハトを紹介した。

そして挨拶の段になると、アイオナはまたしてもザハトから無視された。ダーシュの所有物でしかないアイオナには、わざわざ挨拶をする必要は無いということらしい。ダーシュからの紹介だけで充分なのだ。

腹立たしかったが、アイオナはなんとか堪<sup>こら</sup>えた。これが仮初めの結婚で良かったと熟<sup>つくづく</sup>々思う。結婚するならばやはりローゼンディア人しか考えられない。

ザハトはヒスメネスと挨拶を交わし合うと、ダーシュに向き直った。

「お前の義父<sup>ちちうえ</sup>上にも挨拶しておきたいのだが……」

「すまないが、義父殿はアンケヌにはおられぬのだ」

「そうか。ともあれ結納<sup>ゆいのう</sup>を用意せねばならんな。まだなんだろう？」

「ああ。坐<sup>すわ</sup>って話そう」

ダーシュが促<sup>うなが</sup>してザハトが卓に着くと、ダーシュ、アイオナ、ヒスメネスも着いた。

ザハトは訝<sup>いぶか</sup>しげにアイオナを見た。何故お前まで同じ卓に着く？ とでも言いたげである。アウラ

シール人たるザハトからしてみれば、ダーシュの客人たる己と同じ卓に、ダーシュの所有物という、己とは対等では有り得ない者が着いているのが気に入らないに違いない。

しかし、ローゼンティア人たるアイオナにしてみれば、自分はダーシュと対等であるのだからその客人とも対等であるし、なんといってもこの家の所有者は自分の父であり、自分はその娘であるのだから、今現在のこの家の主人は自分を<sup>お</sup>措いて他に無いという自負がある。家の主人が客人を<sup>もてな</sup>遇さぬわけにはゆかぬだろう。

ということでアイオナは、<sup>とげ</sup>棘のある<sup>まなざ</sup>眼差しで<sup>もっ</sup>て、<sup>ふそん</sup>不遜な<sup>もてな</sup>客を<sup>もっ</sup>遇した。

ザハトはそんなアイオナを無視して話を始めた。

「結納だが、このアンケヌにあるもの、なんでも好きなものを選ぶといい。お前自身の屋敷も思うがまだまだ。アンケヌはもはや我々のものなのだからな」

「何を言っている。アンケヌは、アンケヌを作り上げてきた商人たちのものだ」

しかつめらしくそう言うダーシュに、ザハトは馬鹿馬鹿しいとでも言うように笑った。

「アンケヌは本来の持ち主の元に戻ろうとしている。<sup>さんだつしゃ</sup>篡奪者は<sup>ヤグ</sup>禿鷹と<sup>ウルガ</sup>野犬の<sup>えさ</sup>餌となっている。アルシャンキの正義が示されたのだ」



ヤグとウルガは、この一帯に棲息<sup>せいそく</sup>する屍肉喰<sup>しにく</sup>らいの獣たちである。

「お前が連れてきた盗賊共はどうするんだ？」

と、今までイデラ語で話していたダーシュは、唐突に別の言語で話し始めた。驚いたことに古典ナーラキア語である。

古典ナーラキア語は、今は亡きナーラキア帝国で使われていた言語である。現在のローゼンディア語やダルメキア語、そして一部のアウラシール系諸言語の元となった言語であり、周辺諸国に大きな影響を与えた古代語なのだ。

ナーラキアは遙かな昔、ナバラ砂漠がまだ緑の平原だった頃、隆盛<sup>りゅうせい</sup>を極めた大国である。

しかしナーラキアは滅んだ。その跡地は不毛の砂漠となり、今や見る影もない。

帝国滅亡の直接的な理由は悪の種族の攻撃によるものだが、歴史書には自らの愚かさ<sup>くわ</sup>と身内同士の敵意が滅亡を招いたのだと記されている。悪の種族はそれに付け込んだのだ。

ローゼンディアの歴史書ではナーラキア帝国衰亡史を特に精しく取り扱っており、アイオナもまた、ナーラキア帝国についてはよく知っている。

ナーラキア帝国はアウラシールの北部で生まれ、周辺諸国を侵略しながら巨大化していった。

その歴史は前期と後期に分けられ、前期を古ナーラキア、或いは東ナーラキアと呼び、後期を新ナーラキア、或いは西ナーラキアと呼ぶ。ここナバラ砂漠は一貫してナーラキアの統治下にあった地域だ。

しかしその言語となると別である。なんと言っても遙か古代の言語なのだ。ローゼンディアでも貴族階級か、または神官でもない限りはナーラキア語を話せる者はそうはいない。

そしてアイオナはその数少ない一人であった。ヒスメネスもである。

正確には現在ローゼンディアに残っているナーラキア語は、古典語そのままの姿をとどめてはいない。

ナーラキア語を学ぶ必要があるのは主に神官達だけである。神官達は祭祀や学修などの職務のために学ぶのであって、知的興味に駆られて学ぶわけではない。

ゆえにその体系は実用のために整理され、改変されている部分がある。

だからといってその言葉が単純にローゼンディア語に近くなったわけではない。

あくまでナーラキア語として神官用に調整を施されたのであって、簡略化を目指したわけではないのである。

具体的には元々のナーラキア語に含まれていた例外規則や、格変化などの語法の整理が行なわれただけでなく、筆記法もローゼンディア語の音表四十二文字を用いて可能になるように整理されている。

それに対して本来のナーラキア語では、筆記には<sup>くさびがた</sup>楔形文字と呼ばれる独特な文字が使われる。これは<sup>あし</sup>葦の<sup>くき</sup>莖を切ったものを筆記具として用いることで生まれた文字であり、その形状が、さながら楔に似て見えるところから楔形文字と呼ばれるものである。

この楔形文字にはローゼンディア語のように発音を表す音表文字と、意味を表す絵文字とが存在する。

このため主要な文字数は数百に及ぶことになる。

それだけでも複雑なのだが、楔形文字には文字の使い分けがある。

一つの文字が音を表したり、意味を表したりと状況によって使い分けられるので、文脈による読み分けが必要になる。

さらに文字の意味を限定する記号や、文字の読み方を記す説明書きなども、一連の文章の中にそのまま書き込まれるのである。

そしてその文書には粘土板が用いられる。ナーラキア帝国においては、記録媒体は粘土板が主流であった。逆に楔形文字を用いる以上、粘土板以外の

選択肢はなかったとも言える。

しかしこの事が結果的に帝国の記録保存に役立った。粘土板の耐久性の賜<sup>たまもの</sup>である。

また帝国と最後まで敵対したアウラシールの都市国家群でも同じように、楔形文字を用いる。こちらもお蔭で、その気の遠くなるような長い歴史が、しっかり保存されて後世に伝わっているのだ。

とまれ以上のような違いから、本来のナーラキア語を古典ナーラキア語と言い、ローゼンディアの神官達が使うナーラキア語を正典ナーラキア語と呼んで区別することがある。

とは言っても話言葉に限って言えば、その違いは僅<sup>わず</sup>かなものであり、記述体でもない限りは、片方が理解できればもう片方も理解できる程度のものである。

ダーシュの話すナーラキア語にはアイオナの知らない格変化が含まれていた。

そこから同じナーラキア語でも古典ナーラキア語であるとの判断が出来たのである。

ダーシュの言葉で、ザハトの顔から笑みが消えた。

「奴らにもう用は無い。砂漠<sup>ア</sup>の宝石<sup>ン</sup>は奴らには渡さぬ<sup>ケ</sup>」

驚いたことに、ザハトもまた古典ナーラキア語で

答えた。

その立居振舞<sup>たちいふるまい</sup>、雰囂気<sup>うかが</sup>からも窺えることだが、  
ダーシュもザハトも、その出自は賤<sup>いや</sup>しからぬものに  
違いない。

ともあれ話の内容は不穩である。わざわざ古典  
ナーラキア語で話しているということは、他人には  
聞かせたくない話であるということでもある。

アイオナは、ザハトの背後に控える二人の傭兵を  
ちらりと見た。布で覆われた顔は目だけを覗かせて  
いるが、その目が戸惑い気味に少し揺れている。突  
如耳慣れぬ言葉で話し始めた二人に戸惑っているの  
だろう。おそらくは理解できていない。

ヒスメネスを見てみると、こちらは相変わらず何  
を考えているのやら判らぬ顔をしている。当然二人  
の会話は理解できているだろうに。

アイオナ自身はというと、素知らぬ顔をしていれ  
ばよいのだが、そんな芸当ができているとは我なが  
ら思えなかった。どうしたところで顔に出してしまう  
質<sup>たち</sup>なのだ。

しかしザハトからしてみれば、自分はダーシュの  
おまけに過ぎない。屈辱的な事実ではあるが、今は  
それが助かる。アイオナが二人の会話を理解できた  
ところで意に介されることは無いだろう。

と、思っていたのだが――

「ダーシュの妻よ」

どきりとした。

突如ザハトが話しかけてきた。イデラ語である。

アイオナは戸惑いつつも睥<sup>にら</sup>みを効かせた。ザハトは見定めるような目でこちらを見ている。

「どうしてダーシュと結婚する気になった？」

またまたどきりとした。

偽装結婚を疑われているのだろうか？

しかし妥当<sup>だとう</sup>な疑問ではある。ローゼンディアの女が外国人と結婚するのは、非常に稀<sup>まれ</sup>なことなのだ。その理由の大部分は、ローゼンディアでは男女は平等に扱われるが、諸外国ではそうではないというところにある。

ともあれ妙なことは言えないと思うと緊張した。

「どうしてって……す……」

言いかけた自分の言葉に気付いて、アイオナは顔<sup>あから</sup>を赧めた。

「す？」

ザハトが聞き返す。

「す……」

なんでもないはずのその一言が、恥ずかしい。ダーシュにもヒスメネスにも注目されていると思うと、ひどく恥ずかしい。さらりと言ってしまえばよかったのに、どうしてまた口籠<sup>くちごも</sup>ってしまったのか。

胸を高鳴らせながら硬直していると、横合いからいきなり抱き寄せられた。ダーシュである。アイオナは更に顔を赧めた。

「もう充分だろう？ 我が妻は恥ずかしがりなのでな」

ザハトは笑みを浮かべた。

「随分と愛されているようだな」

——愛!?

アイオナは目を剥いた。聞き捨てならぬ言葉であった。強く否定したいところではあったが、ぐっと堪えた。

「……結納は豪華なものでなければならない。城の宝物庫を開けさせよう」

静かにそう言うと、ザハトは立ち上がった。

「また来る」

ザハトを見送った後、アイオナはダーシュに詰め寄った。

「それで、これからどうなるの？ どうするの？ あなた、いったい何者なの？」

アイオナは混乱していた。続けざまにいろんなことがありすぎた。盗賊の襲撃、アンケヌ陥落、ここに来てダーシュが盗賊の仲間だの、ダーシュの従兄弟がやってくるだの、古典ナーラキア語で会話をするだの、何がなんだか解らない。

自分が今立っているところは、一体どんなところなのか。安全なところなのか、危険なところなのか。それが判らないと不安で堪<sup>たま</sup>らない。

契約では、ダーシュがアイオナの身を護ってくれていることになっている。ダーシュを信用していないわけではないが、だからといって、何も考えずにただ従順に護られているというのは落ち着かない。アウラシールの男ならば大人しくしていると言うだけだろうし、アウラシールの女ならば何も言わずに従うのだろうが、自分はローゼンディア人なのだ。

ダーシュは面倒臭そうにアイオナを見た。

「取り敢えずは、ここで大人しくしている外無いな」

それだけ言うと、自室の方へ足を向けた。これ以上話す気は無いといった様子である。

アイオナは追いかけた。

「重要なことに答えていないわ」

「そうか？ 重要なことは特に無いと思うが」

歩きながら答える。

あくまで呆<sup>とぼ</sup>けるつもりらしい。

「あなたが何者かってことよ」

別段、興味本位で穿鑿<sup>せんさく</sup>しているわけではない。アンケヌ襲撃団の間で、アンケヌをめぐる争いが生じるかも知れぬという状況なのだ。契約者たるダー



シュの立ち位置を知っておくことは重要だ。

ダーシュは鼻を鳴らした。

「何者でも無いさ」

どこか自嘲気味である。

「何者でも無い人が、古典ナーラキア語を話せるはずがないわ」

「ほう。やはり解っていたか。お前だけでなく、ヒスメネスも理解出来るんだろう？ 貴族や神官でもないお前たちでも修得しているんだ。俺とザハトが修得していても奇妙おかしくはないと思わないか？」

「屁理窟へりくつだわ。そんな態度って、ないんじゃないかしら？ わたし、あなたの契約者なのよ？」

「ならば俺を信用して欲しい。俺はお前に損はさせないと言ったはずだ」

「信用はしてるわ。でも……」

「——で、どこまで跟ういてくるつもりなんだ？」

と、言われて気がつけば、アイオナはダーシュの部屋の中にまで入っていた。沈みかけの日の光がうっすらと射し込む、暗い部屋である。

ダーシュは寝台に腰掛け、人の悪い笑みを浮かべた。

「添臥そいぶしでもしてくれるのか？ 妻よ」

アイオナは顔あからを赧めた。羞恥と怒りでだ。

「誤魔化ごまかさないで！」

ダーシュは真面目な顔でアイオナを見つめた。

「悪いが今はまだ話せない。俺と、そしてお前の<sup>いの</sup>生命ちに関わることだ」

アイオナは目を見開いた。

「口止めすればお前は言わないだろう。それは判っている。そこまでは信用している。――が、無意識であれ、お前は顔に出る<sup>たち</sup>質だ」

アイオナは言葉に詰まった。ダーシュの言う通りである。そればかりは、自覚していてもどうにもならないところなのだ。

口を尖らせつつ、小さく溜息を吐いた。

「……解ったわ」

「とにかく大人しくしている」

又その言葉かとアイオナはむっとしたが、何も言わずにダーシュの部屋を出た。

少し歩いてからふと思い出したが、ザハトはアクルしか名告らなかった。

考えてみれば不思議なことである。

彼は父の名も、祖父の名も名告らなかった。

部族名はダーシュと同じダナン族であろうが、あれだけアウラシール人らしい男が……と言ってもアイオナが想定しているアウラシール人という意味だが、そんな人物が父や祖父の名を名告らないのは、<sup>い</sup>如何かにも妙なことに思われた。

## 第九章 密約

面会人が来ているという。

おおかた べんぎ  
大方、便宜を図って欲しい商人が泣きを入れてきたのかと思ったが、違うようだ。

「花婿のことで話があると申しております」

兵は無表情にそう告げた。軽く一礼をすると去ってゆく。ザハトはそれを好ましい態度だと思った。盗賊どもではこうはいかぬ。

ゴーサの傭兵たちは優秀だ。なにしろ数百年の歴史がある。軍規の維持と、確固たる目的を定め、それを貫徹するべく力を尽くすことが軍団の強力さを支えることを知っている。

軍団は先のアンケヌ攻略戦でも目覚ましい働きを見せてくれた。りゃくだつ 掠奪は二刻以内、強姦は禁止という取り決めも厳しく守られたようだ。

それに比べて盗賊どもと来たら……未だに民家に押し入っている者があると聞く。

ハダクはかば庇い立てをしているがまあいい。

いずれ近い内に皆殺しにしてやろう。

馬鹿どもが悪業を重ねれば、それだけこちらには都合がよい面もある。住民は解放者を望むものだからだ。

ゴーサ歴代の将はすべて、実力でその立場を勝ち

取ってきた者たちである。徹底した能力主義が採用されており、九人居る副将すべての賛同がなければ、将として立つことは出来ない。

現在の将はフブルヤギ。その強力な統率力で知られる名将である。

アンケヌ攻略を受け持ったのは副将の一人、ギドウである。

彼はフブルヤギの甥おいにあたる。背が高く、かんこつ顴骨高く、ずがいこつ頭蓋骨に張り付くような肉の薄い頭部と、濃いくちひげ口髭が印象的な男である。

すらりとした体型ながら戦士としての力量は確かで、その点彼の伯父には似ていないと言える。

フブルヤギは自らの武力ではなく、自軍を勝利に導くことでもって指導者になった男である。彼の旗の下には常に勝利と栄光があるのだ。

これは極めて重要な点だが――ゴーサには報酬を支払った方がいい。そうすれば何の問題もなく彼らを排除することが出来る。

現状の問題は、ゴーサに支払うだけの富が無いということだ。

もっと尤もこれは最初から無かったのであるが……もしゴーサに報酬を支払えば、この己の取り分が大きく減ってしまう。

利益は欲しいが損失は御免だという、都合の良い

理窟にザハトも与<sup>くみ</sup>しているわけであった。

「お初にお目にかかります。私はローゼンディア人の商人でヒスメネスと申す者です。王にはご機嫌およろしゅう」

先日ダーシュの様子を見に行った折に同席していたローゼンディア人である。

——お初に、王に、か……。

ヒスメネスの背後にはゴーサの兵が立っている。それを意識しての発言だろうが、ゴーサの兵は口が堅い。余計なことは言わぬ。

とはいえこの男の用心深さは気に入った。今回が初めての会見である、そうしておこうというわけだ。

王に、というのは悪くない。悪くない気分だった。

だがザハト自身が考える王と、このローゼンディア人が考える王とはきっと違う。

そのことには確信が持てた。

「まずは坐<sup>すわ</sup>れ。ローゼンディア人は椅子<sup>いす</sup>の方が良かったかな？」

アウラシールでは敷物を敷いてその上に直に坐るのが一般的である。

敷物はアウラシールのものは一般に絨毯<sup>タフイート</sup>と呼ばれる。これは特にハルジット地方の物が名高い。

そこで作られる絨毯は特にハルジット絨毯と呼ばれ、極めて優れた美術工芸品として有名である。

無論高級品であり、遙か東方ハルジットからローゼンディアはもちろん、西方レメンテム帝国にまで交易商人によって運ばれている。

ここで敷かれているのもそのハルジット絨毯であった。

小豆色に橙、黄色、と黒、白の糸を使った物で、その意匠は一見複雑な幾何学模様に見えるが、実は季節の花や草などの植物を図案化したものである。その様式がハルジット独特のものであり、それがまた魅力なのであった。

この絨毯の上に直に坐るか、個人用の薄手の座物を更に上に敷いて坐るわけである。

少し豪華になるとムムトという中身の詰まった座物を用いる。これが椅子の代わりになる。

<sup>タフィート</sup>絨毯には精緻な織り方をされた高級品から、ほとんどただの布切れ一枚という物まで幅広く存在するし、ムムトにも中身の一杯詰まった体が埋まってしまふような物から、尻を載せるだけの簡素な物までやはり幅広くある。

アウラシールでは一般的に室内で靴は履かない。椅子もあるにはあるが、どちらかということと神殿や王宮で使う道具であり一般的ではない。

床の上に直に坐るのは体に厳しいということで絨毯や座物が発達したのだろう。

ただしローゼンディアでも素足で過ごす風土を持った地方もある。しかもそこでは椅子も普通に使われているので、一概には言えないかも知れない。

ザハトがヒスメネスに勧めたのは、王宮で一般的に使われているムムトであり、尻が埋まるような豪華なものであった。

「いえ、私はカサントスの出身ですので問題はありません」

「カサントス？ 確かナバラ砂漠の北方だったか。不毛のナーラキアに接していたな」

知っていて、敢えてとぼけるような言い方をザハトはした。

不毛のナーラキアというのはアウラシール風の言い回しである。

かつての古代帝国の土地は、今や不毛の荒野や山岳地帯と化しており、見る影もないのだ。

「はい。カプリアの東でございます」

「おお、あの豊かなるカプリアの隣か。聞くところによれば岩だらけで、山羊やぎしかおらぬ地域だそうだな」

軽い侮りあなどを含んだ物言いに、ヒスメネスは微かなかす苦笑を浮かべた。

「はい。貧しい土地でございます」

この返答は嘘である。大いなる大河、ニスルとアプスルはローゼンディアのカサントス地方に発する。その流域は豊かな水に恵まれており、大農業地帯なのだ。

カサントス地方と言っても広い。かなりの広さがある地域であるから、その中には当然貧しい地方はある。特に山岳部は貧しいであろう。

大まかに言ってカサントスは東部が貧しく、西部が豊かだ。ただしニスルとアプスル、両大河の恵みを受ける地域は別である。

そうした知識を表に出すことなくザハトは言葉を返した。

「貧しさならこのナバラ砂漠も変わらぬ。尤もこのアンケヌを除いてのことだがな」

「<sup>おっしゃ</sup>仰る通りでございます。まさしくこのアンケヌは砂漠の宝石。私ども商人もそれゆえにこそ、<sup>はるばる</sup>遙々商をしにやって参りますもので」

二人は向き合って坐った。戸口、と言っても扉は無いが、その左右には<sup>ほこやり</sup>矛槍を持ったゴーサの兵が二人立っている。ザハトの席は片方の兵の半身が見える位置だった。

「それで今日は何の用だ」

「申しあげましたように花婿のことでお話がござい



ます」

「花婿？」

ザハトは敢えて聞き返した。大げさに驚いた顔までしてみせた。

「ええ。花婿のことです」

何でもないようにヒスメネスは<sup>うなず</sup>頷いた。ダーシュの名前を出さない。やはり用心深い。

「その花婿がどうしたのかな？」

「はい。実は少々困っております……」

ヒスメネスの話はある面予想通りであり、またある面では予想を超える内容であった。

ダーシュが<sup>い</sup>如何にしてあの屋敷に入り込み、あの女と夫婦になったかを、ヒスメネスは事細かに話してくれた。また王宮に請願に出た話もしてくれた。

先の王は僭主である。少なくともザハトにとってはそうである。

あの男が許可を出さなかったこと、のらりくらりと逃げようとしたことは察しがつく。

大方時間を稼いで、また後ろから刺そうなどと考えていたのだろう。奴が何を考えていたかなど、ザハトには簡単に予想できることだった。

しかしあの篡奪者も今や冥界に住まう身だ。今となっては奴のことなどどうでも良いことではあった。

……いや、良くはない。正すべきは正し後世に真実を伝えなければならぬ。

あの篡奪者を王と呼ぶことなど決して堪<sup>た</sup>えられることではない。王統譜からは抹殺してくれる。

「このまま彼を夫として迎えて良いものかどうか、  
私<sup>わたくし</sup>どもは困り果てておるのでございます」

「で、私にどうして欲しいのだ？」

単刀直入に尋ねた。つまらん遣り取りに明け暮れる気はなかった。この男は頭がいい。迂遠<sup>うえん</sup>な手順は無駄というものであろう。

「私どもは異国の商人でございます。出来るだけ政<sup>まつりごと</sup>には関わりたくはございません。ただ安全に商売が出来ればそれで良いのでございます」

「外国人らしい言種<sup>いいぐさ</sup>だな」

勝手なものだと思った。だがそう言うように仕向けたのは自分である。

「申し訳ございません」

「構<sup>かま</sup>わん」

「しかし……アンケヌはどうなってしまおうのでしょうか」

「市中に盜賊<sup>あふ</sup>が溢れ、民心が動揺している、か？」

「失礼致します」

女官の声がかかった。召使いが酒と食事を捧<sup>ささ</sup>げ持って入ってきた。

「昼はまだであろう。済ませていくがいい」

「有り難き幸せに存じます」

召使いたちが去ると、ザハトは酒と食事に手を付け始めた。見ているとザハトが最初の一口を味わってからヒスメネスは手を付けた。アウラシールの作法に通じているというわけだった。

「夫としてどうかと言ったな。女の方はどうなのだ？」

ザハトは話を戻した。

「私の見るところ、それほど嫌がってはいないようです」

「ほう……」

それは意外な話だった。ローゼンディアの女は気が強く、<sup>が</sup>我が強く、女の分際で男にもずけずけとものを言うと聞く。

我々砂漠の男たちと<sup>そ</sup>反りが合うとは思えない。砂漠の男たちは従順な女を好む。

従順で美しく、男に喜びを与える女を好むのだ。なればこそ財を支払って家に置く価値があるというものだ。

不思議なのは女に好きにさせているように見えるローゼンディアの男たちが、腰抜けでもなければ頭が悪いわけでもないということだ。これはまったく理解に苦しむことであるが、おそらく宗教の違いと

ということなのだろう。

「ローゼンディアの女と合うとは思えぬがな」

「私もそう考えていたのですが……」

「仲睦<sup>なかむつ</sup>まじくやっているのか？」

だとすれば少々厄介<sup>やっかい</sup>な問題を孕<sup>はら</sup>むことになるかも知れない。

「はい。仲が良いと言ってよろしいと思います」

「ほう……それでお前は二人が結婚するのに反対というわけか？」

「<sup>わず</sup>僅かではあるがヒスメネスの表情に動きがあった。驚いたのだろうか。

ザハトは弱冠<sup>じゃっかん</sup>の興味を惹<sup>ひ</sup>かれたが、今はそんなことを話している時ではない。

この男もそんな話のために来たわけではない。

「まあいい。お前たちの事情はどうでもいい」

問題なのはこの自分の、そしてダーシュの事情なのだ。

「私の見るところ現状は長くは続かぬ」

「と申されますと？」

「今は二人の王がこの都市に居る、ということだ」

ハダクと、ギドウのことを言ったつもりだった。

だがわざと勘違いをするような言い方を選んだ。

この己、ザハトとそしてもう一人、という受け取り方をヒスメネスがするように仕向けた。

ところがヒスメネスは予想外の返答をしてきた。

「彼らは王にはなりません」

その言葉に、ザハトはただ<sup>すごみ</sup>凄味のある笑みで意を表した。

「そうか」

ならぬ、と来たか……。

あの二人の意思を知ってるわけでもあるまいに。特にハダクは、もう自分が王になったつもりでいる。愚かな話だ。

「外征の兵は国に帰る者ですし、盗賊<sup>まつりごと</sup>が政を行えるわけはございません」

「それで俺のところに来たというわけだな」

「はい」

「それは俺の側に付く、ということと受け取って良いのだな？」

ザハトは言葉使いを崩した。それで意を示したつもりである。

「<sup>わたくし</sup>私ども商人を<sup>まも</sup>護り、その商を<sup>いつく</sup>慈しんで下さるのは陛下を<sup>お</sup>措いて他にはございません」

「俺はまだ王ではない」

今度は、ヒスメネスが凄味のある笑みで意を表した。

「ですからこそあなた様なのです」

なるほど。そういうわけか。

このザハトが王になるためならば、自分たちが力を貸すということか。

ダーシュを切るということか。いい覚悟だと思った。

いや覚悟ではない。単に無知なだけだ。

何故この戦いが起こったのか。

何故今日という日が来たのか。

ヒスメネスは何も知らないのだ。

「<sup>せんえつ</sup>僭越な申し出ではございますが、私どもは王のお役に立てるのではないかと考えております」

「お前の店はローゼンディア商人の中でも大きなものであったな」

ダーシュの様子を見に行った後、すぐに調べたのだ。メルサリス家はカプリアに本拠を置く大商人であり、アンケヌに支店を持つローゼンディア人の中でも大手の一つだった。

「今のところそう言われておるようでございます」

「更に大きくするか」

「さあ……それは」

ヒスメネスは<sup>あいまい</sup>曖昧に<sup>ほほえ</sup>微笑んだ。

「このアンケヌは交易によって栄えてきた都市だ。商人を大切にしない王など、王ではない」

「その通りでございます」

「兵は何も生まれず、盗賊は奪うだけだ。商人にとっ

ては王こそが有り難いというわけだな」

<sup>おっしゃ</sup>  
「仰る通りでございます」

「解った。悪いようにはしない」

ザハトは頷いた。この男は味方にしておいて損はない。

この男が自分で言うように、本当に商にのみ没頭あきないするのであれば敵対することもおそらくあるまい。

「後で契約の証あかしを送らせよう。書記官にも記録させる。誓約の見届け人はそちらで自由に選ぶがいい」

「ありがとう存じまする」

ヒスメネスは深く頭を下げた。

## 第十章 前触れ

市内の様子は良くない。それは少し出歩いただけでも判った。

もちろん護衛を連れている。四人もだ。屋敷の護衛も増やしたかったが、今は護衛は引く手数多<sup>あまた</sup>であり、とても傭<sup>やと</sup>う気になれないとヒスメネスは言う。

「信用出来ない者を傭うことは出来ませんから」

「でも護衛は必要でしょう？」

「そうとも限りません。他の方法でも構わないでしょう。要は同じ結果を得られれば良いのです」

「何か考えがあるのね」

「はい。お任せ下さいますか？」

「もちろん。あなたに任せておけば間違いはないものの」

即答すると、何故かヒスメネスは微妙な笑みを浮かべた。

「感謝します。必ず店のため、お嬢さんのためになるよう取り計らうことを御約束致します」

ダーシュが居るお蔭<sup>かげ</sup>か、店の方にも屋敷の方にも盗賊が来ることはなかった。

「アンケヌは現在二分されている状態にあります。ゴーサの傭兵団と、もう一方は周辺部族を加えた盗賊団です」



「とすると盗賊はともかく、傭兵と部族の連中は帰るところがあるわけよね？」

「はい。里心が付くのも時間の問題でしょう」

初期の頃ほど頻発しなくなったが、それでもあちこちで問題が起きてはいるようだ。

商人でもない、旅行者でもない連中が大挙してアンケヌに押し寄せているのだから当たり前だと言える。

「それで……私は<sup>しばら</sup>暫く出歩くことが多くなると思うのです。その間、店の方をお任せしてよろしいでしょうか？」

「解ったわ。私で力になれることなら」

「お願い致します」

翌日からヒスメネスは店に出なくなった。聞くところによると、他の商人たちとの寄り合いや王宮への陳情などで忙しいという。

かくいうアイオナも忙しい。ヒスメネスが居なくなれば代わりに店を切り回せる人間が必要になる。

これは半ば判っていたことではあるが、ヒスメネスは優秀過ぎるのだ。だから皆が彼に頼り切って自分で考えようとしなない。これは店にとっては極めて大きな問題だった。

「あのう……お嬢様——」

「わたしに聞きに来る前に自分で考えたのかし

ら？」

小鼻を拵げて使用人を睥<sup>にら</sup>みつけるのが最近日課になりつつある。まずい徴候だ。

こんな風に怒ってばかり居ては美容に悪い。精神衛生上、良くもない。

しかし人間精神には、神々により思考するという能力が授<sup>さず</sup>けられている。家庭教師の神官からはそう習ったし、アイオナ自身同じように思う。

その折角の恩寵を用いることもせずに、やれ「お嬢様」「お嬢様」と質問ばかりされてはいい加減嫌気もさそうというものだ。

「<sup>すご</sup>凄いな、ローゼンディアの女は。大した主人振りではないか」

ダーシュの皮肉すら、最近では気分転換になるというのだから、さすがに少し疲れてきたのかも知れない。一人で店を切り回していたヒスメネスの偉大さが、段々とアイオナの中で大きくなってきていた。そのことに<sup>いささ</sup>些かの滑稽さを感じもするのだが。

「あら、ダーシュおはよう。今日は早いのね」

「日が沈んでからが仕事だからな。とはいえ今は朝ではないぞ」

「ごめんなさい。今日あなたの顔を見るのは今が初めてだからよ」

にこやかに言ってやる。

「そうか。俺の顔が見られなくて寂しかったか？」

「それにも謝らなくてははいけないわね。店の方が忙しすぎて、あなたのことなど、ころっと忘れていたわ」

忘れていた、に強勢を置いた。

ダーシュはまずそうに顔を<sup>しか</sup>顰めた。

「ところで、いつまであなたはそこに立っているつもりなのかしら。店の者が通るのに邪魔になるんだけど」

「これはすまなかった」

苦笑しつつダーシュがその場を動くと、案の定すぐに使用人が首を覗かせてきた。

「お嬢様……」

「砂糖なら八と二分の一の値段までなら売ってもいいわ。それより下なら他に行くように言いなさい」

「かしこまりました」

ひょいと首が引っ込む。ダーシュが声をあげて笑った。

「いやいや、本当に大したものだ。ローゼンディアの女は夫がなくとも一人で生きていけるといのは本当らしい」

「生きていけるかどうかは本人の問題であって、夫で決まるものじゃないわ」

「そうか。では俺が居なくても問題は無いな？」

「えっ？」

いきなり予想外の言葉を投げかけられてアイオナは固まった。

「少し出かけてくる」

アイオナは訝<sup>いぶか</sup>しんだ。あれほど外に出ることを嫌がっていたのに、どういう風の吹き回しだろう。

ダーシュは外出しようとししないのだ。一日屋敷に居て、書を読んだり剣を振ったりしている。

アンケヌが攻め落とされる前ならばそれも解る。何せ指名手配だったのだから。

しかし今では都市の支配者は彼の味方のはずだ。それなのに一向、ダーシュは外に出ようとはしないのだった。

それが一体、何故、出歩く気になったのだろうか？

「どこへ行くの？」

「それは言えない」

半ば予想していた答えではある。気にくわないが、隠し事の出来ぬ自分の質<sup>たち わきま</sup>は辨えているので、それ以上追及することは憚<sup>はばか</sup>られた。

「護衛は？」

「不要だ。だが駱駝<sup>らくだ</sup>を一頭借りたい」

アイオナは驚いた。

「あなた一人で行くの？」

「心配してくれるのか？」

冷やかす風なダーシュを、アイオナは睥<sup>にら</sup>んだ。

「そんなの当たり前じゃない。契約があるのよ？  
行き先も告げずに勝手に死なれては困るわ」

「案ずるな。今日中には戻る。お前はここで大人しくしていれば問題無い」

お決まりの文句に、アイオナは顔を顰<sup>しか</sup>めた。

「言われなくたってここに居るわよ。店を任されているのだもの」

ダーシュはふっと笑った。

「何よ？ 何が可笑<sup>おか</sup>しいの？」

「いや、ローゼンディアの女は口煩<sup>くちうるさ</sup>いが頼もしいものだなと思ってな」

アイオナは口を尖らせた。

「口煩いは余計よ。行くならさっさと行きなさいよ」

「ああ」

ダーシュは笑みを浮かべ、アイオナの前から去っていった。

＊

指定された場所はアンケヌの外だった。町に入る手前、ガザル族が身繕<sup>みづくろ</sup>いをするために使っている小さな岩山だった。彼らはこの岩陰に衣服や道具など

を隠しておくのだ。

この場所は一部の気の利いた交易商人なども使っているようだが、大概たいがいの商人は垢あかと埃ほこりにまみれて町に入ってくる。

尤もっともそれを責めるつもりは無い。彼らこそがアンケヌ繁栄の源なのだ。

ガザル族はナバラ砂漠を、いやもっと南のゴパール砂漠、遠くジルバラまでを旅して暮らす部族だ。傑すぐれた戦士であり、恐るべき野盗でもある。

彼らが今回のアンケヌ攻めに参加してこなかったのは不思議だったが、アンケヌにとっては運が良かったと言える。

ガザル族の男たちは旅から戻る時、必ず近場の岩陰などで身繕いをする慣わしがある。

元は妻子に見苦しき姿を見せぬためだと言うが、奥ゆかしいことだと思う。男はそうでなくてはならぬ。

月が道を照らしてくれていたが、都市から少し離れただけで、もう城壁の輪郭は怪しくなる。道を知る者でなければ帰り着けないだろう。

目指す岩の背後に大きな月が浮かんでいる。ふと人影が現れた。丸っこい、樽たるに手足が付いたような体型だが、器用に岩を伝って降りてくる。

「ダーシュ！」

野太い声が響いた。ハダクだった。

「兵に見つかったと聞いて肝きもを冷やしたぞ！」

「何とか逃げ延びたさ」

駱駝らくだから降りて歩み寄った。抱擁ほうようを交わした。強こわ  
い鬚ひげが頬なを撫でる感触と、砂の香りがした。

「お前に会いたかった。何故城の方へ来ない？」

「いろいろあってな。そちらはどうなんだ？」

「ゴーサの連中が鬱陶うっとうしくてかなわん！」

予想通りの返答だった。

「なあ城へ来いよ。もうお前を追い回す連中はいね  
えんだ。宝も女も全部俺たちのもんだぜ」

俺たちの、か。ハダクらしいと思った。

自分に好意を持ってきているのは間違いないの  
だが、このようにそれは欲と連れ合いだ。付き合い  
が難しいところである。

「町へ戻ろう。酒と女を用意してある」

ならば最初から町で落ち会えばいいのだが、わざわざ  
こういう場所を選んでくる辺り、現在の情勢を  
感じさせる。

ハダクが肩に手を回してきた。肉の硬い、太い腕  
だ。

「酒は有り難いが女はいい。妻がいるんでな」

「そうか！ お前結婚したんだったな！」

「ああ」

「新妻に回すだけの力は取っておきてえんだな。  
解った解った。女は俺に任せろ！」

任せるも何も用意したのはそちらだろうと思っ  
た。

「すまんな」

「気にするな。そんなことよりお前に聞いて欲しい  
話が山ほどあるんだ」

ハダクが何を言いたいか。大方の予想はついているが、やはり実際に話を聞かねばならない。そのためこそ呼び出しに応じたわけだった。

「ああ。話を聞かせてもらおう」

ダーシュは<sup>うなず</sup>頷いた。

＊

「ケザシュ」

ザハトはテラスに立って呼びかけた。いつものように外に向かい、夜に向かってささやくように名を呼んだ。

すぐに背後に気配を感じた。振り返ると一人のアウラシール人が立っていた。

男である。が年齢はよく判らない。浅黒い肌をしており、その顔立ちにはアウラシールでも南方人の特徴が現れている。体格は<sup>ゆうい</sup>雄偉とは言い難<sup>がた</sup>かった



が、それでも不気味な<sup>すごみ</sup>凄味を感じさせるのは、異様なまでに鋭い眼光のためであろうか。頬は少し<sup>こ</sup>痩けていた。

黒紫色の<sup>ケ ス</sup>長衣を着て、緑色の<sup>ハーティカ</sup>頭布を巻いているが、腰帯に剣は差していない。無腰であった。

「俺を呼んだな」

陰気な声であった。

「お前に頼みたいことがある」

ザハトは嬉しげに両手を広げ、ケザシュに歩み寄った。

## 第十一章 異変

ダーシュが帰ってきたのは夜遅くだった。隠れるように帰ってきたわけではないが、それでも物音を立てないようにしているのが判った。もう屋敷の者たちは寝静まっているからだ。

「おかえりなさい。遅かったわね」

ダーシュが部屋の前を通ろうとした時、アイオナは姿を見せて声をかけた。

「まだ起きていたのか？」

「ええ。さっきまで仕事をしていたの」

本当だった。ただ、床に入ってから寝つけなかったわけだが。

ダーシュは少し酒臭かった。

「食事は外で済ませてきたの？」

「ああ」

「じゃあ後は寝む<sup>やす</sup>だけね。おやすみなさい」

言った直後、酒の臭いに混じって脂粉<sup>しふん</sup>の香りが漂ってきた。ダーシュからである。

アイオナは衝撃と共に事情を悟った。

……なるほど、行き先が言えないわけだ。女を買いに行ったのか、恋人に逢いに行ったのかは判らねど、いずれにせよ女に逢い<sup>あ</sup>に行くとはさすがに言いにくいだろう。

アイオナは晒<sup>わら</sup>いたくなくなった。

てっきり自分たちの今後に関する事で何かをしに行ったのだと思っていた。なればこそ深く追求もしなかった。なんと愚かしい思い込みであったことか。勘違<sup>はなは</sup>いも甚<sup>かり</sup>だしい。

ともあれ所詮<sup>かりそ</sup>は仮初めの夫婦である。本当の夫婦ではないのだから、ダーシュが自分以外の女に逢いに行っても問題は無いはずである。いや、夫婦間以外の性交渉が許されていないローゼンディアとは違い、アウラシールならば本当の夫婦であっても問題は無<sup>かりそ</sup>かろうが。

しかし、そうは思えど気分は良くない。なんだか裏切られたような感じがする。ダーシュは契約違反をしたわけではないのだから、そう感じるのは自分の勝手なのだけれど。

「おい、何を考えている？」

ダーシュが訝<sup>いぶか</sup>しげに声をかけてきた。また顔に出<sup>いぶか</sup>てしまっていたのだろうか。アイオナは羞恥を感じて顔を背<sup>そむ</sup>けた。

「……別に」

不機嫌な声が出てしまった。

「疲れてるんでしょ？ さっさと寝たら？」

ダーシュは不思議そうにアイオナを見、それから何かに思い当たったように苦笑した。

「ふん、そうか。嫉妬か」

アイオナは顔を<sup>あから</sup>赧め、ダーシュを<sup>にら</sup>睥んだ。

「なんでわたしが嫉妬しなくてはならないのよ！」

「安心しろ。お前の勘違いだ。女に逢いに行ったわけじゃない」

「誤<sup>ご</sup>魔<sup>ま</sup>化<sup>か</sup>すことはないわ。あなた、女臭いもの」

言われてダーシュは自分の匂いを<sup>か</sup>嗅ぎ、舌打ちした。

「女は居たが何もしてない」

「なんで？」

その後続く言葉は、「嘘<sup>う</sup>を吐くの？」でも、「何もしなかったの？」でも、どちらでもよかった。

「別にわたしに義理立てることはないわよ。仮初めの結婚なんだし、それ自体今や意味の無いものでしょ？」

アンケヌの兵から逃れるために結婚したのだ。アンケヌが盗賊の手に渡った今となっては、逃げ隠れする必要は無くなった。つまりは結婚している必要も無くなったはずである。

ダーシュは苦笑した。

「義理立ててるわけじゃないさ。単に気乗りしなかったただけだ」

「あ、そう……」

落胆混じりの羞恥を感じて、アイオナは俯<sup>うつむ</sup>いた。

これでは自意識過剰ではないか。

ダーシュは笑った。

「期待に添えなくてすまん。なんなら期待に応えてやってもよいぞ」

と、アイオナの髪に触れてきた。

その瞬間、怒りが噴き出した。アイオナはダーシュの手を乱暴に払い退<sup>の</sup>けた。

「余計なお世話よ！」

その剣幕<sup>けんまく</sup>にダーシュは驚いたように手を引いた。

からか<sup>からか</sup>揶揄<sup>えう</sup>うような笑みも姿を消している。

アイオナは更<sup>さら</sup>にひと睥<sup>にら</sup>みを加え、自室に戻った。

後ろ手に扉を閉めると嫌な気持ちが胸を上がってきた。

最近、このような状態で部屋に戻ることが多いと思った。不愉快と言うよりも遣る瀬無い気持ちになる。

翌朝になっても気分は霽<sup>は</sup>れなかった。自分に怒る権利が無いことは解っているのだが、腹が立って仕方がない。誰の顔も見たくなかったので、部屋で朝食を摂ろうと思い鈴を鳴らしたが、誰もやって来ない。

こういう時に限って思うように事が運ばない。

しかも妙に静かだ。屋敷の中が静まっている。人

の気配が無いわけではない。だが静かだ。

でもこれも良いかも知れない。こういう気分の時には。

アイオナは膝を抱えるようにして寝台に<sup>すわ</sup>坐り、じっと目を閉じた。

気持ちを振り回しては駄目だ。これは自分とダーシュの問題だ。屋敷の者たちは関係……なくはないけれど、このことには無関係だ。

自分を言い聞かせようとしていると、不意に部屋の扉が<sup>たた</sup>叩かれた。驚いた。

「誰？」

「俺だ」

なんとダーシュの声だった。しかも勝手に扉を開けて入ってくる。

「勝手に入ってこないで」

「夫が妻の顔を見るのに遠慮する道理は無い」

「出て行って」

大きな声は出なかったが、はっきりとした拒絶を込めて言った。

「鈴を鳴らしたのはお前だろう？ 召使いが誰も行かないようだから、俺が代わりに来てやったというのにその<sup>いいぐさ</sup>言種はなんだ」

非難するようなダーシュの声を聞いていると無性に悲しくなってきた。

何故このような目に遭わなければならないのだろう。神罰が下るようなことをした憶えは無いのだが。それとも妖精が悪戯いたずらをしているのだろうか。

「おい……泣いているのか？」

「出て行って」

ところがダーシュは出て行かない。逆に近づいてきて、事もあろうに隣に坐った。アイオナは目を剥むいた。殴りつけてやろうと思って手を振り上げた。

「すまん」

アウラシールの男とも思えない言葉が出た。アイオナは手を止めた。

「もっと……あなたには良い結果を生むと思ったのだが、私の考えが足りなかったようだ。赦ゆるして欲しい」

ダーシュは静かな顔で、壁に掛けられた綴つづれ織りを見ながら語りかけてくる。

「私はあなたの身命しんめいを護ると契約をした。それゆえにまだここを離れられぬのだ。状況は私が予想していたようには動いていない。この先、更なる混乱が起こる公算が高い。その時に私はあなたの傍そばに居なければならぬ」

「……」

「昨夜は無礼を働いた。異国の人間であるあなたに対して取るべき態度ではなかった。どうか赦ゆるして欲

しい」

綺麗なイデラ語である。市井しせいの人間が使う言葉ではない。

「私が屋敷を離れば、この家の者たちは皆殺しにされるやも知れぬ」

アイオナは息を呑んだ。

「ヒスメネスが動き回っているようだが、それがどう出るかは判らぬ。いずれにしろ私とあなたが結婚したことを、良く思わない者が居ることは確かだ」

その者にダーシュは心当たりがあるようだったが、問い質ただせる雰囲気ではなかった。

「昨夜はハダクに会っていた。酒と女は奴が用意したものだ。ハダクは……ギドウを殺すつもりらしい」

ハダクというのは盗賊団しゅかいの首魁である。そんな人物に会っていたというのか。

ギドウは……たしかゴーサの傭兵団の頭目。すると……！

この先起こることを想像してアイオナはりつぜん慄然とした。

町は戦場になるかも知れない。今度こそ本当に。

それは先日征服された時のような、大人しいものではないだろう。

「約束しよう。何があってもあなたの身を護ると。



ただし私の力ではあなた一人護るのが精一杯である  
かも知れぬ。その時はやはり赦して欲しい」

ダーシュは言葉を切り、少し間を開けてから含み  
笑いをした。言葉がローゼンディア語になった。

「赦しを請うてばかりだな。情けない話だ。お前に  
とって必ず得になると約束したのにな……」

「あの時はそう思ったのでしょうか？」

アイオナは<sup>つぶや</sup>呟いた。ダーシュが顔を向けた。

「読みが外れることはあることよ。よく調べて、よ  
く考えて採った行動なら、それはあなたの<sup>せい</sup>所為じゃ  
ない」

「では誰の責任だ？」

アイオナは少し考えた。

「たぶん、すべてはヘキナンサの思し召しよ。商人  
にはそれぞれ事情というものがあるのよ。全員の利  
益になるようには、事が動くはずもないわ」

ヘキナンサはヴァリア教の商業神である。道行く  
者を、<sup>あきない</sup>商をする者を護りたもう。

アイオナはじっとダーシュを見つめた。ダーシュ  
も目を<sup>そ</sup>外らさなかった。

ふっとダーシュの目が笑った。

「たぶん、か」

「ええ。たぶん」

アイオナも<sup>ほほえ</sup>微笑んだ。不思議と優しい気持ちに

なった。先程までの嫌な気分が消えていくのを感じた。

だがこれは聞いておかねばならない。

「……町を<sup>す</sup>棄てるの？」

ささやくように尋ねると、ダーシュの顔が<sup>こわば</sup>硬張った。真剣な顔付きになった。

「そういうことも起こりうる」

「そう」

アイオナは目を閉じた。

店の者たちを、屋敷に仕えた者たちを置いていかなければならないのか……それはとても<sup>つら</sup>辛い選択だったが、世の中、<sup>きれいごと</sup>綺麗事を言っていられないのは解っている。

都市内で戦いが始まればどうしようもない。

戦いというものは、いつもいきなりこの身に迫ってくる。

そうなった時、大切な人達を守れるとは限らないのだ。

そこには個人の力を超えた、運命の力が働く。

自分は今まさにそういう所に立っているのだと、アイオナは思った。

「ヒスメネスに期待するしかないな」

アイオナは答えなかった。ダーシュは立ち上がり、扉の方へ歩いていった。

「何か食べるものを持ってこよう。何がいい？」

「<sup>はちみつ</sup>蜂蜜と<sup>こうそうちゃ</sup>香草茶、それと何か野菜が欲しいわ」

「判った」

<sup>かす</sup>微かに頬を上げ微笑むと、ダーシュは部屋を出て行った。

いつもの皮肉気な、小馬鹿にしたような笑いではなく優しい感じの笑みだった。

<sup>しばら</sup>暫くしてダーシュが戻って来た。

丸盆の上には蜂蜜の小瓶と氷砂糖を入れた小鉢がそれぞれあり、更に好みで加える香辛料が入った小鉢と、二人分の茶器を載せている。

寝台の脇に茶器を盆ごと置くとダーシュはまた出て行ったが、香草茶の入ったクワデレムを手にしてすぐに戻って来た。

クワデレムは湯を沸かす為の金属製の容器で、ローゼンディアではカペレースという。

元々はアウラシールで生まれた道具だが、今ではローゼンディアでも使われている茶道具だった。

ただしローゼンディアでは湯を沸かす為だけに使い、茶葉は急須に入れるのが一般的である。一方アウラシールでは直接茶葉を煮出す方式が採られる。

これは習慣だけではなく、茶の原料の違いに原因がある。ローゼンディアではトラナと呼ばれる植物の葉を使うのが主流だが、アウラシールではリ

ヴァーフと呼ばれる香草を使って、更に好みで香辛料やティモネを加えるのが普通だ。

ティモネはアウラシールのみならず、ローゼンディアでも一般的な果物だが、その絞り汁を入れるか、または薄切りにしたものを茶に浮かべるのだ。

香辛料はそれこそ好みで色々なものを加える。アウラシールの香草茶は一般に、南部に行くほど香辛料を加える度合いが強くなる傾向がある。

またはパファティなど別の香草を加えることもある。まさしく香草茶と呼ばれる由縁である。

ローゼンディアのトラナ茶と、アウラシールの香草茶両方の共通点は、砂糖や蜂蜜、牛乳を加えるところだが、トラナ茶には添加物を加えないでそのまま飲むものもあるので、砂糖や牛乳を加えることをもって、飲み方が一致するとも言い切れないのであるが。

クワデレムを置くとまたダーシュは出て行った。今度もすぐ戻って来て、鉢に盛った野菜と果物、卵焼き、ウナを持ってきた。

何度も出入りしているのは召使いを使わず、自分で用意しているからだ。彼なりに気を遣っているのかも知れない。そう考えると少し可笑<sup>おか</sup>しかった。

ウナはこの地方独特のパンである。薄く平たい円盤状をしており、主に千切<sup>ちぎ</sup>って食べる。

よくある付け合わせは搗<sup>す</sup>り潰<sup>つぶ</sup>した茄子<sup>なす</sup>や豆に香辛料を加え、アルサム油で和<sup>あ</sup>えたものや、ヨーグルトや香辛料で下味を付けた鶏<sup>とり</sup>肉の蒸し焼き、または新鮮な羊の挽<sup>ひき</sup>肉を、やはり香辛料とアルサム油で和えたものなどである。これはマナナイと言われる料理であるが、生の肉なので、アイオナは最初抵抗があった。だがアウラシールではマナナイは大人気の料理であり、地方色豊かに色々な種類がある。

ダーシュが持ってきたウナ用の付け合わせは、茄子と胡麻のマナナイと、香草とトマトのマナナイだった。朝食らしく軽めの感じだ。

しかし持ってきた食べ物全体では、かなりの量があった。

「量が多いわ」

「構わんさ。俺も一緒に食べるからな」

ダーシュは少し微笑んだ。部屋を出る時と同じ笑みだった。

「ここの料理人は腕がいいな」

「ハヌサね？ 父様が食い道楽でね。わざわざジルバラから呼び寄せたのよ」

「ジルバラか。随分遠いな」

アウラシールは広大である。その南部地方を主にジルバラというのだ。

古代文明の発祥地であり、しかも周辺地域と全て

地続きであったアウラシールでは、常に侵略と戦争が絶えず、長期的な統一王朝はもちろん、そもそも統一王朝が出現すること自体が稀<sup>まれ</sup>であった。侵攻するのは容易である反面、守るのは難しい地形だからだ。

たまに強力な王が現れたとしても、一定の地域に支配を及ぼすのが限界であって、その外側にはまた別の支配者が軍事力を持って君臨しているわけである。

そうした事情からアウラシールでは、太古から地域を、大まかに東西南北で呼び習わすことが行なわれていた。

<sup>すなわ</sup>則ち北のナーラキア。これはその名の示す通り古代ナーラキア帝国のあった地域である事から名付けられた。帝国は遙か古代に滅び去り、今や名前だけを残すに致ったわけだが、後の新ナーラキア帝国と区別する為に、この地方を古ナーラキア地方と呼ぶこともある。

ナーラキア地方の北部には、帝国の母体となった山岳地帯があり、ここにかつて恐怖の都と呼ばれた帝都バジェラの遺跡がある。帝都バジェラはナーラキア滅亡の際に一夜にして滅びたと伝えられている。世に言う『バジェラの陥落』である。

そして東には山脈を跨<sup>また</sup>いでハルジット高原が拡

がっており、ゼナンやアズシャードといった強大な都市国家が存在している。傭兵で名高い軍事都市ゴーサもこのハルジット高原にある。

南にあるのがジルバラ地方である。最もアウラシールらしい地域であり、更に南には海がある。アウラ海という。この海はローゼンディア人がよく知るミスタリア海とは異なる大海であり、ほとんどその実態が知られていない。神話によると世界の果てに続いているという。

アウラシールの文明は、主に南部から北部に向かって広がったので、歴史的な都市の大部分がこの南部に集中している。

アウラシールの歴史は一万五千年にも及ぶ。それもはっきりと判っている部分、つまりしっかりとした記述が現存している部分だけの長さの話であって、実際にはこれを超える歴史を持った都市がいくつもあり、それらの都市の歴史の古さは、もはや神話の領域に続いていると言っている。そうした都市のほとんどが南部ジルバラ地方に集中している。

アウラシールの名前の元となった都市アウラルもここにある。噂に名高い七つの城門と七色の城壁は、アイオナもまだ見た事はない。

最後に西のリムリクである。ダルメキア王国はリムリク地方の西の涯<sup>はて</sup>であり、ミスタリア海に面して

いる。ナバラ砂漠もリムリクに含まれる。

つまりここアンケヌはアウラシールのリムリク地方ということになる。それも中央部の辺りに位置する。

要するにアウラシールは、ほぼ全体が広大な陸地なのだ。

北の方に山岳があり、南にはアウラ海があるが、ニスルとアプスル、二つの大河を中心に、南北に豊かで広大な土地がある。西と東は異民族が<sup>ばんきよ</sup>蟠居している。

中でも大河に囲まれた肥沃な地域こそが中心地であり、更に細く見れば、その地域は北の高原地帯と南の沿岸部とに区別される。

元々はその南北地域だけがアウラシールと呼ばれていたのだ。

二つの大河は支流を生みながらも、互いにほぼ並行に北から南に流れ、アウラ海に注ぎ込んでいる。

この事からも判る通り、その地域は北高南低の地形になっていて、北は遊牧民が、南では農業を中心とする都市生活民が暮らしていた。この両者が長い年月をかけて<sup>ゆるや</sup>徐々に混じり合い、アウラシールの文明を形作っていったのである。

人類の文明は南から、アウラ海<sup>ほとり</sup>畔の湿地から始まったのだ。



そこに天から王権が下ったという最古の都市、エマシュがある。人類最初の王が現れたと言われている都市だ。

この都市では夜空にグエナ・エマシュと呼ばれる星を見ることが出来る。地平僅<sup>わず</sup>かに姿を見せるこの星は、エマシュの輝きの星と呼ばれる特別な星座である。

これはローゼンディアでは十字連星と呼ばれるが、実はこの星座はミスタリア海近縁では、何方<sup>いずれ</sup>の国々でも見ることは出来ない。本来ならば南大陸のマゴラなどでしか見る事の出来ない星座なのだ。

つまりジルバラとはそれほど南に向かった土地なのである。

「ジルバラのどこだ？ エマシュか？ バハラクか？ それともガニシュラか？」

「バハラクだと聞いているわ」

「とても歴史のある古い都市だ」

「そうらしいわね」

ハヌサの出身地にアイオナは余り関心がなかった。腕が確かなのだから出身などどうでもいいと思っているのだ。

しかしそれが声に出てしまったのだろう。ダーシュはちょっと意外な顔をした。

外国人のアイオナには判らないが、バハラクはア

ウラシールでは重要な都市なのかも知れない。

「大きい町なの？」

「ああ、かなり大きい。何より古い。一万四千年以上の歴史がある」

「一万……」

アイオナは絶句した。ローゼンディア人の想像を絶する古さだ。古すぎて想像が付かない古さだった。

「……人が住めるの？」

「この料理を作った男はバハラクの出身だと言ったのはお前だろう？」

呆れたようにダーシュは言った。

「あいつだって墓場や廃墟から出てきたわけではあるまい」

親指で調理場の方を指す。持って回った言い方がいつものダーシュらしかった。

「アウラシールは歴史だけは、諸外国を圧倒しているものね」

アイオナも応じて、わざとちょっと嫌みに聞こえるように言ってやった。

それを聞いてダーシュは少し嬉しそうに笑った。

「ほとんど殺し合いの歴史だ。自慢にはならんさ」

楽しげに言いながら香草茶を注いで口に運んだ。

綺麗な動作だった。

ダーシュは自分を元気付けようとしてくれているのだ。アイオナはそう思った。

二人で朝食を摂<sup>と</sup>っている間も、誰ひとり部屋には来なかった。おかしい。これは明らかに変である。

「今日は随分と静かだな」

ダーシュも異常を感じているようであった。

「ええ。怪訝<sup>お か</sup>しいわね」

さすがに不審を感じた。

「様子を見てこよう」

ダーシュが出て行き、アイオナはひとりになった。

すぐに戻ると思っていたのにダーシュは戻ってこない。

不安を感じ始めた頃、<sup>ようや</sup>漸くダーシュが戻ってきた。

「ハダクが殺された」

心なしか顔色が悪かった。

事件が起こったのは宮殿の中だという。ゴーサの傭兵団が突然に牙を剥<sup>む</sup>いたのだ。

ハダクとその側近は皆殺しになったという。

市民が話を聞きつけた時には、もうすでにかかなりの数の盗賊たちが町を逃げ去っていた。

さすがに情勢を見る能力は優<sup>すぐ</sup>れている。部族兵たちはまだ都市内に留まり、普段通りにしていた。

そしてそれが命取りになった。

「町の各所でゴーサの傭兵たちと戦闘になっているらしい」

所詮は部族兵である。普段は遊牧などをして暮らしている連中だ。毎日殺し合いが日常の傭兵とでは勝負にならない。

「実際には一方的な虐殺だろう」

「遺のこされた家族は堪たまらないわね……」

「奴らだって市民を殺したり、掠奪りやくだつをしている。お互い様というわけさ」

ダーシュの言葉は淡々としたものだった。

ヒスメネスは例によって朝から出かけている。大丈夫だろうか？

「一応護衛を連れて行ったようだしな。奴自身腕は確かだ。自分から危険に近づくとも思えないから、まあ大丈夫だろう」

「……これからどうなるの？」

「判らん」

ダーシュは首を振った。

「どちらにしろ、俺はこの屋敷を出て行った方がいいだろう」

その言葉にアイオナはぎくりとした。胸が騒ざわめくのを感じた。

「ともかくもう暫くは静観だ。この次に何が起こる

か。それですべては決まる」

「もしあなたが出て行くのなら、最初の約束は果たしてもらえなくなるわね」

その背中を引き止めるようにアイオナは声をかけた。ダーシュが振り向いた。

「絶対にわたしに損はさせないって言ったじゃないの。あれが嘘になってしまうわ」

出来るだけ冗談に聞こえるように明るく言った。通じたのだろう、ダーシュは困ったような優しい顔をした。

「そうだな。すまないと思う。俺は<sup>いのち</sup>生命を助けられたのにな」

「そうよ。忘れては駄目よ」

「だから俺もお前の<sup>いのち</sup>生命を護らなければならん。今後の動きによっては、俺はこの屋敷を出て行く」

「そう」

アイオナは硬い表情で<sup>うなず</sup>頷いた。

第二の変化が起こったのは夕方だった。今度はギドウが殺されたのだ。

「いったい誰が……」

彼は敵対者を始末したはずだ。アイオナには解らなかった。

報を持ってきたのはエニルだった。身振り手振りを<sup>まじ</sup>交えて、自分が聞いてきた話を語った。

「やったのは若いアウラシール人の戦士だそうですよ。かなりの手練れてだのようで、他にもゴーサの傭兵が二人切り殺されたそうです」

ヒスメネスは相変わらず帰ってこない。帰宅は夜遅くになるだろう。

ダーシュはと言うと、布で顔を覆って出かけている。情報を集めるためだそうだが、今まで極端に外出をしたがらなかったことから考えると、それだけ重大な事態に至っているということなのだろう。

自分だけが屋敷の中で、普段と変わらぬ暮らしをしているのがなんだか恥ずかしかった。

「それでその戦士はどうしたの？」

「逃げ延びたようです。見事みごとなものですね」

「市民の評判は良いでしょうね」

「ところがそうでもないんです。どうやらその男、元々連中の一味いちみだったらしい。つまり仲間割れというわけですね」

その言葉がアイオナの耳に引っ掛かった。ダーシュの親戚だという、あのアウラシール人のことが思い出された。

彼はハダクやギドウの仲間だったはずだ。事実護衛としてゴーサの傭兵を連れていた。

となると……彼がその戦士だろうか？

「お嬢様。どう致しました？」

「いえ、なんでもないの。気にしないで」

エニルは不思議そうな顔をしていたが、それ以上聞いてはこず、話が終わると仕事に戻っていった。

ダーシュが戻ったのはそれからすぐのことだった。

「やられた」

一言、言った。今までに見たことが無いほど真剣な、いや追いつめられた顔だった。

## 第十二章 決断

「ギドウを殺したのは俺だということになっているらしい」

「ということは殺してないのね？」

ダーシュは心外そうな顔をした。

「当然だ。殺す理由が無い」

「ではどうして？」

「おそらくザハトだろう」

「あなたの親戚だというあの人が？ いったいどうして？」

「いろいろあるのさ」

ダーシュは皮肉げに口許くちもとを歪ゆがめた。

「とにかく今はそんなことを話している余裕は無い。お前にはどうするか決めてもらわねばならん」

「どうするか、とは？」

アイオナは緊張した。

「俺と来るか、それとも屋敷に留まるかだ」

予想していた問いかけではあったが、はっきり言われると重かった。身体からだが縮こまるように感じた。

「どちらにしても危険であることに変わりはない。ここに居ればザハトが殺しに来るかも知れんし、俺と来ても安全ほしょうの保証は無い。最悪の事態になった」

「なぜわたしの生命いのちが狙われなければならない



の？」

その質問にダーシュは渋い顔をした。言いたくなさそうな感じだったが、ぼそりと答えた。

「俺と結婚したからだ。おそらくザハトは勘違いしている」

アイオナは少し考えた。言葉の意味を理解すると、腹が立ってきた。

「冗談じゃないわ」

ダーシュの<sup>いのち</sup>生命を助けるために結婚したというのに、それがために自分の<sup>いのち</sup>生命までもが<sup>おびや</sup>脅かされるだなんて！

アイオナはダーシュをじっと<sup>にら</sup>睥んだ。

<sup>うそっ</sup>「嘘吐き」

ダーシュは苦い顔をした。

「どういうこと？ 話が違うじゃないの。絶対損はさせないって言ったじゃない！」

「すまない。よもやこんなことになるとはな」

ダーシュは真剣な眼差しでアイオナを見つめた。

「だがこれだけは信じてくれ。これから先の状況がどうなろうと、お前を護るという約束を<sup>ほご</sup>反故にするつもりは<sup>いちごう</sup>一毫たりとも無い」

力の<sup>こ</sup>籠もった言葉である。その言葉、その眼光の強さに、アイオナは魅了されたように固まった。胸だけがどきどきしていた。

ダーシュは僅かに<sup>わず</sup>に<sup>わら</sup>晒った。

「反故にはしない、と断言出来ぬのが情けぬところだが……俺の力が及ばぬことはあり得る。アルシャンキの思し召しは、<sup>じょうみょう</sup>定命の人の身には計り知れぬものであるしな。だから、どうするかはお前が決めるのがよからう」

アイオナは小さく<sup>ためいき</sup>溜息を吐いた。

降って湧いたような事態に驚いて、思わず文句を言ってしまったが、こうなってしまったのはダーシュの所為ではない。ダーシュは誠心誠意で自分に接してくれている。それは承知しているはずだった。今朝、すべてはヘキナンサの思し召しだと言ったのは、他ならぬ自分ではないか。それなのにダーシュに向かって怒りをぶつけるとは、なんと<sup>ぶざま</sup>無様なことだろう。

「……ごめんなさい。嘔吐き呼ばわりなんかして。あなたはよくしてくれてるのに」

気持ちを改めて、アイオナはダーシュを見つめた。

だが聞かなくてはならないことがある。

もし、自分が逃げたとして、屋敷の者達はどうなるのか？ ヒスメネスは？ エニルは？ 水場で働いてくれている女達は？ 馬や駱駝の世話をしてくれた使用人達は？

ダーシュは「ザハトは勘違いしている」と言った。

この言葉は重要だ。

つまり、問題はダーシュの背景にあるのだ。それが何であるのかはまだ解らないし、簡単に聞けるような話でもないだろう。

だが間違いなく彼の親類であるザハトはそのことを重視している。それは則ち、アイオナとの結婚が焦点になっているという事だ。

ならば自分がこのアンケヌから消えた場合どうなるのか？

残された者達は用無しとして放置されるのか？ それとも人質になるのか？ もっと悪ければ殺されるのか？ そこについてのダーシュの見解を聞いておきたかった。

「屋敷の者達はどうなると思うの？」

「ザハトは無関係な者に危害を加えることはないが……場合によっては人質にされることはあるかも知れぬ」

やはり。だがそれはどうしようもない事でもあった。

今から使用人達に暇を出しても、後になって搜索されたら必ず捕まる者が出るだろう。

全員の安全を確保することなど、土台無理な相談

なのだ。

アイオナは目を閉じた。決断の時だった。

こういう事はあるのだ。

生きている以上必ずこういう重大な決断を迫られる事はある。

幼い頃から父親に教えられてきた。決断は早く、行動をより早く、と。

「わたし、あなたに<sup>つ</sup>従っていくわ」

その義務は無いものの、ダーシュの誠意には応えたいと思った。使用人たちのことが心配ではあったが、そちらはヒスメネスがなんとかしてくれるに違いない。そう信じるしかない。

ダーシュは僅かに目を見開いた。アイオナはなんだか照れ臭くなった。

「……だって、あなたの所為だもの。責任取ってわたしを護ってくれないと困るわ」

ダーシュは微笑んだ。

「そうだな」

「それで、いつここを出るの？」

「今だ。すぐに用意をしろ」

アイオナは驚いたが、黙って<sup>うなず</sup>頷いた。ダーシュを部屋から出すとすぐに準備を始めた。

持って行ける物は限られている。着た切り<sup>すずめ</sup>雀は覚悟の上だ。水と食べ物、後は途中の物物交換で役立つ

つ砂金や宝石ぐらいしか持っては行けない。

らくだ  
駱駝の苦勞を考えなくては。これらの荷物に加えて自分が乗るのだ。もしも欲張り過ぎれば砂漠の真ん中で後悔することになるだろう。駱駝は突然に死ぬ。馬とは違う。

荷物をまと纏め、ひもくく紐で括り終えた頃、ダーシュが部屋にやって来た。

「手伝おう」

とダーシュは言って、驚いたように固まった。

「お前……」

「このかっこう恰好？」

アイオナはローゼンディア風のかんとうい貫頭衣から、アウラシール風のケス長衣に着替えていた。生地のままの亜麻布で作られた体を覆い尽くすような衣服である。

「召使いの物をちょっと拝借してきたんだけど、いいわよね？ 今は非常時なんだし。無事に事が済んだら、彼女に事情を話すわ」

「ああ。その方が目立たないでいい。それで荷物の方は？」

「もうすぐ纏め終わるわ」

「一人で出来たのか？」

「こう見えても交易商人の娘よ。荷物を纏めるくらい一人で出来るわ」

ダーシュは驚いたような顔をしている。おそらく

今まで、自分のことはただのお嬢さんだと思っていたのだろう。

心外だ。このアイオナ、やがては家業を継ぐ身である。

幼い頃から厳しく仕込まれている。ちなみにヒスメネスも、ある時期机を並べて講義を共に受けていた。その頃から父が目を懸けていたということだ。

その判断は正しかった。ヒスメネスは今、父の右腕として働いてくれている。

「でも、今の状勢で進発している隊商があるの？」

アンケヌは混乱している。必要物資の補給以外で隊商の出入りがあるとは思えない。

あるとすれば逃げ出す連中だが、そういう所には当然、警戒の目が配られていると見ていい。いや、そもそも町の出入り全てに注意が払われるのではないか？

だとすれば、ダーシュが今すぐと言ったのも合点がいく。

「隊商は使わん。俺とお前の二人で行く」

「冗談でしょ？ 野盗の餌食になりに行くようなものだわ」

交易商人は必ず隊商を組んで旅行する。

でなければ間違いなく野盗に襲われるからだ。

商人でなくとも、長距離の移動は必ず隊商の後な

りに付いて、多人数で移動をするのが鉄則だ。もちろんその中に護衛の傭兵が混じっているのは言うまでもない。

「安心しろ。俺は安全な道を知っている。万一襲われてもどうせこの周辺を根城にしている連中だ。俺の顔を見れば黙って通すさ」

「本当に？ 懸賞金が掛けられていたりはない？」

「俺はハダクかたきの仇を討ってギドウを殺した男だぞ？ この辺りの盗賊連中はみんなハダクの息がかかっている。むしろ歓迎されるさ」

かけられた濡れ衣を逆利用しようということか。

悪知恵だが、冴えたものだと思った。

「ハダクって部下に愛されていたのね」

「金払いが良く、しかも公平だったからな。男気もあった。強欲だったがな」

「典型的な野盗の頭目という感じね」

「ああ。だが死んでしまっただけでは意味がない」

アイオナは頷いた。そう、死んでしまっただけでは意味が無いのだ。

「水はどのくらい持って行けるかしら？」

隊商に付かない以上、水は自前で用意する必要がある。

言葉にすればそれだけだったが、これにはどこを

目指すのか？ どの経路を想定しているのか？ そしてこの言葉の意味を、ダーシュがきちんと理解出来ているかどうかの試しの意味がある。

ダーシュは<sup>しば</sup>暫し考えた。

「……そうだな。最低限でいい。更に要り用な分は途中で手に入れた方がいいだろう」

「当てがあるのね？」

「ああ。途中でオアシスに寄る」

「目的地は？」

「ダルメキアを目指そうと思う。ディブロスの町だ」

ディブロス<sup>は</sup>ローゼンディア人の植民都市である。ミスタリア海沿岸にある都市で、長い歴史を持っている。

「そこならお前の身を護るのも<sup>たやす</sup>容易くなるだろう」

「問題はそこに行くまでということね」

アンケヌからディブロスに向かう場合、西に向かうことになるが、真っ直ぐには進めない。二つの山脈が横たわっているからだ。

そこで山脈を<sup>うかい</sup>迂回するわけだが、すると南北二つの経路が考えられる。

北回りの経路はエルメサ砂漠を抜けて、古都エルメサを通る道だ。この経路だとエルメサを出た後は、更に二つの経路に分岐する。



一つはエルメサ峠を目指して西に進み、そこからミスタリア海を目指して海沿いを南下する道だ。

もう一つはエルメサを出た後はイビドシュ山脈沿いに南下して、アルシャダールのオアシスからイビドシュ山脈を超えて西に出る道だ。

南回りの経路はほぼダルメノン山脈沿いに南下して、古都ザナカンダを目指す。ザナカンダを出てからは北上し、イビドシュ山脈を越える道だ。

どの経路を選ぶにせよ、どこかで山脈を越えねばならない。もっとも楽なのがエルメサ峠を越える道だが、この道は古代から多くの人々が通ってきた道であり、歴史上の戦争で、幾度も軍隊が通った重要経路でもある。つまりは有名すぎるのだ。

「どういう経路を通るつもり？ エルメサを通るにせよ、ザナカンダを通るにせよ簡単に素通り出来るとは限らないわよ」

エルメサもザナカンダも大都市だ。エルメサはともかく、ザナカンダはリムリク地方で最も古く伝統のある都市で、新ナーラキア帝国の帝都でもあった都市である。

双方とも常に多くの人々の出入りがある為、何かの事故に巻き込まれたりした場合、町を出られなくなる危険がある。

おまけにこの二つの都市は独立した都市国家で、

それぞれの都市に支配者の王が居る。

アンケヌもそうだが、基本的にリムリク地方もやはりアウラシールであり、都市国家が広大な大地に点在している状態なのである。

「どちらも通らん。先程も言ったろう？ 俺は安全な道を知っていると」

「直接二つの山脈を越えるの？」

それは余りにも無謀ではないだろうか？

今の季節を考えると、昼間の移動は死の危険があるのではないか。

アイオナは以前父親から聞いた、余りの暑さに墜落したという鳥の話思い出した。狂っていると思った。

かといって夜に山脈越えなど不可能だ。確実に墜落死する。

アイオナは少し考えた。

「安全なだけでなく……あなたしか知らない道があるのね？」

ダーシュは面白そうに眼を細め、口角を僅かに上げた。何だか悪戯いたずらを計画している子供のような笑い方だった。

「なあ一つ聞いていいか？ ローゼンディアの女は、皆お前みたいに頭が回る奴ばかりなのか？ だとしたら、かつて俺の一族がナバラ砂漠の北で死ぬ

破目になったのも納得できる」

「どういう意味？」

「気にするな。昔の戦争の話さ」

怨み言を言っている風ではなく、むしろダーシュは楽しそうである。

話の繋がりが全く見えない。今はディブロスへ向かう経路をどうするかという話をしているはずだ。

アイオナは少し気になったが、取り敢えず今は措いて逃走経路に話を戻すことにした。

「エルメサもザナカンダも通らないで、どうやってディブロスに出るの？」

「まずはベラルのオアシスを目指す。そこから西に進んでダルメノン山脈に入る」

「無茶よ」

「まあ話を最後まで聞け」

ダーシュは手でアイオナを制した。それから軽く周囲を窺った。いつもの感じと違う。

どうやら本当に他の人には聞かせたくない話らしい。

「実はな……」

声を潜めるとアイオナに顔を近づけてきた。

アイオナは反射的に後退りしそうになったがぐっ  
と堪えた。

初めて顔を合わせた時はともかく、見慣れた今で

あっても、凛々しく整ったその顔に迫られると緊張してしまう。

極力平静を保とうと努めているが、自分が変な顔をしていないか気になる。

いちいち意識してしまうのが実に馬鹿らしくもあり、憎らしい顔だと思う。

「あの二つの山脈には、地下通路がある」

「……本当？」

「本当だ。ただ、俺も使ったことはない」

「あなたは どうして そんな事を知っているの？」

「それは今は<sup>お</sup>措いておけ。とにかくあそこには地下通路がある。といっても人間が作った物ではないらしいがな」

それでアイオナには話が解った。おそらく太古の昔にジャグル達が掘ったものだろう。

悪の種族と一括される中であって、ジャグルは最も人類に近い種族とされる。ただし彼らは地下に住む。

ヴァリア教の神話によれば、ジャグル達は邪神ゲオルギウによって作り出されたとあるが、この辺は諸国の神話によって違いがあるので本当の所は判らない。

そして問題なのは連中の出自ではなく、行動様式である。

ジャグルを含め、悪の種族と呼ばれる連中は一貫して人類に敵対的である。

彼らが悪の種族と呼ばれるのにはちゃんとした理由があるのだ。

「ジャグルに遭遇したらどうするの？」

「連中があそこを棲<sup>す</sup>み<sup>か</sup>処<sup>か</sup>にしていたのはナーラキア帝国が在った頃の話だぞ？ 今は一匹だって残ってはいないさ」

「言い切れるの？」

「少なくともあの周辺に暮らす連中から、ジャグルに襲われたという話は出ていないんじゃないか？」

確かにそうである。もしもジャグルが地上に出現したとなれば大事である。

何故ならジャグル達は全人類共通の敵であるからだ。国や民族の如何を問わず、必ずそうした事件は広く知られることになる。

「それにあの辺りの森林にはドルム人がいる。どのみち地上は通れん」

ドルム人は特定の国や都市に属さず、イビドシュ山脈の周辺に暮らす民族だ。しかも遊牧民ではなく定住民である。

単に特定の国や都市に属さないというだけならば話は判る。アウラシールやダルメキアにはそうした遊牧民の部族が幾つもあるからだ。しかし定住して

いるのにいずれの国にも属さないというのは妙な話である。

だがそれには理由があるのだ。

イビドシュ山脈の周辺は、イビドシュ杉と呼ばれる木が群生する広大な森になっていて、ドルム人はその森の中で暮らしているという。

イビドシュ杉は高級木材として広く世に知られた植物だ。古代からローゼンディアの神木、シトロリオンと並んで有名である。

この木は高地にしか自生しない。つまり山脈の周辺にしか生えていないのだ。

その森林の主な部分はダルメキアの国内にあるが、問題はリムリク地方にある部分で、ここがいつも周辺の都市の間で奪い合いになっている。

こうした政治的な状況がドルム人の存在を認めてきたと言える。

ドルム人は他の民族や、周辺の国と接触をすることはほとんど無く、自分たちだけで暮らしている人々なのだ。その実態は明らかになっていない。謎の民族なのだ。

ただ、外部の連中に対して好意的ではないようだ、という程度の情報はアイオナも持ち合わせており、そしてそれは周辺諸国の間でも常識であった。

ドルム人はイビドシュ杉を神聖視しており、その

森を神そのものだと考えているらしい。

それゆえイビドシュ杉を建材や船材として伐採に来る<sup>よそもの</sup>余所者には、容赦しないと言われる。

古来より多くの伐採人がドルム人に殺されており、逆にドルム人達も、それこそナーラキア帝国のあった時代から、軍隊によって殺されてきている。

ジャグルとは違った意味で、ドルム人達も、やはりアイオナ達のような普通の人々を敵視しているのだ。

時折、ドルム人達を取り込もうとする支配者が現れるが、今のところ誰一人成功していない。

彼らにとってイビドシュ杉は神にも等しい。それに斧や鋸<sup>のこぎり</sup>を入れることを認めさせようという方が、どだい無茶な話なのである。

「地下に行く方がよっぽど安全だぞ。ドルム人に出<sup>でく</sup>遇<sup>わ</sup>せば、おそらく問答無用で殺し合いになる」

「そうね」

アイオナは頷いた。

きっと大変な逃避行になる。そう感じた。

地上を行った方が楽かも知れない。しかし地上を行けば痕跡を残す。何らかの形でそれは必ず残る。

しかも追う側のザハトは軍隊を持っているから、複数の経路を同時に追跡できる。

つまり外れがないのだ。予想される経路全てに

追っ手を放てば、その中のどれかが自分たちに追いついてくるだろう。

ザハトを出し抜くには、ザハトの知らない経路を通るしかない。

「あなたの知っているっていう、その地下通路？ザハトは知っているの？」

「わからん。だが、何らかの形で知っている可能性はあるな」

「もし知られていたらその経路にも追っ手を放たれるわよ」

「先行するのは俺達だ。先に地下通路を抜けてしまえば、追っ手を食い止める方法がある」

ダーシュは自信がありそうだった。

しかしアイオナはまだ不安だった。不安だったが従<sup>っ</sup>いていくと決めた以上、判断は下さねばならない。

「……あなたの言う道で行きましょう。ザハトが知らなければ完全に出し抜けるし、知られていたにしても、地下通路さえ出せば何か手があるのね？」

「ああ」

ダーシュが頷く。それでアイオナも徒ら<sup>いたずら</sup>に、不安点について考えるのを止めた。

考えれば不安は限りないのだ。例えば、首尾よく



地下通路を抜けられても、他の経路で進んでいた追っ手が先回りしていたら？ それは不可能ではないかも知れないのだ。

あのゴーサの傭兵達が、ディブロスの手前で待ち構えている情景を想像したらぞっとした。

アイオナは目を閉じた。考えても無駄だと思った。最も重要なのは時間なのだ。安全が保証された経路など無いし、結果としてとにかくディブロスに入ってしまうえば、それでこちらの勝ちなのだ。

「急ぎましょう。時間こそが黄金よりも大事だわ」

「その通りだ」

ダーシュが再び頷いた。

「きっと大変な逃避行になるわね」

「ああ、だが俺が考えていたよりも楽になりそう  
だ」

「旅の前からそんなことを言うもんじゃないわ」

「いや……」

ダーシュは軽く首を振った。

「お前は賢い。不要な手間がかかることは無いだろう」

それは自然な言い方だったので、最初アイオナは誉められているとは感じられなかった。

言葉の意味が解ってくると、誇らしさと同時に恥ずかしさを持った。

「誉めても何も出ないわよ」

自分でも、どうしようもない返事だと思った。

もっと情緒のある言葉を返すべきだった。

<sup>せっかく</sup>折角、ダーシュが誉めてくれたのだから。

「おおアルシャンキよ。我が妻の舌に慈悲の力を与えたまえ」

しかし憎たらしい返事にも拘らず、<sup>かかわ</sup>ダーシュは笑っていた。

<sup>らくだ</sup>「駱駝はどうするの？」

屋敷の駱駝を連れて行ったら、後でヒスメネスが困るかも知れない。

「今はこの屋敷に駱駝はいない」

「え？」

いつも二頭ばかりは<sup>きゆうしゃ</sup>厩舎に<sup>つな</sup>繋いであるのだが。

「どうしたのかしら？」

「今朝になってヒスメネスが連れて行ったそうだ」

「なんでかしら？」

「そうだな……」

ダーシュは何か思うところがある様子だったが、何も言わなかった。

<sup>たびじだく</sup>旅支度を整えて外に出た。すると護衛たちが歩み寄ってきた。屋敷の前庭を警護していた三人だった。

「ご苦労さま。あなたたちのお<sup>かげ</sup>蔭で助かるわ」

「お嬢様？」

日はすでに落ちていたが、アイオナは目深まぶかに布をかぶかぶっていたため、護衛の男たちには判らなかつたようだ。

「悪いけれど退といてくれるかしら」

アイオナの言葉に、男たちは困ったように顔を見合わせあった。

「それは……お嬢様お一人ならいいんですが……」

「ふん。やはりな」

ダーシュが短く吐き捨てた。アイオナはどきりとした。どういう意味だろうか。

「大方おおかたこいつらは、俺をこの屋敷から出さぬようヒスメネスから命じられておるのだろうさ」

「なんですって」

「薄々うすうす感じてはいたがな。奴はザハトと手を組んだということだ」

ダーシュの手がそろりと腰に動いた。剣を抜くつもりだ。アイオナは総毛そうけ立った。

反射的に手を伸ばし、ダーシュの右手首を掴つかんだ。こんなところで戦われては堪たまらない。

しかも相手は店の、屋敷の傭兵ではないか。敵ではないのだ。

「ダーシュ。ここはわたしに任せて」

有無を言わせぬ口調でささやくと、アイオナは護

衛たちに向き直った。

「あなたたち、ヒスメネスから命じられているのね」

ダーシュを外に出さないようにと。

となると少し不思議だ。ダーシュは情報を集めに町に出ている。どうやって屋敷を出ていたのだろうか？ アイオナはダーシュに振り返った。

「ダーシュ、あなた一度も正門を歩いていないわね？」

「この屋敷は広いからな。五人で見廻っていても穴はあるさ」

あき  
呆れた。何故そのことを自分に打ち明けなかったのだろうか。腹が立ったが今はそれどころでない。アイオナは再び護衛たちの方を向いた。

さて、なんと言って説得したものだろう。出来るだけ高圧的な態度は避けたい。道理で解らせるのが最も良い。つねづね  
常々父もそう言っている。

「……あなたたちの雇い主は誰かしら？」

優しく問いかけた。護衛たちはお互いを見合わせながら、

「ヒスメネス様です」

と答えた。少しがっくりきたが、予想の内の答えでもあった。

「そのヒスメネスを雇っているのはわたしの父なの

よ。そのことはご存じ？」

「はあ……」

「つまりあなたたちの雇い主は我が父ファナウス・メルサリスなのよ。だからあなたがたは父の命令にこそ従うべきであって、ヒスメネスの命令はそれに次ぐものとして扱われるべきだわ」

あくまで最上位者は自分の父親なのだ。それを思い起こさせなければならない。

「そしてやがては店を、家業のすべてを継ぐことになるのはこのわたし。つまりあなたがたが尊重すべきはヒスメネスではなくてこのわたしだということよ」

「うーん……」

護衛たちのリーダー格であるオルダニスが腕を組んだ。考えているというよりも困っているようだ。

厳つい外見をしているが、落ちつきのある男で、知恵も回り、無論腕も立つ。

「しかしですねえ……」

「ではわたしが許可したというしょうこ証拠を置いていきましよう」

アイオナは切り札を出した。ふところ懐から守り刀を抜いた。そのまま自分の髪の毛をつか掴むと、刀で切り取った。

「これを置いていくわ」

ひと握りの髪の毛をオルダニスに向けて突き出した。

「あなたがたに<sup>きん</sup>金や塩を支払うのはヒスメネスではないの。このわたしなのよ。近い将来にそうなることになるわ。必ず」

これが<sup>とど</sup>止めの<sup>せりふ</sup>台詞だった。出せる<sup>ふだ</sup>札はすべて場に出した。後はオルダニスが賢明であることを祈るだけだった。

護衛達への報酬は金銀の硬貨、そして塩だ。硬貨が無い場合は砂金や棒銀、粒銀などの事もある。

意外なのが塩である。内陸部では塩が貴重品ということがよくあり、<sup>きん</sup>金などと共に仕事の対価として流通しているのだ。

元々塩は金と並んで珍重される交易商品なのである。

ただしここアンケヌではその価値は低い。何故ならアンケヌは近くに塩沢があり、塩が容易に採れるからだ。これは内陸都市としては特殊な例と言える。

それでも塩が報酬として支払われることがあるのは、アンケヌの市民にとっては貴重品でなくとも、外から来る商人にとっては十分に価値がある交易品だからだ。

<sup>もっと</sup>尤もアイオナには、塩が貴重という感覚はいまい

ち理解出来ないのだが。

それはカプリア地方で生まれ育った所<sup>せい</sup>為<sup>い</sup>だろう。  
ミスタリア海に面し、塩に苦勞することなどないからだ。

オルダニスは難しい顔をしたまま、アイオナの持った髪<sup>にら</sup>の毛を睥<sup>にら</sup>んでいた。

暫<sup>しばら</sup>く黙<sup>もく</sup>ってそうしていたが、やがてふっと<sup>ほほえ</sup>微笑<sup>ほほえ</sup>んだ。

「仕方ありませんな」

「ありがとう」

アイオナも微笑<sup>ほほえ</sup>んだ。

「町をお出になるんですか？」

「あら？ ヒスメネスに報告するつもりかしら？」

「まさか」

オルダニスは笑った。が、もちろんそうするかも知れない。自分とヒスメネス、両方に対していい顔が出来れば、彼にとっては一番の利益なのだから。

「残念だけどそれは教えられないわね。ところで、ヒスメネスに一つ伝言を頼まれてくれる？」

「ほう。なんと？」

「もしわたしを裏切ったら承知しないから。そう伝えておいて」

「かしこまりました。お嬢様」

「ありがとう。恩に着るわ」

アイオナは頷き、ダーシュを促した。<sup>うなが</sup>護衛たちは道を空けてくれた。

正門を出て少し歩くと、ダーシュが話しかけてきた。

<sup>もったい</sup>「勿体無いことをする」

「何が？」

「髪だ。<sup>せっかくみごと</sup>折角見事なものを……」

不満げな<sup>つぶや</sup>呟きにアイオナは少し驚いた。そういうことを気に掛ける男だとは思っていなかったのだ。

「ふーん。あなたって意外に馬鹿なのね」

「馬鹿とはなんだ」

「馬鹿だから馬鹿と言ったのよ。あの状況で砂金でも出せば良かったというの？ それともあなたが持ってる包みの中から髪飾りでも？」

砂金に加えて宝石類、アイオナ自身の装身具、貴金属を持ってきているのだ。いざという時に水や食糧と交換したり、<sup>わいろ</sup>賄賂などとして使うためである。

「ヒスメネスへの<sup>しょうこ</sup>証拠なのだから、説得力さえあれば、別に高価な物である必要は無いのよ。あの場合は最も正しい選択だったと思うのだけれど、あなたは何が不満なのかしら？」

アイオナはわざとらしく首を<sup>ひね</sup>捻って見せた。ダーシュはますます不満そうな顔になった。

「お前の判断が正しかったことは認める。だが気に



入らん」

「……やっぱり馬鹿だわ」

「<sup>さきほど</sup>先程から聞き捨てならぬ言葉を立て続けに言ってくれるな」

「そうよ。感謝しなさい。自覚出来ればその分あなたは賢くなるわ」

何だか楽しくなってきた。足取りが軽くなる。

「それで、これからどこへ行くの？」

「西側の壁だ」

「門じゃないのね」

「ああ。おそらく門は見張られている。だから――」

ダーシュはそこで声を<sup>ひそ</sup>潜めた。

「隠し通路を使う」

「そんなものがあるの？」

「ああ。俺しか知らん」

「へえ……」

アイオナはどきどきした。謎の地下通路といい、まさしく脱出行ではないか。

でも少し考えた。

「まさか……変な虫とか、<sup>ねずみ</sup>鼠とか居ないでしょうね？」

「さあな」

<sup>とぼ</sup>呆けるようにダーシュは言った。

「ちょ、ちょっと冗談じゃないわよ！」

「冗談は言わん」

澄ましてダーシュは答える。

「俺とて使うのは初めてだ。どうなっているかなど知ったことか……なんだ？ その嫌そうな顔は？」

いつの間にか立場が逆転していることに気付いた。おそらく今まで自分が調子に乗っていた分、これからはダーシュによる報復があるのだろう。

<sup>さそり</sup>「蠍や蛇が出るかもしれんなあ……」

<sup>とぼ</sup>呆けた口調で<sup>つぶや</sup>呟きながら、ダーシュはすたすたと歩いていく。なんと性格の悪い男だろう。自分も人のことは言えないが。

アイオナは早足でダーシュの後を追った。

＊

「出て行った、と言うのですね？」

「はい」

ヒスメネスの問いにオルダニスは頷いた。<sup>わるび</sup>悪怯れる様子も無い。だがそのことに腹は立たなかった。彼が聞かされたというアイオナの言い分は、<sup>もっと</sup>尤もなのだ。

「追いかけますか？」

「まさか本気で言っているのではないでしょう

ね？」

苦笑しながら言うと、オルダニスは悪戯<sup>いたずら</sup>っ気のありそうな笑みで答えた。言葉は無い。無言である。

「解りました。後で手を借りるかも知れませんが、その時はお願いします」

オルダニスを部屋から出してしまうと、ヒスメネスはケザシュに目を向けた。

昨夜ザハトに紹介された男である。王宮から帰ってくる時に<sup>っ</sup>跟いてきたのだが、何故なのかは判らない。

「俺はザハトに協力はしてるが、従っているわけではない。つまり俺はお前のお目付ではない。俺のことは気にするな。お前の不利益にはならんさ」

そう言うのだが、この男が何のため、自分に付いているのかが判らない。

今は長椅子に横たわりながら時々干し<sup>ぶどう</sup>葡萄を摘まんでいる。

だらしない姿ではあるが、油断よりも<sup>けんのん</sup>剣呑さを感じさせる何かがある。

「結局どうするのだ？　ダーシュを追って捕まえるのか？」

この男は得体が判れない。「役に立つだろう」とザハトは言っていたのだが、一体どういう特技、能力を持つ男なのか。

一つだけヒスメネスには心当たりがあったが、口に出して言う気にはならなかった。それはとても嫌な予想だったからだ。

「とはいえ、ダーシュは長くはなからう」

「あなたが殺すのですか？」

その問いにケザシュは軽く笑った。

「まさか。そこまでしてやる義理は無いさ」

ザハトのことを言っているのだろう。

それにしてもこの男とザハトとは、一体どういう関係なのだろう。主従という感じではないし、友人という感じでもない。そのくせケザシュはザハトの指示に従って動いているようである。

ケザシュ本人も家臣ではないと言う。よく判らない。この二人の関係については把握しておきたいのだが。

「では何故、ダーシュは長くないなどと言えるのです？」

「奴は暗殺者<sup>ガズー</sup>に狙われている」

その言葉には多少驚いた。アウラシールで恐れられる暗殺者の名前が出てくるとは思わなかったからだ。

「……誰が雇ったのでしょうか？」

「先の王さ。お前の主人と、いや主人の娘か、それとダーシュが結婚すると聞いて、小心な奴は<sup>ふる</sup>顫え上

がったのさ。だが当の雇い主が死んでしまっでは意味が無い」

馬鹿にするように、ケザシュは乾いた笑い声を立てた。ヒスメネスは笑わなかった。

「ではその場合は契約はどうなるのでしょうか？ あなたの話からするとそれでもダーシュは<sup>いのち</sup>生命を狙われるようですが」

「代価は先払いだからな。問題は無い。信用のためにも<sup>ガス</sup>暗殺者は必ずダーシュの<sup>いのち</sup>生命を狙うはずだ」

「お嬢さんには危険は無いのですか？」

それが一番重要なことだった。

「出来るだけ無関係な人間は巻き込まないようにするはずだが……いかんせん殺しだからな。何があるかは判らんさ」

ケザシュは身を起こし、卓上から水差しを取って自分の器に注いだ。水を飲みながら、ヒスメネスに<sup>うかが</sup>窺うような目を向けてくる。

「……<sup>もっと</sup>尤もその方がお前にとってはよいのではないか？」

「何故そう思うのです？」

「あの女が消えればメルサリス商店に跡取りは居ない。腕の良いお前が<sup>あとがま</sup>後釜に納まる公算は高いだろうさ」

「なるほど。<sup>いちり</sup>一理ありますね」

そのようなことは考えたことも無かったが、ヒスメネスは敢えて感心した風に見えるよう演技した。

「まあ好きにすることだな。ザハトやお前の考えていることに、俺はそれほど興味は無い」

「では何故力を貸すのです？」

「それを答えるわけにはいかんな」

ケザシュは鼻で笑った。やはり知恵の回る男のようだ。

「お前の目的に俺が関係無いように、俺の目的にお前たちは関係無いはずだ。それに俺の役目はもう済んだ。ギドウを殺した時にな。この先俺がお前たちの問題に関わることは無いだろうさ」

「一体どうやってあの強者を殺したのですか？」

「ふん。簡単なことだ」

ケザシュはなんでも無いように手を振った。

「戦士は剣がすべてだと思っている。だが実はそうではない。人は多くのことに惑わされるし、それらに付け込む術<sup>すべ</sup>を正しく心得ている者にとっては、屈強な戦士であっても容易<sup>たやす</sup>く斃<sup>たお</sup>せる場合があるものさ」

「どうやって、ダーシュに成り済ましたのですか？」

「知りたいか？」

ケザシュは人の悪い笑みを浮かべた。

「ええ。ぜひ」

「その器を見るがいい」

言われて、ヒスメネスはケザシュの指差した器に目を凝らした。先程注がれた水がまだ残っている。

突然、その水が噴水のように噴き上げた。ヒスメネスは驚き、反射的に身を<sup>ひ</sup>退いた。

「何をやっている？」

ケザシュが低く聞いてきた。

「水が……」

「水が、どうした？」

言われて器に目を戻した。水は噴き出していなかった。卓も濡れていないし、そもそも器の中に水はそのままだに残っている。

「そんな……」

「かように人の目とは信用の出来ぬものさ。ギドウが俺をダーシュと見間違えたとしても、無理のないことだとは思わないか？」

ケザシュは低く笑った。やがて<sup>こうしょう</sup>哄笑になった。悪意のある笑い声。しかしその目は不気味に輝き、まったく笑いを浮かべてはいないように見えた。

ヒスメネスは半ば放心しながら、その様を見つめていた。

### 第十三章 正体

隠し通路は砂に埋もれていた。入口だけは無事だったが、内部は膝の辺りまでが砂に埋もれていた。誰も手入れをしなかったからだろうが、隠し通路なので仕方ないとも思う。

「食べるものも無いし、<sup>さそり</sup>蠍は居ないわよね？」

アイオナは<sup>こわごわ</sup>怖々と尋ねた。

「お前たちローゼンディア人は本当に蠍が嫌いだな」

「当然よ。刺されたら死ぬじゃない！」

「全ての蠍がそんなに強い毒を持っているわけではないさ。それに毒だと言うなら毒蛇も同じだろう。ここらにはヌビが居る。毒の強さなら決して蠍に引けは取らんぞ。むしろ勝ると言ってもいい」

ヌビは砂漠に生息する毒蛇である。尾を激しく振って独特の<sup>いかく</sup>威嚇音を発する。

噛まれればまず<sup>いのち</sup>生命は無い。

「でも蛇は驚かせない限り噛んでこないわ」

「お前たちローゼンディア人は本当に蛇好きだな」

ダーシュはちょっと肩を<sup>すく</sup>竦めた。

「あら、どうして？ <sup>とうと</sup>蛇は貴い生き物よ」

「それを言うなら蠍だって貴いさ。蠍は天の下方を支配する力有る生き物だ。その背には豊穡の女神ナ



ダが乗るといふ。お前たちの蛇に劣るとは思えんがな……」

ローゼンディアでは蛇は決して嫌われる生き物ではない。毒蛇ならば恐れられるが、毒を持たない普通の蛇ならば、特に理由が無い限りは憎まれたり嫌われたりする事は無い。

もちろん場合によりけりなのだが。

例えばにわとり鶏を飼っている人などは日々卵を狙う蛇との格闘をしているだろうし、そういう人は多分、蛇は嫌いだろう。

だけどそういう理由が無い限りは、まずもって蛇は貴い生き物である。王権の守護者、大いなる女神メーサーの使いでもある。

他方、蠍は確かにアウラシール西部・南部においては畏怖される生き物である。

噂に名高いアウラシールの占星術師は、天に巨大な蠍の姿を見るところ。毎年、太陽はそこで死に、翌年、やはり天に輝く雄牛の上に再び現れるのだという。

雄牛と蠍が天を二分して支配している。アウラシールの占星術師はそう語る。

牛は天の水を支配し、蠍が火を支配するのだ。

ダーシュが語った『天の下方』とは、すなわ即ち蠍の支配する領域のことだ。

「……普通、女は蛇を怖がるものだ」

「その普通は誰が決めたのかしら？」

アイオナは首を捻<sup>ひね</sup>った。

「そういうところがローゼンディア人だな」

ダーシュは軽く笑い、松明<sup>たいまつ</sup>に火を点けた。油の爆<sup>は</sup>ぜる音と燃える臭いが、僅<sup>わず</sup>かに流れてきた。

「行くぞ」

アイオナを促<sup>うなが</sup>すと、ダーシュは隠し通路に入ってしまった。

隠し通路は都市の西側の壁、その近くにある水場の背後にあった。水場と言っても今はもう使われてはいない。すでに水は止められている。

場所は城壁沿いの通りから一本入った所で、救護医療院近くの細い通路の奥である。

水場の正面には一応広場が切ってはあるのだが、店が出ることはおろか、立話をする者さえほとんど無い。

こんな奥まった場所にあるし、今はすぐ近くにもっと開けた水場があるしで、段々と使う人がいなくなっただの。

二十年ほど前に廃止されたのだが、水場自体はこうしてまだ放置されたままである。

隠し通路の入口は、この水場の背後にある見張り小屋の中にあっ<sup>もっと</sup>た。尤もこの見張り小屋は建築のた

めに煉瓦れんがを持って行かれてしまっており、足場というか、土台しか残ってはいなかったが。

ダーシュは小屋の床に膝を着いて土を払い、隠し通路の入口を開いて見せた。

これだけ巧妙に隠されていると、ダーシュのように知っている者でなければ見つけ出すことは難しいだろう。

砂に足を取られないようにしながら階段しばらを暫く下りると、西側に向かって真っ直ぐな通路が伸びていた。

松明たいまつの明かりに照らされる通路は、厚い砂に埋れてはいたものの側壁はすべらかであり、確かな職人の手になるものと推察出来た。

「服すその裾を上げておけ」

このままだと砂の上を掃はいていくことになるからだと思ったが違った。

「蠍さそりがいた場合、中に入り込まれる虞おそれがある。おっと下だけ見えていても駄目だ。上から落ちてくるかもしれんぞ」

冗談ではない。

「泣きそうな顔をするな。俺に掴まって、ゆっくり歩いてくればいい」

ダーシュが差し出した手に掴まった。日頃剣を振っているだけあって皮は厚いが、柔らかさのある

手だった。

「急ごう。ザハトは知恵が回る。ヒスメネスも向こうに付いたとなれば尚更だ」

通路自体は予想を超える長さがあった。行けども行けども出口が見えてこない。始めは緩やかに下っていると感じたが、やがて水平になり、何度か折れた。どこから入り込んだのか判らないが小さな<sup>とかけ</sup>蜥蜴を何度か見かけた。ヌビには<sup>でくわ</sup>出遇さなかったが、蠍には遭遇した。

悲鳴を上げたが、ダーシュが素速く間に入って<sup>かば</sup>庇ってくれた。

「騒ぐな。このまま通り過ぎれば大丈夫だ」

「騒いでなんかいないわよ！」

思わずムキになって声を荒らげてしまった。

「落ち着くんだ。上の連中に声を聞かれるかも知れないぞ」

<sup>みみもと</sup>耳許でダーシュがささやいた。注意されているにも<sup>かかわ</sup>拘らず、何故か優しさを感じた。

「俺を信じろ。こんなところで蠍に刺されるような馬鹿はしない」

それで気が落ち着いた。その後は黙って歩いた。

遂に出口の明かりが見えた時、アイオナは歓声をあげそうになった。慌てて口を手で<sup>ふさ</sup>塞いだ。

「出口だ」

特に感動した様子もなく、ダーシュは外に出た。

そこはアンケヌからほど近い岩場だった。常識的に考えてもそう遠い場所まで地下通路など掘れるはずもないのだが、やはり意外に思った。ここの他にも都市を訪れる交易商人が目印にしている岩場は幾つかあるが、まさかその中に隠し通路を持っているものがあるなどとは。

「さてと……」

何かを探すようにダーシュは辺りに目を配った。おそらくらくだ駱駝を探しているのだろう。

屋敷を出る時にも思ったが、駱駝は絶対に必要だ。だからダーシュは絶対に用意してあるはずだし、用意してあるとすればここしか無い。

「ホイヤム！ ホイヤムはどこだ！」

ダーシュは大きな声を出した。駱駝はホイヤムというらしい。

名前を付けて可愛がっている辺り、この男らしくないと思ったが、さぞや大切にしている駱駝なのだろう。

「はいはい！ 申し訳ございません！」

甲高い男の声が聞こえた。すぐに下から声の主が登ってきた。

ずんぐりとした体型に、黒い袖無し上着、騎乗用の下穿したばきを穿いた中年の男である。思わず摘まみた

くなるような鬚<sup>ひげ</sup>を鼻の下と頤<sup>あご</sup>に蓄えていた。

「おお、ホイヤム。不安になったぞ」

どうやらこれがホイヤムらしい。随分可愛くない駱駝だと思った。

ホイヤムはダーシュの前まで来ると、恭しく片膝を着いた。

「我が王子様。お待たせして申し訳ございませんでした」

「王子様？」

自分でもひどく間抜けだと思える声だった。どこに王子が居るというのか。

「してこの女は？ 婢<sup>はしため</sup>でございますか？」

ぎろりとアイオナを見て聞いてくる。睫毛<sup>まつげ</sup>が凄く長い。ばさばさと砂を弾きそうだ。

この男の駱駝を連想させる顔付きの中で、目と睫毛は特に駱駝に似ていると思った。

「いや、妻だ」

素っ気無いダーシュの返答にホイヤムは目を剥いた。

「つ、妻ですとっっ!!」

「ああ、お前には報<sup>しら</sup>せることが出来なくてすまなく思う。俺は結婚したんだ」

全然そうは思っていないような口振りである。ダーシュの人が悪いのは、自分に対してだけではないの

だなと思い、妙に安心した。

「け、結婚ですとっっつ!!」

実に判りやすく驚いてくれる。見ていて飽きない男だった。

「そのような重大事を何故お一人でお決めになったのですかっつ!!」

「非常事態だったのな。すまんが喚<sup>わめ</sup>かないでもらえるか。耳が痛くなる」

ホイヤムは息を吸い込んだ。軽く咳<sup>せき</sup>払いをした。

「申し訳ございません。しかし御結婚などと……ザハト様は御存知なのでしょうか」

「奴なら俺を殺そうと躍<sup>やつき</sup>起になっている。今頃搜索を始めているかもしれん」

ホイヤムは口をぱくぱくと動かした。何か言おうとしているようだが事態の動きに舌がついていかないらしい。

「安心しろ。お前には危害は及ばない。ダナン族の所へ行け。話は通してある。お前一人くらいは庇<sup>かば</sup>ってくれるだろう」

「おう、王子様はどうなさるので？」

「俺か？ 俺は妻を護らねばならん」

急に話を振られてアイオナはどきりとした。同時に怒りが込み上げてきた。

なんとなれば、今までこの男は、自分の身分を隠

してきたからだ。いや隠してきたのは構わない——  
のではなくて隠してきたのは仕方ない。この問題を  
先送りしてきたのには自分も加担していたからだ。

だがどうにも腹の虫が収まらない。言うに事欠い  
て王子だと？

よく考えてみれば符合することばかりだ。隠し通  
路にしても王族ならば知らないはずはない。おそら  
く最初に潜入してきた時も、似たような通路を使っ  
たのだろう。

ザハトとの会話もそうだ。古典ナーラキア語を話  
せたことだって、王族ならば不思議は無い。物腰に  
ある気品だってそうだ。

だが、だが……とにかく腹が立つ。

「どうした？ 怖い顔をして」

初めて、こちらの様子を窺<sup>うかが</sup>うような声をダーシュ  
は出した。

それがまた怒りを誘った。つまりこの男は今の自  
分の立場を自覚しているというわけだ。

今までダーシュは自分の身分、素<sup>すじょう</sup>姓という、最も  
重要な事実を伏せてきた。

隠してきたわけだ。

当然それが明らかにされる時には大きな影響があ  
るわけで、それまで隠してきた時間や、その隠し方  
が強固なものであればあるほど、影響は激しくな



る。

無論それはアイオナの驚きや怒りといったものになるだろう。

この男はそれをちゃんと解っていたのだ。

アイオナは<sup>けんのん</sup>剣呑な眼差しでダーシュを睥んだ。

「……王子ですって？」

ダーシュは何か言いかけたが止め、<sup>わず</sup>僅かの間を置いてから不敵な笑みを浮かべた。

謝るべきか、虚勢を張るべきか考えていたのだろう。

そしてどうやら虚勢を張る方を選んだようだった。

「ああ。光栄に思うがいい。お前の夫は実は王子だったのだ」

その言葉で、目に見えない何かが、張っていた糸のようなものがぷつつり切れた。その音が確かに聞こえたときアイオナは思った。

「冗談じゃないわ！　つまりはこれって、わたしは政権争いに巻き込まれたってことでしょ!?　どこが損にならないのよ！　王子だって判ってたなら、結婚なんかしなかったわ!!」

ダーシュは、<sup>にがみ</sup>苦味と驚きの混じった笑みを浮かべた。

「アウラシールの女ならば、王族の妻に選ばれたと

なれば、一も二もなく喜ぶものだがな……」

「<sup>あいにく</sup>生憎と、わたしはローゼンディア人なもので！」

再びダーシュは何かを言いかけたがやはり口を<sup>つぐ</sup>噤み、言葉を探し始めた様子だった。

どうやって<sup>なだ</sup>宥めるべきか、それともこの期に及んでまだ誤魔化そうか考えているのかも知れない。

アイオナはダーシュが話すのを待った。その間にも、怒りにとろとろと油が注がれるのを感じた。

<sup>らくだ</sup>駱駝のホイヤムが口を挟むべきか、それとも黙っているべきか、やはり考え<sup>あぐ</sup>倦ねて不審な挙動を見せている。

立ち上がりかけて中腰のまま口を押さえているその仕草は、リスか何かの小動物のようだ。滑稽な姿だったが今のアイオナには全然おもしろくない。

何やら視界に入るものすべてが、怒りの<sup>めもり</sup>目盛を上昇させることへと加担している気がした。

だが、こういう時こそ冷静にならねばならない。

「顔は怒っても心は静か。目と指は賢く。数えることを間違わない」

父はいつもそう言っていた。商人は冷静たれ。勘定を間違ってはならないと。

アイオナは大きく深呼吸した。ダーシュとホイヤムが警戒したように<sup>みじろ</sup>身動きした。安心しなさい。あなたたちをこれ以上怒鳴りつけたり、棒で追い回し

たりはしないから。

「……今の言葉は取り消すわ。どのみちあの夜のわたしには選択肢はなかったのよ。ただあなたが嘘を吐いたことだけはたしかね」

「俺は嘘など吐いていない」

ダーシュは不満げである。

「あら？ 権力闘争真っ最中の王族と結婚することが「必ず得になる。損はさせない」なんて言い切れるのかしら？ 危険も大きい代わりに見返りも大きいというのなら解るけれど、必ず得になるというのは言い過ぎではないかしら？ 店先に羊の頭を置きながら、売っていたのは犬の肉だったという話があるけれど、まさにそれね」

「なんだと」

かっとなったのかダーシュは睥<sup>にら</sup>んできた。負けずに睥み返した。怒っているのはこちらも同じだ。

おろおろしているホイヤムを放置して、アイオナとダーシュは無言で睥み合った。

先に根負けしたのはアイオナだった。こんなことを続けても仕方ない。それにたった今、冷静になると決めただけではないか。

「あーあ。もういいわ」

頭を振って背中を向けた。

「今更どうにかなるでなし。どうでもいいわ。それ

よりも先のことを考えましょう」

「……」

ダーシュはまだ無言でいる。何となく、再びダーシュの顔を見るのが躊躇ためらわれた。だからというわけではないがホイヤムに目を向けた。実に情けない表情をしている。それで少し、気持ちなごが和んだ。

「それで、わたしはこれからどうすればいいの？」

振り向いて、しっかりとダーシュを見つめた。睥んでくるかと思ったが、意外にもダーシュは気まずそうに視線を下げた。

「……俺の妻になった以上、ザハトはお前を殺そうとするはずだ。差し当たっては安全な場所まで逃げてもらわねばならん」

「なぜザハトはわたしを殺そうとするの？」

それが疑問だった。

「未来の王母となられるからです」

答えたのはホイヤムだった。

「血筋の上でもダーシュ様が正統。ザハト様は大臣家の御子息。母方でしか王家の血を引いてはおられません。この上ダーシュ様が御成婚となれば、アンケヌの市民、そして宮殿の家臣たちのすべてがダーシュ様を推戴すいたいいたしたいと思うことでしょう。ザハト様は聡明なお方。そこを恐れたのではございますまいか」

「それだけでわたしを殺す理由になるの？」

「それは私めには判断出来かねます。ですが我が王子が先程<sup>おお</sup>仰せになったところでは、ザハト様はお二人のお生命<sup>いのち</sup>を狙っているということでございました。ならばそういうことなのではございませんか？」

この男、見かけによらずなかなか頭が良いではないか。

アイオナは感心すると同時に、ホイヤムに好感を持った。

「あなたホイヤムと言ったわね」

「ははあ～」

ホイヤムは岩場上にひれ伏した。

「別段<sup>は</sup>這いつくばる必要は無いわ。それよりも水を持ってきてくれない？ 咽<sup>のど</sup>が渴いたわ」

「はい。ただいまお持ちいたします」

ホイヤムは素速く立ち上がり、岩場を降りていった。軽やかな動きだ。ずんぐりした体型からは考えられない身のこなしだと思った。

アイオナは手頃な岩を見つけて腰を下ろした。召使いの服を着ていて良かったと思う。

高価な普段着だったならば、こんな所<sup>すわ</sup>に坐る気にはなれなかったに相違無い。

「あなたも坐らないの？」

手近な岩を指差してダーシュを招いた。大人しく  
ダーシュは従い、アイオナの隣に坐った。

「……お前に損をさせるつもりはなかった」

ぽつりと<sup>つぶや</sup>呟いた。まだ気にしていたらしい。こちら  
らはもう逃避行のことを考え始めているというの  
に。

「別にあなたの善意を疑ったわけじゃないわ」

内心<sup>ほほえ</sup>微笑ましいと思いつつも、わざと素っ気無い  
口調で答えた。

「あなたの読みが外れただけでしょ」

「<sup>く</sup>口惜しいがな」

「あなたにとっては<sup>いのち</sup>生命の懸かった非常事態だった  
し、私の<sup>くび</sup>頸に手を掛けたことも<sup>ゆる</sup>赦してあげるわ。読  
みが外れたことも、残念だけど仕方ないわね」

「随分気前がいいな」

「何言ってるのよ！ これでも泣く泣く在庫整理し  
てるのよ。あまりローゼンディア商人を甘く見ない  
ことね」

「それもこれもヘキナンサの思し召し、か？」

「確かにそうだけど……異教徒に言われると複雑な  
ものがあるわね」

「だろうな。俺はアルシャンキを引き合いに出すべ  
きだった」

二人して笑った。笑っていると、ホイヤムが水袋

と何か、他の袋を<sup>さ</sup>提げて戻ってきた。大方、乾物などの軽食が入っているのだろう。笑っている自分たちを見て不思議そうな顔をしたが、すぐに釣られたように笑顔になった。

「干し<sup>ぶどう</sup>葡萄を持ってきました。<sup>なつめやし</sup>棗椰子、干し肉もあります」

「ありがたいな」

ダーシュが晴れやかな顔になった。

「<sup>らくだ</sup>駱駝は三頭用意したな？」

「はい。王子様のお言い付け通りに」

「良し。ならばもう、お前は去れ」

「ちょっとダーシュ！」

それは<sup>ひど</sup>非道いのではないか。使うだけ使っておいて、用が無くなれば「去れ」とは。

「いえ、良いのです。王子様は私めの安全を考えて下さったのです」

「良いか？　ダナン族の所へ行け。そしてザハトのことを長老に話せ」

「その後はどうすればよろしいのですか？」

「俺たちはディブロスにゆく。あそこはローゼンディアだ。ザハトの手は届かない。お前は長老への報告を済ませたらその足でディブロスへ来てくれ」

「かしこまりました」

「良いか？　急いでダナン族の所へ行け。そして必

ず長老に直<sup>じか</sup>に面会してこのことを話すのだ」

ダーシュは厳しく命じた。

「ははあ。仰<sup>おお</sup>せの通りに致します」

「お前に死なれては俺が困るからな。必ず生き延びよ」

「ははあ」

ホイヤムは再び岩場上にひれ伏した。

「ダナン族っていうのは何？　そこが安全なら私たちもそこに逃げ込めばいいんじゃない？」

「そうはいかん。そこまで甘えられない」

「どういう関係なの？」

「母の実家だ」

「……いろいろと複雑なのね」

アイオナは溜息を吐いた。王族というのはいろいろと大変そうだ。いろいろと。

ローゼンディアにしたって現王妃の奢侈<sup>しゃし</sup>は問題視されているし、それに伴うどろどろとした貴族間の人間関係など、アイオナは耳にしたことがある。

「我が王子よ。何とぞ、何とぞ御無事で……」

ホイヤムはダーシュの手をしっかりと握ると、祈るように言った。

「俺がそう簡単に死ぬものか」

「お妃様もお体を大事にして下さいませ」

その言葉が何を意味するのか想像して、アイオナ



は何だかこそばゆくなった。

「あなた様は未来の王の母となられるお方」

やっぱりそうだった。うるうるとした駱駝のような目を向けられて、この結婚が偽装であることを思い起こすと、何だか悪いことをしているような気になった。

「ホイヤム。もう行きなさい。王子の言い付けに従うのですよ」

自分でも似合わぬと思いながら、雰囲気の流れでそう言った。ホイヤムは至極しごく自然にその言葉を受け容れて、感謝の言葉を返し、それから岩場を下っていった。すぐに駱駝に乗って去っていく姿が見えた。

「さて、我らも浮々うかうかはしておられぬ」

ダーシュが腰を上げた。

## 第十四章 彷徨える魔神

ザハトは苛<sup>いらだ</sup>立っていた。ある程度想定していたことではあるが、ダーシュが気配を察して逃げ出したのだ。

「……お前はいつも逃げるな」

本人の居ぬ場で、宮殿の中庭の前に立ちながらザハトは呟<sup>つぶや</sup>いた。

自分がアンケヌを攻めると言った時もそうだった。市民を巻き込むことを恐れ、ダーシュは反対した。ゴーサの傭兵団に渡りを付けたのも、ハダクを抱き込んだのも自分の仕事だ。

そのくせダーシュは市内への偵察を買って出た。大方、衛兵に見つかったのも、迷いを持ちながらうろろろとしていた所<sup>せい</sup>為であろう。煮え切らぬ男だと思う。

自分とダーシュの立場が逆であったならばと思うことは、今までにも幾度かあった。

同じ王家の血を引いているとはいえ、ダーシュは<sup>れっき</sup>歴とした王子であり、一方ザハトは大臣家の人間だった。

ザハトの母は先王の妹に当たる。つまり母方の血筋を通して、ザハトとダーシュは従<sup>いとこ</sup>兄弟になるというわけである。

女の血筋を通してしか、自分は王家との血縁が無い……。

そのことはザハトにとっては大きな弱点だと言えた。父権の強力なアウラシールにあっては、何よりも父を持つこと、父の系譜を受け継ぐことが重要視される。

女では駄目なのだ。

だからといって、ザハトは母を軽視したり憎んだりしているわけではない。

要は問題点をどう解消するかだ。

今となっては馬鹿馬鹿しいことであるが、こうしてアンケヌを掌中に収めるまでは、ダーシュが王になり、己が大臣として政務を執ると――それが漠然たる目的だった。

すべてが変わったのはゴーサの町を訪れた時だ。たまたま立ち寄った水場で、すべてが変わった。

「お前か」

ケザシュはそう言った。始めは何のことやら解らなかったものだ。

だが自分は運がいい。物事の絡繰り<sup>からく</sup>を知る機会に恵まれた。尤も<sup>もっと</sup>、それすらもケザシュに言わせれば「護神像の力」ということになるのだろうが。

そう、ゴーサの町に入る途中、盗賊に襲われた隊商<sup>でくわ</sup>に出遇した。

ただし奮戦むなしく敗れたという感じではなかった。

盗賊が理由で壊滅したのではなく、何か他の理由による、奇妙な壊滅の仕方を示していた。そこに興味を惹かれてザハトは近寄ったのだ。

もちろん金目の物は後から来たであろう盗賊達にすべて持ち去られ、禿鷹が姿を見せるのも直であろうという頃合だった。

何か期待したわけではない。

だがザハトは、屍体と破壊された荷物の間に入って行った。そこで見つけたのだ。砂に埋もれた小さな人形を。

黒曜石を刻んだ物だった。この硬い石をどうやって刻んだものかは判らない。膝を抱えて坐った、侏儒のように見えた。初めは子供を授けるダフラ神かと思った。だが違う。見たことの無い像だった。

「お前は運がいい」

ケザシュはそう言った。だがその理由は決して語ろうとはしなかった。ただ跟いてきただけだ。

「一度だけ機会が与えられるだろう。それを逃さぬことだな」

ケザシュはそうも言った。真実だった。

機会とはすなわち、何故ケザシュが自分に跟いてくるのか、その理由を知る機会ということである。

ケザシュに出会う直前、確かにそれを暗示するような出来事にザハトは遭遇していた。そのことをケザシュは知らない。だからこそ不用心にそう発言したのだろう。

だがザハトは運が良かった。まさにケザシュの言葉そのままに。

ゴーサの町に入ってすぐに、どういうわけか占い師の小屋に入ったのだ。普段ならばそんなことはしない。何故か足が向いたとしか言いようが無い。

「お前が拾ったのはアシュバ神の像だ。小さな、黒い魔神だよ」

占いを始めてすぐに、老婆はそう語った。聞いたことの無い神の名だった。

最初は当てずっぽうだと思った。なんとなれば何かを拾うことなどよくあることだし、曖昧あいまいな言い方をして客をほんろう翻弄するのは、こうした商売には当然のことだからだ。

「遠く、ハルジット高原を越えてなお遠くの涯はてに、ヤヌシャフという山がある。その山には死をつかさ掌どる恐るべき者たちがおる」

「暗殺者ガズーのようなものか」

ザハトは尋ねた。暗殺者ガズーならば、ザハトも知っている。誰もが恐れる死の使い。黒き手を持つ者たちだ。その本拠地がどこなのかは誰も知らない。

老婆は<sup>わら</sup>晒った。

「<sup>ガズー</sup>暗殺者は召使いに過ぎん。彼らの黒き手は、その  
<sup>あるじ</sup>主より与えられたものさね」

「ほう」

「昔。まだハルジット高原が人の住める場所ではな  
かった頃の話じゃ——」

老婆の語った話は東部域の古い伝説らしかった。  
アウラシールは広大である。西部の人間であるザハ  
トにとって初めて聞く内容だった。

老婆によれば、ハルジット高原の東方、その涯に  
ドゥルーダという山脈があるという。天を<sup>つ</sup>衝くばかり  
の高く<sup>けわ</sup>峻しいその山脈の中に、ヤヌシャフという  
山がある。

それこそが魔の山。黒き予言者たちが住まう山  
だ。彼らは元は一柱の魔神を崇めていたと言うが、  
<sup>ゆうきゆう</sup>悠久の昔、自らの手によって魔神を追放したのだと  
いう。

魔神は小さな像の中へと封じられ、以来、アウラ  
シールを<sup>さまよ</sup>彷徨っているのだと。

長い、長い間。

「アシュバ神は帰りたいのさ。山に、自らの故郷に  
ね」

「その昔<sup>むかし</sup>噺がどうしたというのだ」

「お前の持つておるその像がアシュバ神さ。そんな

小さな姿に封じられて、今もアウラシールを彷徨っているのさ」

「馬鹿馬鹿しい」

ザハトは鼻で嗤<sup>わら</sup>った。この手の占い師に多いハッタリだと思った。

「信じるか信じないかはお前さんの自由さ。だがお前さんはアシュバ神の下僕<sup>げぼく</sup>に会っているはずだよ」

「どうしてそう思う？」

「アシュバ神は下僕を持っておるからさ。自分を追放した者たちに復讐<sup>ふくしゅう</sup>するため、アウラシールを彷徨<sup>さまよ</sup>いながら、少しずつ力を蓄えておるのだと聞く」

「……」

「人知れず、黒き魔神を崇める者たちがおるということさ」

「俺の故郷ではそのような話、頓<sup>とん</sup>と聞いたことも無いがな」

「それはそうよ。お前さん、西の人間じゃろ。アシュバの信者は少ない。ほとんどがハルジット高原より西へは出て行かぬだろうさ。魔神は山から離れたくないのだよ」

「ほう。では何故俺の許<sup>もと</sup>に魔神はやって来たのだ。奇妙<sup>おか</sup>しいではないか？」

「そうさねえ。きっと何かのお考えがあつてのことだろうねえ」

「魔神の下僕というのはどんな者たちなのだ？」

「大きな力を授<sup>さず</sup>かっておるそうだよ」

「大きな力？」

「魔道<sup>まどう</sup>の力さ」

老婆は声<sup>ひそ</sup>を潜めた。ザハトは滑稽だと思った。自分自身が占いという魔道の一端<sup>にな</sup>を担いながら、まるで何か恐ろしいものについて話している風にするのは可笑<sup>おか</sup>しいではないか。

「魔神は自らの手足となる者に強い力を与えるというよ。そしてその者たちは必ずお前さんの前に現れるだろう」

「馬鹿馬鹿しい」

もう一度ザハトは鼻で嗤った。まともに取り合う気がしなかった。小屋を出て、咽<sup>のど</sup>の渴きを覚えたので水場に向かった。アウラシールでは大河に挟まれた中央地域を除いて、水は貴重である。丁寧に水を汲み、一滴も無駄にせぬようにする。ザハトは桶<sup>おけ</sup>一杯の水で咽を潤し、顔を洗い、水を浸した布で肩や首の回りを拭いた。

いつの間にか背後に人が立っていた。

男である。が年齢はよく判らない。浅黒い肌をしており、その顔立ちにはアウラシールでも南方人の特徴が見て取れた。体格は雄偉<sup>ゆうい</sup>とは言い難<sup>がた</sup>かったが、それでも不気味な凄味<sup>すごみ</sup>を感じさせるのは、異様



なまでに鋭い眼光のためであろうか。頬は少し瘦こけていた。

黒紫色の長衣ケ スを着て、緑色の頭布ハーティカを巻いているが、腰帯に剣は差していない。無腰であった。

「お前か」

ケザシュはそう言った。

ザハトは運が良かったと思っている。もしもこの順番で出会わなければ、そうと察することは出来なかったかも知れない。

もちろん魔神崇拝者なのかとケザシュに尋ねた。笑って取り合わなかった。

「もしそうだとして、だとしたらどうだというのだ？」

逆に問い返された。

「俺がどこの何者でもお前にとってはどうでもいいこと。お前にとって重要なことは、この俺を、俺の力をどう使うかということではないかな？」

確かにそうだった。

ザハトはケザシュの能力を大いに利用した。ハダクを抱き込んだのも、ゴーサの傭兵団やとを傭うことが出来たのも、すべてケザシュの奇怪なる協力あってこそだった。

ケザシュは何も語らず、何も要求せず、ただザハトが求めることを実行した。だからとっていい気

になっていたわけではない。

やがて懐ふところの神像は重くなり、手の内で蠢うごめくように思えた。確かに言い知れぬ何か、人智を越えた力を持っているように感じた。

ザハトは己が掌てのひらを見つめた。考えごとをする時、常にあの神像を握り締めていた。

今はもう無い。突然に失われたのだ。持ち歩いている内に落としたのか？ いや、考えられない。気付くはずだ。

懐から神像が消えた時、消えたのに気付いた時には血の気が引いた。すべてを放り出して神像を探した。だが、見つからなかった。

「じゃあな」

血眼ちまなこになって神像を探している時、不意にケザシュが背後に立ってそう告げた。

「驚くな。判っていたはずだ」

「お前は……」

「俺はあの男の所にゆく」

指差した先にはヒスメネスの姿があった。噴水の向こう、丁度中庭ちょうどの反対側だ。

「奴はローゼンディア人だぞ」

「関係無いさ」

ケザシュはくるりと背を向けた。呼び止めようと思った。だが、声が出なかった。何かが自分の声を

封じていると思った。

「……余計なことをする」

ケザシュは<sup>つぶや</sup>呟き、遠くを見るように町の方へと目を向けた。

「お前は運がいい。最後まで生き延びた。大概是、途中で死ぬのだから」

ケザシュが歩き去っていくのを茫然と見つめた。

だが、本当に驚いたのはその後だった。

まったく、神像を取り戻そうという気が失せたのだ。上手くは言えぬが、自分の役目は終わった。そんな気がした。

同時に自分を<sup>う</sup>衝き動かしていた炎のようなものが消えているのを感じた。

いや正確には、その炎が、魂の力とでも言うような物が変化しているのを感じたのだ。

何かを成したいという思いが、何を成すべきかという思いに変わったのを、ザハトは感じた。だがそれはかつての状態に戻ったのだとも言えた。

ザハトは自分の姿を再発見したのだ。炎の上に炎を重ねられると、どちらが真の炎なのか区別が付かなくなる。そういうことだと思った。

神秘というものはあるのだ。この世は人が形作ったものかも知れぬが、その周辺には見通すことも出来ぬ深淵が広がっているのだと感じた。

ザハトはヒスメネスに簡単な紹介だけを済ますと、後はケザシュを自由にさせた。ケザシュの方でも挨拶に来たりはしなかった。風のような男だと思った。

あの時、何故ケザシュを呼び止めなかったのかは解らない。

何か強烈な力が自分を制した。

何の力であるかは解らない。だがその力があの時、あの判断を導いた。ケザシュはそれを知らないか。

知らなければケザシュはそのように語るだろう。おそらくヒスメネスにも。そのことはザハトの想定する方向へ事態を動かす助けになるかも知れない。

——いや、あの男のことだ。知っていても何の不思議も無い。

いずれにしても、後は己が成した行為の結果がどのような軌跡を描くのか、それを待てばいい。

そこには畏れと期待、そして好奇の思いがある。

が、それだけではない。それらの思いが入り交じる奥に秘められた核がある。硬い鋼鉄の球のようなものがある。それは危険なものだとザハトも自覚している。

だがそれがザハトなのだ。それがザハトがザハトで在るということなのだ。それは余人には疎か、本<sup>おろ</sup>

人にとってさえもどうにも出来ぬ事に違いない。

花は花であるというその性質、本性によって花たり得るのであり、同様に水は水であるということによって水となる。輝く月も、天に浮かぶ雲も、また同じことだ。

己が、己が思うところの己であるという核たる中心。

あの時己を捕まえた力は、その核に触れたのだ。そのことだけは解っている。

その力はザハトの胸の内に吹き込み、重要な変化を起こしたのだ。今度ははっきりと解った。何かが自分を導いているのだと感じた。

——アルシャンキの御加護があったのやも知れん。

今ではそう思う。ケザシュが見た町の方向には、その中心にはアルシャンキの大神殿ディアマシュがある。

父の実家も、母の王家も長くアルシャンキを奉祀ほうしする一族である。

その一員として特別の加護が与えられたのか…  
…。

人智を越えた領域について推測するのは、もはや妄想するのと変わらない。

自己の経験とそこから得られる体験内容を判断す

るといふ行為にも、余分な情報、無自覚の前提が混入しているに違いないのだ。

だからといって行者の如く、神秘を認めつつも、それを知る事は出来ないと断じるのも愚かと思う。

現実的な立場に立って考えれば、何が何やらまったく解らないと言うのが正しいのだろう。

いずれにしるケザシュの協力を失ったことだけは確かだ。しかし、これからも自分は進まねばならない。

目的をすいこう遂行するべくまいしん邁進せねばならない。

差し当たってはダーシュをどうするかだ。種は蒔いた。蒔いたが、どういう芽が出るかはまだ予測しがたい部分がある。

そしてみすみす逃がしたヒスメネスについてもよく考えねばならない。

あの男は切れ者だ。何を考えているのか、何を目的としているのかをしっかりと捕まえておく必要がある。

——ヒスメネスには真実を知る機会が与えられるのだろうか？

ふとそんなことを思った。自分には機会が与えられた。それもまたアルシャンキの加護であるのかも知れない。

王には祭祀長としての役割がある。ディアマシュ

において祭儀を取り仕切る仕事があるのだ。

ここから先は未知の領域だ。

だがもしもダーシュを殺し、名実共に王となった  
<sup>あかつき</sup>暁には、それでも、それでもアルシャンキには最大  
の祭儀を<sup>ささ</sup>奉げよう。

ザハトはそう心に誓った。

## 第十五章 砂漠の逃避行

砂漠は寒暖の差が激しく、昼の暑さに比べて夜は気温が急激に下がる。

そのため砂漠を旅する者は昼夜を逆転させる。つまり夜に進み、昼に休息を取るのだ。

アイオナも当然そのことを知っている。始めの内は苦しいし、何よりも暑いので休みを取ろうとしてもなかなか寝つかれないのだが、すぐに慣れる。疲労がそんな問題を解決してくれるのだ。

ただ、全ての砂漠がそうというわけでもないらしい。

アウラシールの東には恐ろしい流砂の砂漠があると聞く。そこでは流砂を避けるために敢えて暑い昼間に旅をするのだという。

夜だと足元が見えず、砂に飲みこまれるからだ。

「お前は休め」

休息を取る時になると、ダーシュは一人で天幕を張り、横になることが出来る場所を作った。

「王子なのにしっかりしてるのね」

「それなりに苦労してるからな」

「いったい何があったの？」

「母の弟が謀反むほんを起こしたのさ。それが今の王だ。

いや先の王と呼ぶべきかな？ 今は……ザハトが王



だろう」

アイオナは不思議に思った。母の弟と言うことは、先程話に出ていたダナン族ではないのか？ その出身になるはずだ。

となるとホイヤムを行かせたのはどういうことなのか。大丈夫なのだろうか。

「それだと謀反を起こした叔父さんは、ダナン族の出身にならない？」

「そうだ。叔父は元々はダナン族の人間だった」

「ちょっと……ホイヤムは大丈夫なの？」

「アンケヌを追放された俺たちが身を寄せたのはダナン族の所だ。今では叔父とダナン族は完全に切れている。問題無い」

そういう問題なのだろうか。アイオナにはよく理解出来なかった。

「そんなに簡単に割り切れるものなの？」

いまいち納得しきれないものを抱えながらアイオナは腰を下ろした。

「お前はローゼンディア人だから解らないかも知れないが、俺たちには俺たちなりの考え方があってな。一族の中でも敵味方が入り乱れているものなのさ」

ダーシュは作業する手を休めた。何故かは判らないがジャヌハを摺<sup>す</sup>り下ろしている。

ジャヌハは香辛料として使われる他、魔<sup>ま</sup>除<sup>よ</sup>けにも使用される植物だ。香草の一種だが何か料理でもするのだろうか。その割には火の用意をしてないが。

というか蠍退治はしないのだろうか。アイオナは気になって仕方がない。

「蠍退治はしないの？」

「今準備してるじゃないか」

ダーシュは摺り下ろしたジャヌハを小さな水袋に入れて、そこに水を注ぎ入れて振り始めた。混ぜ合わせているのだ。

「では行ってくる」

外に出たダーシュは天幕の周りを注意深く調べて回った。

蠍の巣穴を見付けると持っていた水袋から水を流しこんでいく。蠍が慌てて出て来たところを叩き潰して始末するのだ。

蠍退治が終わるとダーシュは天幕の中に戻って来た。

「さっきの話だが心配するな。ホイヤムは無事だ。俺たちよりも遥かに安全だ」

「それはそうだけど……」

やはり納得できない。どうも安全に対する判断の仕方に疑問が残る。

文化の違いというやつだろうがホイヤムの身が心

配だ。

「これを体に塗れ」

そんな風に考えていると蠍退治に使っていた水袋を突き出された。摺り下ろしたジャヌハを溶いた水は、結構臭いがきつい。

「蠍<sup>さそりよ</sup>避けになる」

アイオナは大喜びで受け取った。これで蠍の恐怖から逃れられるのならば<sup>やす</sup>易いものだ。

「俺は外に出ていよう。体の柔らかい所には塗るな。滲<sup>し</sup>みるからな」

ダーシュが出ている間に肩や首筋、腕や足などおおよそ塗ることが出来る場所にはすべてこの水を塗った。お蔭で臭いがする身になってしまったが構わない。そんなことを気にしている場合ではない。

「塗ったか？ では寝ろ」

「いちいち指図するのね」

「夫だからな」

ダーシュは軽く笑い、残った水を自分に塗りつけた後、アイオナの寝床回りに軽く散らした。

「夜になったら出発する。それまでは体力を養っておけ」

「言われなくてもそうするわよ」

アイオナは目の上に布を折って被せ、横になった。暑い、乾燥しているためそれほど苦しくはな

い。アンケヌに来る前もこうして砂漠を越えてきたのだ。楽とは言わないが、堪<sup>た</sup>えられないわけがない。

でもこんな蠍避けはやったことがなかったな…  
…。

ジャヌハの溶き水を体に塗るなんて想像したこと  
もなかった。

隊商は大人数だったし、見張りを受け持つ護衛  
たちも居た。父や自分は立派な天幕の中で安心して眠  
ることが出来たのだ。

あの護衛の者達もこうやって蠍を退治してから眠  
りに就いていたのだろう。

旅の間はそれなりに苦勞してると思っていたが、  
今に比べれば何と安楽な旅だったことか。

そう思いつつアイオナは眠りに落ちていった。

起こされたのは日が暮れてすぐだった。

まだ大気には暑さが残っているが、これくらいが  
いいのだ。完全に闇が落ちると進む方向を間違える  
恐れがある。

視界はほぼ一面砂礫<sup>されき</sup>だけだ。所々に生きているの  
か死んでいるのか判らない草が生えている。

砂漠と言っても実態は荒れ地に近いのだ。荒野と  
言ってもいい。

しかし南大陸のマゴラや、ここから遙か東の、ハ

ルジット高原だかトゥライの付近だかには、砂だけの砂漠があると聞く。

そこはとても美しく、そしてとても恐ろしい場所だという。

一面の砂。想像するだけで美しいと感じるが、何が恐ろしいのだろうか？

だがそこはトゥライ語でガウィダーン砂漠と呼ばれているらしい。

それは『二度とは戻れぬ』という意味であり、ハルジット語では、そこはムワナティカ砂漠と呼ばれている。こちらは『無限なる死』という意味だそう。

アイオナはその事を知って以来、その砂漠を見たいとは思おうが、行ってみたいとは思わなくなった。

今居る荒野の方がまだましなのだろうか。

風が少し吹いていてアイオナの髪を揺らしている。

目を遠くに向けると、夕日の残した輝きがまだ残っているのが見えた。

「急げ。出発するぞ」

ダーシュは言い、てきぱきと片づけを始めた。実に手際がいい。手慣れた動作である。

「慣れてるのね」

「それなりに苦労してると言っただろう？ 追放された王族が安楽に暮らしていけると思っていたのか？」

「でもホイヤムだっているじゃない」

「あいつはな……」

ダーシュは苦笑した。

「あいつは兄上が<sup>いのち</sup>生命を助けたのさ。そして自由の身分を与えた。あいつが俺に仕えてくれるのは兄上の遺言だからだ。王族だから仕えているわけじゃない」

「お兄さんがいたの？」

「ああ。殺された」

何でもない口調だったが、アイオナは衝撃を受けた。

「……ごめんなさい。<sup>ぶしつけ</sup>不躰な発言だったわ」

「構わんさ」

気にした風もなく、ダーシュは天幕を<sup>まと</sup>纏めて<sup>ひも</sup>紐で縛った。

「行こう。うまく行ければ明後日にはオアシスに着けるはずだ」

アイオナは<sup>うなず</sup>頷いた。

月の砂漠を進んだ。<sup>らくだ</sup>駱駝の背に揺られて。

出来るだけ急いだ。でないとザハトの手が伸びてくるかも知れないからだ。

目指すディブロスの町まではかなりの距離がある。まだアンケヌの峡谷を抜けて、エルメサ砂漠の縁<sup>ふち</sup>を南に下り始めた辺りだろう。

果たして無事に辿<sup>たど</sup>り着けるのか、アイオナには判らなかった。

## 第十六章 炎

ザハトは権力を握ることに余念がない。まずは将を失い動揺しているゴーサの軍団を手早く纏めた。ギドウの葬儀を取り仕切り、軍団の半数以上をゴーサへと帰国させた。

上手くやらなければ大混乱が生ずる問題だっただけに、これにはヒスメネスも驚いた。

しかも一部は自らの私兵として再雇傭し、精鋭部隊まで編制してしまったようだ。

更にザハトはアンケヌ陥落以来、手持ち無沙汰になっていた王宮の兵たち、家臣たちを呼び戻した。

その上で自らの出自を明かした。

町はちょっとした騒ぎになった。無論それは、最近の騒々しさの中では大したものではないが、それでも人々にはそれなりの驚きをもって迎えられた。

それはザハトは先の王家の出身だという話だった。叛乱により追放された王族なのだという話だ。

十年ほど前に確かに王家の中での内紛はあった。それにより今の王が即位したのだが、その時の争いは市内にまで拡がるほどのものではなかったので、王族でも貴族でもない町の多くの住人にとっては余り関係ない話だったのだ。

もちろんそれは情報統制の結果でもある。



実際の王位篡奪でどれだけの血が流れたのか、何が行なわれたのか。

それらの事実を住民達にそのまま知られて良い事などあるはずがない。

ゆえに真実を隠蔽したり、嘘を市内に流したりといった事が行なわれたのは間違いないのだ。

ザハトの話は事実だろうと思う。少なくともダーシュが真実、王子なのは間違いない。

屋敷に居た時に、どこかで見たことがある顔だと思っていたのだが、それも当然の話だ。旦那様に連れられてアンケヌを訪れた時に、一度見たことがあるのだから。

そのことに気付いた時にヒスメネスは苦笑した。何のことはない。今回のアンケヌ陥落は先の王家による奪還でしかなかったわけだ。初めてザハトが屋敷を訪れた時、話した内容は、まさにそのことを裏付けている。

とはいえ大まかな事情は、つまりダーシュとザハトの関係や、彼らが何者であるのかなどということは、この屋敷にまだダーシュが居た頃から調べはついていた。

叛乱によって王位を奪った王は、ダーシュの叔父に当たる人物だったはずだ。

『剣によって得たものは、剣によって失われる』と

いう。

これは戦神イスターリスの箴言<sup>しんげん</sup>だが、まさしくそうなったわけだった。

尤も<sup>もっと</sup>誰が王位に就<sup>つ</sup>こうが、そのこと自体には興味が無い。

交易商人にとっては血筋だの、正統性だのといったことはどうでも良い話であり、問題になるのはただ一つ、安全に商売が出来るかどうか？ ということだけだ。

その点、ザハトは有能な支配者であるようだった。

市民の怒りをハダクとその一党に向けさせ、ゴーサの軍団を速やかに帰国させた。

先王に仕えていた家臣たちを呼び戻し、その多くを新たに召し抱えた。

中でも最後まで篡奪者であった現王に味方せず、奴隷に落とされたり、追放された者達には極めて厚い恩情を示しているという。

逆に先王を弑逆した叛乱に乗じ、栄達<sup>えいたつ</sup>を得ていた者たちは一人残らず殺されたという。

アウラシールではよくあることではあるが<sup>すさま</sup>凄じいと思う。

ザハトは徹底して復讐<sup>ふくしゅう</sup>したのだ。

大人達は獣の餌にされたり巨獣に踏み殺された

り、燃える泥を塗りつけられて火を放たれたという。

その他にも色々な方法で処刑が行なわれたようだが、噂と事実が混在しており、正確なところは判らない。知りたいとも思わない。

とにかく槍や刀を使った単純な処刑を選ばず、わざわざそうした残酷な方法を選んだのだ。

老人や病人たち、赤子も引き出されて鉄の板に並べられたという。

鉄の板に並べるというのは、ただ鉄板上に<sup>すわ</sup>坐らせておくだけのことだが、アウラシールでは、今の時季によく使われる処刑方法だ。

強烈な日射しの下では、それは焼き殺すことに相当する。

皆、昼までに死んだと聞くが、熱さに耐えかねて転げ出た母親は、赤子ごと槍で突き殺された上に鉄板の上へ蹴り戻されたという。

子供たちなどは、通常は奴隷にするのが普通なのだが、ザハトは一人残らず殺してしまった。

一族、係累、<sup>ことごと</sup>悉く探し出して殺した。今も探し続けている。

逆に最後まで現王に味方せず、苦しんだ者達もまた、同じように徹底的に搜索されている。

生きている者は皆、名誉を回復され、以前の立場

に戻れる者は戻ったと聞くし、奴隷として他の都市に売られた者達まで全て買い戻すつもりようだ。

叛乱で殺された者や、不遇を託<sup>かこ</sup>って死んだ者達はその骨までが捜されている。

彼らは名誉ある者達であり、それに応じた葬送をもって、後日正式に埋葬し直すのだという。

今も市内のゴミ捨て場や共同墓地などを、多数の者達を動員して骨を搜索させているのだ。

ほとんど狂気とも言える命令が下されているのだった。

それだけに、その胸に抱かれていた怨念の深さは、察するに余りあるものがある。

ザハトは処刑を自ら指揮し、観覧し、酒杯を片手に神の名を讃えていたという。

余りに酸鼻を極める光景に、見物人達も声も発せられず、ただ殺されていく者達の悲鳴と哀訴、怨みの叫びが刑場に響いていたとか。

元々罪人の処刑などヒスメネスは見たいとは思わない。悪趣味だと思う。

だから今回のことも伝聞であり、自分の目で見たわけではない。

しかしアウラシールの風習を考えても、今回は度を過ぎていると感じざるを得ない。

<sup>ふくしゅう</sup>

復讐は正義である。これはローゼンディアでも変

わらない。

ただしアウラシールではそれを示すことが、社会的な基本条件として要請されるのだ。

だからザハトもそれを実行したに過ぎないのだろう。

社会規範上は、そういうことになる。

理知的で冷静、野心があり、自己を<sup>たの</sup>恃むところ<sup>すこぶ</sup>頗る厚い天才肌の政治家で、感傷的な復讐心に左右されるような人間ではない。

ヒスメネスはザハトのことをそう思っていたが、見誤っていたかも知れない。

あの伶俐な外見の裏には燃え盛る激情が隠れていたのだ。

自分は今、獅子の背後に立っているのかも知れないとヒスメネスは思った。

これは危険な状態である。だが危険は商売には付き物だ。

というか危険をどう選択するか？ どのように危険を取るか？ ということが商売だと言っても過言ではない。

商売とは、煎じ詰めれば危険の管理と同じことなのだ。

これを教えてくれたのはアイオナの父、ファナウス・ディアス・メルサリス。商会の長でありヒスメ

ネスが敬愛する旦那様だ。

これは座学ではまったく解らなかったが、実際に仕事に関わるようになると、恐ろしいくらい正しいのだと思い知らされた。何度も思い知らされた。そのための授業料は高かったが、だからこそ今の自分がある。

商売は利益を取るものではなく、危険を取るものなのだ。

なんとなれば利益も損害も、危険の中に同居しているものだからだ。

安全な商売などというものは無い。もし安全だと思っていたならば、それは危険に気付けていない状態であり、逆に極めて危険だ。

——もしザハトではなくダーシュと手を組んでいたら、どうなっていただろうか？

そう自問してみた。

おそらくそれは無いだろうと思う。

何故か。

あの時の情勢では、ザハトに<sup>くみ</sup>与した方が圧倒的に利益が大きかったから？

違う。ダーシュに味方をする<sup>こうむ</sup>ことで被る危険の程度が予測不能だったからだ。

危険は常に管理可能になるように努めねばならない。だからザハトに付いたのだ。

そしてその目算<sup>もくさん</sup>は正しかったのだろうと思う。今のアンケヌの状態を見ていると、そう判断せざるを得ない。

アンケヌは完全に安定を取り戻していた。それはザハトの迅速な行動によるものだ。

尤も王宮の宝物庫はかなりの損害を受けているだろう。ゴーサの軍団への支払いや、被害を受けた市民の救済などで出費<sup>かさ</sup>が量<sup>もつと</sup>んだはずだ。

「だからギドウに死んでもらったのさ。ゴーサとの契約の時に、ザハトは気前良すぎたからな。おそらくあの時にもう、やがてギドウを排除することが決まっていたのだろう」

そう言うケザシュの言葉は、二つのことを意味している。

一つはゴーサの傭兵団との契約は、事実上ザハトとギドウとの間で取り交わされたのだろうということ。

もう一つはザハトはギドウのみに、特別な手当てを出すという約束をしていたのだということだ。

つまり軍団への支払いの額と、ギドウとした約束の額とは等しくない。だからギドウが死んでしまえば、支払いは一気に軽くなるということだ。

何故そんなことをするのかと言え、直<sup>じか</sup>に軍団に契約を持っていくには都合の悪い理由があるか、ま

たは軍団に対してより大きな影響力を及ぼしたかったかだ。

真っ当に契約を結ぼうとすれば必要経費は大きくなるし、そのことを多くの人間に知られもしてしまうだろう。だから独自の人脈を利用して、秘密裏に軍団の一部を雇用した方が良いと考えたのではないか。その見返りとして、ギドウに<sup>わいろ</sup>賄賂を<sup>ていじ</sup>呈示したのではないだろうか。

巨額の賄賂が入るとなれば乗ってくるだろうし、実際の行動においても真剣さが変わってくるだろう。何しろ自己の利益に直結してくるからだ。

そしてそのことは軍団全体には知られてはならない。これも当然のことだ。

おそらく、ザハトは兵を集める段階からかなりの注意をし、かつ目的を定めていたのだろう。

「ダーシュは反対だったかな」

「アンケヌの市民を巻き込みたくはない、ですか？」

「そうだ。奴は王族としての立場にあまり重要さを感じてはいなかった。王家の再興を熱望していたのはザハトだ。<sup>もっと</sup>尤も今では奴が王になってしまったかな」

ケザシュは含み笑いをした。

「ええ。あなたの協力があった<sup>おかげ</sup>御蔭ですね？」



「どうかな？ 奴自身の才覚によるところも大きいと思うが」

「でも御自分の助力も否定なさらない」

ケザシュは声を立てて笑った。

「まったくザハトといいお前といい、頭の切れる者が続くことよ」

「それはどうも。で、あなたがここにいる理由はなんなのですか？」

「さあな。それを考えるのはお前の問題であって俺の問題ではない」

「あなた一人をただ食べさせておくほどの余裕は、この屋敷には無いのですが」

「ほう。ならば俺はこの屋敷を出ようか。お前が俺を必要とする時に、現れるとしよう」

ケザシュは上体を起こした。もはや定位置となっている長椅子の上からである。

「私が必要とする時？」

「そうだ」

ケザシュは怪しく光る瞳をヒスメネスに向けた。

「お前の望みを言うがいい。俺はそれを手助けしようではないか」

「見返りは何ですか？」

「それを知ってどうする？」

「<sup>はぐ</sup>逸らかさないで下さい。<sup>ただ</sup>無料、ということはない

のでしょう？」

つまらない質問だと思いつつ、敢えて聞いた。こういう場合、この手の質問はお約束のようなものだからだ。

「一つだけ教えておいてやろう」

ケザシュは人差し指を立てた。

「一度だけ機会が与えられるだろう。それを逃さぬことだな」

「……どういう意味ですか？」

「答える必要は無い」

ケザシュは立ち上がった。

「用があったら呼べ」

「待って下さい。あなたは私を手助けすると仰るおっしゃのですね？ ならば話は別です。このままおとど逗まり下さって結構です」

「現金な奴だ」

「商人ですから」

「なるほどな。で、お前は何を望む？ この屋敷か？ それともこのアンケヌか？」

「私がアンケヌを望むと言うとお思いですか？」

「思わんさ。お前は頭が切れる。用心深い。俺とザハトのつな繋がりを考え、そのようなことは言わぬだろう。だがそれがお前の限界でもある」

「……私の限界？」

その言葉にヒスメネスは興味そそられた。

「どういう意味です？」

「お前の器はこのような店で使われているものではない、ということさ。では何故この店に居るのか…お前はそれを自分に問うてみたことはあるのか？」

「……」

またこの話だと思った。ケザシュが、というのではない。

今までにいろいろな人間にこの話をされてきた。引き抜きを持ちかけられたことも一度ではない。

そんなに自分はこの店に不似合いに見えるのだろうかと思う。もしそうだとしたら、そのことに軽いいきどお憤りを感じもする。

「ありませんね。その内気が向いたら自分の店を始めるかも知れませんが」

「ほう」

「今は現状に満足しています。旦那様はよくして下さいますし、大きな仕事を任されてもおります。それに見合うだけのものを支払っていただいてもいます」

「計算高い商人かと思いきや、存外、欲が無いな」

「欲はありますよ。ただ道理を知っているだけです」

道理。通じぬだろうと思いつつそう口にする。

この言葉にはとても大きな意味が込められている。けれどそれを正確に表すためには非常に多くの説明が必要になる。そして説明したとしても、ほとんどの相手には理解されないのだ。

だから一言で済ませる。

「物事には道理というものがあるのですよ。それに逆らってははいけません」

魚が水の中を泳ぎ、鳥が風を読むように生きねばならない。

不自然なものは破綻する。

「何故、今以上を望もうとしないのだ？」

ケザシュは興味を持ったようだった。再び長椅子に腰を下ろすと、ごろりと横になった。

「欲するならば正しい時に、正しい手順でなければならぬということですよ。でなければ身を滅ぼします」

「なるほどすべて計算<sup>っ</sup>尽くというわけか」

「はいませんか？」

「いや、人が誰もお前のように考えたらさぞや俺の仕事はやりにくくなるだろうと思ったまでだ」

そう言う割にはケザシュは楽しげである。会話を楽しんでいる風である。

「ダーシュと逃げた女が、ここでのお前の直接の主

人になるのかな？」

突然、アイオナに話が及んだ。

「あの女はお前とは違うようだが……お前のように物事を深く考える<sup>たち</sup>質ではないようだな」

「さあ……どうでしょうか。ああ見えてお嬢さんは道理が解った方ですよ。無茶はなさっても無道ではありません。ところで、あなたはどこでお嬢さんにお会いになったのです？ あなたがいらした時には、すでにダーシュと共に屋敷を逃げ出していたはずですが」

質問をしながらヒスメネスは不安を感じていた。

おそらくケザシュはただの一度も、アイオナには会っていない。言葉を交わしたこともなければ、姿を見たことすらないはずだ。実際には、という意味でだが。

「お前はどこまで俺を試そうとするのだ」

うんざりしたような口調だが、やはりケザシュは楽しんでいるようだった。

「まあいい。奴らの<sup>いのち</sup>生命も風前の<sup>ともしび</sup>灯火だ。今更考えるまでもない」

「ちょっと待って下さい。奴らということは、お嬢さんの<sup>いのち</sup>生命に危険が迫っているのですか？ <sup>ガズー</sup>暗殺者はダーシュだけを狙うのではないのですか？」

「お前、奴らを狙うのが<sup>ガズー</sup>暗殺者だけだと思っている

のか？」

不思議そうにケザシュは聞いてきた。

「ザハトが放っておくわけがあるまい。今頃、始末するための兵が出されたはずだ」

今度はヒスメネスが立ち上がった。ケザシュがおもしろそうに見上げてくる。

「今からでは間に合わんぞ。それに二人が向かった先をお前が特定出来るのか？」

「それはおそらくディブロスの町です。そこからマンテッサへと船で向かうのではないのでしょうか」

「ほう。なるほど父親の所を目指すわけか」

マンテッサはカプリア地方にあるローゼンディアの沿岸都市であり、アイオナの父、ファナウス・メルサリスの居住する町である。当然メルサリス商店の本店がある。

しかし一体どこまでこの男は知っているのか。調べているのか。ヒスメネスは空恐ろしく感じた。

「ディブロスに向かうと判っていれば、途中のオアシスをつな繋いでいくことが予想されます。北回りのエルメサ経由か、南回りでザナカンダを通るか……」

言いながらヒスメネスは、これは表か裏かの硬貨投げに賭けるような物だと思った。

二人がどちらの道を選ぶかなど、そう簡単に推測できるはずもない。

現実的な手段と言えば、足の速い騎馬を先行させて情報収拾に当たらせることだが、当然ダーシュはその対策も講じているだろう。

だが、だからといってお嬢さんをそのまま放置して置くことなど出来はしない。今の状態は余りに危険である。

「……大急ぎで後を追えば、ザハトの追っ手よりは先に接触出来るはずですよ」

自分でも苦し紛れだと感じつつそう口にすると、ケザシュは鼻先で嗤<sup>わら</sup>った。

「ザハトもお前と同じように考えるとは思わないのか？」

当然の指摘でもあり、痛いところだった。ヒスメネスは眉根を寄せた。

「……」

「どうしようもないな」

ケザシュは起き上がって坐<sup>すわ</sup>り直し、指を組んだ。相変わらず楽しげである。

「俺なら追いつける」

「何？」

「俺なら追いつけると言ったのだ。今からでもおそろく間に合う」

ヒスメネスは驚いた。驚愕したと言っていい。何年ぶりであろうか。

これほど驚いたのは久しぶりである。ケザシュの言葉に驚き、またその言葉を真面目に受け取っている自分に驚いていた。

「本当、ですか？」

「俺は決して嘘は言わぬ」

<sup>すごみ</sup>凄味のある声で<sup>つぶや</sup>呟くと、ケザシュも立ち上がった。

「お前を含め、連れて行けるのは五人までだ。それだけだったら運ぶことができる」

「あなたは……」

「さてな。そんなことはどうでもいい」

薄笑いを浮かべたままケザシュは歩き出した。先に外に出て待つつもりなのだろう。

「ゆくのなら急げ。時は待ってはくれぬぞ」

「一体どうやって……」

部屋を出る直前ケザシュは振り返った。

「空気の馬という秘術がある。ローゼンディア人のお前に見せてくれよう」



## 第十七章 残党

ベラルのオアシスに着いたのは夜中を過ぎた頃だった。

砂漠の旅人は昼夜逆転が基本のため、近くで日が昇るのを待ってからオアシスに入る。アイオナたちもそうした。とはいえオアシスの活動が本格的に始まるのは夕方からなのだが。

アイオナにとって隊商宿ではない宿を取るのは久々だった。

旅行といえば父について行く事がほとんどなので、いつも決まって隊商宿なのだ。

隊商宿というのは隊商を相手にした専門の宿で、ローゼンディアではハヴィータ、アウラシールではハビトという。

通常は二階建てだがアウラシールでは一階建てのものも多い。

二階建ての場合は一階が荷物や家畜にあてられ、二階が宿泊施設になっている。

どちらにしても特別な設計でない限りは浴場は一階に作られる。

隊商宿は個人客を相手にしないわけではないが、たいてい大抵は隊商で埋まってしまっているので、個人客は一般の宿に向かう事になる。

アイオナもダーシュもその辺は辨<sup>わきま</sup>えているので最初から普通の宿を探した。

宿が決まると駱駝の世話を頼んでから二人は町に出た。

「体を拭きたくはないか？」

ダーシュが聞いてきた。宿の浴場を使えるのは夕方になってからだ。

それまでに一度汗と砂埃を落として落としておくかという心遣いだった。

ただし浴場とは言っても、ローゼンディア人の感覚からはとてもそうとは言えないようなものだろうと予想できた。

アイオナの見てきた限りではあるが、アウラシールで宿屋の浴場と言え、そもそも浴槽が無い場合がほとんどなのだ。

問題外である。浴槽に浸かりたければ公衆浴場<sup>カラシュハル</sup>に行けということなのだろうが全く信じられない。その感性を疑ってしまう。

公衆浴場はここら辺りではハルサブルと言うらしい。名前が違えば中身も違うということで、ローゼンディアのものとは全く違う。

やはり基本的に浴槽は無く、蒸し風呂なのだが、まれに浴槽がある公衆浴場<sup>ハルサブル</sup>もある。

だがそういう所は大抵恐ろしく不潔で、とても浴

槽に入る気にはならないのだ。

結局、宿屋の浴場だろうが、<sup>ハルサプル</sup>公衆浴場だろうが変わりなく、どうせ入るならばローゼンディア式の公<sup>カラ</sup>衆浴場<sup>シュハル</sup>が理想だが、アンケヌのような大都市ならばともかく、ただのオアシスであるベラルにそんなものがあるとは思えないし、あってもきちんと管理されているか信用できないのだ。それにそうした浴場を探す時間もない。

「いいわよ。宿屋の浴場じゃ入った気にならないし、飲み水の残りで拭くから。それに余分な買物はしたくないわ」

アイオナはすげなくそう答えた。

男なら共同の水場で体を拭くことが出来る。しかしアイオナはそうはいかない。

そこまで考えたであろうダーシュの気遣いは無駄になった。

ちょっと悪いかなという気もしたが、オアシスとはいえ砂漠の町である。水は無料ではない。

「立派な心がけだが無理をすることは無い。そんなことまで吝嗇<sup>けち</sup>っていては心の方が先に参ってしまうぞ」

「そんなことはないわよ。あなたは商人の<sup>たくま</sup>逞しさを知らないだけ」

「店は本当にお前が継ぐのか？」

「ええ。父様がそうと決めれば。多分そうなるでしょうね」

「ヒスメネスはどうなる？」

「彼がこのまま働いてくれるのなら、わたしとしては大助かりなのよね。けどやがては自前の店を持つことになるでしょうね」

「城に出入りする商人としてな」

皮肉げにダーシュは言った。

「気に入らないの？」

「お前にとってはどうだか知らんが、俺にとってはもはや敵だ。気に入るわけがない」

アイオナは口を<sup>つぐ</sup>噤んだ。難しいところだと思った。

ヒスメネスがザハトと結んだであろうことは何となく判る。<sup>しょうこ</sup>証拠を見ていないのではっきりと断じることが出来ないが、まず間違いない。損得勘定をすれば当然そうなって<sup>しか</sup>然るべきだ。

ひょっとすると自分は逃げる必要は無かったのかも知れない。その辺の話も、すでにザハトとヒスメネスの間で約束が交わされているのかも知れない。大いにあり得ることだと思う。

だが、ダーシュはどうなる？

おそらく、いや間違いなく殺されるだろう。

ダーシュにとっては逃げるという以外に手がな

い。待てよ？ となるとわたしが随ついてきたのは  
ダーシュにとってのみ一方的な利益になるのではない  
か？

ダーシュはそこまで考えていたのだろうか。

いや、おそらく考えてはいない。この人はそうい  
う人ではない。

本当にわたしの生命いのちが危険になると思い、助けよ  
うとしてくれたのだろう。

アイオナはダーシュを見上げた。ここは水場の隣  
の休憩所である。お互いに咽のどを潤した後、近間の小  
屋で体を拭き、今は風にあたりながら休憩をしてい  
るところだった。

ときおり折風が軽く吹いてくる。砂を含んだ暑く乾燥し  
た風だ。日射しは強く、休憩所の屋根の下と、通り  
とではまるで別の世界に感じられる。

ここでは太陽の光はほとんど暴力に等しく、そこ  
から逃れた場所こそが生活の場なのだ。それは強烈  
な黒と白とに分けられた世界である。

ダーシュは静かな顔をしていた。とても生命いのちを狙  
われている者とは思えないような表情である。野心  
や闘争心、王位をめぐる争いなどとは無縁な人の顔  
をしている。

だからといって市井しせいに埋もれているような顔でも  
ない。その面には輝きのような何かがある。上手く

は言えないが、その輝きに秘められた運命のようなものをアイオナは感じた。

不意に<sup>ひらめ</sup>閃くものがあった。

——この人は、王になる。

思った途端、アイオナの<sup>からだ</sup>身体を<sup>おそけ</sup>怖気のようなものが走り抜けた。

「どうした？」

「……何でもないわ」

「<sup>ふる</sup>顫えていたのでな。熱でも出たかと思った」

「馬鹿にしないで。こう見えても旅には慣れているの」

「すまん。<sup>さわ</sup>気に障ったなら謝る」

「その必要は無いわ。怒っているわけじゃないから」

「ならせめて口調を改めてくれるか。なんだか責められているような気持ちになる」

ダーシュの<sup>くちもと</sup>口許に笑みが浮かび、それを見てアイオナは安心した。二人の距離が縮まったように感じた。

「あなたはヒスメネスのことを心配してるようだけれど、彼がわたしたちの敵に回るはずはないわ。何か考えがあつてのことなのよ」

「お前の敵には回らんだろうが、俺の敵になることには<sup>ちゅうちょ</sup>躊躇はすまい。ザハトと組んだ方が得だから

な」

「それなんだけど、本当にザハトはあなたを殺そうとしてるわけ？ 間違いなんじゃないかしら？」

だとしたら、ここまで逃げてきたのはすべて茶番だということになってしまう。

もちろんアイオナはそうは思っていない。一度しか会っていないが、あの男には用心しなければならないと思う。商人の勘である。

「野心的な奴ではあったが、まさか俺を殺す気になるとはな」

「間違いではないの？」

「間違いないな。でなければギドウを殺したのが俺だなどと、そんな話が出てくるはずがない」

「それなんだけど、その嘘を曝<sup>あば</sup>いてしまえば事態は好転するんじゃないかしら？」

「無理だな」

ダーシュは言い切った。

「おそらくギドウを殺したのはケザシュだ」

「誰よそれ？」

「ザハトの協力者だ」

「何者なの？」

「判らない」

ダーシュは首を振った。

「最も用心せねばならない男であることは確かだ。」

あいつはどこか得体が知れない」

「そいつがわたしたちを追いかけてくるってわけ？」

「さてな。そこまでは判らん。ザハトも馬鹿ではないから、そう時を置かずに俺たちの目的地を探り出すだろう。ヒスメネスに聞くという手もあるしな」

「ヒスメネスが話すかしら？」

「お前の<sup>いのち</sup>生命を助けるという交換条件ならどうだ？」

「それなら大いにありうるわね」

アイオナは<sup>うなず</sup>頷いた。

「だけど、その約束をザハトがきちんと守るという<sup>ほしょう</sup>保証はあるの？」

「契約を立てればいい」

「そうね。でもザハトは王であり、軍隊を持っているわけでしょう？ こっちは外国の商人よ。約束を<sup>どたんば</sup>土壇場で<sup>ほご</sup>反故にされたって、<sup>ふくしゅう</sup>復讐出来るとは限らないわ」

「ふむ」

「だからもしヒスメネスがその交換条件に応じる場合、必ず自分と店と、そしてわたしの安全が保証された状況でしか動かないはずよ」

「続けてくれ」

ダーシュは興味を持ったようだった。



「ところがそのためにはザハトの兵を使えない状況にする必要があるわ。けれど現状、そのための方策を採用することは難しいのよ」

兵という軍事的裏付けがあるザハトは、いつでも約束を反故に出来る状況にあるということだ。

ダーシュを押しえた後で、アイオナもヒスメネスも皆殺しにしてしまうことだってありうる。決して行きすぎた想像ではない。

となるとこちらも同程度の軍事的裏付けを持ってくるか、または強力な第三者の許<sup>もと</sup>で契約を結ぶしかない。

だが実際問題としてそれは不可能である。そんなことをしている間に物事は終わってしまう。時間こそが最大の問題なのだ。

「つまり、ヒスメネスがその交換条件をザハトに持ちかけている可能性は低いということだな？」

「話だけならしているかも知れないわ。けど、信用してはいないでしょうね」

「ふむ……」

ダーシュは頷いた。考えているようだった。

「だからわたしたちとしてはひたすら逃げればいいわけよ。首尾よくディブロスの町に入ってしまうえばザハトも手出し出来ないわ」

ディブロスの町はローゼンディアだからだ。いく

ら大都市アンケヌの支配者とはいえ、無理はできないのだ。

「なるほどな。お前は本当に頭がいい」

「頭だって使うわ。これは取り引きなのよ」

言ってしまうってから、しまったと思った。誉められたのを良いことに調子に乗り過ぎたと思った。素直に喜んでおけば良かったのだ。

あくまで自分たちの結婚は取り引き、偽装の結婚なのだ――。

言葉に出すたびに何故かやるせない気持ちになる。しかもそれが段々大きくなる。

「……そうだな」

案の定、ダーシュは興<sup>きょう</sup>を削<sup>そ</sup>がれたような、少し寂しいような顔を見せた。

「行くか。今日中に出発したい。大丈夫か？」

「もちろん大丈夫よ」

返事をしながら、何か気の利いたことを言おうと思った。

だが考えている内にその機会は去ってしまった。男達の一団が休憩所に入ってきて、ダーシュの注意がそちらに向いたのだ。

「こいつは驚いた。ダーシュじゃねえか。なんでこんなところに居やがるんだ？」

休憩所に入ってきた男たちの内の一人が、驚いた

ようにそう言った。アイオナの見たところ、<sup>にんそうふう</sup>人相風  
<sup>てい</sup>体、あまりよろしくない。

「ワディか」

ダーシュには別段嬉しそうな様子は見えなかつた。

「お前が生きてやがったとはな」

憎々しげに吐き捨て、ワディはダーシュを<sup>にら</sup>睥んでいる。知り合いではあるが、友人ではなさそうだった。

「<sup>あいにく</sup>生憎と<sup>しぶと</sup>仕太いんでな。お前も元気そうじゃないか。ハダクが殺された時、お前はどこに居たん  
だ？」

あからさまな<sup>ちょうろう</sup>嘲弄にワディの顔に怒気が差した。

「貴様……」

「ここはオアシスだぞ。やめておくんだな」

アウラシールでは一般にオアシス内での戦闘行為は禁止されている。それはかなり厳しく守られている規律であり、従わない場合には重い罰則が適用される。

とはいえ砂漠の都市国家はどこも大概がオアシスなので、この規律は国家と言えるほどには発達していないか、または共同の集落として使われているオアシスに限った伝統であるのだが。

ワディの、剣の柄に伸ばしかけた指が、<sup>もが</sup>藻掻くよ

うに動いている。ダーシュはつまらなそうにそれを見ている。アイオナと、ワディの連れていた二人の男は、それを不安気に見守っている。

「ダーシュ。関わることは無いわ」

アイオナはローゼンディア語でささやいた。

「そうだな。こんな馬鹿に関わっている暇は無いしな」

ダーシュはイデラ語で答えた。ワディは泡を吹かんばかりに顔を紅潮させた。単純で気の短い男であるようだった。

「俺を<sup>うら</sup>怨むのは筋違いだぞ。ハダクが死んだのはザハトの話に乗ったからだ。俺はちゃんと忠告したんだ」

「てめえとザハトさえいなけりゃ……」

「人の<sup>せい</sup>所為にするのは良くないな。お前だって大乗り気だったろうに」

「ワディ」

見かねた仲間がワディの肩を<sup>つか</sup>掴んだ。引き離されるようにしてワディはダーシュから離れた。

「いいか？ いつかケリをつけてやる。必ずだ」

「汚い指で俺を指差すな。気分が悪くなる。そんな指は<sup>らくだ</sup>駱駝の<sup>くそ</sup>糞でも差しておくがいい」

唇を<sup>ふる</sup>顫わせながらもワディは<sup>ひ</sup>退き下がった。オアシスで切り合いをするほどには馬鹿ではないよう

だった。アイオナはワディたちが去ってからダーシュに話しかけた。

「王族なのに随分ずいぶんと汚い言葉を使うのね」

「城で召使いにかしず傳かれていたのは子供の頃の話だからな」

「血筋の良さは隠しようがないのにね」

「おや？ ひょっとして俺は誉められたのか？」

「そうよ」

「これは驚いた。初めて優しき言葉をかけてくれたな」

「そお？」

アイオナは首をひね捻った。さすがに今まで優しく接していたとは言えないが、思い遣らなかつたことが一度も無いわけではない。

「あなた鈍いんじゃないかしら？ もっとも砂漠での暮らしが長いようだし、今みたいな男たちに囲まれて育ったのならば仕方ないけれど。育ちって重要ね」

「そう簡単に染まるものか。曲がりなりにも俺はラムシャーン王家の出身だぞ」

「だといいわね」

アイオナはくっくと笑った。

「笑うことはないだろう」

ダーシュは不満そうに言ったが、目が笑ってい

た。

「さてと。ともあれ厄介<sup>やっかい</sup>かも知れん」

「ワディたちね」

「我が妻は聡<sup>さと</sup>いな」

「ありがとう。で、どうするの？」

「ここにいる限りは問題は無いが、外に出たら襲ってくるだろう。だからなるべく早くオアシスを出た方がいい」

「夕方までは休めると思ったのに」

アイオナは溜息を吐いた。

「すまん。俺の不徳の致すところだ」

慰<sup>なぐさ</sup>めるようにダーシュが肩を叩いてくれた。

休憩所を出ると、二人はそのまま駱駝<sup>らくだ</sup>を預けてある宿へ向かった。ついさっき預けたばかりなので、亭主は面食らっていたが、文句も言わずに支度<sup>したく</sup>を手伝ってくれた。

「まだ昼前ですが」

「少し行ってから休むさ」

ダーシュは亭主に答えた。

「どちらへ行かれるんで？」

「アンケヌだ」

嘘<sup>うそ</sup>を吐いたのは悪意が有ってからではなく、追跡者がこの亭主に、自分たちのことを聞いた場合を考えてのことだろう。

「御無事を祈ってます」

「ありがとう」

アイオナはにこやかに手を振った。

日射しの下を進むのはきつかったが、とにかくオアシスからある程度の距離を離れなければならない。岩場は通り過ぎた。もしもワディたちが追ってきたとしたら、真っ先に目星を付けられる場所だからだ。

「砂の上に天幕を敷くしかないな」

「知ってる。穴を掘って横に広げるのよね？」

「ローゼンディア人の癖くせに物知りだな」

「手伝ったことは無いけど、見ていたことならあるわ」

「そいつは心強い」

「駱駝はどうするの？」

「近くに伏せておくしかないな」

ホイヤムに用意させた駱駝は良く仕付けしつけされており、主の命令が無い限りはじっとしている。きちんと天幕を張って涼む場所を作ってやれば、日が沈むまではじっとしていてくれるだろうと思われた。

半刻ほど走りオアシスが完全に見えなくなった頃、見付きりにくく、出来るだけ砂の多い場所を探した。

場所を決めると二人は協力して穴を掘り、駱駝と

自分たちの休める場所を作った。

横に伸ばした天幕の上には砂を掛けて、容易には見つからないようにした。

「水の補給だけは済ませておいて正解だったな」

「そうね。火が使えないのが残念だけど、ウナと乾し肉もあるし」

「……オアシスに来ればマナナイが食べられると思ったのだがな」

ダーシュが残念そうに言った。きっとアンケヌの館で食べたマナナイのことを思い出しているのだ。だがあれほどのマナナイはそうは食べられない。

館の厨房で働いていたハヌサはマナナイ作りの名人だ。何せ舌の肥えたアイオナの父親が、自分で口説き落としてアンケヌに連れて来たほどの料理人である。

「それは次のオアシスまでお預けね」

「仕方ないな」

「それで、いつまでこうして隠れているつもり？」

「夜になったら出発する」

アイオナは驚いた。

「隠れているんじゃないの？」

「そんなことをしたらザハトの手の者が追いついてくる」

ダーシュは苦い顔をして呟いたが、どうも理由は



それだけではない感じだった。

「何かあるの？」

「何がだ？」

「<sup>ごまか</sup>誤魔化さないで。あなた何か隠してるでしょう？」

ダーシュは<sup>きよ</sup>虚を突かれたような顔になった。

「王族だって時にもかなり<sup>あき</sup>呆れたけれど、この上まだ隠し事をするつもりかしら。もうここは砂漠の真ん中なのよ？ 町に居る時にはそりゃあ隠すことも必要だったのかも知れないけれど、今は私たち二人きりなのよ」

そう二人きりなのだ。自分で口にした癖に、妙にどきどきしてしまう。なんて馬鹿らしいのだろう。

いつもそうだ。言ってしまうてから後で心乱される。

そんなアイオナの気持ちも知らぬ風に、ダーシュは返事をしてこなかった。考えている様子だった。

「……俺は<sup>ガズー</sup>暗殺者に狙われているようだ」

<sup>しばら</sup>暫く経ってからぽつりと呟いた。今度はアイオナが黙った。一瞬、何のことだか考えたのだ。

「ガズーって……」

記憶が確かならば、アウラシールで有名な暗殺者のことである。個人の名前ではなく、暗殺者そのものを示す言葉だ。

狙われたが最後、生き延びることは不可能であると聞く。

「それって……」

「心配するな。今日明日襲ってくるはずもない。いずれは現れるだろうが、お前は気にしなくていい。狙われるのは俺だ」

「そういう問題じゃないでしょ！」

「何を慌てているんだ。暗殺者が狙うのは俺一人だ。余程のことがない限り、お前が狙われることは無い」

確かに暗殺者が狙うのは標的だけで、周りの者を巻き込むことはまず無いという。

「安心しろ。必ずお前をディブロスまで連れて行く。でなければ本当に、お前に損をさせてしまうからな」

おどけたようにダーシュは言ったが、アイオナはそんな気になれなかった。

「……どうするつもりなの？」

「さてな」

ダーシュは腕を組んだ。

「山羊を連れて行くしかないな」

「山羊？」

「ああ。おそらく暗殺者を傭ったのは先の王だ。ザハトにはその必要が無いからな」

「何で？」

「奴にはケザシュが居る」

「さっき言っていたザハトの協力者ね？ いったい  
どういう人なの？」

「奴は得体の知れぬ技を使う」

「どういう意味？」

「奴はおそらく魔道まどうの徒だ。確證かくしょうは無いがな」

真剣な顔をして言うダーシュを、アイオナはぽか  
んと見つめた。魔道だって？ この人は何を言っ  
ているのだろうか。

「冗談じゃないの？」

「ふん。笑うがいい。ローゼンディア人のお前には  
所詮解らぬことだ」

「笑いはしないわよ。ただ、信じられないのは確か  
だけど」

魔道などというものが、そうそうそこらに転がっ  
ているわけがない。

話自体は一般に流れてはいるが、その実体は謎に  
包まれている、それが魔道というものではないだろ  
うか。

アイオナ自身、魔道の使い手という者には会った  
ことが無い。

自称『魔道士』ならば何度か見かけたことがあ  
る。祭りの時など大道芸ひろうを披露している人たちだ

が、あの人たちは芸<sup>げ</sup>達<sup>いた</sup>者<sup>っしや</sup>ではあるとは思うけれど、あれを魔道だと言われると頷<sup>うなず</sup>けない。

とはいえ、この世には神秘が存在することは確かだ。貴族の宗家が守る聖遺物などという物もあるし、事実、現在のローゼンディア王もそれに悩まされていると聞く。あくまで噂ではあるが、王位を継ぐべき実の娘が、恐るべき呪いを身に受けて産まれてきたというのだ。

「とにかくその人は不可思議な術を使うのね？」

「ああ」

ダーシュはいい加減に返事をした。アイオナの態度が不満らしい。馬鹿にされていると感じたのかも知れない。そんなつもりは毛頭無かったのだが、また何か要らぬものが顔に出てしまっていたのかも知れなかった。

アイオナは話を変えることにした。

「それはともかく、山羊って何のこと？」

「暗<sup>ガ</sup>殺<sup>ズ</sup>者に契約の取り消しを求めるのさ。それには仲介者と山羊が必要だ」

「それって大丈夫なの？」

「さあな。上手くいけば死<sup>まぬが</sup>を免れるが、駄目ならその場で殺されるだろうな」

全然解決になっていないではないか。

「ともかくいつ仕掛けてくるかは向こうが決めるこ

とだ。だから俺が考えても仕方ない。今はディブロスを目指すだけさ」

「ワディはどうなの？」

「お前も判ったとは思うが、奴は愚かだ。指先と心臓が頭を介さず直接繋がっている」

要するに単純ということだった。

「でも、もうすぐであなたに斬りかかりそうだったじゃない」

「そんな度胸は無いさ。仲間がいた手前、装っただけだ」

「そうかしら？」

アイオナにはそうは思えなかった。あの場がオアシスでなかったならば本当に殺し合いになったかも知れないと思う。

「問題はあいつが仲間を引き連れてきた場合だが…」

「どうするの？」

「こっちもあれだけ強がったんだ。まさか俺たちが一目散に逃げ出すとは思ってしまい。あいつが仲間に声をかけている間に、精々遠くへ逃れるとしよう」

ダーシュはにやっと笑った。

「あなたの胆力には敬服するわ」

「俺もお前の辛抱強さには感心しているところだ」

「そうなの？」

「こんな逃避行、並の女なら音を上げていても怪訝お かしくないさ」

「砂漠の旅には慣れてるって言ったじゃない」

アイオナは口を尖とがらせた。何度言えばこの男は解ってくれるのだろう。

「そうではない。俺が言っているのは追われているという状況だ。恐怖という重石おもしが心に掛かってくる。お前はそれに負けていない」

「そうかしら？ 実は内心、結構怯おびえているのかも知れないわよ？」

「だとしたら、俺はますますお前を尊敬する」

ダーシュはきっぱりと言い切った。

「へえ、相手が女でも尊敬することがあるの？」

「立派かどうかということに男も女もないだろう」

「あなたの言葉とも思えないわね」

アイオナは砂の上に横になった。ダーシュに背中を向けた。顔がにやけてしまったのでそれを隠すためだった。

「おい、お前は俺を誤解しているぞ」

「はいはい。出発の時になったら起こしてちょうだい」

背後でダーシュが不満げにぶつぶつ言っている。アイオナは目を閉じた。

とにかく今はディブロスに行くことだけに集中しようと思った。

## 第十八章 砂の遺跡

昨日と同じく日が沈む直前にアイオナとダーシュは出発した。

右手にはダルメノン山脈が見えている。その向こうにはドルム盆地がある。高原地帯だが、ドルム人の領域であることもあり、ほとんど実態が知られていない。

その先にイビドシュ山脈がある。目指すミスタリア海は更にその向こうだ。

このまま進めばザナカンダに着いてしまう。どこかでダルメノン山脈へと向かうはずだが、ダーシュは何も言わずにただ駱駝を進めている。

沈む夕日の中を駱駝が砂を踏むさくさくとした感じが伝わっていく。その感触に風が細かい砂礫を巻き上げる感じが混じり合う。

「明日の休憩でも穴を掘って隠れた方が良いかしら？」

らくだ駱駝の背に揺られながらアイオナは問いかけた。駱駝というのはおもしろいもので、歩いているより走っている方が揺れが少なくなる。

歩かせている時が最悪で、駆足の時が最高なのだ。

駱駝もへたばりそうなものだが、これが馬よりも



遙かに頑強な生き物で、水と食糧さえたっぷり与えておけば、三日くらいは平気で走り続けるのだ。

ただし駱駝は突然に死ぬ。

それだけが注意するべき点であり、砂漠の民は『駱駝は主人を裏切る』などと形容するが、突然死するまで酷使する方が悪いと思う。

今のところアイオナは駱駝を殺したことは無い。この先も殺すつもりは無い。

給料の<sup>きん</sup>金や塩も払っていないのに、水と食糧だけでこんなに働いてくれるのだ。実に有り難く、かつ可愛い生き物だと思う。

でも臭くてべとべとの涎だけはいただけないが。

一人で駱駝を操ることなどアンケヌの屋敷に居たときには考えもしなかったが、慣れてみると結構楽しい。馬とは違ったおもしろさがあった。

「そうだな。用心をした方がいいが……」

ダーシュは考えているように語尾を濁した。

「この先に岩山がある。そこで休憩する」

今のところ<sup>きえい</sup>騎影はまるで見当たらず。砂漠を走るのは自分とダーシュの駱駝だけだ。

急にダーシュが進む方向を変え始めた。<sup>ゆるや</sup>徐々にダルメノン山脈の方へと駱駝を向かわせていく。

日中ならば美しい山並みがほぼ一線に広がっているのが見えるはずだが、今はただの黒い壁が並んで

いるようにしか見えないのが残念だったし、暗示的で怖くもあった。

やがて黒々とした山並みが、段々と正面に向かってくるのが判った。

砂の多い地帯に入ったのだろう。行く手には砂が、うねりながら<sup>はて</sup>涯しなく続いている。

砂丘は月の光を受けているところだけが白く輝き、そうでない箇所は闇に沈んでいる。

暑さを感じない。むしろ涼しかった。昼間の熱は別世界のようなのである。

そう、別世界なのだ――

砂漠は昼と夜で恐ろしいほどにその姿を変える。

まるで死の世界のような静けさの中、ただ自分たちの騎行する音だけが耳に届いてくる。

ときおり吹く風の音すら耳に入らない。

砂避けの布を被り、目許まで覆っている<sup>せい</sup>所為か。

まるで死の国のようだとアイオナは思った。だが、これが死の国ならば、なんと美しいのだろうとも思った。

先日、遙か東方にあるという砂の砂漠を想像したが、<sup>ちょうど</sup>丁度こんな感じではないだろうか。そんな風にも思った。

東の地平線に朝日が昇り始める頃、ダーシュの言う岩山が見えてきた。

山脈に向かっていることもあり、少し手前から足許の砂場が減って、また小石や岩が増えてきたと思っていたが、どうやら半ば砂に埋もれた山か何からしい。

ダーシュはここに来るのは初めてではないようであった。

確かな足取りで駱駝を走らせて岩山に向かってゆく。アイオナも後に続いた。

ちょうど良い岩陰を見つけて駱駝を繋ぐと、そこから更に岩山を登っていった。

登ると言っても急峻な山ではない。岩場を進んでいくのと大差はなかった。

時折、少し高さの違う場所が現れたが、そういう岩場はダーシュが手を貸してくれた。

そんなわけで、へばりついて登っていくような真似は必要なかったのだが、ダーシュが休憩所と定めた場所に出るまでには多少骨が折れた。

休憩所は少し開けた窪地だった。上に天蓋のように岩が張り出していて都合がいい。

「おもしろいものを見せてやろう」

風避けの布を張り、石でしっかりと固定してからダーシュはそう言った。

「何よ？ まだ仕事の途中よ？」

「あとでいい。日射しがきつくなる前に見ておけ」

どこに向かっているのか。どうやらダーシュは岩山の反対側に出ようとしているようだった。

「ちょっとダーシュ！ 駱駝をそのままにしているの？」

「いいさ。どうせ誰もここには来ない」

軽い物言いだったが、確信めいたものが含まれているようにアイオナは感じた。

何故そうと言いきれるのかは分からないが、とにかくダーシュにはそう判断するだけのなにがしかの根拠があるのだろう。

それほど歩くこともなく反対側に出た。

ダーシュは岩壁に手をつき、もう片手でアイオナを招いた。

「見るがいい」

ただの砂漠が広がっているだけだった。一見ではそう見えた。

けれどダーシュがわざわざ見せようとするのだ。何か理由があるに違いない。そう思ってアイオナは目を凝らした。

岩山の向こう側にはただの砂漠が広がっている。

一面に砂礫を吹き曝<sup>さら</sup>したような荒漠とした風景だ。

砂の多い場所では、砂の紋様が波のように重なりながら広がり、積み上がって小さな砂丘になってい

る所もある。

これまで見てきた景色と同じだ。何も変わるころはない。

だが、何か引っ掛かるものを覚えた。

——そうか……四角いんだ。

不思議と砂漠が仕切られているように感じる。左手にはダルメノン山脈が迫ってきているし、この岩山と、そして右手の向こうに見える砂丘の所為だろう。

「よく見ろ」

ダーシュが指差す辺りに目をやると、何やら砂漠上を輪郭めいた物が見える気がした。

「……何か埋まっているの？」

当てずっぽうで聞いてみた。

「ああ。以前は町があったのさ」

ダーシュが腕で示した範囲は、概ねおおむアイオナが「仕切られている」と感じた範囲と一致した。

大方、右手の砂丘の下には都市を囲む防壁などが埋もれているのだろう。そしてこの岩山自体がもう一つの壁なのだ。

いや、壁だったのだろう。

かつて在あったはずの都市は砂に埋もれ、今ではそこに都市が、人々の営みがあったと想像することしか出来ない。

「……<sup>いくさ</sup>戦でやられてな」

ダーシュが<sup>つぶや</sup>呟いた。

「生き残りは西のオアシスに移ったという話だ」

「それって、これから向かうケッサラのこと？」

「そうだ」

「この都市が破壊されたのはいつの話？」

「詳しくは知らないが、少なくとも三百年以上は経っている。随分昔の話さ」

「どうして滅んだの？」

「さあな」

ダーシュの返事は<sup>ぶっきらぼう</sup>打切棒なものだった。アイオナはむっとしたが、すぐに疑問が心に浮かんできた。

どうしてダーシュはここに来たのだろうか？

自分たちがディブロスを目指す途上で、利用しやすい場所にあるということは理解出来る。

そうではなくて、ダーシュは元からここをよく知っていたのだ。だからアイオナに「おもしろいものを見せてやろう」などと言うことが出来たのだ。

それならば何故、この滅んだ都市のことを知らないなどと言うのか？

そこまで考えてふっと答えが浮かんだ。

「ケッサラは山脈の向こうなのね？」

「あのな……」

ダーシュは溜め息を吐いた。

「言っておくが俺はお前は試したり、焦らしたりしたいわけじゃない。今だってちゃんと説明をしようと思っていたんだ。それをどうしてお前は先に回って答えを言い当ててしまうんだ？」

「不満そうに言うこと無いじゃない……手間が省けて良いでしょ？」

「お前は頭が良すぎる」

「褒めてくれてありがとう」

「いや、褒めてないが」

「馬鹿ね。褒められたと思ってあげる、という意味よ」

その言葉にダーシュは吹き出した。余程面白かったのか暫く笑っていた。

「いやいや、お前と話すのは楽しいな」

「褒めてくれてありがとう」

ダーシュはまた笑った。笑いの急所を突いてしまったらしい。しかし嫌な笑い方ではない。楽しそうな笑い方だった。

笑いが収まると、ダーシュは手で遺跡の辺りを示した。

「お前の予想通りだ。ここの連中が通った道が、これから俺達が向かう地下通路なのさ」

「やはりね」

「ただ、俺も一度も見たことはないが」

「見付けられなかったらどうするの？」

「心配するな。判り易い目印があるそうだ」

「本当に？」

わざと疑わしそうに横目で見つめると、またダーシュは吹き出した。

あまり突つくのは止めておこう。本当に笑いの急所を突いてしまったようだから。

さすがに今度はダーシュも咳払いをして笑いを無理に収めた。

「……元は、ナーラキアの遺民が作った都市だったようだ」

「ナーラキアの？」

「ああ」

「それって新ナーラキアのことでしょ？」

「ああ。ザナカンダに都を移したナーラキアだ」

言い伝えによれば古ナーラキア帝国が滅んだ後、その遺民はちりぢりになったという。

しかも古ナーラキア帝国滅亡の折、その国土は砂漠へと変貌したと記録にはある。

信じがたい話だが、ナーラキアは聖遺物を積極的に用いた、極めて強引な侵略を繰り返していたから、それが関係しているのかも知れない。

その後再びナーラキア人達は結集して新たな国を作った。それが新ナーラキア帝国である。西ナーラ



キア、あるいは後期ナーラキア帝国ともいう。

かつての強大さには及ばないが、それでもリムリク地方一帯を支配下に置いた強力な帝国だったと歴史書にはある。

新たな帝都はザナカンダに置かれた。この都市は現在もリムリクに存在する。アンケヌからは南西にある都市だ。

しかしその帝国も又滅びた。

滅亡の動乱の中、聖賢リュベイオンに率いられてローゼンディアへとやって来たのは、そうした遺民の一部である。

現在のナバラ砂漠は、一貫してナーラキアの国土だった。つまりかつては緑豊かな大地だった事になるわけだが、アイオナにはとても信じられない話である。

だが真実なのだろう。

となれば、その姿は変わり果てたとはいえ故郷を離れがたく、砂漠に<sup>きよ</sup>居を構えた一団があってもおかしくはない。

それにしても遙かな昔の話である。

『呪われた民』として<sup>うと</sup>疎まれたナーラキアの人々が、そのまま自国の文化を保って生きていけるものだろうか？

「……<sup>もっと</sup>尤も本人たちが言っていただけのようだが

な。真実は誰にも判らんさ。なにせ千年を超える時の彼方の話だ」

そういうことならアイオナにも理解出来た。

「とにかくここに住んでいた連中は自分たちをナーラキア人の末裔だと信じていたらしい。その所為かどうか知らんが、あまり立ち寄る連中もなくてな。だからこの都市が滅んだ理由もよくは判らないのさ」

「どうしてこの場所をよく知っているの？」

「以前厄介事やっかいごとがあつてな。ここに追い立てられたことがある。すると連中、追いかけて来ないのさ」

ダーシュはくくと笑った。

「後で知ったことだが、この近隣の連中はここには近寄らんらしい。何でも呪いがあるんだと……どうした？ 神妙な顔をして」

「呪われた土地というわけだったのね」

「ああ、そうだ。恐ろしいか？」

恐ろしくないと言えは嘘になるが、今はそれよりもザハトの方が余程厄介よほどだし、恐ろしいと思った。

「あまり良い気分はしないけれど、追っ手が来ないというのはありがたいわ。けど、ワディやザハトはここを知っているの？」

「ザハトは知らない。ワディの方はどうかわからんな」

「じゃあ平気で追いかけてくるんじゃない？」

「それは俺たちの後をきちんと<sup>っ</sup>跟けてきた場合だけだ。奴らはアンケヌに向かっているかもしれん」

「それはそうだけど……」

何だか嫌な予感がする。

「とにかく日が沈むまではここで休む。お前も岩陰で体を休めておけ」

ダーシュは岩壁から手を離し、休憩所へ向かって歩き出した。アイオナも後に続いた。

岩陰に身を横たえるとすぐに眠気が襲ってきた。目が覚めた時にはもう、日は大きく傾いており、そろそろ出発する時間だった。

「起きたか」

静かな呟きだった。<sup>せ</sup>急かす風でもない。水袋が差し出された。

「ありがとう」

アイオナは礼を言ってから水袋を受け取り、<sup>なまぬる</sup>生温い水を飲んだ。なんて<sup>おい</sup>美味しいのだろうと思った。

ダーシュは休憩所の片付けを始めている。手伝おうかと思ったが、寝起きでのろのろ動いても邪魔になるだけと考え直した。

「駱駝の様子を見てくるわ」

言い置いて岩山を下りていった。きちんと繋いであるから心配は無いが、一応の用心のためである。

岩陰には駱駝の姿はなかった。アイオナは一瞬青くなっただが、なんのことはない。少し離れた岩場ののろのろ歩いている。

しかし安心するのは早計だ。驚かせるとそのまま走り去ってしまうかも知れない。

アイオナは出来るだけ脅かさないように気を遣いながら、駱駝に向かってゆっくりと歩を進めた。

二頭はぼーっと突っ立ち、もう一頭は足を畳んで坐り込んでいる。

どうも馬と違って何を考えているのか予想出来ない。駱駝はわけの解らない生き物だと思う。

立っている駱駝の<sup>くつわ</sup>轡を手に握った時だった。いきなり背後から襲いかかられて抱え上げられた。

アイオナは悲鳴を上げた。

＊

悲鳴が耳に届くと同時にダーシュは剣を抜いて飛び出した。途端に斬りつけられた。

ダーシュが岩陰から現れるのを待ち構えていたのだ。

驚きつつも、ダーシュは反射的に飛び<sup>の</sup>退いて避けた。すぐにもう一撃が襲ってきた。幸いというべきか、相手は一人だった。

首筋を<sup>かす</sup>擦める一刀を何とかやり過ごして、反撃の太刀を繰り出した。手応えと同時に男の悲鳴が上がった。

どこの連中だろうか？ ザハトか？ それとも砂漠の<sup>ひょうとう</sup>剽盗か？

<sup>ひらめ</sup>閃くようにいくつもの思考が頭を過ぎたが、今はそれどころではない。岩山を駆け下りた。

少し離れたところで、今襲ってきた男の仲間二人がアイオナを駱駝に積み込んで逃げ出そうとしている。

どうやら砂漠の盗賊らしい。ザハトの追っ手ではないと思った途端に妙な安堵感が込み上げてきた。そんな状況ではないというのに。

盗賊は盗賊だ。

よもやそんなことは無いだろうが、このままアイオナを連れ去られた場合、厄介なことになる。

アイオナを担ぎ上げた男は駱駝の背にアイオナを<sup>くく</sup>括り付けようとしている。その駱駝もダーシュたちのものなのだから恐れ入る。

アイオナは手足を振り回して暴れている。時々金切り声を上げる。

本来ならば賢いとは言い切れない行為だ。盗賊が<sup>かんしゃく</sup>癩癢を起こして喉首を掻き切りにきた場合どうするのか。大人しくしていた方が身のためということも

ある。逃れる機会を次に繋ぐために。

賢いアイオナにそれが判らないはずはあるまい。

とすれば、叫ぶのはダーシュに聞かせるためということになる。

——俺を信じているのか。

足が地を蹴るたびにアイオナとの距離が縮まる。

——期待に、応えねばな。

走りながらも冷静に、ダーシュはそんなことを考えた。

思ったよりアイオナが暴れるのだろう。男はなかなかアイオナを固定出来ずにいる。横で駱駝に跨またがっていたもう一人が、ダーシュに気付いて向かってきた。

こちらは徒歩で相手は騎乗である。不利は明らかだったが、ダーシュはそのまま突っ込んだ。上から振り下ろされる剣を掻い潜りながら、同時に男の腰裏に剣を突き刺した。

男は悲鳴を上げて剣と轡くつわを取り落とした。乗っていた駱駝の足が乱れた。

その隙にダーシュは素速く駱駝に取り付き、もう一度男を刺した。今度はくぐもった声が漏れた。男の白い服が、たちまち噴き出す血の色へと変化してゆく。

致命傷を負った男は力を失い、ダーシュに押され

るままに地面へと転げ落ちた。

その間にもう一人の男は駱駝を走らせている。仲間も殺され、ダーシュが駱駝を取り戻したというこの状況では、盗賊はもう逃れようがないと言えるのだが、それでも逃げようとしている。生命<sup>いのち</sup>惜しさが混乱からか、どちらにしてもダーシュの血を冷やしたのはそんなことではなかった。

駱駝が走るたびに、中途半端に固定されたアイオナが激しく揺れている。

このままでは後足で頭を蹴られかねない。そうなれば大怪我をしてしまうか、下手をすれば死んでしまう。

ダーシュは慌てた。すでに現状大慌てであり、斬り合いまでしているのだが、それ以上に慌てた。余裕があれば盗賊の間抜けさを神に呪ったことであろうが、そんな余裕は当然無かった。

奪い返した駱駝に<sup>また</sup>跨がると、ダーシュは飛ぶようにアイオナを追った。

必死に逃げる男に追いつがる。こちらも必死である。剣の届く距離にまで近づくと、ダーシュは男の背中<sup>めが</sup>目懸けて剣を投じた。嫌な音とともに剣は深く背中に突き刺さり、男は<sup>よろ</sup>蹠跟めいた。駆けていた駱駝の足が乱れた。

ダーシュはアイオナの服を掴んだ。頭が出来るだ

け上に来るように強引に体を引っ張り上げた。悲鳴を聞いても容赦しなかった。アイオナを縛り付けたひも紐は実にいい加減に結ばれており、すでに解けそうだったからだ。

駱駝が足を止めた。

ダーシュは息を吐いて駱駝から下り、男を引きずり落とした。地面に落ちた男は、血を吐きながら死けいれんの痙攣を繰り返している。

男の胸を刺して止めとどをくれた。それから男の服のすそ裾で血を拭ってから、ダーシュは剣を納めた。

アイオナの拘束を解いてやり、駱駝から下ろして地に立たせた。

「大丈夫か？」

両肩に手を置いて支えた。そうしないとアイオナは倒れてしまうのではないかと思ったからだ。

「大丈夫よ」

気丈に答えたが、声には震えが残っている。顔色も良くない。

ダーシュはアイオナを抱え上げた。いつもなら文句か抗議か、何か言ってきそうなものだが、アイオナは何も言わずにふる顫えている。

「帰るぞ」

アイオナを胸の前に抱くようにして駱駝に乗った。もう一頭は紐で繋いで岩山の休憩所に戻った。



最後の一頭はダーシュが繋いだ時そのままになっていた。

おそらくダーシュを襲った男が、仕事の後に連れて帰るつもりだったのであろう。

盗賊たち自身は徒歩でやって来たらしく、他に駱駝の姿はなかった。

とすれば、この近隣に盗賊たちの住み家があるか、でなければいずれの部族が滞在している場所があるということだ。

どちらにしてもここに長居は望ましくない。そして二人とも、そのつもりはなかった。

この岩場に現れたという事は、どこか他所<sup>よそ</sup>からやって来た連中である公算が高い。ならばアンケヌで起きたことも知らないだろうし、ダーシュにとっても全くの見知らぬ連中であるという事になる。遭遇するのは極めて危険だ。

休憩所に入ると、すぐにダーシュは火を起こして氷砂糖入りの香草茶を作り、アイオナに渡した。

アイオナがそれを飲み終わるまで、何も言わずにじっとしていた。余計なことを言いたくなかったし、そっとしておいてやりたかった。

ただ胸の内で、お互いに無事だったことを神に感謝した。

二人に会話はなかったが、休憩所を仕切る布が風

を受けて音を立てていた。

風が出てきた所為ではなく、ただ片付けの途中で襲われたために、<sup>おもし</sup>重石<sup>の</sup>を除けられてあったからだ。

日は地平線に沈みかけている。出発には頃合と言えた。

「……もう落ち着いたわ。助けてくれてありがとう」

香草茶を飲み終わるとアイオナが口を開いた。

「すまん。まさか盗賊が現れるとは思わなかった」

ダーシュはすかさず謝った。誰も来ない、安全だと言っておきながらこんな目に遭わせてしまったのだ。謝罪は当然だと思った。

ところがアイオナには予想外だったらしく、突然の謝罪に慌てたようだった。

「いっ、いいのよ！ 不用心にしていたわたしにも責任はあるわ！」

「いや、誰も来るまいと高を<sup>くく</sup>括っていた俺が悪い。恐い思いをさせてすまなかった」

——アイオナに怪我がなくて良かった。

ダーシュは心底そう思った。

出来ることならもう少し休ませてから旅立ちたかったが、そうもいくまい。

「動けるようになったら出発しよう」

アイオナは無言で<sup>うなず</sup>頷いた。力のある目をしている

と思った。たった今恐ろしい目に遭ったばかりだというのに。

まだ近くに他の盗賊が潜んでいやしないかという不安はあったが、あまりもたもたしていると今度こそザハトの追っ手に追いつかれてしまう。

おそらくもう一日以下の距離にまで迫っているだろう。

何せ向こうはゴーサの傭兵が追ってくるのだ。速度が違う。

もしこちらの選んだ逃走経路を知られていれば、ディブロスに着く前に追いつかれてしまうのは必至だ。

——何か手を打っておかねばな。

闇に落ち始めた砂漠を見ながら、ダーシュは考えていた。

## 第十九章 地下通路

ダーシュの話によると、入り口は幾つかあるらしい。

それはそうだ。入り口にせよ出口にせよ、一箇所だけということは有り得ない。

いくら人外の種族であろうとも、複数の出入り口を設定する程度の知恵はあるはずだし、でなければ攻められたら全滅してしまう。

自分たちが向かっているのは一体どの入り口なのか。

あの砂の遺跡に暮らしたというナーラキア帝国の遺民達が使った入り口だろうか。

そう思って尋ねると、

「さあ……それはわからんな、ただ駱駝で入れる場所へ向かっている。徒歩で長い地下通路に行くのはぞっとしないからな」

「そうね」

山脈の手前で朝を待つのかと思いきや、ダーシュはそのまま登っていく。

月明かりもあるし、道幅が広いので今のところは問題ないが、この先道が狭くなり、片側が崖とかになったらもう進めなくなる。

アイオナは不安に思いながらついていったが、

乗っている駱駝の方には何ら不安はないらしく、足並みに乱れはなかった。やはり駱駝は馬とは違うと思った。

岩肌が急角度になって切り立っている場所に出ると、ダーシュは駱駝を止めて降りた。

「ここだ」

左手に崖崩れか何かで壁のようになった山肌がある。その下に、ちょっとした広場程度の開けた空間があった。

あちこちに岩や砂礫が散らばっているが、休憩を取るのには十分なだけの広さがある。

そのことに違和感を覚えた。これだけの崖崩れがあったらしいのに土砂の山がない。

逆に広場のような場所になっている。これは変である。

雨風でどうにかなるとも思えないし、誰かが片付けたのだろうが、そんな事をするには理由があるはずだ。

おそらくダーシュもその辺を感じ取っているのだろう。松明<sup>たいまつ</sup>を片手に、壁のようになった岩肌を調べて回っている。

邪魔をするのも悪いし、特に何も言ってこないのアイオナも話しかけなかった。

駱駝から降りて近くの岩の上に腰を下ろすと、自

分たちが来た方向へ目をやったが、当然ながら暗くてほとんど見えない。

月の光は明るい、それで見える範囲も限られている。

アイオナは闇に向かい合って坐っていた。

少し高いところにいる所為か風もある。その風は目の前の闇から吹いてきて、アイオナの服や髪を揺らし、頬を撫でていくのだ。

不安を感じても良い状況だと思ったが、駱駝に乗っていた時と違って、何故か不安は感じなかった。

月を見上げた。空に雲がないのでくっきりとその姿が見える。冷たいように輝いていて、とても綺麗だと思った。

振り返って岩肌を見た。全体は壁のような印象だが何とというか、上手くは言えないが不自然なものを感じた。

岩壁の端の方を調べていたダーシュが急に姿を消した。驚いたが、どうも岩壁の向こう側に廻り込んだようだった。松明の明かりが漏れている。

見ているとすぐにダーシュは出てきて、アイオナの所へ戻って来た。

「見付けたぞ」

そこは岩壁の裏側の窪みだった。

入り口から見るとただの浅い窪みだが、中に入ると急に開けた空間になっていた。見てもすぐには判らないように入り口が偽装してあるのだ。

ダーシュが松明を動かすと、空間の中が照らされて、通路がずっと延びているのが見えた。縦に細長い通路で、裂け目のようにも見える。

かなり綺麗に岩の中を<sup>く</sup>削り抜いてあって、さすが地下で生活するジャグルの作った通路だと思わせた。

おそらく入り口の偽装は人間が作り、通路から先がジャグルの掘ったものだろう。

「駱駝を連れてこよう」

「このまま行くの？ 朝を待った方が良くないかしら？」

アイオナは怖くないのかと思った。一日待って明日の朝か、でなくともしばらく休憩してから行くのではないのか。

「地下なんだから昼も夜も関係ないだろう。それに俺達には時間がない。急ぐぞ」

「そうね……」

アイオナは頷いた。

二人は駱駝を連れて通路の中に入っていった。アイオナの駱駝は中に入るのを嫌がったが、ダーシュが宥<sup>なだ</sup>めながら手綱を引くと諦めたように歩き出し

た。

横幅がそれほどでもないのに天井は高く、二人が駱駝に乗ったままでも進むことが出来た。

「おそらく槍などを持った兵士が移動する為だろうな」

「でもそれだと出口に敵が沢山いたらどうするの？」

こちらは少人数しか一度に出せないとなると不利ではないだろうか？

「その時は内側からこの通路を塞いでしまおうんだろ  
うな。守りに回ることを考えれば、一度に多人数の  
出入りができない場所は有利になる」

ダーシュが先に立って松明を<sup>かざ</sup>翳し、進む。アイオ  
ナがそれに続いた。

二人は無言で駱駝を進めた。道は少しずつ下り  
になっている。

どのくらい進んだろうか。おそらくはそれほど行  
かない内に左右の壁が消えた。

ダーシュはすぐに駱駝を止めて松明を動かした。

外は涼しかったのにそこはほんのりと暖かかっ  
た。

空気の動き方や、何となく伝わる周囲の感じか  
ら、自分たちがかなり広い空間に出たことは判っ  
た。



松明の動きに合わせて、周囲の状況が切り取られたように目に入ってくる。

そこは巨大な広間のような空間だった。あちこちに四角い石柱が立っている。天井を支える柱だとすぐに理解したが、その高さが凄かった。

まるで神殿のようだ。相当な高さがある。

松明で照らしても天井の方ははっきりとは見えない。

「おお……」

ダーシュは感嘆していた。アイオナも周囲を見回した。

「凄い……」

柱の他にはやはり石で出来た奇妙な三角形の置物とか、長方形の大きな卓のような物とかが、アイオナ達が入ってきた入り口の脇に据え付けられてあったが、何に使う物なのか用途が判らない。

ただ、どれもそれなりに大きくて、寛ぐ<sup>くつろ</sup>為の椅子や何かではなさそうだ。

ここは文字通りの広場のようだ。

ジャグル達が作ったのだろうか。おそらくそうだろう。

岩肌の中を、いやもうここは山の内部かも知れないが……そんな場所を、こんな風に加工するのは人間の手では難しいと思えた。

地下生活者のジャグルならではの仕事だと思えた。

「少し周囲を見てくる。お前はここにいる」

そう言ってダーシュは駱駝で周りを歩き始めた。

アイオナは目でダーシュの松明を追った。周囲をぐるりと回って戻ってくるのに、それほどの時間はかからなかった。

「……おそらく出撃前に集合したりする為の場所だったのだろうな。あの辺の置物も槍とか剣を立て掛けたりするのに使ったのだろう」

「え？」

武器と聞いてアイオナはひやりとした。

「そう怖い顔をするな。ここが放置されて随分長い時間が経っている。最近とを感じるようなジャグルの痕跡はないな」

「ジャグルの痕跡が判るの？」

「ああ、野営の跡とかを見ればある程度判る。あいつらは人間より小さいしな」

驚いた。この人はジャグルを見た事があるのだ。アイオナは話に聞くだけで一度も目にしたことはないというのに。

「人間達が宿営した痕跡ならあったぞ。火を焚いた<sup>すす</sup>煤が残っていた。ただ、これも最近のものではないな」

「さっきの遺跡のナーラキアの人達かしら？」

「かも知れん。または俺達の他にもここを知っていて、利用している商人とかがいるのかも知れんしな」

「聞いた事がないわ」

「山脈を貫通して延びている地下通路だぞ？　しかもおそらく盗賊も知らない。つまりは安全で、早く移動できる経路だ。余程の馬鹿でない限り、この道を知った奴は誰でも秘密にするさ」

「ましてや商人なら」

「そうだな」

微笑むかと思ったがダーシュは頷いただけだった。

「……急ごう。出来れば休憩を入れずに一気に通り抜きたい。ついて来られるか？」

「ええ」

アイオナは頷いた。休憩がないという事には落胆したが、そんな場合ではないのだ。

休むならばディブロスに着いてからゆっくり休めばいい。

「行きましょう」

アイオナが決意を口に出すと、ダーシュは駱駝の向きを変えた。また先頭に立って進み始めた。

松明が眩<sup>まぶ</sup>しいので、アイオナは額に降りた日射し

よ  
避けの布を出来るだけ引っぱって、更に目線を下げ  
気味にして進んだ。

進んでいく内に判ったが、ここは地下通路と言う  
よりも、地下都市と言った方がいい作りをしている  
ようだった。

まるで町の中の通りを進んでいるようなのだ。

自分たちが進んでいるのはその中でも中心的な通  
りの一つであるらしく、道幅はとても広く、複数の  
馬車がすれ違えるほどだった。

左右には壁か、建物を思わせるジャグル達の<sup>す</sup>棲み  
か  
処か何かが並んでいて、時折枝分かれした通路が現  
れるといった感じだった。

建物と言っても岩を<sup>く</sup>削り抜いて作られたものであ  
り、壁と一体化している。それが岩壁にへばりつく  
ように積み重なって広がっているのだ。

どことなくアウラシールの日干し煉瓦の建物に似  
ているが、やはり人間の作る物とは違う印象で、何  
というか微妙な感じなのだ。そして全体に小作り  
だった。

天井の方は高さが目まぐるしく変わった。ジャグ  
ル達の密集していたであろう地区では天井は凄く高  
くなるが、単なる通路の時には低くなる。

更にアイオナ達が走っている通路とは高さの違う  
通路があるらしく、松明の明かりにそうした別階層

の通路が見えることがあり、アイオナを驚かせた。

ここは幾つもの地区が通路で結ばれた地下都市だったのだ。

一体どれほどのジャグルがここに棲んでいたのか。それを考えるとアイオナは恐ろしくなった。

だがそれも遠い過去の話だ。今はここにジャグルが棲んでいるはずがない。生き残っているはずがない。そう信じることにした。

ダーシュは途中で松明を取り替えたが、駱駝の足は止めなかった。時々振り返ってアイオナを見た。心配してくれている気配が伝わってきた。そのたびにアイオナはダーシュを見返して無言で頷いた。意地を張っているのではなく、積極的に先に進もうと思った。ここが踏ん張りどころだと感じていたからだ。

どのくらい進んだか判らなくなっていて、更にそれからまたどれくらい進み続けているのか判らなくなった頃、ダーシュは急に駱駝を止めた。

「ここらで少し休憩しよう」

「大丈夫よ。まだ行けるわ」

「判ってる。俺が休憩したいんだ。咽が渴いてな。すまない」

言いながら駱駝から降りると、駱駝に下げていたクポラを取った。

クポラというのは飲料用の器で、主に旅行で使われる。荷物や、馬や駱駝の帯から下げられるように、横に持ち手の付いたものだ。アウラシルではカラクという。

ダーシュは自分のクポラに水袋から水を注いだ。少し変わっているが、ダーシュは直<sup>じか</sup>に水袋から飲むという事をしないのだ。

「お前も降りてきて水を飲むといい」

言われて駱駝から降りようとして落ちそうになった。何でそうなったのか解らない。解らないが、とにかく急に頭が大きく動いて下に向いたのを感じた。

「大丈夫か」

突然ダーシュの声が耳元で聞こえた。何で？ と思った。どうしてついさっきまで、少し離れていたダーシュが自分のすぐ傍にいるのだろう。

体が引っぱられるような、持ち上げられるような感覚があって、気が付くと地下通路の上に坐らされていた。

「あれ？」

「取り敢えず水を飲め」

言われてクポラを押し付けられた。銅から叩き出した物で凄く手触りがいい。口を付けて水を飲んだ。

それで気分が少し良くなって、頭がはっきりしてきた。

気付かない内に自分は意識が怪しくなっていたようだ。自分で感じていた以上に疲労が溜まっているのか。

落馬ならぬ落駱駝らくらくだしそうになったのもその所為だろう。

道々振り返りながらアイオナを観察していたダーシュにはそれが判ったのだ。

ダーシュが抱き止めてくれなければ、頭からこの石の地下通路に落ちていたかも知れない。

——抱き止める？

思った途端に顔に血が上るのを感じた。だが恥ずかしさよりも嬉しさの方が大きかった。

ダーシュはちゃんと自分を見ていてくれたのだ。

「飲んだか？ 何か食べるか？」

「……棗椰子を少し貰もらうわ」

余り食欲はなかったが、少しでも元気を付ける為にアイオナは干した棗椰子を二つ食べた。

「香草茶でも飲ませてやりたいところだが……」

「うん。わかってる。ありがとう」

「すまん」

「ちょっと横になるわ。四半刻しはんときもしたら起こしてくれる？」

「わかった」

ダーシュはアイオナから少し離れたところに剣を抱いて坐った。

松明は消して、携帯用の油燈を出すと火を点じた。松明に比べて遥かに小さい可愛らしい燈が点<sup>とも</sup>る。

ダーシュはそれを近くの石で軽く囲って、アイオナからは直接見えない位置に置いた。

火はダーシュの体に遮られて、アイオナからはぼんやりとした燈<sup>あか</sup>りが僅<sup>わず</sup>かに感じられるだけになった。そうした小さな心遣いが嬉しかった。アイオナは目を閉じたまま少しだけ微笑んだ。そこで意識が途切れた。

どのぐらい寝ていたかは判らない。ともかくアイオナは肩をそっと揺すられる感触で目を覚ました。

「出発するぞ」

ダーシュの声を聞きながら身を起こすと、体がかなり硬張<sup>こわば</sup>ってしまっていた。

硬い石の床に寝たのだから仕方ないが、服を払って立ち上がってから少し伸びをしたり、腰を回して腕や肩を自分で引っぱったりした。

埃っぽいこともあいまって、アイオナは風呂に入りたくなった。

カラシュハル  
公衆浴場に行けば専門の按摩士が居て、料金を支



払えば客の体の筋を伸ばしたり、筋肉の硬張りを揉み解<sup>ほぐ</sup>してくれるのだ。

それが見た感じグラティオンのようになる事もあるが、やって貰<sup>もら</sup>うとすっきりするのだ。そうした腕のいい按摩士にかかりたいと思った。

グラティオンとは戦場での組打術であり、ローゼンディアでは一般的な闘技の一つである。幾つかの方式があるが、公衆浴場で施されるのはお互い素手で組み合うものに似た感じになる。

ローゼンディアではこうした闘技を、貴族の子供は全員学ぶことになっている。

なので準貴族の身分で就学していたアイオナも当然学んだ。余り興味が持てない学課ではあったが。

「後どれくらいかしら？」

何の気なしに聞いたただけだが、ダーシュは済まなさそうな顔になった。

「……わからん。ただこの道を行けばイビドシュ山脈の向こう側に出るはずだ。ケッサラの近くに出ると思う」

「ケッサラね」

それで大体の位置関係は判った。尤も出口<sup>もっと</sup>だけだが。

「じゃあ行きましょう。もう大分来たと思うし——」

話している途中で目の前を筋のような物が横切った。何かが飛んで来たのだ。

不思議に思って飛んで来た方向、つまり自分たちがやって来た方向を見ようとすると、ダーシュが強くアイオナの手を引いた。

「いたっ！」

「伏せろ」

頭を上から押さえられる。ダーシュとアイオナは這うようにして石で囲ってある油燈の傍<sup>そば</sup>から離れた。

「弓だ」

「えっ？」

自分たちの居た辺りを何かが飛び過ぎていく音がある。耳を澄ますと弦音<sup>つるね</sup>も聞こえる。

何者かが弓で自分たちを攻撃してきたのだ。

アイオナの脳裏にジャグルの名前が浮かんだが、すぐにそれを否定するような疑念が浮かんだ。ダーシュの意見を信じるまでもなく、ジャグル達がここを根城にしていたのは遙かな昔の話である。

ジャグルよりも人間と考える方が可能性は高いと考え直した。

「何者かしら？」

声を潜めてダーシュに問うと、

「さあな。盗賊の類かも知れん」

「盗賊が？」

「こんな場所だ。盗賊が隠れ家にしていたとしても有り得る話だろう？ それに時々俺達のように迷いこんでくる奴らが居れば獲物になるしな」

「どうするの？」

「話し掛ける」

逃げるという答えを予想してただけに意外な感じだった。

「まさかジャグルが居るとは思えんが、相手が人間だって事を確認しておけば、逃げる分にも気が楽だろう？」

「それは……そうだけど……」

「心配するな。逃げるのには自信がある」

おどけたようにダーシュはアイオナに片目を瞑って見せた。

また矢が飛んできた。微かだがそろそろと近づいてくる足音もする。

「奴ら駱駝を射らないな……やはり人間か」

急にアイオナの駱駝が立ち上がってこちらに歩いてきた。微かな光に反射して、駱駝の大きな瞳が黒い宝石のように見える。

「丁度いい。お前は駱駝の蔭に入れ。俺が合図したら一緒に走り出すんだ」

「わかったわ」

ダーシュは寝かせていた松明を取ると、置いてあった油燈をそれで掻き寄せるようにして手元に持ってきた。油燈など見捨てていけばよいと思えるが、ここは地下だ。燈りが無くては何も出来ない。

また矢が飛んできた。こちらに燈りがある為に、向こうはそれを目指して攻撃したり移動すればいいわけだ。非常に危険だった。

「俺達は敵じゃない!!」

ダーシュはイデラ語で叫んだ。そしてアイオナを見て頷く。それで理解した。

「わたしたちは敵じゃないわ!!」

今度はアイオナがローゼンディア語で叫んだ。

暫く間があった。これで攻撃が止むかも知れない。そう期待した時、

「お前共死にゆるし！」

妙な返答が返ってきた。

「死にゆるし？」

アイオナは小首を傾げた。

「妙なダルメキア語だな」

ダーシュが呟いた。

「生け続かれぬ！ お前ばら！」

他にも幾つかの言葉が投げかけられてきたが、どれも何だか妙な言葉だった。

ダルメキア語なのだが何だか<sup>おか</sup>奇<sup>おか</sup>妙<sup>おか</sup>しい。

少し考えてアイオナははっと気付いた。ダルメキア語にはないが、聞き覚えのある名詞の変化と動詞の活用があった。それはナーラキア語の文法なのだった。

ダルメキア語もローゼンディア語も、名詞は男性、女性、中性の三つの性別がある。

それが単数、両数、複数の区別と変化を伴う。ここまでがいい。

問題は名詞と動詞の変化の仕方で、ナーラキア語はこれが圧倒的に多い。格形の変化は八種類に及び、名詞だけでも二十四種類にも曲用するのだ。

つまりローゼンディア語やダルメキア語には無い曲用があるわけである。

曲用とは名詞の変化のことで、動詞の変化を活用という。

ナーラキア語では動詞の活用は一般的に十種類に分けられているが、これは学者によって分類に違いがある。

つまり襲撃者が話しているのはナーラキア語なま訛りのダルメキア語なのだ。

言葉の出現した時系列的には正しいが、起きている事態は明らかに異常だった。

ナーラキア語は死語なのだ。今ではその母語話者はいない。いないはずだ。

だが現実に古代の地下遺跡の中で、ナーラキア語なま訛りのダルメキア語を話す連中が、アイオナ達に矢を射掛けてくる。

こんな言葉を話しそうな連中といたら一つしか心当たりがない。

いや、こんな言葉を話してるかどうかは判らない。

こんな言葉で話し掛けてきそうな連中といた方が正確だろう。

おそらくはドルム人。まずそれ以外は考えられない。

でなければこんな妙な言葉でわざわざ話し掛けてきたりはしないだろう。

「逃げるぞ」

ダーシュは言うなり駱駝に乗った。松明はもう火を付けてある。

同じくアイオナも急いで駱駝に乗ろうとしたが駱駝が坐ってくれない。口をもごもご動かしてるだけで坐る様子がない。

アイオナは慌てた。駱駝は馬よりも高い。必死によ攀じ登ろうとしていると、ダーシュが背中を引っぱり上げてくれた。

「身を低くしろ！ 走るぞ！」

ダーシュはアイオナを急かして、駱駝の綱を引き

ながら走りだした。アイオナは何とか駱駝に<sup>また</sup>跨がってしがみついた。

背後から矢が飛んでくるが、どうも駱駝に<sup>あた</sup>中るのを恐れているらしく、いまいち勢いが無い。

二人はひたすら駱駝を走らせ続けた。駱駝は馬ほどの速度は出ないが、その分長く走ってられる生き物である。松明を先頭に二頭の駱駝は地下通路を走り続けた。

随分走ったと思ったとき、道が徐々に上りになっているのにアイオナは気付いた。

そしてまた不意に開けた空間に出た。

「ここで少し待て」

ここでもダーシュは言って、駱駝に乗ったまま偵察に出た。

松明の火が移動する様子から、最初に入った広間と同じような作りの空間であることが予想できた。

ダーシュは一回りして戻って来た。

「最初の広間と同じような作りだな」

「じゃあ……」

期待を込めたアイオナの呟きにダーシュは頷いて応じた。

「ああ、出口が近いかも知れん」

広間を突っ切ると、反対側の地下通路の入り口が見えた。

「ねえ、さっきの人達……」

「ドルム人だと思う」

「やっぱり？ でなければあんな変な言葉で話し掛けてこないわよね」

「だがナーラキア帝国もドルム人を圧迫していた。イビドシュ杉が理由でな。その敵の言葉をドルム人達が話しているとすれば、悲しいな」

ダーシュの言葉には同情が籠もっているとアイオナは感じた。

「でも、ドルム人達は独自の言葉を話すらしいし、あれは余所者向けの言葉かも知れないわ」

ドルム人達に最初に立ち開帳<sup>はだ</sup>かった敵、それも恐るべき敵がナーラキア人だ。

一体どれほどのドルム人達が殺されたのだろうか。アイオナには想像も出来ない。

だから敵の言葉を学び、それを今の時代まで保持していたのか。

そして現代のダルメキア語も同じように学んだが、習熟度の差が訛りとなって現れた。

彼らはイビドシュ杉を守りたいだけだという。実際に彼らと親しくなった人間は数少ないらしいし、それがどこまで本当かは判らない。

判らないが、その事について考えるのは気分の良いものではなかった。



「悲しいわね」

「ああ。だからといって俺達が殺されてやる理由にはならん」

「ええ……」

とても<sup>ゆる</sup>緩やかな上り坂を二人は黙って進んだ。

途中で道が急角度で折れていた。しかも少し進むと小さな小部屋に出た。何もない部屋だ。反対側にまた通路の入り口がある。

ひょっとしてまだまだ地下通路は続くのかも知れない。

そう思ってアイオナはぞっとした。嫌気がさしたと言うよりも<sup>おそけ</sup>怖気が走った。

ダーシュの様子を窺ったが、<sup>たいまつ</sup>松明を手に持った後姿からは何も感じられない。

部屋の入り口で一度駱駝を止めたが、すぐにまた進み始めた。

そしてその通路もまた<sup>しばら</sup>暫く行くと折れ曲っていた。

うんざりしながら通路の角を曲がった瞬間、遠くに白い物が見えた。

「アイオナ！」

「ええ！」

ダーシュが駱駝を前に進めた。進むほどにその白い光がはっきりしてくる。

「出口だ」

声に喜びが表れている。ダーシュが最初に外に出た。すぐにアイオナが続いた。

ちらと見た感じ、どこかの山の中腹のようだったがよくは見えない。

長い間地下にいた為に、急な光が眩<sup>まぶ</sup>し過ぎるのだ。

二人は目を閉じたり開いたりして光に目が慣れるのを待った。

目が開けられるようになると辺りを見回した。

背後には山脈が見える。前方には山脈はない。

つまり背後の山脈はイビドシュ山脈ということだ。

ここも偽装などはないものの、まともな出口にはなっていなかった。おそらくは人間など来ない場所なのだろう。

いきなり出口が外に向かって開いていて、その下は斜面になっている。道として使えそうな経路は出口から少し離れて左の下手にあった。

それほど急な斜面ではないが、そこまでは駱駝を降りて引いていく必要がある。

下りの岩肌を道になりそうな所まで降りると、アイオナは遠くへと目を向けた。

山の斜面を降りきった向こうには、あの見慣れた

砂礫の地平と、棘だらけのしぶとい植物が点在しているのが見えている。

「今どの辺にいるのかしら？」

「大体は判っている。任せろ」

「もちろん頼りにしてるわよ」

アイオナの言葉にダーシュは少し眉を上げた。

意外な言葉を言ったつもりはないが、相手はそう思っているという事か。

その事が不本意だったがまあ仕方ない。何よりも今は再び地上に出られたことを喜びたい。

天には燃え盛る<sup>アクション</sup>太陽神の姿がある。位置から考えて、そろそろ本気で輝き出す頃合いだろうか。

朝と言うには遅く、昼というには早い、そんな時間帯だろう。

アイオナがアンケヌに來た頃は夏の初めで、季節的にもアウラシールの陽光は十分強烈だった。

余りにも強烈なので、本当にこれがあの偉大なるローゼンディア王家の神なのかと、故郷にいた頃とは余りに違う日輪の姿に驚いたものだ。

しかし今こうして、叩き付けるような——そう、アウラシールでは陽光に対して『叩く』という動詞形を使うのだが——日射しを浴びていても、無慈悲な強烈さは感じない。

というか、その強烈さを歓迎したい気分だった。

以前だったら広大な地下迷宮とか、地下遺跡と聞いたら胸がときめいたろうが、今はもう御免だ。少なくとも当分は。

「本当ならここで休憩をしたいが、まだ山脈のすぐそば傍だ。またドルム人が現れないとも限らん。このまま山を下るが、いいか？」

「もちろん！」

アイオナは自分でもうきうきしながら答えた。

## 第二十章 少女

予想していたよりもケッサラのオアシスは大きかった。遠くからでもそれは判った。地に広がる緑の量が多いからだ。

ここまで来ればディブロスの町までは半日の距離になる。まだ気が早いと思いつつもアイオナは安堵した。

以前訪れたときにも目を奪われたが、ケッサラを囲む壁は白く、艶<sup>つや</sup>やかで、おそらくディブロスから<sup>もたら</sup>齎された物だろうと思われた。

この近隣の砂漠で取れた石だとは思えない。

そもそも砂漠では石は貴重品だ。普通は建材として日干し煉瓦を用いる。ジルバラ地方などでは特にその傾向が強く、石は財力の證<sup>あかし</sup>であり、贅沢品なのだ。

だからこの壁のことをケッサラの人々も自慢にしているらしい。

地下通路の出口のあった所からケッサラまでは近かった。

駱駝で走っても二刻はかからない距離であり、これであの地下通路が見付けられていないとしたら、やはりドルム人の為だろうかと思った。

二人はちょうど昼を過ぎた頃にケッサラのオアシ

スに到着した。

宿は大通りに面した、一般客用のなるだけ高級そうな店を選んだ。

寝心地はもちろんだが、それよりも信用を買いたかったからだ。荷物の安全や、駱駝の世話をしっかり確保しておきたかったのだ。

もちろん地下通路での経験への反動があったのはアイオナも自覚していたし、ダーシュもそうだと思う。

高い宿を取ると言ったときのダーシュの嬉しそうな顔は<sup>みもの</sup>見物だった。

ところが通りの西側の店にするか、東側の店にするかで、ダーシュと意見が異なった。

「わたしの目を信じなさい」

アイオナはあくまで譲らなかった。こういうことなら、自分の得意領域だからだ。

剣を振り回す力はなくても、商売柄多くの人を見ている。

どの店が信用出来て、どの親父が信用ならないかなど、ほとんど一目で分かる自信がある。

「それは本当に当てになるのか？」

うんざりしたようにダーシュは言った。

普段は<sup>ひきし</sup>緊縮まった目許も情け無さそうに下がっている。

どうやらまったくアイオナを信用していないようだった。

不愉快だったが、結果を突きつけてやれば納得するだろう。

絶大な自信があるがゆえに、アイオナは怒る気にもならなかった。

「信用出来るかどうかなんて、店構えと店主の顔を見れば判ることよ」

「俺にはその根拠がどうしてもわからん」

「経験が足りないのね。もっと人を良く見た方がいいわよ」

「それは皮肉か？」

「いいえ。夫に対する思い遣りに満ちた助言よ」

父の言葉を思い出す。

とにかく人の相<sup>そう</sup>を見るべし。信用が置けるかどうかは相に現れる。外見ではない。相を見ることだ。

そして隠しているか、それともくすんでいるかに注意しなさい。

くすんでいる人間には良いことはない。その人は魂が<sup>よど</sup>澱んでいるか、でなければ悪いことを企んでいる。注意することだ。

隠している人には敵意を持たれているか、警戒されているかだ。

それはその人が自分の能力や技、心をお前に見せ

まいとしているからだ。

敵意を持たれているなら理由を考えなさい。警戒されているならば、自分は敵ではないという<sup>あかし</sup>證を見せればいい。

これらを良く見極めなさい。

<sup>おおむ</sup>概ね、人間は一見で全てが知れる。知れないのは目が無いということだ。目を磨かなければならない。

顔の造作や体格、服装などはどうでもいい。

その人と出会った状況、その人がどういう人であるか、どれだけの力を持っているのかは相に現れる。

<sup>うわべ</sup> <sup>みすぼ</sup>上辺の見窄らしさや、<sup>だま</sup>上辺の豪華さ、虚勢に欺されてはいけない。

信用とはそういったものとは無縁なのだから。

世の中の評価はどうでも良い。大切なのはアイオナ、お前がどう評価するかということだ……。

「だいたい、一目で判るものなのよ」

父からの受け売りを口にしながらアイオナは、両方の店を順番に見に行った。

そして軽く<sup>いちべつ</sup>一瞥しただけで、アイオナは西側の店を選んだのだ。

ダーシュにはそれが判らないのだった。

「西側の店の方が働いている人たちの相がいいわ」



同じように繁盛はんじょうしているように見えても、宿の中は大違い、なんてこともあるのだ。

恐いのはその『違い』を見抜ける客が少ない場合で、そんな時はこのように二軒の店が並立することになる。

「……これだけ違えば、普通もう少し客入りに差がつきそうなものよね」

「何を言っている？」

「素人は黙ってなさい」

ダーシュは顔をしか顰めた。

「いまさらとやかく言わないが、人前であまり威張った態度は取るな」

「あら、わたしのどこが威張っているのかしら？」

アイオナは首を傾げた。ダーシュは溜息を吐いた。

「お前にとっては普通でも、ここらに住んでる連中にとっては普通じゃないのさ。店主との掛け合いなど、本来は俺にしか出来ない役目だぞ」

「別に任せてもいいわよ」

宿さえ決めてしまえば、細かい遣り取りなどダーシュに任せても差し支えない。

「そうね。外国人とはいえ女のわたしが交渉するよりも、あなたが行った方がいいかもね」

「では西側の店でいいんだな？」

「ええ。そうしてちょうだい」

「あまりうろうろするなよ」

「わかってるわよ」

ダーシュが駱駝を連れて宿に向かっている間に、アイオナは近くの休憩所で涼むことにした。

賭け札やイエッダルルの勝負をしている老人たちや、町に着いたばかりで一息入れている商人の姿がある。

イデラ語で交わされる世間話のささやき声や、賭け札の手を言い合うのが聞こえる。それに混じって卓の上をさいころが転がる乾いた音が、アイオナの耳に入ってくる。

なんと水は無料らしい。ただし一杯だけ。

おおがめ大甕からひしゃく柄杓でく汲まれた水は十分に冷たく、アイオナは歓喜して飲み干した。

「もう一杯どうだい？」

目を細めて休憩所の管理人が聞いてくる。

「一杯、一ラムだ」

最強の商売だと思った。

二杯目の水を飲みながら足を休めていると、休憩所の裏手から男の怒鳴り声が聞こえてきた。

最初は無視していたが、少し聞いていると子供の泣き声と一緒に聞こえてくる。気になって席を立った。

声を頼りに休憩所横の小道を進み、大通りから一本入った通りに出た。すぐ目の前に壺つぼを売る店があり、怒鳴り声と泣き声はその店の中から聞こえていた。

「ごめんなさいごめんなさいご主人様!!」

店の舗石ほせきに額を擦りつけて少女が謝っている。その横では主人と思しき男が、顔を真っ赤にさせて怒鳴り続けている。

「うすのろめ！ 馬鹿め！ 誰が主人だと思っている！」

イデラ語ののしで罵りながら、男はどんどん興奮していくように見えた。

大方、使われている娘が、売り物の壺でも割ったのだらうと思って店内を見回したが、割れた壺の形跡は無い。

男は店主だろうと察せられるが、アイオナの方を見た。

アイオナは軽く礼をしたが、男はまるで見なかったように無視をした。再び足許の少女を怒鳴り、蹴飛ばした。

平伏していた少女の姿勢が崩れると、男はそれを罵り、傍らかたわに立てかけてあった棒を手にとった。

店先の張り布を掛けたり下ろしたりするときを使う棒だが、あろうことかそれで少女を打った。

硬い、良く締しまった木の棒である。潰つぶれたような悲鳴が上がった。

男は喚わめき、唾を飛ばしている。もう一度少女を蹴った。正気とは思えない。

「うすのろめ！ 汚らわしい奴隷め！ 誰が主人だと思っている！」

再び棒で打った。また打った。更にもう一撃加えようとしたところでアイオナが叫んだ。

「やめなさいっ！」

事情は知らないが黙ってはおれなかった。男が口にした「奴隷」という言葉が癩しゃくに障さわったのも確かだが、何よりこのままでは少女は殺されてしまうと思った。

「あなたどういうつもりなの！ こんな子供を叩き殺すつもりなの!?!」

僅わずかの間、男はぽかんとした顔でアイオナを見ていたが、すぐに悪意ある相を見せた。

男の昏くらい情念が泥のように体に纏まとわり付いてくる気がして、アイオナは胸むかつが嘔いた。

こいつは悪人だ。アイオナはそう判断した。

それとなく後ろを見て人通りを期待したが、どうもこの通りは裏通りであるらしく、通行人の姿は無い。何かあった場合にそれは困る。

さりとてこのまま退き下がるわけにもいかない。

とりあえず少女を逃がさなければならない。

「あなた、もう行きなさい。あなたの主人はわたしと話があるのだから」

おび  
怯えた目でアイオナと主人を見ていた少女は、静かにその場を離れようとした。途端に再び棒で背中を打たれて倒れた。

「誰が行っていいと言った!!」

「やめなさいっ！」

アイオナはとっさ  
に咄嗟に棒を掴んだ。男が馬鹿にしたような目でアイオナを見た。

「何だお前？ 俺のやることに文句でもあるのか？」

女の癖に。言葉には出さないが、態度が、顔がそう言っていた。

「引っ込んでろ。外国人が。偉そうに」

「……あなたの奴隷なの？」

言っていて吐き気がした。ローゼンディアには奴隷は居ない。奴隷制度は無い。外国人でさえ、私有奴隷を国内に連れてくることは禁じられているのだ。

奴隷制度はヴァリア教における最大の禁忌きんきと  
言っ  
ていい。

小さい頃から奴隷制度の否定を刷り込まれて育っているアイオナにとって、眼前にその事実を見るだ

けでも気持ち悪く、堪え難いことなのだ。

ましてや大人の男が少女を打ち殺そうとしているなど、それだけでも十分に醜悪で悍ましい。それに加えて少女が奴隷だなどとくれば、嫌悪で眩暈がしそうだった。

「俺の奴隷に俺が何をしようと勝手だ」

唇を歪めた物言いに、アイオナは怒りで目の前が眩んでくるように感じた。

軽く深呼吸をした。落ち着かなくては。自分が遣り損ねたら、つまり今、この場で事を収められなければ、男は少女を叩き殺すだろう。

いや、場合によってはアイオナに見せつけるためだけに、男はそれを遣りかねない。

そう考えてアイオナはぞっとした。想像される悪意に身が震えた。

「あの子を買うわ」

これしかないと思った。あとで自由民にしてやればいい。

今はこれしかない。

「あーん？」

男は大仰に首を傾げた。

「おい外国人。お前何言ってるんだ？」

「あの子を、買う、と言ったのよ」

「ふーん……」

男は身を引いてアイオナをじろじろと見た。嫌な眼付きだった。値踏みされている。そう思った。

「お前、ローゼンディア人だろ？」

その問いかけに顔から火が出そうになった。耳が熱い。おそらく今の顔は真っ赤だろう。

屈辱と羞恥、怒りで顔を上げることが出来ない。自分の足許を見つめたまま、アイオナは息を荒くしていた。

「ローゼンディア人が奴隷を買うのかよ」

鼻で笑われた。

「いいぜ。いくら出す？」

ぬっと手が突き出された。その無骨な<sup>てのひら</sup>掌を見て、アイオナは<sup>いくばく</sup>幾許かの理性を取り戻した。懐から皮袋を取り出して、宝石を幾つか店の台上に並べた。

男の目の色が変わった。

「……これだけあれば充分でしょ」

男は答えなかった。しきりに唇を舐めている。少女とアイオナを暫く見比べたあげく、

「その皮袋の中味全部だ」

あろうことかそんなことを言った。

「な……」

アイオナは息を呑んだ。開いた口が<sup>ふさ</sup>塞がらないとはこのことだった。どこまでこの男は下劣に出来ているのだろうと思った。

人とは、いや人間とはここまで羞恥心の無い生き物だったか、と神官の如く怪しんだ。

男は少女の所まで歩いて行って、なんと踏みつけた。

「嫌ならいいんだぜ。その代わり口を出すなよ。俺がこいつを殴ろうが、蹴飛ばそうが、お前には関係無いんだからな」

「ならこの店を買うわ」

アイオナは言った。この宝石袋全部ならこの程度の店が十軒は買える。

本来ならば絶対にあり得ない取り引きだったが、今更やめるわけにもいかない。少女の<sup>いのち</sup>生命が懸かっているかも知れないのだ。

「てめえ、何馬鹿なこと言ってるんだ？ 俺はこいつと、その皮袋ならいいと言ったんだぜ？」

踏み躪<sup>にじ</sup>られるたびに少女は哀れな声で<sup>ゆる</sup>赦しを請うた。それを聞いているだけで、ここから逃げ出したくなる。

アイオナは息を吸い込んだ。

——父様。ごめんなさい！

心の中で父親に<sup>わ</sup>詫びた。

「……いいわ。この袋の宝石全部とその子を交換しましょう」

男はふへへと嫌らしく笑い、引ったくるようにし



て宝石袋を奪った。台上の宝石も拾い上げて皮袋に  
しま  
蔵い込む。男は大事そうに宝石袋を懐に入れた。

「立てるかしら」

アイオナは少女に手を差し伸べた。骨でも折って  
いなければいいが。あれだけの暴力を受けたのだ。

「何勝手なことをやってるんだ？」

男の声にアイオナは振り向いた。まだここに居た  
のか。店の奥にでも去っていればいいものを。

だが、男が口にしたのは驚愕すべき内容だった。

「そいつは俺の奴隷だぞ」

「あ、あなた何を言って……！」

男が近づいてくる。アイオナは本能的に危険を感  
じて<sup>あとじさ</sup>後退った。

「お前なんか知らない」

顔を近づけてきてそう言う。まずい、と思った。

力の釣り合いが、取り引きの釣り合いが崩れてい  
る。宝石袋を渡すまでは確かに感じられた商売の感  
じが失われている。

首筋がちりちりと焦げるように感じた。何か言わ  
なければ。

過ちを犯したのだ。

今まで培<sup>つちか</sup>ってきた商売人としての勘がそれを告げ  
ている。大変な損失を犯したのだ。そして今、更に  
危険な深みへと<sup>はま</sup>嵌り込もうとしている。

「消えろ。外国人。俺に叩き出されない内にな」

アイオナは思考が白く塗り潰されるのを感じた。何をどうしたらいいのか分からなかった。ローゼンディア語で「卑怯者！」と叫ぶと同時に男に飛び掛かっていった。

男はアイオナの体を受け止めると手首を<sup>ねじ</sup>振り上げた。全く歯が立たない。悔しかった。

激情が再び叫び声になって<sup>ほとばし</sup>迸りそうになったとき、店の入り口に人影が落ちたのを見た。

人影は強い日射しを背に受けて立っている。

白い<sup>ケス</sup>長衣と、日射しで生まれる黒い影とが合わさって出来ている。

全く真逆の色彩でありながら、どうしてこうも調和しているのだろうか？

「ああ！ これはこれは！ いや何でもないんですよ！ 何でも！」

途端に男は明るい声を出した。この店で起こったこと、今まさに進行している犯罪を知られたら困るのはこの男だ。第三者には何も気付かれずにご退場願いたい、そんなところなのだろう。

「この外国人がいきなり暴れ出しましてねえ！」

弁明をしながらアイオナから手を放して<sup>ちんにゆうしゃ</sup>闖入者に歩み寄る。

アイオナも闖入者を見た。そして息を吐いた。

「ああ……」

ダーシュだった。

「ちょうど困っていたところだったんですよ！」

相手が腰に剣を提げた、見るからに砂漠の戦士という風体ふうていをしているからだろうか。

男は陽気に、努めて友好的な雰囲気を作り出そうと努力していた。

アイオナは何も言い立てることはしなかった。

何故なら、ダーシュの姿を見た途端に悟ったからだ。

ダーシュは大体の事情を察している。そう思った。信じられた。

「猿芝居はやめろ」

男とは反対に、とても友好的とは言えない口調でダーシュは呟いた。

「はあっ？ 何を言っているんですか？」

男は不思議そうな顔を作ってみせた。わざとらしい仕草だと思った。だが、このまま押し通すつもりらしい。ダーシュはどうするのだろうかと思った。

ダーシュの行動は極めて単純なものだった。いきなり殴りつけたのだ。しかも一撃ではない。殴り続ける。

男は潰れたような悲鳴を上げた。蹠よ踵ろめきながら手で顔を覆った。その手を目懸けてダーシュの拳が

うな  
唸った。お構いなしというやつだった。

ダーシュは男の腹を蹴り上げた。

「おげえええっ！」

男は吐き、床に倒れかかった。酸っぱい臭いが店内に漂った。

アイオナは身が縮むように感じた。痛みで大混乱をきたした男に対し、ダーシュの様子には何の変化も無い。表情には怒りの色は見て取れない。黒い瞳は卓上の棗椰子なつめやしでも見るように男を見下ろしている。

慣れている——とアイオナは思った。

ダーシュはこういう修羅場に、とても、慣れているのだ。

むんずとばかりに、ダーシュは男の髪の毛を掴んだ。そのまま躊躇ためらうことなく近くにあった台の上へと男の顔を叩きつけた。先程アイオナが宝石を拵げた台だ。

男の鼻は既に碎けていたが、この一撃で前歯がまとめてへし折れた。鼻と口から血を噴きながら男は床に倒れ、のたうち回った。

その男をダーシュは蹴り、踏みつけた。

それから売り物の壺を掴むと男の頭に叩きつけた。派手な音がして壺が碎け散った。男の頭が裂け、そこからも血が噴き出した。

男は気狂いのような声を上げて喚<sup>わめ</sup>き、顔と頭<sup>かば</sup>を庇うようにして丸くなった。

そんな男にダーシュは馬乗りになってひたすら殴り続けた。

男が悲鳴を上げる、ダーシュが殴る、血が飛び散る、男が悲鳴を上げる、ダーシュが殴る、血が飛び散る……<sup>しばら</sup>暫く<sup>あぜん</sup>啞然と眺めていたが、このままではダーシュは男を殺してしまうと思った。

アイオナは我に返って声を上げた。

「ダーシュ！」

「なんだ？」

きちんと返事をし、ダーシュは血まみれの拳<sup>こぶし</sup>をびたりと止めた。

「……このままではその男は死ぬわ」

「殺すつもりだ」

やはり、と思った。アウラシール人らしい激しさだ。

しかもダーシュの様子は冷静だ。声にも昂<sup>こうふん</sup>奮は無<sup>な</sup>い。それだけに本気の度合が感じられて恐ろしい。

一体どこから男とアイオナの遣り取りを聞いていたのだろうか。

「こいつは契約を破り、お前を侮辱した。殺されても文句は言えん」

「こんなところで揉め事を起こしてどうするの！」

ここはオアシスだ。オアシスでは暴力沙汰は御法度ではないか。

「問題無い。町の長老に届け出ても<sup>とが</sup>咎めは受けないさ、なあ？」

ダーシュは男に問いながら襟首を掴み上げた。

「貴様は盗人であり、俺の妻を侮辱した。砂漠の男はその侮辱に<sup>むく</sup>讐いる必要がある。それは判るな？」

潰れた顔に向かってイデラ語でささやきかけると、男は何か言うように呻き声を上げた。

鼻と口から血と息を吐き、息を吸い、裂けた唇の間から血まみれの<sup>はぐき</sup>齒<sup>のそ</sup>茎を覗かせながら、必死に何か言おうとしている。

「弁解は要らん。死ね」

ダーシュの手が男の首に掛かった。絞め殺すつもりらしい。

男が喚いた。<sup>とさつば</sup>屠殺場の家畜のような声を上げた。

「……だがまあ我が妻に赦しを請い、それが聞き届けられれば話は別だ。お前の<sup>いのち</sup>生命の相談をしようじゃないか？ さあどうする？」

暗い瞳で男を睥みながら、ダーシュは優しく問いかけた。

男は激しく<sup>うなず</sup>頷いた。店の床石に頭がごつごつぶつかっているが気にならぬらしい。それくらい必死に頷いていた。

「良し」

ダーシュが離れると男はアイオナに平伏した。もはや言葉にならない呻き声だったが、とにかくひたすら謝罪をしていることだけは理解出来た。尤も、<sup>もっと</sup>生命が懸かっているのだから当たり前だが。

「さて我が妻よ。この男を赦し、その<sup>いのち</sup>生命を<sup>つぐな</sup>贖わせてやるか？」

万一男が反撃してきた場合を予想しているのだろう。油断なく<sup>かたわ</sup>傍らに立ってダーシュが聞いてくる。

アイオナは視界が明瞭になるのを感じた。今し方の恐怖と混乱は影もなく消え失せ、落ち着きと自信が戻ってきた。

「……そうね」

アイオナは考える振りをした。<sup>もっと</sup>尤も答えはもう出ているのだが。

「ではあなたの懐にある宝石袋をいただきましょうか。それをもってあなたの<sup>いのち</sup>生命とするわ。どうかしら」

<sup>は</sup> <sup>つくば</sup> 這い蹲った男の背中に、<sup>ふる</sup> 顫えが走るのが見えた。

<sup>わず</sup> 僅かな間、男はそのまま固まっていたが、やがてのろのろと懐から宝石袋を取り出して差し出してきた。ダーシュが受け取ってアイオナに渡した。確認しろということだろう。

アイオナは素速く中味を台上に拵げて確認した。

過不足無し。宝石は全て揃っていた。

頷いてダーシュに報<sup>しら</sup>せた。

「その娘、自分の部屋に行って荷物を取ってこい」

いきなりダーシュに話しかけられて驚いたのだろう。少女はびくっと身を顫<sup>ふる</sup>わせた。

「お前の身柄は我が妻が買い受けたのだ」

「はい」

素直に頷き、娘は店の奥に消えていった。すぐに小さな手荷物を持って戻ってきた。

「それだけか？ 良し、行くぞ」

ダーシュは娘を先に出し、アイオナに手を伸ばした。

「さてゆこうか。我が妻よ」

アイオナはその手を取った。躊躇<sup>ためら</sup>いなく。

店を出る時にアイオナは振り返った。

男は、呆けたように自分の店の床に坐り込んでいた。

破壊された体と、破壊された悪巧みを抱えたまま。

＊

「あまりうろうろするなと言っただろう」



「ごめんなさい」

不満げに文句を言うダーシュに、アイオナは素直に詫<sup>わ</sup>びた。

「この子の悲鳴が聞こえたのよ。それでつい……」

「お前らしいな」

ダーシュは軽く唇の端を上げた。不思議と馬鹿にされている気はしなかった。

しば<sup>しば</sup>暫く無言で歩いた。

「……それで、あなたはどこから話を聞いていたの？」

「お前が宝石袋を引ったくられるところからだ」

なんだ。それでは一番恥ずかしいところは見られていないではないか。

無様に混乱した。その原因になる遣り取りを聞かれたわけではなかったのだ。

アイオナは安堵した。

しかし、ならばどうしてあんなに適確にダーシュは動けたのだろう。

不思議に思ってアイオナはダーシュを見上げた。

「どうした？ そんな顔をして」

「……ねえ」

「なんだ？」

「それならあなた、何でわたしが宝石袋を出したか解<sup>と</sup>ってないんじゃないかしら？」

「この娘を譲り受ける対価だということか？ それ  
は聞こえたさ。奴め大声で喚<sup>わめ</sup>いていたからな」

ダーシュは含み笑いをした。

「宝石袋をそのまま差し出そうとしているところを  
見たときには肝を冷やしたぞ。だがお前はローゼン  
ディア人だ。お前の行動は、正しいのだろう」

優しい物言いだった。その言葉を聞いた途端、急  
に涙が溢れてきた。

「お、おい、どうした？」

ダーシュが慌てている。だけど止められない。心  
の一部が急に弛<sup>ゆる</sup>んで涙が止まらない。悲しいわけ  
じゃない。だけど涙が溢れてくる。

アイオナは蹲<sup>しゃが</sup>み込んだ。普段の状態に戻らなけれ  
ば。

「奥さま……」

おずおずと少女がイデラ語で声を掛けてくる。不  
安そうな顔をしていた。その顔には痣<sup>あざ</sup>があり、唇が  
切れている。造作が悪くないだけに痛々しい。

「……ごめんなさい。あなたの方が大変だよね」

にっこり微笑みかけてやると、少女もぎこちな  
い笑みを浮かべてくれた。それで涙はぴたりと止ま  
った。

「よし」

気合いを込めてアイオナは立ち上がった。体に力

<sup>みなぎ</sup>  
が漲ってきた。

「わたしはアイオナ。こっちはダーシュ。訳あって今は夫婦なの」

「……その言い方はないだろう」

ダーシュが情けない声で苦情を言ったが、真実なのだから仕方ない。

別に悪気は無いし、他に言いようも無いのだ。

それにしてもダーシュを見直さねばならない。

あの下劣な男との遣り取りの時、ダーシュはすぐに店に入ってこようとはしなかった。

外で男の喚き声を聞き、少し離れたところからアイオナと男の会話を聞き、状況を大まかに理解してから、絶好の時に助けに入ってくれた。

これは大いに賞賛されるべき商売感覚と言っている。

「ダーシュ、わたしさっきの言葉、取り消すわ」

「なんだいきなり」

「あなたは商売の素人なんかじゃない。立派な商売人よ」

「お前な……その判断は一体どこから……」

「あなた、名前は？」

アイオナはダーシュから少女に顔を転じた。

「はい。あたしはスイサと言います。真面目に働きます。怠けたりいたしません。一生懸命働きます。

これからよろしく願ひいたします」

言うなり、スイサはいきなりその場でアイオナとダーシュに平伏した。

アイオナは戸惑ったが、道行く人は誰も気に留める様子はない。一瞥<sup>いちべつ</sup>すらせずに通り返り過ぎていく者もある。

「奴隷のすることだ。別に珍しいものではない」

ダーシュがささやいて教えてくれたがアイオナは落ち着かない。とにかく手を取って立たせた。

そんな真似をする必要はないのだと、スイサに教え諭<sup>さと</sup>そうかとも思った。

しかし逆に混乱させるだけではないだろうかと考え直し、止めた。

育った環境が、受けた教育がスイサとアイオナとは違いすぎる。

スイサは不安気な色を瞳に宿している。アイオナは微笑みかけた。するとスイサも微笑んだ。

焦る必要はない。順々に教え諭していけばいい。

人間であるということはそれだけで途方もなく尊いことなのだ。

ヴァリア教の教えではそうなのだ。そしてそれは正しいことだとアイオナは思う。

「あなたの服を用意しないといけないわね」

スイサは服とはちょっと言えないほどの汚れた、

ぼろを着ていて、しかも臭いが酷かった。

奴隷の価値は労働にあるのだから仕方のないことではあったが、まずはここから改めねばならない。

「取り敢えず宿に入って話をしよう」

ダーシュの提案に従って三人は宿に入った。

投宿の掛け合いを纏めたのはダーシュだったが、その時には二人と言ったはずだ。

だがスイサが加わっても何も文句を言われなかった。一瞬、宿の人間の顔に驚くような色が現れたがそれだけだった。

やはりこちらの宿にして正解だったとアイオナは思った。

旅行者にはかなり凄じい外見の者もいるから慣れているのか、それともこの宿屋が大きく立派だからそのくらい問題にもならないのかは解らないが、なんにせよアイオナとしてはその気前の良さが有り難かった。

寛ぐための部屋と寝室とは別になっており、更に小さいながらも浴室まで切ってあった。

風呂を見たアイオナが小さな歓声を上げると、宿の主人は自慢気に目を細めた。

「ローゼンディアのお客さまには皆、ご満足いただけております」

これがこの宿の売りの一つなのだろう。アイオナ

は当たりを引いたと思った。

「お使いの時には誰か宿の者をお呼び下さい。湯を運ばせるように致します」

部屋を案内すると主人は下がった。

主人はアウラシール人に見えたが、実に<sup>りゅうちょう</sup>流暢にローゼンディア語を操った。はっきり言ってダーシュよりも上手かった。

「ローゼンディア人は本当に風呂が好きだな」

感心しているのか呆れているのか判らぬ口調でダーシュが呟いた。

「当然よ」

<sup>す</sup>隙かさず答えた。

アンケヌでは風呂に苦勞することはなかった。あそこは水が豊富にあるし、素晴らしいことに、何とも素晴らしいことに、アンケヌには温泉があるのだ。白く美しい、素晴らしい湯の出る温泉である。

残念ながら、その歴史有る見事な地下温泉も、ローゼンディア人がアンケヌに移住するまでは質素というか、粗末なものだったらしい。

だがローゼンディア人が移住してより二百年、アンケヌの地下温泉は改修やら補強やらを繰り返してきた。

今では非常に美しい、その湯本来の素晴らしさに見合った姿を取り戻している。

しかもその資金は全て、ローゼンディア人の寄進によってなされたものだ。

そしてそれは当然のことであるとアイオナは思っている。あれほど見事な温泉を粗末なままに放置して置くことなど出来ようはずもない。

昔からアンケヌ市民はもちろん、交易商人や、周囲の部族民まで使っておきながら、どうしてあんなにいい加減な施設で我慢していたのか。全く理解しかねる。

「ああ……アンケヌの温泉に入りたいわ」

「あの地下温泉のことか？」

「そうよ。あの匂い。湯の手触りが懐かしくて堪<sup>たま</sup>らないわ」

「どこが？ 卵の腐ったような臭いではないか」

ダーシュは嫌そうな顔をした。

「風呂に入りたいなら汲<sup>く</sup>み上げた水の方が良いだろう。妙な臭いが付かなくてすむしな」

この男、正気だろうかとアイオナは思った。あの温泉の良さが解らないのか。

「……なんだその憐<sup>あわ</sup>れむような目は」

「あなたの貧しい価値観を憐れんでいるのよ」

鼻先で笑ってやる。

折角アンケヌに生まれたのに、あの温泉の素晴らしさを理解しないなんて。

「……」

「……」

二人は<sup>しば</sup>暫し無言で見つめ合った。

お互いに相手を非難する気持ちが視線に籠もり、結果、鏡に映したように同じ眼差しで相手を見ていたのだが、そのことには二人とも気付かなかった。

これは……風呂の素晴らしさをダーシュに教えてやらねばならない。アイオナはそう考えた。

とてもローゼンディア人らしい思考である。

ダーシュが風呂好きなのかどうかを考慮していただけでなく、世の中には風呂が嫌いな人間もいるという事を理解していない。そこがまさしくローゼンディア的であると言えた。

そしてこれ又ローゼンディア人らしい名案がアイオナの頭に浮かんだ。

「そうだわ。あなたが入るなら洗って上げるけど？」

問いかけると、ダーシュはきよとんとした。目が丸くなるというのはこういう顔のことを言うのだろう。本当に<sup>きよ</sup>虚を突かれたらしい顔だった。

「は？」

「は？ じゃないわよ。だから、あなたが入るなら洗って上げると言ってるの」

「な、なにをいきなり!!」



明らかにダーシュは動転していた。その様子に今度はアイオナの方がきょとんとしたが、すぐにその驚きの理由が判った。

おそらくアウラシールでは、女が男の体を洗うという習慣が無いのだろう。

「あなたひょっとして照れてるの？」

意地悪く尋ねてやった。

「照れてなどいないっ！」

ダーシュは全力で否定してきた。つまり、照れているということだった。

「ふうん、そう……なら別にわたしに洗われても構わないんじゃない？」

「そんな、奴隷のする、ような真似を、お前がする必要は無い」

ダーシュの言葉が急に片言になった。面白い。凄く面白い。

「そう？　じゃあスイサにやらしてもらおうかしら？」

ダーシュの体がぎくりと固まるのが見えた。見ていて面白くて堪<sup>たま</sup>らない。

「ねえスイサ、早速で悪いんだけど夫の体を洗ってもらえるかしら？」

先程からスイサは傍<sup>そば</sup>に待機していた。雑事を命じられるのを待っているようだった。

全身で期待しつつ待ち構えているという感じなのだ。遣る気があるのは有り難いが、別に働いてもらう目的で助け出したわけではないので、アイオナとしては少し<sup>きおく</sup>気後れしてしまう。

ところが予想していた威勢の良い返事がない。

アイオナが目を向けるとスイサは顔を<sup>あか</sup>赧くして立ち尽くしていた。どうやら本当にアウラシールにはそうした風習が無いようだ。

そういえば以前、父に聞いたことがあるのを思い出した。

ローゼンディアでは女が男の体を洗ってやるのはごく普通のことであるし、遠方から来た客人などを<sup>あかし</sup>歓待する<sup>あかし</sup>證でもあるのだが、諸外国ではそうではない。同じ風習を持っているのはダルメキアぐらいのものだと。

そこまで思い出して、自分が言っていることが含んでいる意味にも気付いてしまった。

急速に顔に血が上るのが判った。

「……まあいいわ。嫌だというなら無理強いするつもりは無いし」

出来る限り落ちついた声が出るように心掛けた。ここで失敗が<sup>ばれ</sup>暴露してしまったら、後でダーシュに何を言われるか分かったものではない。

休憩用の椅子と卓のあるところまでゆっくりと歩

き、椅子を引いて腰を下ろした。

すぐ傍<sup>そば</sup>に窓がある。大通りに面しているかと思ったがそうではないらしい。この部屋はどうやら大通りの反対側、宿の中庭に面しているようだった。

お蔭<sup>かげ</sup>で騒音が入ってこないのは有り難い。窓の外には薄物の布を使った庇<sup>ひさし</sup>のようなものが出されていて、日射しも弱められるように工夫されてあった。アイオナは感心すると共に、ますますこの宿に好感を持った。

アイオナは軽く息を吐いた。胸がほっとするような心地がした。まだ逃避行は途中だというのに、奇<sup>お</sup>妙な話だと思った。

「スイサ、お茶を貰<sup>もら</sup>ってきてくれるかしら？ 出来れば何か軽く食べるものも」

「はい奥さま！」

今度は予期した通りの元気な返事だった。

スイサが出て行ってから、そうだ一番先に風呂に入らなければならないのはあの子だわ、とアイオナは思った。汚れを落として、傷の手当てをしてあげなければ。

「まったくローゼンディア人という奴は……」

ダーシュはまだぼやいていた。

## 第二十一章 招かれざる客

ごく普通の香草茶と蜂蜜、氷砂糖、それと菓子までが出てきた。

お茶が冷めるのはもったいなかったが、とにかくまず先にスイサの入浴と傷の手当てをしなければならぬ。ダーシュを部屋から出すついでに接骨医を呼びに行かせた。

その間にアイオナがスイサの体を洗ってやった。

傷に<sup>し</sup>滲みないように注意深く洗ったがそれでも時折痛そうな様子を見せていた。

スイサの体は思った以上に肉が固く、しかもかなり痩せていた。

ろくな食べ物を与えずに肉体労働で酷使された体だ。怒りと悲しみがふつふつと込み上げてきたが、それを表に出さないように手早く入浴を済ませた。

体を拭いて、少し大きいがアイオナの持ってきた衣服を着せてやると、ちょうどダーシュが接骨医を連れて戻ってきた。

接骨医はがっしりした体つきをした白髪交じりの男性で、見た感じ簡単にスイサを診察したが、腕は良さそうだった。手足や体の打ち身をよく観察し、口を開けさせて覗き込み、それから頭を強く打っていないか、胸が息苦しいかどうかなどを聞いた。

軟膏を塗り込み、上手に包帯を巻くと、安くはないが高くもない料金をアイオナから受け取った。

そして「後日急に具合が悪くなったりしたら諦める」と恐ろしい言葉を残して帰っていった。

ダーシュの話によるとこのオアシスでは最も有名な接骨医だという話だった。

最後の言葉が気になるが、そうした場合はどうしようもないので、そんな事態が起きないことを願った。

打撲が翌日、または数日後の急死を引き起こすことはまああることなのだ。そしてそれは防ぎようがない。

お茶の風味を犠牲にしてまで先延ばしをしたからか、軽食の方は見た目以上に豪華に感じた。

出てきた物はウナと付け合わせの野菜、そしてマナナイだった。

蜂蜜をかけた豆菓子に、ピコラテのパラモナ、果物を使った蒸し菓子まで用意してある。

アイオナの経験上だが、アウラシールでは蒸した料理を見たことがない。蒸すという発想自体が無いかのようで、それがここに来て蒸し菓子である。正直驚いた。

元々、蒸し物はローゼンディアでもトラケス地方の料理法であり、蒸し菓子もトラケス地方やイオル

テス地方で見られるものだ。まさかアウラシールの宿屋で蒸し菓子を食べられるとは思っていなかった。

一方パラモナはアウラシールではファラモナという。ローゼンディアやアウラシールではごく一般的な菓子である。

小麦粉や胡麻などの穀物や果物をすり潰し、バターやアルサム油などを加えて練り、砂糖や薔薇水を加えて固めたもので、香辛料で風味付けをすることもある。

今用意されたのはピコラテという豆を使った物である。なめらかな風味がある緑色の豆で、よく菓子や料理に使われる。

パラモナは非常に古くから存在する菓子であり、古代ナーラキアの文献にも登場する。

付け合わせの野菜は大雑把に搗<sup>す</sup>り潰<sup>つぶ</sup>してあり、塩と香辛料、アルサム油で和<sup>あ</sup>えてあった。

何だかマナナイのようだが、だったらもっと細く、液体のようになっているはずだと思った。しかしこれもマナナイの一種かも知れない。

そしてダーシュ期待のマナナイはと言うと、やはりマナナイらしい形で出てきた。

何種類かが丸皿に分けて盛り付けられているため、まるで皿自体が赤、黄色、緑、そして薄紫の四

色に塗り分けられたもののように見えるのだ。それぞれが羊肉、豆、チーズと香草、茄子を原料にしたものだった。

これをウナに塗り付けたり、ウナの中を開いて挟むようにしたりして食べるのだ。

アンケヌの屋敷で雇っていたハヌサは本当に腕が良く、食事の度に作ってくれたものだが、塩と香辛料の塩梅あんばいなどは絶対に教えてくれなかった。

マナイを見たダーシュは嬉しそうに顔を綻ほころばせた。余程よほど食べたかったのだろう。

「あなたも一緒にどうかしら？」

アイオナが誘うと、スイサはびっくりしたように首を激しく振った。

「滅相めっそうもないです！」

これもまた予想出来た反応だったが、アイオナはそのままにしておくつもりはなかった。

「いいのよ。みんなと一緒に食べた方が美味しいでしょう？　ここに来て卓に着きなさい」

「でも……」

窺うようにダーシュの方に目を向けている。どうやら奴隷の自分が、主人たちと同じ卓に着いていいものかどうか迷っているようだった。

「俺のことなら気にしないでいいぞ」

ダーシュがスイサに声を掛けた。

「俺はお前のことを奴隷だとは思っていない。だからここに来て卓に着け。折角のマナナイが不味<sup>まず</sup>くなる前にな」

実に旨<sup>うま</sup>そうにマナナイをウナに包み、食べている。

いつもどおり上品な手付きだ。こういう所でやはり出自の良さが出てしまうなとアイオナは感じた。

そしてそんなダーシュの様子を好ましいと思った。スイサに気を遣っているのだ。

手許<sup>てもと</sup>を見ると、いつの間にやらダーシュは自分のクポラを出している。あの地下通路でアイオナに水を飲ませてくれた物だ。

アンケヌを出てから彼はずっとこれを使っていて、水も香草茶もこれで飲んでいた。今もクポラに自分でお茶を注いでいる。

そうか。スイサが持ってきたお茶一式には器が二人分しかないからだ、と気付いた時、アイオナは可笑<sup>お</sup>しさが込み上げてきた。この男なりに少女に気を遣っているのだ。

滑稽な気の遣い方だと思った。

だけど好ましい。

「ディブロスに着いたら自由民にしてやるから心配するな。あとはお前の好きにすればいい」

更に安心させるために言ったであろうダーシュの



言葉は、意外にもスイサの顔を暗くしてしまった。

ディブロスに着いたら用無し、お払い箱にされると受け取ったようだった。

もちろん、そんなつもりは無い。そんな意味でダーシュは言ったのではない。

スイサの表情の変化を見て、ダーシュは戸惑っているようだった。ウナを右手に持ったまま、救いを求めるようにアイオナに目を向けてきた。

「勘違いしないでね。あなたを追い出そうっていうわけじゃないのよ。あなたさえ良ければ、ずっとわたしの傍<sup>そば</sup>に居てもいいわ」

素速くアイオナは取り成した。スイサの表情が明るくなる。

「解ったら早く卓に着け」

急<sup>せ</sup>つつくようにダーシュが言った。

＊

食後、予定通りダーシュとアイオナは今後の相談を始めた。ディブロスは目の前とはいえ、まだ到着したわけではない。

油断は出来ないのだ。

ただ地下通路を抜けたお蔭で時間を少し節約できたのは判った。

本当ならこのままディブロスまで駱駝を飛ばすべきなのかも知れない。

しかし居心地の良い宿と、予想外のスイサとの出会いなどがあって、二人はすぐに出発する気にはなれなかった。それが油断であるとは、自覚していたが。

スイサは買い物に行かせた。一度卓に着くと、それこそ流しこむように食べ始めたが、アイオナもダーシュも作法や何かを口にする気は全く起きなかった。そんなことを気に出来る環境で生きてきた子ではないと解っていたからだ。

特に揚げた胡桃に蜂蜜と香辛料をかけた菓子、卵と果物を使った蒸し菓子は、スイサにとって初めて口にする味だったのだろう。美味しさも感動も乗り越して、ただ味に驚愕している様子だった。

彼女が十分満足に食べてから、食後の運動がてらに買い物を頼んだ。果物と、そして入浴用の糸瓜へちまと香水を頼んだが、それがアイオナが頼んだ分だった。

垢擦りとアルサム油、ダルメキアの石鹼せっけんはこの宿屋にあったが、アイオナは糸瓜へちまがないのは不満だったし、入浴するなら香水は絶対に必要だった。

「俺も買い物を頼みたいが構わんか？」

「はい！」

スイサの返事は元気がよい。仕事を命じられることが嬉しいようだ。

おそらくあの悪逆な男から助け出されたことを恩に感じているのだろうが、こうはっきりと好意を示されると、思わず口許が綻ほころんでしまう。

「ハーティカ頭布を三本買ってきてくれ。黒い布のやつだぞ。それと土笛三つと、あとお前が着られるような白いケス長服を買ってくるんだ。今着ているのだと大きすぎるからな」

どういうわけかダーシュはそんな物を買ってくるように指示した。

スイサはとても物覚えの良い子供で、アイオナとダーシュが指示する内容を一度で憶えてしまい、二人を驚かせた。

「良い召使いを雇ったな」

ダーシュは感心したように唸うなり、アイオナを喜ばせた。

こういう言葉の端々はしばしに、ダーシュがスイサをどう考えているかが表れてくる。奴隷だとは思っていないことがアイオナには嬉しかった。

スイサが行ってしまうと、アイオナは風呂の様子を改めて確かめた。

個人的な感想を言わせて貰もらえばかなり狭いが、使う分には問題ない程度の広さがある。

実際、洗い場もあるし全く問題はない。問題はむしろ時間的な余裕がないことだった。

しかし浴槽に浸かりたいのだ。ゆったりと、背を伸ばして息を吐きたい。とても。

「のんびり風呂に入っている時間は無いぞ」

ダーシュは嫌味を言ったが、目の前に風呂を用意されて黙って見過ごせる者はローゼンディア人ではない。

アイオナとしては、自分はローゼンディア人だとの自覚があるので当然無視しない。

「今夜宿泊出来るかも判らないというのに……」

ダーシュはぶつぶつ言ったが、別に宿泊をしなくても風呂で生き返ることは出来る。

この数日、垢と砂埃あかにまみれてきたのだ。こころで綺麗にしておきたい。

「ディブロスに着けばいくらでも風呂に入れるだろう」

「それはそれ、これはこれよ」

納得しきれない様子ではあったが、ダーシュは強く反対はしなかった。

「あなたも体くらい拭いたら？」

善意から言ったのだが、ダーシュは先程の会話を思い出したのだろう。嫌そうに首を振った。

「それとも臭うか？」

少し心配そうに聞いてくる辺りが可愛らしい。しかしこういうことで<sup>からか</sup>揶揄っても何の意味も無いのでアイオナはきちんと答えた。

「臭うかどうかではなくて気分的なものよ。あなたもさっぱりしたいでしょう？」

「そうだな……では後で時間があったら体を拭くことにする」

「それがいいわ」

アイオナとダーシュは卓に向き合って坐った。

別に追いつくためにスイサを買い物に行かせたわけではないが、やはり二人きりの方が何でも話せる分、気楽ではある。

アイオナは茶のお代わりを注ぎ、ダーシュに勧めた。

「ありがとう」

「どういたしまして」

「よく気の付く妻を得て、俺は幸せだ」

「それは皮肉かしら？」

「いやいや、妻に対する本心からの感謝の言葉さ」

「そう。素直になってくれて嬉しいわ」

どうにも疑わしさを感じるが、案外とダーシュは本心から言っているのかも知れない。

屋敷での日々や、ここ数日の逃避行で始終顔を突き合わせている内に、この男についてはついつい

うが  
穿った見方をしてしまう。

あまり意地悪く捉えるのも悪いかと思い、アイオナは何も言わないことにして、本題に入った。

「さてと、これからどうするかしらね……」

旅の連れが一人増えてしまった。

「いや、これはむしろ都合がよいことかも知れんぞ」

「何か考えがあるのね？」

「ああ、おそらく向こうは俺たちを二人連れの夫婦者だと思っているだろうからな」

なるほどと思った。

「それで、どういう風に化けるつもり？」

わくわくしながらアイオナは尋ねた。スイサに買いに行かせたハーティカ頭布や、長服をどう使うのかとても興味があった。変装以外に考えられないではないか。

ところがダーシュの返事は意外なものだった。

「焦るな。それになんだ。化けるといのは？」

「見つからないように変装するんでしょ？」

きき嬉々としたアイオナの言葉に、ダーシュは何とも情けない顔をした。

「お前な……芝居の見過ぎじゃないのか？」

「そんなに見てないわよ」

むっとして言い返すと、ダーシュが疑わしげに聞いてきた。

「どのくらい見ていたんだ？」

「……興行があれば、必ず……」

しまったと思いつつ、かといって嘘を答えるわけにもいかないの、アイオナは口の中で呟くようにして答えた。

ダーシュは<sup>おおげさ</sup>大袈裟な溜息を吐いた。

「なによ」

「いや……別に何も」

「だったら疲れたように首を振るのを止めてくれるかしら？」

「すまん。本当に疲れたんでな。俺の肩に砂漠の悪鬼が跳び乗ったようだ」

「ふーん。わたしには見えないけれど」

「芝居の見過ぎで目がどうにかなったんじゃないか？」

「うるさいわね。好きなものは好きなんだから仕方ないじゃない」

「まあ……な。アンケ又は砂漠の真ん中だ。外国人が楽しめるものと言えれば限られてるし、お前がどれだけ芝居に入れ揚げようが俺の知ったことではない」

「なら――」

文句を言わないでよ、そう言おうとしたが、ダーシュが口許に<sup>てのひら</sup>掌を突き出すようにして発言を<sup>さえぎ</sup>遮って

きた。

「俺が困るのはな、今の俺たちの現実を芝居と混同されることだ。ザハトの追っ手はおそらく俺たちを殺す気で来る。芝居だったら剣で切られても、赤い布を散らして済むだろうが、そうはいかない。本当に<sup>いのち</sup>生命の危険がある」

「言われなくても解ってるわよ」

「そう願いたいな」

「解ったわよ。それで……実際のところあなたはどうか考えているの？」

「俺の考えは二つある」

ダーシュは指を二本立てて言った。

「現実的な方から聞きましょうか」

当て付けるようにアイオナが言うと、ダーシュはおもしろげに口許に笑みを浮かべた。

「一つめは三人でどこかの隊商に<sup>もぐ</sup>潜り込むことだ。俺とお前が夫婦連れになり、スイサはその召使い。これなら全く無理が無い」

「けれどザハトの追っ手が、夫婦連れに網をかけて探している場合、見つかりやすくなるわけね？」

「その通りだ。だがこっちは一人増えているから網を逃れやすくなってはいるだろう」

「問題は隊商を捜せるかどうかということね？」

「そういうことだ」



ダーシュは<sup>うなず</sup>頷いた。

砂漠に限らず旅行者は普通、隊商を組む。

そもそも隊商を組んでいてさえ襲われるのに、一人旅など襲ってくれと言っているようなものだからだ。

だから隊商は必ず武装しているし、護衛も連れてくる。

それだけ危険なのだから当たり前だが、大体は一族や一つの商店だけで隊商を作ることになる。

人選には慎重になるし、気心の知れない者や、信用の置けない者を隊商に加えることはない。当然のことである。

誰でも隊商を編制する時にはじっくりと時間を掛けるのが普通だ。

つまりいきなり顔を出して同道を願い出ても、はいそうですかと参加を許してくれるとは考えづらい。

そこでそうした旅行者向けに寄せ集めの隊商を仕立てる者達がいる。

いわば隊商業というわけだ。小規模な商売人や、個人旅行者などがこうした隊商を利用する。

基本的には誰でも参加できるが、やはり良し悪しがあり、信用度の問題もある。

良いとは言えぬまでも、旅の安全を確保できる程

度には、まともな業者が多いはずだが、中には性質<sup>たち</sup>の悪い者もいると聞く。

最悪の場合、隊商業が町を出て数日後に盗賊業に変じるなんていう事さえある。

だから前もって情報が必要なわけだし、やはりそうした場合は同国人という単位が、候補の基本になる。

ダーシュが言っているのはそういうことだった。

たとえディブロスがいかに近くても、砂漠に出れば何が起こるかわからない。

できる事なら信用のおける、まともな隊商に参加したいわけであった。

「そこでお前の出番というわけだ。ローゼンディア人の隊商を捜し出して、お前の人脈で潜り込む」

「そう簡単にいくかしら？」

アイオナは首を捻った。もし自分が隊商の統率者だったとしたらどうだろうかと考えたのである。

いきなり尋ねてきた三人組を、入れるだろうか？

一人は若い砂漠の戦士。美形で品の良さもあるが、それだけに正体不明。

もう一人は飾り気も何もない恰好をしたローゼンディア人の女。

最後はアウラシール人の少女。顔に殴られた痣<sup>あざ</sup>がある。

怪しいと思う。この三人が一緒に居るというそのこと自体が、すでに限りなく怪しい。

「……無理じゃないかしら」

「なんだ、その諦めたような目は」

「遣る前から結果が見えているもの。あなたが隊商を率いていたら、わたしたちみたいな三人組を入れるかしら？」

「交渉次第だな」

「太っ腹ね」

今度はアイオナが溜息を吐いた。

「確かに交渉には充分なだけの持ち合わせが有るわよ。けれど充分過ぎて隊商の目の色を変えてしまうかも知れないわ」

「隊商変じて夜盗になる、というやつか」

「それだけの魅力はあると思うけれど」

アイオナは内懐を叩いて見せた。そこには例の寶石袋がある。

「俺は何も宝石で交渉しろとは言っていない。お前の人脈で潜り込もうと言ったんだ」

「メルサリスの名前を出すの？」

危険ではないだろうか？ 追っ手に手掛かりを与えることになる。

逃避行の間は、あくまで偽名で通すべきではないだろうか。

「ああ、だがここはもうディブロスとは目と鼻の先だ。追っ手の連中がメルサリスの名前を聞き出したとしても、その時には俺たちはディブロスの門をくぐ潜っているさ」

「たしかにそうね」

あと半日の距離だ。ケッサラに証拠を残したところで、それほど問題にはならないかも知れない。

「けど隊商の歩みがひどく遅かったらどうするの？」

それなら結局、道の途上で追いつかれてしまうおそれ虞がある。

「その時には隊商を置いて先に進む。俺達には時間が最大の敵だからな」

それでアイオナには全て解った。

つまり交渉の段階でそこまで話をまと纏めてしまうということだ。

いわば隊商はケッサラを出るまでの隠れみの蓑、そういうことで交渉する。

隊商を伴わずに三人だけで砂漠に出るなど危険すぎるし、ディブロスが近いという事で隊商がのんびりしすぎていたら置いていく。

ケッサラにも当然盗賊やそれに類する住人が居るわけで、そういう連中の目に止まることは何としても避けなければならない。三人きりでオアシスを

発<sup>た</sup>ったら獲物にしてくれと言うようなものだ。だからなんであれ隊商に参加する必要がある。

ダーシュは大丈夫だと言っていたが、現にここに来るまでに盗賊に襲われている。

予想外の結果が起きているわけだ。

だからここに来て隊商と言いだしたのは、ダーシュもその事を重く鑑<sup>み</sup>ての事だろう。

参加するべき隊商は、同じローゼンディア商人なら問題はない。メルサリスの名前には信用がある。それは胸を張って言える。

アンケヌで政変があったことはおそらく、どの商人も知っているだろう。なんであれ商人は耳が早くなくてはやっていけない。

となれば、アイオナがディブロスに避難するということにも相手は納得するはずだ。

「あなたの言いたいことは解ったわ」

「では早速行動するとしよう」

「ちょっと待ってよ。このオアシスにそう都合よくローゼンディア商人が居るかしら？」

「捜せば一人ぐらいは居るだろう」

「そうね。隊商なら大きな宿を取っているはずだし」

「それはここと、道向こうの宿くらいしかない」

「大して時間もかからないってわけね」

自嘲的にアイオナは言った。捜す手間も少ない分、それは見付かる見込みの少なさを示してもいるのだ。

「ああ、他にもあるかもしれんが、そこまで当たっている時間はおそらく無いだろう」

このケッサラ中を歩き回って、ローゼンディア商人を捜すゆとりは無いということだった。

「じゃあ、もし見つからなかったら？」

隊商というのは余り見込みのない考えだと思ったのでアイオナが尋ねると、ダーシュは急に何とも苦い顔をした。

「二つめの考えを聞かせてよ」

その様を不思議に思いつつアイオナが問うと、ダーシュは具合が悪そうに目を外<sup>そ</sup>らした。

「……後でな」

話を切り上げようとしている。アイオナは何か引っかかるものを感じた。

「なによ、隠すことないでしょう？ それともわたしが信用出来ないの？」

「そうじゃない」

「なら言いなさいよ」

しつこく食い下がると、渋々といった様子でダーシュは<sup>つぶや</sup>呟いた。

「……お前が男に化ける」

予想外の返答だった。あまりに予想外だったのでアイオナは怒りを忘れた。

「俺たちは連れ合いのダビール戦士ということになるな。問題はスイサだが……」

何事もなかったようにダーシュは考え込んでいる。いや、考え込んでいるような顔をしている。

<sup>つか</sup>束の間アイオナはダーシュの顔を見つめたが、やがてすぐに怒りが込み上げてきた。

やっぱりあの買い物は変装用の道具だったに違いない。二つめの場合に備えて買いに行かせたのだ。

「勘違いするなよ。俺が言っているのは芝居とは全く違った意味でだな……」

機先を制するように<sup>かか</sup>掲げられたダーシュの<sup>てのひら</sup>掌を見て、その指に噛みついてやろうかと思った。

「ええ、どう違うのか聞かせてもらおうかしら！」

「大きな声を出すな」

必死に<sup>なだ</sup>宥めようとするダーシュを見ていると、複雑な気持ちになる。

確かに腹は立っている。だが怒る反面、頭のどこかでは「これを何かに利用出来ないかしら？」と考えてもいる。<sup>つくづく</sup>熟々自分は商人なのだなと思った。

そしてそう考えてしまうと怒りは収まっていった。

一息吸い込むと、アイオナはぴしりと人差し指を

立てた。

「いいこと？ 一つ、貸しよ」

「ああ、判った」

威に押されてダーシュが頷いた。

「それでわたしたちは二人連れの戦士に化けるとして、スイサはどうするの？ あの子にも役者の真似をさせるの？」

一言嫌味を加えてやると、ダーシュはとても嫌そうな顔をした。見ていてなかなか気分がいい。

「そうね……どこかのお嬢様ということにしたらどうかしら？」

「それは駄目だ。無理がある」

ダーシュは首を振った。スイサを見下げて言っているわけではないと解っていたので、アイオナは嫌な気持ちにはならなかった。

「お嬢様が顔に傷を作っているのは無理があるし、スイサは人に仕えることに慣れ過ぎている。いきなりお嬢様扱いをしても無理が出るだけだ」

「そうね」

「俺たちの召使いということにしたいところだが…  
…」

「戦士二人連れが召使いを連れてきているというのも無理があるわね」

「ああ、スイサも共連れの見習いに変装をさせると



いう手もあるが、やはり無理があるだろう」

「あの子は上手くやりおおせると思うけれど」

「ああ、頭の良い娘だ。変装したとしてもそう簡単には暴露ばれまいが、問題は何に化けるかだ。そこに無理があると……危ないだろうな」

「どちらにしても変装自体が冒険だものね」

「そうだ」

ダーシュは頷いた。アイオナとしても最初の案の方が優すぐれているのは理解出来る。

もちろん、変装の方がおもしろいが、おもしろさに生命いのちを賭ける気にはなれない。

イスタリハーレイ戦神の末裔ではあるまいし、危機的状況を楽しむ趣味は、自分にはない。

「解ったわ。わたしローゼンディア商人を捜してみ  
る」

「すまないな」

「何を言ってるのよ。わたしたち――」

アイオナは笑い飛ばそうとして、次の言葉が言い出せなかった。

――夫婦じゃないの。

そう言うはずだった。けれど恥ずかしくて言い出せない。

どうしたものかと少し悩んで、それからダーシュの顔を窺った。

アイオナが途中で言葉を切ったのに気にならぬらしい。まるで興味が無いとばかりに素知らぬ顔をして香草茶を飲んでいる。

何も聞いてくる様子が無い。

助かったと思った。このままなかったことにしよう。

急に会話が途切れたことが不自然ではあったが、このまま黙ってやり過ごすのが一番いい。

ダーシュが話しかけてくるまで沈黙を貫くことにしようと思った。

取り敢えず茶で咽<sup>のど</sup>を潤そうと思って、アイオナも香草茶を口に運ぼうとした。

その時を捉えるようにしてダーシュが言った。

「……思ったよりも貸しを早く返せて俺は嬉しい」

たった一言だったが、アイオナをぎよっとさせるには充分だった。

危うく茶を溢<sup>こぼ</sup>しそうになってしまい、アイオナは慌てた。

その様子を楽しげにダーシュが見ている。

やっぱり解っていて黙っていたのだ。

悔しいが今回はダーシュに分があると認めよう。

アイオナは何だか遣り込められたような気分になった。

その後は二人してスイサが帰るのを待つことにし

た。

先に風呂を使ってから出掛けようと思ったのだ。

ダーシュも文句は言わなかった。

「もうすぐ日が傾く。商人たちが動き出すのもその頃からだろう」

確かに昼日中、せっせと動いている商人はあまりいまい。

ここはローゼンディアではなくてアウラシールである。

夕方が仕事時間の中心なのだ。折角足を運んでも、昼寝でもされていては意味が無い。

そういうわけで香草茶を飲みながら待っていると、やがてスイサが階段を上がる音が聞こえてきた。

「ただいま戻りました」

「ごくろうさま」

笑顔で礼を言い、アイオナは品物を受け取って卓の上に並べた。受け取りながら果物の状態に目を配る。

どれもちゃんとしている。奇妙おかしな物は掴まされていなかった。糸瓜へちまと石鹼にも問題は無い。

お釣りもそれなりの額が残っている。これは意外であった。

アウラシールでは物価は変動性がとても高い。

無論ローゼンディアでも物価はその時々的情勢によって変動するし、その意味では確たる定価は無いと言えるのであるが、アウラシールでは物価の変動傾向が遥かに大きい。

そもそも定価という観念自体がないのではないかと思える程だ。

だから買い物においては値段を基準にするのではなく、まず大まかな金額を頭で計上し、その範囲で必要な物を揃えるようにするのである。

出来る人間ほど、要するに交渉事に<sup>た</sup>長けているとか、馴染みのお店が沢山あるとか、そういう人間ほど良い物が買えるし、買い物の必要経費も安くなる。

そして受け取った品物とお釣りから思うに、スイサは相当に出来る子だった。

「スイサ、それぞれの品が幾らだったか憶えているかしら？」

試みに尋ねてみると、スイサは淀みなくそれぞれの品の値段を言い、どこで幾ら支払ったかまでちゃんと答えた。

半ば予想していたことではあるがスイサは勘定が出来るのだ。一体どこで<sup>おぼ</sup>覚えたのか。

ダーシュは<sup>ハーティカ</sup>頭布を確かめ、土笛の具合を見ていたが、

「お前、どこで勘定の仕方を習ったんだ？」

興味を惹かれたのか尋ねると、何とスイサは誰にも習ったことは無いという。

自分で勘定の仕方を覚えたというのだ。それを聞いてアイオナの目が鋭くなった。

父に会わせようと思った。この娘は優秀だ。きちんと仕込めば優秀な商人になるかも知れない。

どのみち自由民になっても、彼女が自立出来るまでは手許に置くつもりだったわけだし、好都合だと思えた。その方がスイサのためにもなるだろう。

「あなた見込みがあるわ」

言ってみると、スイサは嬉しそうに顔を綻ほころばせた。それが何ともいじらしく感じて、思わずアイオナは抱き締めそうになったが、頭を撫なでるだけにとどめた。

この先、しっかりと商売を教えるならば、あまり最初から甘くし過ぎてもいけないと思ったからだ。

アイオナの頭の中では、もはやスイサは『年少の弟子』とでも言うべき位置付けになっているのだった。

「あの、旦那様、奥さま」

「なんだ？」

「お二人にお会いしたいというお人がいらしております」

「ほう……」

ダーシュの目が細くなった。警戒の色を表している。

「そいつは下に居るのか？」

宿屋の一階は大きな食堂になっており、そこで食事を摂ったり休憩、待ち合わせなどが出来るようになっているのだ。

「はい」

「どういう奴だ？　まさか買い物途中で声を掛けられたのか？」

軽い口調で付け加えられたダーシュの言葉の後半は、おそらく冗談であろう。

何故ならそのためには元からアイオナとダーシュを<sup>っ</sup>跟けて来ているか、またはこのオアシスでアイオナたちに興味を持ったかのどちらかになるからだ。

このオアシスでならば、例の店先の一件、あの荒事を見ていた相手ということになるが、あの場には他の人間は居なかった。

あそこに居たのはアイオナとスイサ、ダーシュ、そして極悪のあの男だけだ。

となればアンケヌからここまで<sup>っ</sup>跟けてきた相手がいるのだろうか？

今までの道中でそんな追跡者があったとは思えない。追われているのは確かだが、そんな隠密じみた

相手に……。

考えたところでアイオナは該当者に思い当たった。

——<sup>ガズー</sup>暗殺者。

ダーシュは確かにそう言った。しかし、すぐにその考えも打ち消された。<sup>ガズー</sup>暗殺者が堂々と連絡を取ってくるはずなど無いからだ。

——でも、普通の商人の振りなどして接触を図ってくるかも知れない。

無論そんなことはあるまいと思う。おそらく宿に出入りの商人か誰かが、何か売りつけに来たのだろう。

けれどアイオナはふと胸騒ぎを覚えた。

不安が膨らむ中、スイサの口を開いて出た言葉は驚くべきものだった。

「はい。お前の主人たちに会いたいと、そうおっしゃってます。お二人のことをよくご存じのようでした」

ダーシュの顔色が変わった。険しい顔になった。

考え込むように少し黙っていたが、何か思い当たることがあるのだろうか、スイサに問いかけた。

「それは、白い服を着た奴だったか？」

「いいえ黒紫色の長衣<sup>ケス</sup>を着て、緑色の頭布<sup>ハーティカ</sup>を巻いた男の人です」

ダーシュの目が見開かれた。驚いているのだ。

これほどにはっきりと、驚きの色を顔に出すとはアイオナにとって意外だった。そういう男ではないと思っていたのだ。

いや、それともそれ程までに驚いたということなのか。

「……誰かしら？」

「ケザシュだ」

ダーシュは低く呟いた。

「以前言っていた人ね？」

「ああ、奴なら確かに急に現れても不思議はない」

「で、どうするの？」

「会うしかあるまい」

アイオナは咽<sup>のど</sup>を鳴らした。恐れはあったが、『魔道の徒』それがどういう人物なのかということへの興味が大きかった。

「その人は下に来ているのね？」

「はい、一階の卓でお待ちです」

「お前たちはここに居ろ」

予想通りのダーシュの言い種<sup>ぐさ</sup>に、アイオナは強い不満を感じた。

「わたしも会う権利があるわ」

「その権利は認めよう。だが会わせるわけにはいかない」



「どうして？」

権利を認めると言ったではないか。

「あいつは尋常ではない。何を考えているかまるで判らぬし、俺はお前の身を守る責任がある」

「大丈夫よ。ここは人の出入りも多いし、何か企んでいたとしても大事にはならないわ」

「お前は奴の恐ろしさを知らない」

ダーシュは首を振った。

どうしても自分をケザシュに合わせるつもりはないらしい。ここで強く要求してもまず逆効果だろう。ダーシュは頑固者だ。

元々自分も頑固者であるだけに、アイオナはダーシュの気性を理解しているつもりだった。

だがアイオナとしてはどうしてもケザシュの姿を見ておきたかった。

多少気が咎<sup>とが</sup>めるが、ここは狡<sup>ずる</sup>をさせてもらおう。

「そうね。じゃあこうしましょう。わたしたちはここで待っているわ。あなたは下でケザシュに会って、話を聞いてきてちょうだい」

アイオナがそう切り出した時だった。

「どうでもいいが、重要な物事は夫婦二人で決めるのがローゼンディア式ではなかったのか？」

陰気な声が聞こえた。目を向けると階段の所に見知らぬ男が立っている。

浅黒い肌をした、年齢不詳の男だった。

体格はよいとは言えないが、全身に何か、不気味な<sup>すごみ</sup>凄味のようなものが漂っている。

武器は身に付けていなかった。黒紫色の<sup>ケス</sup>長衣を着て、緑色の<sup>ハーティカ</sup>頭布を巻いていた。

「ケザシュ……」

「久しぶりだな。ダーシュ」

「近づくな」

ダーシュは歩み寄ろうとしたケザシュを鋭く制止した。

「安心しろ。俺はお前たちに<sup>あだ</sup>仇なすつもりは無い」

「ぬけぬけと！」

ダーシュの怒気はかなりの<sup>けんのん</sup>剣呑さを帯びていたが、ケザシュには一向<sup>こた</sup>堪えぬらしい。おもしろそうににやりと笑っただけだった。

「そう言うな。事情が変わった。今の俺はザハトとは何の関係も無い」

アイオナはダーシュを<sup>うかが</sup>窺った。表情は陰しく、見るからに緊張している。

こう言っでは怒るかも知れないが、おそらくダーシュは恐れを抱いている。それは魔道の力に対する畏怖なのだろう。

恐れおののくという程ではないにせよ、ケザシュに対してかなりの警戒感を持っているのではない

か。その顔付きから、アイオナにはそれが容易に察せられた。

「それで？ 貴様の<sup>せい</sup>所為で俺はゴーサの兵に追われることになった。今度はどんな<sup>わざわ</sup>災いを持ってきたのだ？」

「お前たちが逃げるのを手助けしてやろう」

「何？」

ダーシュは聞き返した。陰気な口調ではあるが、ケザシュの声は良く通る。まさかダーシュが聞き逃したと言うこともないだろう。だがダーシュは聞き返した。

「今、何と言った？」

「お前たちを逃がしてやろうと言ったのよ」

「……どういうつもりだ？」

「どうもこうもない。今の相方がそれを望んでいるのでな」

仕方がないと言った風な言い方だった。アイオナには意味がよく解らなかったが、ダーシュには解っているようだった。一瞬、何か複雑なものが彼の胸中を駆け抜けたらしい。ダーシュは乾いた声音でケザシュに尋ねた。

「ザハトは……？」

「奴は運がいい。今はアンケヌを<sup>まと</sup>纏めるのに大忙しといったところさ」

「そうか」

ダーシュは小さく<sup>うなず</sup>頷いた。何故だろうか。アイオナはそこに安心しているような様子を感じた。

ザハトは、自分の<sup>いのち</sup>生命を狙っている相手だということに……。

「あいかわらず甘い男だな」

ケザシュが<sup>あざけ</sup>嘲るように笑った。<sup>かす</sup>擦れた息を吸い込むような、不吉な笑い方だった。

「時間が惜しいのでな。話をさせてもらおうぞ」

そう前置いてケザシュは歩み寄ってきた。反射的にダーシュが腰に手を伸ばした。アイオナはその手<sup>つか</sup>を掴んだ。ここで剣を抜かせるわけにはいかない。

何故だと問うような瞳と目が合った。ダーシュの瞳に責める色はなかったが、アイオナはとても悪いことをしてしまったような気になった。

「今はこの人の話を聞きましょう。行動を決めるのはその後でも問題無いわ」

「なるほどローゼンディアの女は<sup>すご</sup>凄いな。よもや夫<sup>かんし</sup>を諫止するとはな！」

おもしろそうに言ってケザシュは卓の前の椅子を引き、席に着いた。

「お前たちも<sup>すわ</sup>坐ったらどうだ？」

良い機会だとアイオナは思った。ダーシュが何か言う前に急いで席に着いた。それを見たダーシュは

目を剥<sup>む</sup>きかけたが、すぐに憤然とした表情になり、諦めて席に着いた。

これで三人が卓を囲んだことになった。

「スイサ、何か飲み物と、菓子を貰<sup>もら</sup>ってきてくれるかしら」

「はい、奥さま」

これまでの緊張感からだろう、スイサは詰めていた息を小さく吐くと、急いで階段を下りていった。

## 第二十二章 化け札

ケザシュの話によれば、ゴーサの傭兵団は複数に分かれて、それぞれ追っているという。

「それなりに人手があるからな。それでもディブロスには一番多くの人数が割<sup>さ</sup>かれているぞ」

それはそうだろうと思った。アイオナを連れて逃げる以上、ローゼンディアの植民都市を目指すのはごく当然の判断だからだ。予想されていても不思議はない。

「俺とて全ての動きを知っているわけではない。こちらに振り向けられたのは二十人といったところだろう」

それでも驚異的な数である。追いつかれたらどうしようもないと思った。

どんな戦士であれ、一人で二十人を相手には出来ないだろう。

とにかく見つけられたらお終<sup>しま</sup>いだ。

「お前たちの姿を変えてやろう」

ケザシュの提案は、ひどく奇妙なものに思えた。

前もってダーシュから『魔道の徒』と聞かされてもなお奇妙に聞こえた。

「断わる」

即座にダーシュは否定した。

「お前一人で決めていいのか？」

おもしろそうにケザシュは言った。棗椰子なつめやしが好きならしい。スイサが持ってきたお茶受けの中でも、それだけを食べている。

アイオナは答えなかった。ケザシュの力を借りて良いものかどうか判断が出来なかったし、ダーシュの意思をあからさまに無視するのも嫌だった。

黙ってダーシュの目を見た。ダーシュも無言で見返してきた。

アイオナはその瞳の中に理性を見た気がした。単に意固地になっているだけではないと思えた。

アイオナは頷うなずいた。ダーシュに任せようと思った。魔道の助けがどのようなものか興味はあった。頼りたいという気持ちもあった。

けれどそれ以上にダーシュを信じようと思った。

「断わる。お前の手は借りたくない」

ダーシュははっきりと言った。

「ヒスメネスの言った通りの返答だな」

ケザシュの口調は半ば予想通りといったものであり、落胆したり、馬鹿にする様子などは見られなかった。

「あいつが新たな宿主か」

「仲間と言って欲しいものだな。相方だと言っただろう？」

アイオナは軽い衝撃を覚えた。何ということだろう。この男とヒスメネスが組んでいるというのか。

あのヒスメネスがこんな不気味な男と。

かなりの違和感を覚えたが、よくよく考えてみれば、ありそうな話でもある。

ヒスメネスは切れ者だ。この男のような人間を味方と出来れば、それはさながら賭け札で言うところの『化け札』になりそうである。

ヒスメネスなりに危険と、期待利益とを秤はかりに掛けて吟味ぎんみした結果、この男と手を結んだのならば、それは怪訝おかしいことではない。

それにしても、ケザシュというのは不気味な精気を感じさせる男である。

化け札というのは我ながらいい譬たとえだと思った。

「まあいい……お前の返答は予想出来ていた。俺は俺で好きにやらせてもらう」

「待て。どういう意味だ？」

「言った通りの意味よ」

「貴様、何を企たくらんでいる？」

「お前たちの利益になることさ。さて、話は終わりだ。俺は立ち去るとしよう」

「俺たちに関わるのを止めろ。そしておとなしくヒスメネスの許もとへ戻れ」

その言葉に、ケザシュは凄味すごみのある笑みを見せ



た。

「あの時も言ったな、ダーシュ」

「……そうだったな」

ダーシュは息を吐いた。うんざりしたような、しかし同時に危険を感じさせる仕草だと思った。

「俺を殺そうというのなら考え直した方がいいぞ」

「安心しろ。もう結果は出ている。俺は貴様に出会って以来、このことを考え抜いてきている。夢に見るほどにな」

「そうか？ だがもう一度考えた方がいいぞ。奴隷を失いたくなければな」

アイオナとダーシュは、ケザシュの指が指し示す方向を見て息を呑んだ。

それはスイサの足許だった。<sup>まだら</sup>斑の毒蛇が静かに床上を<sup>は</sup>這い<sup>ず</sup>摺っている。

スイサは気付いていない。きよとんとした顔をしてアイオナを見ている。

いつでも命令されても大丈夫なように、注意心のほとんどをアイオナに振り向けているのだ。足許の脅威には全く気付いていない。アイオナは叫びそうになったが、両手で口を押さえて我慢した。大声を上げたらどうなるか判らない。

「……奥さま？」

「スイサ、そこを動くな。決して大声を上げるな」

静かに、はっきりとした口調でそう命じてダーシュは立ち上がった。ゆっくりと剣を抜いた。それを見てさすがにスイサも異常を感じ取ったらしい。自分の周囲を見回し、そしてびくりと身を固くした。スイサの視線が毒蛇に張り付いた。

「声を出すなよ」

言いながらダーシュが静かに近づき、剣を振り上げた。

「ではな、ダーシュ」

ケザシュの声がした。ダーシュが剣を振り下ろすのと同様だった。床板に剣先が食い込む鈍い音がした。

「……やられたか」

あくまで冷静なダーシュの<sup>つぶや</sup>呟き。

剣の下には毒蛇の姿はなかった。ただ両断された<sup>ひも</sup>紐が転がっているだけだった。

「えっ……？」

アイオナは腰を浮かした。何？ 何がどうなっているのだろうか？

確かに毒蛇の姿があったはずだ。

それが何故……。

「半ば、そうではないかと思ったんだがな……」

剣を鞘に<sup>さや</sup>納めながらダーシュは一人ごちるようになんと言った。アイオナはぽかんとその横顔を見つ

め、次いで再び足許の紐に目を落とした。

「……」

「スイサ、もう動いていい」

ダーシュに言われて、スイサはへたへたと腰を落とした。その場に坐り込んだ。余程、<sup>よほど</sup>驚いたのだろう。

「いつまで<sup>ほう</sup>呆けているんだ」

「えっ？ ああ、その、毒蛇はどうしたのかしら？」

それを聞いてダーシュは吹き出した。<sup>こら</sup>堪えるようにしてくくくと笑った。

「何が<sup>お</sup>可笑しいのよ？」

「いや、お前の態度があまりにも型通りなのでなあ……」

むかっと来た。明らかに馬鹿にされていると感じた。

「笑うことはないじゃない」

「これが笑わずにおれようか……」

まだ笑っている。いい加減頭に来たのでアイオナは詰め寄った。

「あなたねえ……」

「いやいや」

身を<sup>かわ</sup>躲そうとしてダーシュは<sup>よろ</sup>蹠跟めいた。その拍子に例の紐を踏みつけて足元を滑らせた。

「うわっ！」

「っ！」

アイオナは反射的に手を伸ばし、ダーシュの腕を掴んだ。が、そのまま堪えられず、二人は重なるように倒れ込んだ。

ダーシュの上に覆い被さったアイオナは、ダーシュのぬくもりを感じてどきりとした。

「あ……ご、ごめ……さいっ！」

顔を赧<sup>あか</sup>らめ、舌を縛<sup>もつ</sup>れさせながら慌てて離れる。その途端、後頭部に衝撃が走った。目の前がぐるぐる回った。

アイオナは何が起こったのか判らなかったが、卓の角に後頭部を思い切り強打したのだった。

不本意ながらもダーシュの上に再び倒れ込んだ。

「おいっ、大丈夫か!？」

「奥さまっ……！」

ダーシュとスイサの慌てた声が、遠くに聞こえる。

ダーシュの胸に顔を埋<sup>うず</sup>めたまま、アイオナは声も無く呻<sup>うめ</sup>いた。痺<sup>しび</sup>れるような痛みである。痛みに意識が行き過ぎているためか、体にうまく力が入らない。頭の様子を確かめようにも、腕が上がらない。

と、ダーシュの手がアイオナの頭に触れてきた。まさぐるように、しかし慎重に、アイオナの髪を搔

き分ける。

こんな状況でなんだが、アイオナは何やら頭を撫でられているような気分がして、こそばゆくなった。しかし悪い気分ではない。むしろ心地良い。痛みが引いていくような気がした。

「血は……出ていないようだな」

少し安堵したように言う。

さらにまさぐり、大きく息を吐いた。

「<sup>こぶ</sup>瘤が出来てる。瘤が出来てるなら大事ないな」

その言葉で、スイサもほっと息を吐いたようだった。

「動けるか？」

アイオナははっとした。ダーシュの上に載<sup>の</sup>ったままだった。再び顔が赧らんだ。

後頭部はまだずきずきと疼<sup>うず</sup>いているが、体はもう動かせる。今度は慎重にダーシュから離れた。

自分でも頭に触れてみると、確かに立派な瘤が出来ていた。瘤が出来ることになった理由も理由だけに、何やら非常に間抜けな気がした。

ダーシュが気遣うように見ている。抱き合った感触が思い出されて、また恥ずかしくなってきた。

「あなたが悪いのよ」

指を突きつけて言った。

「あなたがわたしを馬鹿にするような真似をしたか

ら、こんな瘤を作る破目<sup>はめ</sup>になったんだわ」

ダーシュは何か言い返したように唇を動かしかけたが、軽く息を吐き、

「そうだな。俺が悪かった」

素直に過ちを認めた。あんまり素直に認められたので、今度はアイオナが責任転嫁をしているような気持ちになった。

「……まあいいわ。とにかくローゼンディア商人を捜しに行きましょう」

「奥さま、おやすみになられた方が……」

「ありがとう。けどそんな余裕は無いのよね」

にっこりスイサに微笑みかけて、アイオナは立ち上がろうとした。

立ち眩<sup>くら</sup>みがした。右手を卓上に置いて体を支えているのに、全然頼りにならない。

足が浮き上がったとかそういうのでもない。けれど急速に視界が傾く。

倒れると思ったがそうはならなかった。

力強い腕が体を抱き留めてくれた。

「無理をするな」

「ダーシュ……」

「頭を強く打ったのにすぐに動けるわけではない。お前は休め。俺が商人を捜してくる」

有無を言わせぬ口調だった。

「でもわたしが行かないと……」

「俺で信用されぬならそれまでの話さ。スイサに買ってこさせた布もあるしな」

「少し横になれば大丈夫よ」

「駄目だ」

ダーシュには全く聞く耳はないらしい。

「風呂にでも入って横になっている。俺が出掛けてくる」

ダーシュはアイオナの世話をしようスイサに指示を与えると、買ってこさせた黒布で顔を目元まで覆った。

「無理はせず休んでいろ」

土笛を腰に紐で止めると、そのまま宿を出て行ってしまった。

アイオナは寝台に身を横たえた。スイサが水で絞った布を持ってきてくれた。

「ありがとう。あなたはよく気の付く子ね」

「奥さま……大丈夫でございますか？」

「ちょっとしたへまをやっただけよ。珍しい話ではないし、少し横になっていれば良くなるわ」

冷たい布を後頭部に当てているのはとても気持ちがよかった。

こうして横になっていると、ダーシュの言う通りに外に出て交渉するのは無理だったと判る。

「あとでお風呂に入るわ。手伝ってね、スイサ」

「本当に大丈夫でございますか？」

スイサはまだ心配そうな顔をしている。



## 第二十三章 追っ手

ダーシュは道向いの宿屋に向かって歩いていった。自分たちが泊まっている宿で捜すよりも、他の宿で捜した方が、多少は足がつきにくくなるだろうと思えたからだ。

向かいの宿屋の入口にまで来た時、オアシスの入口の方からやって来る四人組の姿が目に入った。

白装束に槍を携えた覆面姿。見間違いようがない。ゴーサの傭兵だった。

——遂に追いつかれたか。

ダーシュは胸の奥がひやりとするのを感じた。

追い付かれるだろうとは思っていたが、地下通路を抜けたことで安心していただけ部分もあったのは確かだ。その甘さを悔いた。

相手は四人。どう頑張っても切り合いになれば勝ち目は無い。

四人はそれぞれに辺りに目を配りながらゆっくりとこちらに近づいてくる。

慌ててこの場を離れようとすれば目についてしまうかも知れない。

ダーシュは平静を装い、そのまま宿の入口を潜った。

「いらっしゃいませ」

使用人と思しき若い男が進み出てきた。だがすぐにダーシュの身なりを見て眉を<sup>ひそ</sup>顰める。怪しんでいるような眼付きになる。

ダーシュの<sup>ふんそう</sup>扮装を考えれば当たり前のことだった。

顔と<sup>くびもと</sup>頸許を覆う黒い布、腰に下げた土笛は、ダビール人の印だった。

ダビール人は砂漠を行き交う遊牧民の一部族で、決して定住をしないことで有名だ。

彼らならば普段から放浪をしているので、隊商に加えてくれと言い出しても不自然ではない。

仲間から<sup>はぐ</sup>逸れてしまったとか何とか、適当な事情を言えばまず疑われないだろうと考えたのだ。

アイオナはダビールの人々を知らない様子だったが、おそらくアンケヌにずっと定住していたからだろう。

<sup>おおだな</sup>大店のお嬢さんでもあることだし、市の周縁部にしか姿を現さない遊牧の少数民族など、知らないのかも知れない。

「こちらにローゼンディアの交易商人さんはいらっしゃいますか？」

「居ないね。客でないのなら出て行ってくれないか」

言いながら男はダーシュを押し出そうとする。何

という扱いだと思った。アイオナがこちらの宿を選ばなかったのは正解だと納得した。

「あのう……本当にいらっしゃいませんか？」

なおも食い下がったがぐいぐいと押し出されてしまう。強気というより無礼な使用人としか言えない。

あまりしつこくしすぎても目立ってしまうと思い、ダーシュはそのまま宿の外へと押し出された。

すぐ横に、例の四人組が居た。先頭に立っていた男と目が合った。

何と間の悪いことだろうと思った。肝が冷えたが、これくらいの危機ならば今まで何度も切り抜けてきている。

ダーシュはすぐに目を外らすことをせず、わざとぼんやりと男と目を合わせて、それから目を外らした。

そのまま歩き去ろうとすると呼び止められた。

「お前、ローゼンディア人の妻を連れた男を見なかったか？」

ハルジットなまり訛のあるイデラ語だった。

「そうですねえ……見たような気がしますよ」

ダーシュが気を持たせるように言うと、男は仲間に目配せをした。

軽く頷いた仲間が銀貨を一枚放って寄越よこした。

ダーシュは空中でそれを受け取って懐<sup>ふところ</sup>に入れた。

「アルシャダールのオアシスへ向かうと言っておりました」

「夫婦連れか？」

「はい。黒髪のローゼンディア女で」

それを聞くと四人組は顔を見合わせた。

アルシャダールはドルム高地にあるオアシスだ。そこに向かったということは、ダーシュたちはディブロスを目指してはいないかも知れないという事になる。そういう解釈をさせることを狙った嘘だった。

アルシャダールからはディブロスにも、ザナカンダにも行ける。

ドルム高地にありながらダルメキア人の都市として建設された町である。

千年ほど昔にザナカンダ王によって征服され、現在ではザナカンダの要塞都市となっているオアシスだった。

しかしアルシャダールというのは咄嗟<sup>とっさ</sup>に出た嘘にしては絶妙だった。どこへ向かったかの推測がしばらく位置にあるのだ。

男たちはハルジット語で会話を始めた。

十人長に報告を……ディブロスに向かうのは中止するか……小声で交わされる会話を耳にしながら、

ダーシュは内心ほくそ笑んだ。

「ありがとうございました」

ダーシュは内心の緊張を決して表さないように注意しながら礼を言った。

それからごく普通の歩みでそこを立ち去ろうとした。

「おおい！ あんた！」

突然宿の中から大声で呼ばれた。無視するわけにもいかずに足を止めるしかなかった。

中から出てきたのは明るい髪をしたローゼンディア人だった。

「あんた今ローゼンディア商人を捜していたよな？俺で良ければ話を聞くがどうだ？」

——まずい時に……！

舌打ちをしたい気分だった。

ゴーサの四人組もこちらに注意を向けている。

「とりあえず中に入れよ」

「はあ……」

ローゼンディア商人について中に入ろうとすると、案の定呼び止められた。

「お前、その覆面を取ってみろ」

来た、と思った。同時に思ったよりも呆気ない<sup>あっけ</sup>と思った。

どうするか。ここはオアシスだから中に居る限り

は殺し合いにはならない。

しかしオアシスから出ることも出来なくなる。

ゴーサの連中はオアシスに掛け合うかも知れない。そうすれば自分の身柄は引き渡されてしまうだろう。そうなればアイオナは……。

ぐるぐると頭の中で思考が<sup>めぐ</sup>回る。己が混乱しているのは判ったが、だからといってどうすることも出来ない。

「取ってやれ」

老人の声がした。振り返ると同じダビールの衣裳を着た老人が杖を突いて立っている。

「こちらの御方たちはお前の顔が見たいそうだ。取っておやり」

何だこの老人は!? ダーシュはますます混乱したが、どちらにしるこの場で布を取るのを拒否しても同じことだと思った。

——顔を見せ、驚いている隙に斬り殺すか。

オアシスで斬り合えば、もう二度とオアシスというオアシスへと足を踏み入れることは出来なくなる。

——だが死ぬよりはました。

このまま正体が<sup>ろけん</sup>露顕すれば、捕縛されるのは目に見えている。そんなことを受け入れるわけにはいかない。

アイオナを無事にディブロスに連れて行くこと、そのことだけは遣り遂げなくてはならない。

ダーシュはゆっくりと顔を覆う黒布を外しにかかった。

顔を見せたら、奴らが驚いている隙に斬り掛かる。二人殺せれば活路はある。そう信じた。

布を外し、同時に剣を抜こうとした途端、<sup>すさま</sup>凄じい力で手首を掴まれた。あの老人だった。

全く動くことが出来ない。

<sup>わし</sup>「儂の息子です」

老人はゴーサの四人組に向かってそう言った。どうしたとか、四人組に動揺の色は見て取れなかった。ダーシュを目の前にしているというのにだ。

「……失礼した。世話を掛けたな」

先頭の男がそう言って踵<sup>きびす</sup>を返すと、後の三人も続いた。わけが解らなかった。

ダーシュは心臓が飛び上がろうとするのを抑えるように息を吐き、<sup>しばら</sup>暫く四人組の背中を目で追っていた。

だが、すぐに思い当たることがあって横に立つ老人に向き直った。

そこに居たのは老人ではなかった。ケザシュだった。

あの怪しい目眩<sup>めくら</sup>ましの術だった。

「……礼を言われてもよい状況だと思うが」

意地の悪い笑みを浮かべながらダーシュを見ている。

「貴様……」

「俺が通り掛からなければどうなっていたことか」

「ずっと俺をつけていたのか？」

「違うな。ここを通ったのは偶々たまたまさ。お前は運がいい」

「とりあえず、礼を言っておく」

「ほう、まさか本当に礼を言われるとは思わなんだぞ」

「危ないところを助けられたんだ。礼くらい言う」

「とにかく気を付けることだな。お前の敵はゴーサだけではないだろう？」

軽く手を振ってケザシュは歩き去っていった。

ローゼンディア商人は宿の中に引っ込んでしまっていた。揉め事の気配を察したのだろう。もう一度呼びかけても、おそらくもう顔を出してはくれない。

いつになくダーシュは無力感を感じた。

自分で出来ることには限界がある。久し振りにそれを感じさせられたと思った。

過去が思い出された。炎、焼け落ちる中庭、兵たちの靴の音、最後を見ることも叶わなかった父と



母。

——兄上……<sup>わたくし</sup>私はまだ未熟です。

ダーシュは宿に帰ることにした。このままダビールの三人組と言うことでケッサラを出よう。

それでいいと思った。追っ手が掛かるとしても、それは少なくともゴーサの傭兵ではないだろう。

それよりもずっと厄介な相手だ。まだ姿さえ見せていない。

## 第二十四章 別れ

結局隊商は見付からず、三人はダビール人に変装してケッサラを出た。

ケッサラを出てからは誰にも会うことは無かった。

恐れていた暗殺者<sup>ガズー</sup>も、ザハトの放ったゴーサの傭兵たちも、無論、ワディの一党も現れることは無かった。

遭遇したもののといえば小さな砂<sup>すな</sup>蜥<sup>とかげ</sup>や、<sup>さそり</sup>蠍、上空を飛びゆく鳥の影くらいのものであった。

鳥は縁起がいい。棲<sup>す</sup>み<sup>か</sup>処とするような木々や、建物などの存在を暗示するからだ。

オアシスを出たのは夕方だったが、道中を急いだために、夜明け前にディブロスの町に到着した。

朝日が出るまで岩場の陰で休憩を取った。

他にも先に来て休んでいる人たちがおり、火を囲んで簡単な食事をしたり茶を飲んだりしている者達もいた。

その中にケザシュの顔があった。

「またお前か」

ダーシュがあからさまに嫌そうな顔をしたが、アイオナは別に嫌う理由もないのでごく普通に挨拶を交わした。

「別れを言いに来た」

「お前らしくないな」

ダーシュは嫌味を言ったが、ケザシュは気にしている様子も無い。

「俺はディブロスの町に入るつもりはないからな」

「そうなの？ 何故かしら？」

「あそこはローゼンディアだからな。俺にはあまり居心地が良くないのさ」

アイオナには意味が解らなかったが、とにかく町に入らないということなら、ここが別れの場ということになる。

「そうなの。じゃあお別れね」

「そうだ」

「<sup>せいせい</sup>清々するな」

「あなたは黙っていて」

アイオナがダーシュの<sup>つぶや</sup>呟きを制すると、ケザシュは乾いた声で笑った。

「では俺は行くとしよう。また会うこともあるかも知れん」

ケザシュは砂漠に向かって歩き出した。<sup>らくだ</sup>駱駝に乗るわけでもなく徒歩で歩き去ってゆく。

何人かがケザシュを指差して不審がり始めたが、ダーシュは放っておけと素知らぬふりだ。

「奴は普通ではない。問題は無いさ」

アイオナとしては気になったが、いきなり自分たちの前に現れたことといい、紐を毒蛇に見せかけたことといい、確かに普通ではない。

考えている内にケザシュの姿は闇の中に溶けていった。後には砂の音だけが残った。

火に当たりつつ他の人たちと取り留めもない話をしながら日の出を待った。

ダーシュは会話に参加することなく、剣を支えにしたままアイオナの隣でうたた寝をしていた。

完全に眠っていると思って布を掛けてやると、  
「ありがとう」

しっかりとした声で礼を言われてびっくりした。

アイオナは他の人たちと火を囲みながら、温かい香草茶を飲んでいたが、いつの間にか眠ってしまっていたらしい。ダーシュに揺すられて目を覚ました。

「起きろ。ディブロスに入るぞ」

始めの頃は寝顔を見られるのが嫌だったが、今では意識しない限りは気にならなくなった。

いつの間にかダーシュに掛けたはずの布が自分に掛けられていた。眠っている間にダーシュがそうしてくれたらしい。

朝日が昇ってきていた。

荒漠とした砂礫の向こうに都市が見え、さらにそ

の向こう、遠くにはミスタリア海が見えた。

ディブロスはローゼンディア人の植民都市であり、ダルメキアの領内にあるものの、ローゼンディアの都市として認められ、独立した政治機構を持っている。言うなれば小国家だった。

町を取り巻く灰色の石壁はローゼンディア風のものであり、ここからはよく見えないが、その石壁の向こうには、やはり同じ様式の建物が整然と並んでいるのだ。

それを想像した時、アイオナの胸の中に安堵感が広がった。

「いつ見ても思うが、ローゼンディアの建築技術は  
みごと  
見事なものだな」

「ディブロスに来たことがあるの？」

ダーシュは心外そうな顔をした。

「長い歴史を持つ交易都市だ。訪れたことが無い方が不思議だと思わないのか？」

「それもそうね」

ディブロスは判っているだけでも三千年以上の歴史を持っている。都市としての規模も大きく、ミスタリア海沿岸の交易都市として、果たしてきた役割は大きい。

都市正門で簡単な手続きを済ませ、二人はディブロスに入った。

港へと続く大通りの左右には宿屋や交易商人の店が建ち並び、町に入ったばかりの旅人を誘っている。

お茶売りが金属の茶器を鳴らしながら客を呼び込んでいると思えば、駱駝に水袋を乗せた水売りも負けじと声を張り上げている。

香辛料の混じった良い匂いに釣られて目を向けると羊肉の回転焼きの店が見え、その近くでは果物屋が切った果物や、器に入れた果実水を売っている。

生糸や、美しい刺繍をされた反物の店があり、細工の美しい家具を並べた店もある。

どの店も呼び込みや、あるいは商品の入荷を報せるを板を出しており、そこにはイデラ語、アウラシル語、ローゼンディア語の各言語が書き付けられている。

似たような光景はアンケヌでも見られたが、こちらの方がより国際的に感じてしまう。

おそらく区画整備の見事さや、石で舗装された通りなどから受ける印象であろう。

その中を駱駝を引きながら水場まで歩いた。

水場は公共のもので誰でも無料で利用できる。特にアウラシルでは、大抵はアウラシル人の篤志家が寄進をすることによって作られる。

ローゼンディア人は浴場の建設には意欲的であ

り、当然水場の整備についても関心を持つわけだが、こと公共の水場についてはアウラシール人に後れを取ることが多い。

これを口の悪いアウラシール人は、「我々が引いた水をローゼンディア人が風呂で浪費する」などと言うが、これは確かに、そう言われても仕方ないだけの真実を含んだ言葉であった。

ディブロスの水場は広く、水を使える場所も一箇所ではなく、広場の中に幾つかの水場が存在していた。

それぞれの水場の上には天井があり、すぐ近くにはやはり天井を備えた休憩所が用意されてある。

休憩所の長椅子では休んだり、世間話をしている旅人や市民があり、水場では諸肌もろはだを脱いで身体を拭いている男や、桶に汲んだ水を駱駝に飲ませている旅人の姿があった。

駱駝を繋ぐと、ダーシュが駱駝の荷の中から貴金属しまを蔵った袋を取り外した。

旅に出る前にアイオナが預けた袋だった。

「ほら」

差し出されて、何のことかと思うほど愚かではない。だが一瞬考えてしまったのは何故だろうか。

「大切にしろ」

荷を縛り直しながら、ダーシュは小さな声でささ

やいた。中味が貴金属だと他の者に知られないようにとの気遣いだろう。

それからアイオナに片方の駱駝の綱<sup>つな</sup>を渡してきた。道中アイオナを乗せ、その荷物を運んでくれた駱駝だ。

「……なんのつもり？」

「お前にやる」

言われて駱駝を見た。長い睫に縁取られた黒い瞳が、きらきらと光っている。駱駝は唇を捲<sup>めく</sup>り上げてアイオナを見返した。いつも思うのだが侮<sup>あなど</sup>られているのか、懐<sup>なつ</sup>かれているのか理解に苦しむ表情である。

「お前にはすまないことをしたと思っている。アンケヌが落ちた時、俺が傍<sup>そば</sup>に居ればお前にも、お前の屋敷にも被害が出ないかと思ったのだが、俺の目算は外れた。お前には恐ろしい思いをさせてしまったし、苦勞をさせた。すまないと思っている」

「あなたが居るお蔭<sup>かげ</sup>で確かに、屋敷も店も掠奪<sup>りやくだつ</sup>は免れたわ」

「だがお前が生命<sup>いのち</sup>を狙われては元も子も無いだろう」

「そうね。けどそれも――」

「ヘキナンサの思し召しか？」

ダーシュは微笑んだ。普段のような、人を小馬鹿



にした笑い方ではない。微<sup>かす</sup>かに白い歯を見せる上品な笑い方だった。

きっと、これがこの人の本当の顔なのだと思うた。

「それに夫婦は助け合うものよ」

病める時、飢える時、苦しき時、いかなる時も互いを思い、助け合うべし。

ローゼンディアではそう教えられる。

「そうなのか……いいことを言うものだな」

「あなたはそう教わらなかったの？」

「ああ。結婚は男の義務であり、一族への責任の開始だ。すべては男が背負う。女は子供の世話くらいしかすることがない。アウラシールではどこもそうだ」

「もったいないわね」

「俺もそう思う」

今度はアイオナが微笑んだ。

「……これからどうするの？」

「そうだな……取り敢えずはダルメキアに<sup>とど</sup>逗まるか、船でミスタリア海にでも出るか。ローゼンディアへ行くのも悪くないかも知れん。そうすればザハトの手も、暗殺者<sup>ガズー</sup>の手も伸びては来ないだろうからな」

ならマンテッサに来ない？　そう言いそうになっ

た。

けれど言えなかった。

「苦勞をかけた詫<sup>わ</sup>びが駱駝一頭というのも寂しい話ね」

代わりにアイオナはそう言い、冗談のように肩をすく<sup>すく</sup>竦めた。

「はは。そう言うな。そう見えてもそいつはいい駱駝だ。役に立つぞ」

「そんなことは判ってるわよ」

道中良く働いてくれたのだから。

「お別れだ」

ダーシュは静かな目でアイオナを見た。

「……ええ、お別れね」

「あ、あの奥さま!? 旦那様!?!」

スイサが目を白黒させている。そうか、この子にはまだ全ての事情を話してはいなかったわね……ぼんやりとそう思った。

「達者でな」

自分の駱駝を引くと、ダーシュは背を向けて歩き出した。

アイオナはそれを見送った。すぐに人の間に紛<sup>まぎ</sup>れて見えなくなった。

背の高い、駱駝の頭だけは暫<sup>しばら</sup>く見えていたが、それが判らなくなるまでアイオナは見送った。

それから息を吐いた。ゆっくりと。

終わったのだと思った。

「奥さま！ 旦那様が……！ 奥さま！」

スイサが必死に服の裾<sup>すそ</sup>を引っぱってくる。アイオナは優しくスイサの頭に手を置いた。

「いいのよ……始めから決まっていたことだったのよ」

スイサの目に涙が溜まり始めた。

「そんな……」

「あなたはわたしと来るの。わたしたちはこれからも、一緒よ」

「そんな……」

スイサは啜<sup>すす</sup>り上げ始めた。

「あたし……もう奥さまとお呼びすることができなくなってしまう……」

その啜きを聞いた途端に胸が詰まった。スイサを慰めなければいけないと思いつつも言葉が出てこなくなった。

止める間もなく涙が溢れてきた。アイオナはスイサを抱き締めて泣いた。声を殺して泣いた。

決断に後悔はない。始めから決められていたことを履<sup>りこう</sup>行しただけだ。

約束を守る。

それが商人として大切なことだと教えられてき

た。

けどこの喪失感は何なのか。身体からだの中を風が吹き抜けてゆくようだ。

乾いた、冷たい風だ。このディブロスの熱気にはふさわ相応しくない。

日はまだ高くなる。太陽神アクションは天頂を目指して駆け上る途上にある。

濃い影が石畳の上に落ちている。それが自分の頭おおを被う布の影だと判るまでに少し時間が掛かった。

腕の中でスイサも泣いている。スイサの温もりを感じていると、しっかりしなければと思った。

ひとしき頻り涙を流すとアイオナは立ち上がった。スイサの手を取ると、涙を拭って歩き出した  
これからどうするか。

取り敢えずはメルサリスの商館に行くのが自然だろう。

メルサリス商会は手広く商売をしている。当然ディブロスにも何年も前から商館を持っている。

そこでじっくり休息を取った後はディブロスの政庁に届け出て、マンテッサへ向かう船に予約を取ることにしよう。

一度、父の所へ戻ろうと思った。

まずは商館だが、商館のあるのは港側だ。

船からの荷の積み下ろしのためだが、お蔭かげで港側

まで歩いていかねばならないし、そろそろ朝食を摂<sup>と</sup>る時間でもある。

どこか適当な所へ、そう、ローゼンディア人が経営している宿屋か料亭がいい。この町なら簡単に見つかるだろう。

アイオナはダーシュとは反対側に歩き出し、通りへと出た。

どうせなら一番大きな店にしよう。お金はあるのだ。

今まで砂と汗と、<sup>さそり</sup>蠍避けのジャヌハにまみれて旅をしてきたのだ。少しくらいいい思いをしたって罰は当たらないと思う。

何だかまだ泣きたいような気持ちだったが、泣いたらお終<sup>しま</sup>いだと思ったので我慢することにした。

結局大通りまで出てきてしまった。立派な宿屋や料亭というと、どうしてもこの通りに面した店になってしまう。町の正門から港にまで通じる大通りだ。

大きな宿屋の前に立った。

「お嬢さん」

「わあ！」

<sup>す</sup>素っ頓<sup>とんきょう</sup>狂な声を上げてしまっても仕方ないと思う。何せいいきなり真横にヒスメネスが立っていたのだ。

「そんなに驚かないで下さい」

「驚くわよ！　なんであなたがここに居るの！」

「店先です。大声は出さないように」

ヒスメネスの態度はいつも通りだった。そのまま店の外側にある、通りに面した席へとアイオナを誘うと、注文聞きちゅうもんの少年に茶と軽食とを注文した。実に手際てぎわがいい。

ちょうど朝食時ということもあり、他にも食事を摂ったり休憩したりしている人たちが、周囲の席に陣取っている。

商談をしている者まで居る。アウラシール語で砂糖の値段を言い合っていた。

「無事にディブロスに辿り着けて何よりです。心配しましたよ」

「質問に答えていないわ。あなたなんでここに居るのよ」

「先回りしたんですよ」

何でもないようにヒスメネスは答えた。

「お嬢さんたちにそれほど選択肢はありませんでしたしね。ダーシュの人柄から考えて、まずディブロスに向かうだろうと思っていました」

「いったい、あなたの頭はどうなっているの？」

すべて見通していたということか。アイオナは驚き、かつ呆あきれた。

「どうもなっていません。普通です」

「いえ絶対に普通じゃないわ」

アイオナは首を振った。注文取りをした少年が、盆の上に食べ物や茶を載せて現れた。

「すいません。注文の食べ物持てきます夕」

詰まったような物言いである。強勢の置き方や耳当たりからの判断だが、言葉の訛なまりはアウラシール語ではないかと思った。

少年はウナとマナナイ、野菜の和あえ物、豆のスープ、とりにく鶏肉の蒸し焼き、香草茶と氷砂糖を手早く並べ、ヒスメネスから銀貨を受け取ると、客の間をすり抜けるようにして店の中へと戻っていった。

「ところでそちらのお嬢さんは？」

「彼女はスイサ。これからわたしが面倒を見るの」

スイサにも解るようにアイオナはイデラ語でヒスメネスにそう言った。

「そうですか」

ヒスメネスもイデラ語で答え、うなず頷いてスイサを見た。

「旦那様にお預けになるのが良いと思います」

「わたしもそう考えていたのよ。この子はいい商人になる素質があるわ」

「よろしくね。私はヒスメネス。メルサリス商会で働く使用人です」

使用人と言えるほど下<sup>した</sup>っ端<sup>ば</sup>ではないのだが、雇<sup>やと</sup>わ  
れていることに変わりはないのでアイオナは訂正を  
しなかった。

「あたしはスイサと言います。奥さ……あの、助け  
ていただきました」

「うん」

ヒスメネスは優しく微笑んでスイサの頭を撫でて  
やった。

説明と言えるような言葉はほとんど交わしていな  
かったが、おそらくヒスメネスには大体の事情が理  
解出来ているのだろうと思えた。

だからアイオナも何も言わなかった。落ち着いた  
ら、ゆっくりと事情を説明すればいい。そう思っ  
た。

運ばれてきたウナを手に取り、千切<sup>ちぎ</sup>ってから、そ  
こに野菜のマナナイを匙<sup>さじ</sup>で掬<sup>すく</sup>って軽く盛った。

綺麗に四色に分けられた野菜のマナナイは、どれ  
も煮崩れた果物の砂糖煮か、やはり煮崩れた何かの  
煮物のようになっているが、甘いものは一つも無  
い。

マナナイを知ってから暫くは、これは主食となる  
ウナの付け合わせなのだと言っていたが、どうも主食はマナナイの方らしい。初めて見た  
時はこれは何なのかと思ったものだった。



味は美味くも不味くもなかった。少し塩が強く感じた。アイオナは薄味が好みだ。

アルサム油に甘みがあるから、熟したアルサムから採れた油だろう。もっと若い油の方がいいのではないかと思った。

香辛料には特に気を惹く点はなかった。普通に使っている感じだ。

昨日ケッサラで食べた物の方が美味しいし、無論アンケヌの屋敷で食べていた物とは比ぶべくもない。店構えの立派さにしては大したことはないなと感じた。

多分料理人にはあんまりやる気はないと察せられた。

だが、まあ及第点の味とは言える。

「まともな食べ物にありつけるのは久しぶりでしょう」

ヒスメネスはそう言ったが、そうでもない。昨日の昼に美味しい食事を口にしているのだ。

「ケッサラでいただいたわ」

「そうでしたか」

ヒスメネスは上品に香草茶を飲んでいたが、アイオナとスイサはがつがつと食事をした。

別れの後でも腹は減る。昨日の夜は休憩場所の岩陰で分けてもらったウナと香草茶しか口にしていな

い。普段決して大食いではないが、この分だとヒスメネスの分まで平ら<sup>たい</sup>げてしまいそうだった。

「これからどうなさるおつもりですか？」

「そうねえ。いったん父様の許<sup>もと</sup>に帰るわ。その方が安全でしょう」

「ええ。私もそれがいいと思います」

ヒスメネスは同意した。

アイオナは少し考えたが、旅の道中疑問に思っていたことを聞いてみることにした。

「あなたどうしてダーシュを切り捨てたの？」

裏切った、という言葉は使いたくなかった。ヒスメネスを責めているようだし、彼とダーシュとの間に何らかの契約があったとは思えないからだ。もし契約があったならヒスメネスは裏切らない。そういうことはしない人だと思う。

「あの状況ではザハトと結んだ方が安全だったからですよ。実際、他の選択肢はどれも危険過ぎました」

「あなたが言うなら、そうなのでしょうね……」

残念だった。だが仕方のないことでもある。

ヒスメネスの護るべきはまず彼自身であり、店であり、そして多分、アイオナなのだ。

頭の良い彼が熟考した末に出した結論がそれならば、文句を言うことは出来ないと思った。

「ケザシュと手を組んだのよね？」

「彼に会いましたか？」

「ええ。私たちを助けるよう彼に命じたのでしょ  
う？」

「ええ。それくらいしかしてあげられませんでした  
から」

「ありがとう。ひょっとしたらわたしの知らないと  
ころで彼には世話になっているかも知れないわ」

「お役に立てたなら何よりです」

「ダーシュは嫌っていたけどね」

「そうですね」

アイオナとヒスメネスは苦笑を交わした。

「あなたはこれからどうするの？」

「アンケヌに戻りますよ。仕事が待っていますか  
ら」

「……そう。じゃあここでお別れね」

せっかく  
折角出会えたのに、ヒスメネスとも別れなければ  
ならないのか。そう思うとアイオナはとても寂し  
かった。

「私はお嬢さんの無事を確認しに来ただけですか  
ら」

「人が好<sup>よ</sup>いのね」

「その商品は店の取り扱い品目の中にはありません  
ね」

真面目な顔でヒスメネスは答えた。彼らしい冗談だと思ったが笑ってしまった。少し涙が出てしまうほどに。

「いろいろなことがあり過ぎました。旦那様の所でしばら暫くお休みになられるのが良いでしょう」

「ええ。ありがとう。ヒスメネス」

通りの方からざわ騒めきが広がってきた。遠くの方にひとだか人集りが出来ているようだ。

「何かしら？」

並びの席に坐っている客の中にも、立ち上がって様子を見に行く者が出始めた。

どうも何かが起こったらしかった。槍と鎧の燦めきが見える。ディブロスの兵が先導をして、野次馬を寄せないようにしているのだ。

「何か揉め事があったようですね」

胸騒ぎがした。

「……ちょっと見てくるわ」

「お嬢さん」

ヒスメネスがはっきりとした声で呼びかけた。

「およしさない。争い事だった場合、巻き込まれないとも限りませんよ」

「ええ。でも気になるの。スイサをお願い」

アイオナは立ち上がって人混みの方に向かった。

＊

思っていたよりも別れは重くのし掛かってきた。

最初からこうなることは解った上での契約だったはずだ。なのにこの喪失感は何故だろう。

駱駝を引きながら、ダーシュは石畳の上を歩いていた。気が付くと市場に出ていた。知らない内に人恋しくなっていたのかも知れない。

特に何か買うつもりは無かったが市場に足を踏み入れた。

まだ朝だったが、人の数は多く、買い物に来ている人々でごった返していた。

果物を並べている店の前で足が止まった。黒い髪ぶどう すいかの娘がイムールや葡萄、西瓜などを売っている。

イムールはローゼンディアではエミュルと呼ばれている桃に似た果物だ。

皮は赤く、皮ごと食べられるが、この皮の部分に酸味があるので、皮ごと食べる人とそうでない人がいる。これは好みの問題である。

果肉は瑞々しく甘い。古くから人気があり、一般的な果物だと言える。生でも砂糖漬けでも食べられる。

その他にダーシュの知らない果物も多い。ローゼンディアの海洋商人が船で運んでくる物だろう。

「富めるローゼンディア」という言葉がある。本当だなと思った。

果物よりも娘の姿を見ている自分に気付いた。黒い髪、アイオナと同じだと思った。

頭を振って歩き出そうとした。

「お客さん！ 何か買っていかない？」

ローゼンディア語で呼びかけられた。娘は明るい笑顔で、ダーシュの見たことのない果物を一房手に<sup>ひとふさ</sup>提げている。葡萄に似ているが少し違う。

「……そうだな。そちらの林檎を<sup>もら</sup>貰おうか」

ダーシュは林檎を指差した。アウラシールではま<sup>ず</sup>手に入らない果物だ。

ザナカンダに行けば山の方で採れると言うが、当然値は張る。

おそらくここでも高い買い物になるだろうが、どうせ食べるならそれくらいのものを食べたい。そんな気分だった。

懐から銀貨を取り出して娘に渡した。代わりに林檎を四つ渡された。

「毎度あり！」

己は何をやっているのだろうか。

苦笑しながら林檎を両手に抱えた時、嫌な気配を背後に感じた。

咄<sup>とっさ</sup>嗟に振り向いた。短剣を持った男が突きかかっ

てくるところだった。

ダーシュは男に林檎を投げつけるように放り出した。ばらばらと林檎が男の肩や額に当たるが、全く<sup>ひる</sup>怯む様子はない。

素速く剣を抜こうとしたがその時にはもう男が懐に入ってきていた。

短剣が突き出される。

周囲から悲鳴が聞こえる。

ダーシュは大きく身を<sup>ひね</sup>捻って短剣を<sup>かわ</sup>躲したが、男の方もすぐに突きから払いへと攻撃を変えてきた。

右腕に軽い衝撃が走った。短剣が<sup>かす</sup>擦ったのだ。早くも男とダーシュを囲んで大きな人混みの輪が出来ており、距離を取れるだけの余裕があった。

ダーシュは数歩離れたところで剣を抜いた。男は攻撃をしてこない。じっとダーシュを見ている。

男はアウラシール人だ。若い。何者だろうか？だがすぐに思い当たる相手があることに気付いた。

右腕が<sup>しび</sup>痺れる。石畳上に血がぽたぽたと落ちる音がする。

再び嫌な予感がして、ダーシュは右腕の傷口に目をやった。男から目を離すのは自殺行為だと判っていたが、そうせずにはいられなかった。

——毒！

右腕の傷口には黒緑色の何かが付着している。服

の袖にも一部付いている。

ダーシュは剣を落として傷口に吸い付いた。毒を吸い出さなければ。痛みなどに構ってられない。

男は攻撃をしてこない。人混みを掻き分けて足早に去っていく。

もう攻撃する必要は無いのだと言わんばかりだ。

——油断した。

吸える限りの毒を吸い出すと、ダーシュは服を裂いて右腕の付け根を縛った。どのくらいで効いてくるか？ どんな毒なのか？ まるで見当が付かない。

——あとは俺の体力次第か……。

投げ遣りになるわけではなかったが、このまま毒に倒れても仕方ないかと思った。

ただ——。

この場にアイオナが居なくて良かった。

居たらきっと大騒ぎになるだろう。いや、すでに騒ぎになっているか……。

自嘲的にそう思った。

体が痺<sup>しび</sup>れてきた。寒気がする。かなりの量を吸い出したつもりだったが、なかなか仕太<sup>しぶと</sup>い毒のようだ。目の前が暗くなってきた。

「誰か……医者を呼んでくれないか？」

イデラ語が口を衝<sup>つ</sup>いて出た。ダーシュを見ている



人たちは不思議そうな顔をしている。

周囲は騒がしい。刃傷沙汰があったのだから当たり前だが、人々の交わす言葉が耳慣れないものだった。

そうか。ここはローゼンディアだったな。イデラ語では通じないか……。

ローゼンディア語で言わなければな。

ぼんやりとそう思っていると、急に左肩を掴まれた。

「医者を呼んだわ。何があったの？」

すぐ横にアイオナの顔があった。

「……アイオナ？」

「そうよ。<sup>ガス</sup>暗殺者に襲われたのね？」

呑み込みが早いと思った。やはりこの女は頭がいい。話が楽で助かる。

しかしこんな姿を見られたのはまずかった。大騒ぎをされてしまいそうだ。

けれどアイオナは取り乱さなかった。

「毒……だ」

「ええ。見れば判るわ。毒の種類が判るようなものは残っている？」

「服の、袖に……」

自分の呼吸が荒くなっていることに気付いて驚いた。

「今からあなたを運ぶから、もう少し我慢してね」

かっちゅう

甲冑を着た兵士が二人やって来て左右から体を担

かつ

ぎ上げられた。

体が浮き上がると急速に意識が遠退いた。

とおの

## 第二十五章 追憶

傘の下は不思議と涼しい。

左右に立った女たちが風を送ってくれるからなのか、それとも日避けの傘のお蔭かげなのかは判らないが、近くに待る者たちも、それぞれに棗椰子なつめやしの木陰を利用して涼んでいるが、ここほどには涼しくはないらしい。額や首筋に流れる汗がそれを物語っている。

吸う息は熱く、吐く息は冷たい。

それはこの場にいる誰もがそうだったろうが、目の前で平伏している男は一際ひときわに、そうだったろう。

男の服装は腰の周りを覆おおう布だけ、足は裸足、頭を包む布さえしていなかった。

奴隷だから当たり前だったが、日射しの直撃を受ける剥き出しの肉体は、ある種異様な凄味すごみを持っているように感じられた。

少なくともダーシュの目にはそう見えた。

「鳥を捕ったのはお前か」

問う声には感心したような響きがあった。

「ははあ」

見かけに似合わず甲高い声だった。何だか顔が駱駝らくだに似ている。

ずんぐりとした体型といい、平伏している男は見

るからに鈍重そうで、とても鳥など捕れる才覚があるようには見えなかった。

連れてきた兵たちの証言からすれば間違いなくこの男なのだが、ダーシュとしてはむしろ兵の間違いではないかと疑いたくなっていた。

「この石を投げて鳥を捕ったのだな」

ジュダルは<sup>てのひら</sup>掌の上で黒い石を<sup>もてあそ</sup>玩んでいる。

「聞いたか？　ダーシュ。この男は<sup>かわひも</sup>革紐も無しに石で鳥を落とすと言うぞ。凄いとは思わないか？」

「……出来ないと思います」

石投器もなしに、ただ手でもって投げただけで鳥を落とせるはずがない。

「そうか。お前もそう思うか」

ジュダルは<sup>うなず</sup>頷いた。髪飾りがさらりと鳴った。その音は<sup>かす</sup>微かだったが、近くに立っているダーシュには聞こえた。

王族らしく髪を長くしているのはともかく、兄ジュダルは女のようにその身を飾り立てるのが好きだった。

金銀貴金属や<sup>ちりば</sup>貴石を鏤めた装身具を身に<sup>まと</sup>纏い、髪を飾り、香を<sup>た</sup>焚いた。

王族の、それも男性が<sup>ほどこ</sup>施す化粧は女のものとは程遠い。

それは戦士と神官とを兼ねるものだからだ。

美しさよりも強さと崇高さを意味するものだからだ。

だがそんな化粧と華美な装身具、それら全体がジュダルという中心の中に納まってみると、驚くほど似つかわしい。

またジュダルはその優美な外見からは想像出来ないほど勇猛でもある。

王宮の誰もがジュダルを次期王と認め、期待と尊敬を持って見上げていた。

「やってみせよ」

よく通る声でジュダルは命じた。

男は慌てるだろうと思った。何とか言い逃れようとするのではないかと。

だがダーシュの予想は外れた。男はあっさりと命に答えた。

「かしこまりました」

上げた顔にも焦りの色はない。駱駝のような、<sup>ひょう</sup>剽軽さを感じさせる顔をしている。

甲高い声といい、何だか<sup>どうけ</sup>道化のような男だと思った。

男は小さな石を二つ手に持って歩いた。棗椰子の木の間にある、少し開けた場所に出ると、中腰になって構えた。

男には用心のために兵が二人付いているが、逃げ

出すつもりは毛頭無いらしい。

空を見ながらじっとしている。

結構長い間そうしていたが、やがて鳥影がちらりと木の上に見えた。鳥の全身が見えると男は腕をゆっくりと回し始めた。

鳥が木から離れ飛び立とうとする瞬間、短い気合と共に男は石を投じた。今までに見たこともない投げ方だった。

石は恐るべき速さで宙を飛び、鳥の胸を打った。

だが驚くのはそれからだった。

何と男は落ちてくる鳥目懸めがけてもう一つの石を投げ、それも命中させたのだ。

「おお」

ダーシュの周囲から響動とよめきの声が上がった。今男がやって見せたことがどれ程難しいことであるか、誰にも判るからだ。

男は地に落ちた鳥を掴つかむとジュダルの傍そばまで走り寄ってきた。

傘の影の外側に来るとひざまず跪き、鳥を両手で差し上げた。

声を発する者はなかった。男の技に対する驚きが大きかったのだ。ダーシュも内心舌を巻いていた。

石投器もなしに、ただ手でもって投げただけで鳥を落とせるはずがない。

初めはそう考えた。だがその考えは間違いだった。

男は素手で石を投げ、見事に鳥を落として見せたのだ。

「見事だ。誰に習った？」

驚きを隠そうともせずにジュダルが尋ねた。

「は、はい。そのう……勝手に覚えた技でございませう」

恥じ入るような声である。男には誇るところが感じられなかった。

自分が見せた技の意味をよく解っていないのだ。

「お前が嘘を吐いていないということは解った」

兵たちに捕らえられた時、男は王室の御苑ぎょえんで狩りをしていた。たまたまジュダルが御苑に来ていたために見つかってしまったのだ。

王室の御苑で狩りをすることは禁じられている。

見つければまず死刑だ。この男だって当然それは知っているだろうに、何故この場所で狩りをしたのか。

ダーシュには解らなかった。

「どうしてこの場所で狩りをした？」

ジュダルが核心部分を尋ねた。

「はい。そのう……は、腹が減っておりまして……」

身を縮ませて男は答えた。<sup>おび</sup>怯えているというよりも恥じている感じだった。

これから男に下される刑罰は間違いなく死刑だ。

王族以外の人間が御苑で狩りを行うこと自体、言語道断であるのに、この男は奴隷である。

死刑以外考えられなかった。

<sup>よほど</sup>「余程腹が減っていたのであろうな」

「はい。それはそれはもう……」

男は額を地に擦り付けながら、消え入るような声で答えている。

兵を含めてジュダルやダーシュの近くに<sup>はべ</sup>侍っている者たちは、あからさまに男に<sup>ぶべつ</sup>侮蔑の眼差しを向けていたが、ダーシュは不思議とそんな気にはならなかった。

お腹が空いていたのなら仕方ないな。

そんな風に思った。見つければ殺される。その危険を<sup>おか</sup>冒してまで狩りをした。

それ程にお腹が空いていたのなら仕方ない。

そう思った。

「それだけ太っていれば腹も空くであろうなあ……」

感慨深げにジュダルが言うと、周囲からどっと笑いが起こったが、当のジュダルは笑っていない。その目は黒く輝いて、興味深げに男を見下ろしてい



た。

「<sup>ゆる</sup>赦そう」

思い付いたように、だがはっきりと誰にも聞こえるようにジュダルが宣言した。

誰もが驚いたようにジュダルを見上げた。

平伏していた男も、ダーシュもだ。

「私はお前を赦すことにする。その鳥も与えよう」

「たっ、太子様……」

近侍<sup>きんじ</sup>の一人が声を詰まらせるようにしてジュダルの前に進み出た。余程慌てているのか動きも少し奇<sup>お</sup>妙<sup>か</sup>しかった。

「何人<sup>なんびと</sup>たりとも御苑で狩りを行うことは禁じられております。禁を破った者には厳罰が下されるが定め、何卒<sup>なにとぞ</sup>お考え直しを……」

近侍の言い分には筋が通っている。それを<sup>ま</sup>枉げようとするジュダルの方に非があるのだ。

だがこういう時、どうなるかダーシュにはよく判っている。

この時もそうだった。

「嫌だ」

ジュダルはあっさりと近侍の言葉<sup>しりぞ</sup>を却けた。

「ここは王室の狩り場、そしてこの私が赦すと言っているのだ。それで充分であろう？」

「太子様あ……」

なんとも情けない声で近侍は嘆いたが、それ以上  
言い募ってはこなかった。

この男も十年以上王族に仕えてきている。

ジュダルの性格をそれだけよく知っているのだ。

「お前の技は見事だ。誇るがよい」

男に向けて手を翳した。裁きが終わった印だった。

「宮殿へ帰るぞ」

ジュダルが腰を上げると一斉に周囲の者たちが動き始めた。傘を畳み、広げていた掛物を巻き取り、腰掛けを片付ける。

整然とした動きの中、平伏している裸の男だけが取り残されていた。

呆けた顔でジュダルを見上げている。

「ダーシュ。人は空腹には勝てぬぞ。憶えておくがいい」

微かに頬を上げてはいるがジュダルの瞳は笑っていない。

そう。兄はよくこういう顔をした。

派手を好み、華美を好み、遊びに情熱を燃やしながらも、どこか冷静さを残していた。

けれどダーシュはそんな兄が好きだった。

ジュダルの冷静さは冷たさではなく賢さ、そして優しさを感じさせたからだ。

「……行くがいい。誰にもお前を罰せさせぬ。よく盗みや強奪に走らなかった。お前は立派な男だな」

臣下の者たちが後片付けをしている間に、ジュダルはダーシュを連れて男に近づいて、そうささやいた。

男は驚いたような顔をした。長い<sup>まつげ</sup>睫毛に縁取られた目に涙が溢れてきた。

声を殺して男は泣いていた。肩が小さく<sup>ふる</sup>顫えている。

その頃のダーシュには、男が何故泣くのか解らなかった。

今ならばよく解る。

＊

メルサリス商会の商館は船着き場に面している。船からの積荷をそのまま店に引き入れられるからだ。

商館といっても複数の建物の集まりであり、専門の倉庫として使われている建物と、倉庫に商店を併設した建物、そしてアイオナ達が暮らす居住用の建物とがある。

アイオナが言う所の商館とはこの居住用の館を指していた。

そこは一階が積荷を置いておく倉庫と商店になっており、二階から上が大きな商談などを纏めるための応接室や会議室、そして三階と四階が居住空間になっている。

ダーシュは三階の客室に運び込まれた。すぐに医師が呼ばれ手当てが施された。

毒の種類は判明しなかった。

「概ね、毒とはそういうものですよ。解毒方法が簡単に判るようでは意味が無いですからね」

「よくもそんなことが言えるわね」

いつもは気にならないヒスメネスの言い方が、やけに気に障った。

「申し訳ありません。ですがあとはダーシュの体力に任せる外無いと考えます。我々に出来ることは見守ることだけです」

「わかっているわよ！」

「落ち着いて下さい」

「落ち着いているわよ。冷静にね。事態の推移を見守っているわ」

「ならば結構です。あとは召使いに看護を任せてお嬢さんはお休みになられて下さい」

「いいえ。わたしが看護するわ」

ヒスメネスは溜息を吐いた。

「およしなさい。彼と我々とはもう関係無いので

す。契約も切れているのでしょうか？」

「あなた……」

ヒスメネスを睥<sup>にら</sup>んだ。ヒスメネスも視線の意味を理解したのだろう。首を振った。

「別に彼の死を願っているわけではありませんよ。助かるものなら助かって欲しいと思っています。けれどそのために、お嬢さんが必要以上に彼に尽くす必要は無いと申し上げているのです」

「でも、だって……」

「とにかくそろそろお休みになられて下さい。もう二日もお休みになっていないでしょう？」

ダーシュが生死の境を彷徨<sup>さまよ</sup>っているというのに、とても横になる気にはなれなかったのだ。

アイオナは医師の手配、毒の分析、ディブロス政庁への、何故ダーシュが襲われたのかの報告をしてきた。

もちろん暗殺<sup>ガズー</sup>者のことは伏せた。暗殺<sup>ガズー</sup>者に狙われている人間など市で受け入れてくれるわけがない。

適当な揉め事<sup>でっ</sup>の理由を捏ち上げて嘘の説明をしたわけだが、ゴーサの傭兵団に追いかけて回されている方については、概ね本当のことを話した。

事実濡れ衣なのだから問題は無い。問題があるとするれば、何故ゴーサの兵士たちがダーシュを犯人と特定したかということだが、ケザシュの魔術の話

したところでややこしくなるだけだと考えてそこは伏せた。

ともかくその辺りの仕事を全部、ダーシュの市内への滞在の届け出などを全て、アイオナは一人でやっていたのだ。

手伝うというヒスメネスの申し出は断わってきた。アンケヌに戻るという予定を急遽<sup>きゅうきょ</sup>取り止めてくれたヒスメネスだが、休みを取っているわけではない。

彼には商会の仕事がある。申し出を断わるのはそれが理由ではあったが、自分が意地になっている面もあるのは否めない。

「ダーシュが目を覚ました時にお嬢さんがきちんとしていないと、<sup>けお</sup>気圧されてしまいますよ。彼は皮肉屋ですからね」

「……そうね。そうだわね」

アイオナは<sup>しぶしぶ</sup>渋々頷いた。

けれど寝台に行く気にはなれなかった。近くにあった椅子に深く腰掛けた。

目の上に布を乗せた。ダーシュの顔の汗を拭くために用意した布だった。

「何かあったら起こしてちょうだい」

「わかりました」

＊

宮殿を脱出してもまだ安心はならなかった。

都市の内にはまだ敵の兵がうろうろしていたし、誰が敵で、誰が味方かも判らないのだ。

全ての兵が叔父に従っているかどうかは判らないが、敵味方が判然としない以上、迂闊うかつにこちらから兵に呼びかけるのは躊躇ためらわれる。

だから都市内に居る限り、誰にも出会うぬようにするしかない。

かと言ってアンケヌから出てしまえば安全かというところでもない。

叔父は当然追っ手を差し向けるだろうし、誰が自分たちの味方になってくれるかは判らない。場合によっては全てが敵という状況もあり得ないことではない。

西側の市壁そばの傍まで来たところで建物の陰に身を潜めた。

夜も更ふけている。出歩いている者は見当たらなかったが、市民の姿が無くとも、ジュダルたち王太子の一行を求めて徘徊はいかいしている敵兵がいる。

頭上には大きな月がある。真円に近い月だ。

お蔭たいまつで松明を持つという危険おかを冒さなくても、光の下さえ歩いていれば最低限の明かりは確保出来

る。

辺りに人の気配は無かったが、用心のために誰も口を開かなかった。

いや用心のためではなく恐怖からだったのかも知れない。

一行は全部で七人、兄ジュダルと自分ダーシュ、大臣の息子にして従兄弟<sup>いとこ</sup>のザハト、王室近衛のギジムとウルバ、そして兄に付いていた侍女のイーシャ、同じく近侍<sup>きんじ</sup>のホイヤムだった。

この中でまともに戦えるのはギジムとウルバ、そしてホイヤムだけだった。

ダーシュもザハトも小剣<sup>さ</sup>を提げてはいるが、大人の兵士との体格差は圧倒的だ。ぶつかり合えば吹き飛ばされてしまうだろう。

それでもザハトも、ダーシュも戦うつもりでいた。そのことだけは疑いなかった。

「近くには誰もおりません」

軽く周囲を見て回ってきたギジムが報告すると、ジュダルは小さく頷いた。

顔にも体にも濡れたように汗をかいている。左手で傷口を押さえているが、腹に巻いた布越しにも、押さえた手の指の間からも、じくじくと血が溢れてきている。

イーシャがそっと布でジュダルの額の汗<sup>ぬぐ</sup>を拭っ



た。

「……すまぬ」

微かな声でジュダルは礼を言った。苦しそうだ。

時折<sup>うめ</sup>呻くが泣き言は言わない。

瞳は強く輝き、指示は的確だ。だからギジムもウルバもすぐさま命令に従う。

イーシャは丁寧にジュダルの顔の汗を拭ってゆく。優しい手付きだが、その横顔には張り詰めたものがある。恐れと緊張とで今にも崩れそうな危うさがある。

しかしここに来るまで、イーシャは叫び出したり泣いたりせず、一行の足を乱したり危険を招き寄せたりすることは無かった。

いや、一度だけイーシャは短く叫んだ。

宮殿を逃げ出す時の切り合いでジュダルが刺された時だ。イーシャは<sup>ふる</sup>顫え、腰が抜けてしまったようにへたり込んだ。それを自分が抱き起こして走らせたのだ。

少し離れたところでザハトが小剣を握りしめて立っている。目は血走り、体を小刻みに動かして落ち着きがない。通りの向こうを窺うように何度も行ったり来たりしている。

宮殿を抜け出る時にザハトは敵を刺した。

おそらく人を刺すのは初めてだったろう。日頃の

稽古とは違う。気が<sup>たか</sup>昂ぶっていても仕方ないと言えた。

「ダーシュ」

兄が自分を呼んだ。ダーシュは静かに傍に近寄り、膝を着いて顔を寄せた。

建物の陰に潜んでいる以上、通常の会話は出来ないし、今のジュダルには普通の声で話すことは苦しそうだったからだ。

「何でしょうか。兄上」

「……ここから北に行った角に、油屋があるのを知っているか？」

「はい」

大きな<sup>つぼ</sup>壺を幾つも並べた<sup>おおだな</sup>大店だ。市内を出歩いた時に何度か見たことがある。

「その油屋の……手前にな、壺を並べて置くための倉庫がある」

「はい」

「壁に浮彫りがしてある。壺を転がす人夫の絵だ」

それは見たことが無かった。

「……三人の、男が、北に向かって……壺を転がしている絵だ」

ダーシュが記憶を紡ぎ出そうとする様子を見て察したのだろう。苦しそうにジュダルがそう補足した。

「兄上、あまりご無理を致しては……」

「聞け」

ジュダルは短く、しかしきっぱりとダーシュの意見<sup>しりぞ</sup>を却けた。

「その倉庫の向かいの家にな……この鍵で開く扉がある」

イーシャがジュダルの胸飾りの下から小さな真鍮<sup>しんちゅう</sup>の鍵を取り出した。ダーシュに見えるように目の前に翳<sup>かざ</sup>した。

「……扉を開ければ……中庭に出るはずだ」

「何があるのですか？」

「外への……隠し通路がある。父上と……私しか知らぬ」

ジュダルは<sup>む</sup>噎せた。嫌な噎せ方だった。その口からは血が流れ出ている。

ダーシュは衝撃を受けた。浅い傷ではないと解っていたつもりだった。

だがこうして目の前で血を吐かれると、恐ろしさに血が凍るような心地がした。

「太子様……」

か細い声でイーシャが呼びかけ、ジュダルの口許を布で拭った。優しい、しかし悲しい仕草だった。

突然ダーシュは悟った。今まで気付かなかったのが不思議なくらいだった。

明瞭な事実を悟った。

イーシャは兄に想いを寄せている。兄もまたイーシャを慈しんでいる。

そんな単純な事実だ。

ダーシュはイーシャを見て、それからジュダルを見た。

驚きだった。側仕えの侍女と兄が心を通わせていたとは……しかし思い起こしてみれば納得出来る気がする。

ジュダルは常に身边にイーシャを置いて世話をさせていた。

イーシャの父親が娘に婚約者の話を持ってきた時は、一日中機嫌が悪かった。

そういうことだったのかと思った。

ダーシュの表情から悟ったのだろう。ジュダルが微かに笑った。

「お前には……まだ早い」

こんな状況でもそんなことを言って弟の自分を<sup>たしな</sup>窘める。

兄上らしいと感じた。

一行から離れて辺りを見回っていたホイヤムが戻ってきた。

「南から兵の一団がこちらに向かっています」

ダーシュは身を固くした。急いでこの場を離れな

くてはならない。

ギジムとイーシャの肩を借りてジュダルは立ち上がった。

「……行こう」

ゆっくりと歩き出す。一行の先頭にウルバとザハトが、少し距離を置いてジュダルとイーシャ、ギジムが、最後尾にホイヤムとダーシュが並んだ。

追ってくる兵隊がいる。まだ発見されていないとはいえ、そのことは恐怖だった。

いつ後ろにぼんやりとした<sup>たいまつ</sup>松明の明かりが届いてくるかと思うと気が気でない。

ダーシュは歩きながら何度も振り返った。

<sup>あか</sup>燈りを持たないために建物の影に入ってしまうと周囲は全く見えなくなる。

月影だけを頼りに進むことがこれほど不自由だなどと考えたことも無かった。

だが一番恐ろしかったのは暗闇でも、追っ手でもなかった。

地面に点々と続く黒い<sup>し</sup>しみ、兄ジュダルが流した血の跡だった。

見ているだけで恐ろしくて息が詰まる。足が止まりそうになる。

吐く息が震えるのは夜の寒さの所為だけではない。

少し大きな血の跡が目に入った時、思わずダーシュはたたらを踏んで止まった。

「さ、王子様参りましょう」

ホイヤムに背中を押された。優しい声だった。

「急がねば敵に追いつかれます」

「わかっている」

ダーシュはわざと無愛想に答えて歩き出した。

血に驚いて足を止めたのだと思われたくなかったからだ。

幸いにジュダルが言っていた建物まではほとんど距離がなく、二区画ほど歩いたらすぐに右手の茶色の壁に大きな浮彫りが見えてきた。

反対側に目を転じると土塗りの家が建っている。裕福な市民の家らしく、ゆったりとした中庭に通じているであろう木製の扉が見えた。

ジュダルから鍵を受け取ったウルバが扉を開けて、最初に中に入った。

続けてザハトが入る。まだ小剣を抜いたままにしている。危ないと思ったが、ザハトの緊張も理解出来るのでダーシュは何も言わなかった。

外から見ると判らないがこの家には誰も住んではいないらしい。

庭は広く、水場と休憩場が建っている。邪魔にならない程度に木が植えてあるが、池などは切っ

かった。

「外国から訪れる使者のために用意された屋敷の一つさ」

ザハトが教えてくれた。

休憩場の椅子は重そうな石で作られていて、動かすことを考えてはいないようだ。

その石の椅子の一つに、ダーシュはイーシャと手伝って兄を静かに<sup>すわ</sup>坐らせた。

兄が呻く<sup>うめ</sup>るとイーシャは動きを止めた。

「大丈夫ですか？」

イーシャが小声で尋ねた。大丈夫なはずはない。

血は左足全体を染めている。かなりの出血だ。今すぐに手当てをしなければ<sup>いのち</sup>生命が危ないだろう。

「大丈夫だ」

ジュダルは答えて背筋を伸ばした。<sup>りん</sup>凜とした気配が漲<sup>みなぎ</sup>った。

庭を見て回っていたザハトや、ウルバ、戸口を見張っていたギジムまで振り返って戻ってきた。

皆が揃うとジュダルは話し出した。

「皆ここまで良く<sup>っ</sup>随いて来てくれた。礼を言う」

「<sup>もったい</sup>勿体無いお言葉です」

代表してダーシュが答えた。身分から言って己が答えるべきだと思ったからだ。

「水場から西側の壁下に隠し通路の入口がある。皆

はそれを使ってアンケヌから脱出して欲しい」

「兄上も御一緒です」

「私は無理だ」

ジュダルは静かに否定した。

わたくし  
「私めの背にお乗り下さい。安全な所までお運び致します」

ほとんど無礼とも言える勢いでホイヤムが進み出てきた。

あの日、ぎょえん御苑で助けられて以来、ホイヤムは兄に仕えてきた。

奴隷の立場からも解放されて今では自由市民の身分を得ている。兄に対する忠誠心は絶対だった。

「そうしたいところだが……無理であろう……」

ジュダルは得意の皮肉げな笑みを見せたが、生気がないためにととても弱々しく見えた。

「この傷は深い。腹の奥からの出血だ……おそらく私は助かるまい」

兄らしい冷静な意見だった。その場に居る誰もが納得しただろう。

それに、ここに来るまでの間に皆そうではないかと感じてもらいたいだろう。

王太子は助からない。傷が重すぎる、と。

だから誰も言葉を発しなかった。言葉を発せないと思った。



「……いえ、医師に診<sup>み</sup>せなければ判りませぬ」

しかし、僅<sup>わず</sup>かな沈黙を挟んでザハトが強く否定した。

「太子様が助からぬなどと。あってはならぬことです」

「なるならぬの問題ではないのだ」

「なります。私も太子様に背中をお貸し致しましょう。立ち塞がる敵を切り払いましょう。なんとしても太子様には生き延びていただかなくてはなりません」

傲慢とも言える言葉だった。子供の言葉ではない。だがダーシュはザハトラしいと思った。

ザハトは兄を尊敬している。心底から尊敬している。その兄が死ぬことが許せないのだ。

だから覆そうとしているのだ。王太子の死を。現実を。運命を。

「この場の全員、太子様のために生命<sup>いのち</sup>を捨てて働く所存」

ダーシュは頷いた。ホイヤムが、ギジムとウルバも頷いた。

「ですからその様な弱気なお言葉はお慎み下さい。必ず助かります。アンケヌを出ればお味方を集めることも出来ましょう。今暫<sup>しばら</sup>くの御辛抱です」

ザハトの言葉をジュダルは優しい表情で聞いてい

た。

「ダーシュ」

不意に兄に名前を呼ばれて少し驚いた。

「何でしょうか？」

「ダナン族の所に行け。彼らなら力になってくれるだろう」

ジュダルはダーシュの方を向いた。真っ直ぐに見つめてくる。

瞳を合わせるのも辛い<sup>そ</sup>が、外らすのも辛くなる眼付きだった。

「お前は好きに生きろ。アンケヌに縛られるな。王になろうなどと考えなくてもよい」

「何と<sup>おおせ</sup>言うことを仰られますか！」

ザハトが叫んだ。大声を出してはいけないという状況も忘れて叫ぶほど、それは衝撃的な言葉だったのだ。

「アルシャンキが我らを滅ぼすというなら仕方ない。王がラムシャーンからヤンギルに代わったとて市民が安寧に暮らせればそれでよい」

ラムシャーンは王家の、ヤンギルは叔父の氏族名だ。

叔父ジヌハヌは父王に取り入り、力を蓄え、そして今夜叛乱を起こした。

兄上でさえ見抜けなかった。恐ろしい周到さだっ

たと言っていい。

「あの<sup>かんぞく</sup>奸賊に善政が敷けますものか。太子様、お気を確かに」

ギジムが怒りを込めて、しかし皆に聞こえる程度の声で吐き捨てた。

「ギジム、ウルバ、そしてザハト」

「はい」

三人が一斉に答えた。並んでジュダルの前に膝を着く。

「弟を、ダーシュを頼む。だが決して王にしようなどと考えないでくれ」

「何故ですかっ!!」

再びザハトは叫んだ。

潜んでいなければならないという状況を忘れてしまったかのようにだった。

それほどにザハトは混乱していた。

「アンケヌはラムシャーン王家のもの、王家が開き、王家が栄えさせ、そして今に至ったのです。奸賊に奪われるのを黙って見過ごすことが出来ましようか！」

「ザハトさま、お声を小さく」

初めてイーシャが口を挟んだ。女に<sup>たしな</sup>窘められてザハトの顔に怒りが表れた。

だが状況を理解出来ないほどザハトは愚かではな

い。怒りはすぐに羞恥へと塗り替えられて姿を消した。

「みなも太子様のお言葉をよくお聞き下さい。そしてその命に違わぬよう<sup>たが</sup>にお願い申し上げます」

イーシャが頭を下げた。彼女が面を上げるとジュダルは続けた。

「王は神が選ぶ者、アルシャンキがお選びになるのだ。人の身で定めて良いものではない。弟がもしも王足るべき器を備えているのならば、必ず神が弟を王になされるであろう。その時は……皆で支えてやって欲しい」

ジュダルが噎<sup>む</sup>せた。嫌な音がして口許から血が溢れる。

ザハトが顔を歪めた。ホイヤムが俯<sup>うつむ</sup>いた。ギジムとウルバは膝を着いた姿勢のまま動かない。だけど地に押し当てた拳<sup>こぶし</sup>が震<sup>ふる</sup>えている。

イーシャが優雅に、静かに兄の血を拭った。その動きには淀<sup>よど</sup>みがない。

何という強さかと思った。何という悲しさかと思った。

イーシャの動きを、その静かな表情をダーシュは美しいと感じた。

「ホイヤム」

「はい太子様」

「お前には特に感謝している。今までよく仕えてくれた……これからは弟に仕えて欲しいと言ったら、  
贅沢ぜいたくであろうか？」

「滅相めっそうもございません。誠心誠意お仕えさせていただきます」

ホイヤムは額を石畳に打ちつけて答えた。

「ザハト、お前は賢い。その賢さに足を取られぬよう気を付けよ。お前と弟がいつまでも友であることを願っている」

「誓います。私はダーシュ様の友として生き、決して裏切りませぬ」

ザハトもまた額を石畳に押しつけて答えた。

「ギジム、ウルバ、お前たちは勇敢な戦士だ」

「勿体無いお言葉でございます」

「弟たちを守って欲しい。ダナン族の許もとまで無事送り届けてやってくれ」

「必ず。生命いのちに代えましても……」

齒の間から搾しぼり出すようにして二人は答えた。

その言葉を聞くとジュダルは息を吐いた。

「……イーシャ」

「はい太子様」

「行けと言っても……聞かぬであろうな？」

「はい太子様」

イーシャははっきりと答えた。兄の命令に従わな

いと言いつつ切った。

だがダーシュに驚きはなかった。そうだろうと思った。

従順な、忠実な侍女であるイーシャ。

でもイーシャはそれだけの人ではないのだ。そのことをダーシュは知ってしまった。

「……では私の傍そばに居てくれるか？」

「もちろんでございます」

イーシャの声には微かすかな震えがあった。

だけどそれは恐れではないだろう。

「すまぬ。私はお前を手放せそうにない」

「それでようございます。わたくしは最後まで太子様のおそばに……」

小さくジュダルは笑った。

「良かった。断われたらどうしようかと……思ったぞ」

ぐっと背が曲げられる。イーシャが支える。兄はまた血を吐いた。

拭おうとするイーシャを制し、兄は己の手で血を拭った。

「ダーシュ、お前の剣をくれるか？」

「はい」

ダーシュは躊躇ためらわずに自分の小剣を差し出した。

王家に伝わる物であり、緑玉と黄金で飾られた剣だ

が、十分に実用性も兼ね備えている逸品だ。

ジュダルは剣を受け取るとイーシャに渡した。

「汝自身のためにこれを使うがよい」

ダーシュはその言葉に衝撃を受けた。王が自殺を命じる時の作法だったからだ。

罪ある家臣に名誉ある死を賜<sup>たま</sup>う時の作法なのだ。

だがイーシャに罪は無い。死ぬ必要など無いのだ。

「イーシャ、私たちと共に来る気はないか？」

思わずダーシュは尋ねた。死なせたくなかった。そして急に恐ろしく感じた。

自分はもう兄の死を受け入れている。イーシャまで死ぬことはないと感じたのはその<sup>しょうこ</sup>証拠だ……そう気付いたからだ。

「お前は、罪人ではないのだから」

何とか言葉を搾り出した。これでイーシャが考えを変えろとは思えなかったが、それでもそう言わずにはいられなかった。

「罪人ですわ。命に反してここに留まるのですから」

イーシャはにっこりと微笑んだ。いい笑顔だった。

「では私はあなたの罪を許そう。あなたは罪人としてではなく」

ここで己は言葉に詰まった。喉が腫れるように感じた。胸が痛くなった。

「……あなたは罪人としてではなく、我が兄の妻としてここに残って欲しい。受け入れてくれるだろうか」

イーシャの顔に驚きが拡がった。予想外の言葉を受けたという顔だった。

「そんな……滅相もございません」

「いや、いい考えだ。さすがは我が弟」

混乱しているイーシャを尻目にジュダルは夜空を見上げた。

「我が父祖を護り給たまいしアルシャンキ、シャル、そしてナイよ。ここなイーシャ・マニ・バハル・ナブ・サディク・アヌン＝アルハを我が妻に迎えることを誓う」

平常ならばあり得ないことである。身分が違いすぎる。

だが似合っていると思った。兄の傍には、隣に坐るべき女性はイーシャだ。彼女以外に考えられない。

「ほら、もう誓ってしまったぞ。お前も誓え」

イーシャは口許を覆っている。見開かれた瞳は、ジュダルを捕らえて放さない。

「早く。神々をお待たせするものではない」



ここは神殿ではない。正しい手順に律<sup>のつと</sup>ったものでもない。

だけどその場の誰一人、異を唱える者はなかった。

「……誓います」

イーシャは涙ぐんでいた。

それから一人ずつ、兄とイーシャに別れを告げた。

皆、王太子妃としてイーシャを扱った。

ホイヤムは泣いた。泣き虫のホイヤム。涙<sup>はなみず</sup>を流して泣いたが、兄の命令を守ると誓った。繰り返して誓い、壁に開いた隠し通路へ姿を消した。

驚くべきことにザハトも涙を流した。後にも先にも、ザハトが泣いたのはこの時だけだった。

ギジムとウルバは丁重に別れを告げ、怒れる精霊のような顔をしたまま通路へと入っていった。

最後はダーシュだった。

「……兄上、そして姉上」

二人を直視する事が出来ずに、自分の足許を見つめた。月の下、影になって何も見えなかった。

「ダーシュ」

兄が優しく名前を呼んだ。

「私たちを見てくれ。似合いの夫婦だと思うだろう？」

二人は手を取り合って微笑んでいる。

これ以上ないほど幸せそうに見えた。

「行け。そして生きる。お前にアルシャンキの御加護があらんことを」

「お二方にも、アルシャンキの御加護があらんことを……」

ダーシュは背を向けた。涙が止まらない。言葉を紡ぎ出せない。

胸が苦しい。二人の姿があまりにも悲しくて、美しく見ていられない。

「……お別れでございます」

それだけを震える声で搾り出すと、ダーシュは走った。

目の前に暗い穴がある。四角く切った墓所の入口に似ている。

この道はアンケヌの外に、西壁の向こうに通じている。

「行け。そして生きる。お前にアルシャンキの御加護があらんことを」

兄の言葉が消えずに、いつまでも胸の中に残った。

## 第二十六章 目覚め

通路の向こうは砂漠が広がっているはずだった。

あの時はそうだった。

涙に<sup>にじ</sup>滲む瞳で月の砂漠を見た。そして、すぐに敵が襲ってきた。

月光の下を早足で向かって来る兵士たちは、皆、剣を抜いていた。

悲しみを混乱が、混乱を恐れが塗り替えていった。

剣を抜かなくては。敵の喉笛を掻き切る剣を。

ダーシュは手を伸ばした。何か叫びながらウルバが小剣を差し出している。装飾の無い兵士の剣だ。今持つべき剣として望ましい。

<sup>つか</sup>柄に手を掛けて握り締めると妙な感触がした。柔らかい。ダーシュは驚いた。

目の前から月の砂漠が消えている。敵の姿もない。

大きな絵が目に入っている。<sup>さんさもり</sup>三叉<sup>かか</sup>銛を掲げた黒髪の男が描かれた絵だ。いつの間に場所が変わったのだろう。

何が起きたのか。だがすぐに事態が呑み込めた。

己は<sup>ガス</sup>暗殺者の毒に倒れたのだ。

握っていたのは剣の柄ではなくて布団だった。寝

台に横たわっているのだ。

「気が付いたわ!!」

ローゼンディア語の叫びが耳を打った。アイオナの声だ。

首を少し傾けて声の方を見る。アイオナが身乗り出してダーシュの顔を覗き込んできた。

「大丈夫？ 気分はどう？」

「良いとは言いがたいな……」

あまりにも弱々しい<sup>ひび</sup>罅割れた声に自分で驚く。

アイオナが水差しを口に運んでくれたので、飲もうとしたができず、口を湿らせる程度に水を吸った。

「話せる？」

アイオナは冷静だった。何日ぐらい己は倒れていたのだろうか。

「あなたは一週間目を覚まさなかったわ」

こちらの気持ちを察するようにアイオナが教えてくれた。

「ここはうちの商館よ。ディブロスの湾に面した海岸沿いにある館で、三階の客室に今あなたは寝ているの」

ダーシュは小さく息を吐いて微笑んだ。それを確認するようにアイオナは<sup>うなず</sup>頷いた。

「市当局にはあなたの滞在許可を出してもらった

わ。これでゴーサの傭兵団があなたの身柄を要求しても引き渡されることはないから安心して。あなたを襲った男に関しては捜索中だけれど、こちらはあまり期待しないでちょうだい。ほとんど情報が無いの」

さすがだと思った。なんと頭の回る女だろう。

ローゼンディアの女が皆このように賢いのならば、それはアウラシールの男を伴侶には選ばないだろう。自分の人格を認めず、ただ豪華な家具のように家に収まっていると言われて大人しくしていらるはずがない。

「……世話をかけたな」

「心配しなくても対価を請求したりはしないわ」

「俺もそれを心配してた」

アイオナが微笑んだ。ダーシュも笑みを返した。泣かれるよりはずっといい。

それとも己が倒れている間に泣かせたのだろうか。いや、それは己の自惚れうぬぼというものだろう。

お互いの間に親近感が無いとは言わないが、それは恋愛とは違うものだ。

アイオナはそう思っているはずだ。

何故だか胸にしんとしたものが広がった。

「どうしたのかしら？ 目覚めたばかりで疲れてるの？」

心配げに尋ねられた。<sup>せいさい</sup>精彩の無い顔をしていたら  
しい。

目覚めたばかりで精彩も何もあったものではない  
と思うが、ダーシュは努めて明るい顔を作った。

「いや、何か腹に入れる物が欲しい」

「今用意させるわ」

アイオナが離れた。ダーシュは天井を見つめた。

天井画の男は見事な黒い髭を持ち、長い黒髪を<sup>なび</sup>靡  
かせ、三叉銛を手にしてしている。おそらくローゼン  
ディア人の海神ゼーフルだろう。

伝説によればディブロスを開いた神だと言うが…

…

「王子様!!」

<sup>すっとんきょう</sup>

素頓狂な声が入口の方から聞こえてきた。

誰だかはすぐに判った。ホイヤムだ。

ダーシュが命じた通りにディブロスまでやって来  
たのだ。

ぱたぱたと寝台の<sup>そば</sup>傍まで駆け寄ってくる。

「王子様！ お目覚めになりましたか！」

「ああ、あまり大きな声を出すな。頭が割れそうに  
なる」

「おお、申し訳ございません」

「心配を掛けたな」

ダーシュが<sup>ねぎら</sup>労いの言葉を口にするかしないかのう

ちにホイヤムは泣き始めた。

「ううっ……王子様あ……わたくしめがどれほど…  
…」

「判った判った。お前が心配してくれたのはよく判った」

だから泣くな。ホイヤム。

泣き虫のホイヤム。だが決して勇気や力に劣るわけではない。

ホイヤムは頼りになる男なのだ。

「お前が来てくれて助かる。ダナン族の長老は何と言っていた？」

「はい。やはりそうだったか、と仰せおおでありました」

ホイヤムは涙を拭ぬぐってそう報告した。

「なるほどな」

ダーシュは頷きつつ考えた。長老はダーシュがザハトに追い落とされるのを予期していたということだろうか。それとももっと深い意味があるのだろうか。

どちらにしてもあの長老が簡単にザハトを王と認めるとは思えない。

ザハトとしても扱いかねているのではないだろうか。利益や脅しで動かせる人物ではないのだ。

ダーシュは長老の顔を思い出そうとした。もう何

年も見えていないが忘れられるものではない。

ダナン族の長老は日焼けした皺<sup>しわ</sup>だらけの顔をして  
いた。

長老の顔は厳しさとも無表情とも言いがたい何か  
を形作っていて、容易に話しかけるのを躊躇<sup>ためら</sup>わせる  
威厳を備えていた。

まるで全ての感情を表した末に辿<sup>たど</sup>り着いたような  
独特の顔であり、何を考えているのかまるで読めな  
かった。

薄く煙を吹いたような青い瞳は何も語らず、逆に  
その瞳を向けられた者の方に語らせる力を秘めてい  
た。

アンケヌが落ちた後、ダーシュたち一行は追っ手  
の兵から何とか逃れることに成功した。

苦労の末にダナン族のオアシスに辿り着いたのだ  
が、それも束の間、それから間もなくしてヤンギル  
族が襲ってきた。疲れと悲しみを癒す間もなかつ  
た。

戦いの中、ギジムはダーシュを庇<sup>かば</sup>って死んだ。

体に幾筋<sup>いくすじ</sup>も矢を立てられながらもダーシュを抱え  
て走り、駱駝の背に預けると、その場に倒れた。

屍体は守ってやれなかった。ヤンギル族が刻んで  
ウルガ<sup>えさ</sup>の餌としたと聞いた。

ダナン族と共同してどうにかヤンギル族を撃退し



たものの、ダナン族の受けた被害は大きかった。

長老に言われるまでなく一行はオアシスを離れることを決めたのだ。

ダナン族のオアシスを離れる前に、ザハトは黄金の首飾りを支払って旅の魔術師を雇った。

ザハトの母が王家から嫁ぐ時に持って行った品で、今では形見となった品だった。

それを支払ってまで魔術師を雇ったのは、散り散りになってしまったギジムの魂を呼び集めるためだった。

「俺は忘れぬぞ」

炎を見つめてそう<sup>つぶや</sup>呟いていた。あの激しさこそが己には無かったものだと思う。

だからザハトが王になったのだ。

<sup>ふくしゅう</sup>復讐の念と、自身が正統たることへの自負、そのことに対する絶対的な忠誠。

それがザハトを王位へ押し上げた。

アンケヌの民にとってもザハトが王であることは悪いことではないだろう。

「ザハト様は現在は摂政ということでアンケヌを治めておられるようです」

「王になってはいないのか」

「はい」

<sup>ふ</sup>腑に落ちない話だった。ダーシュに濡れ衣<sup>ぎぬ</sup>を着せ

て殺そうとまでしておいて、何故王位に就<sup>つ</sup>かないのか……。

ひよっとするとダーシュがディブロスに保護されていることを知っているのか。

アイオナの話では自分は一週間寝込んでいたという。その間にザハトが情報を掴<sup>つか</sup>んだとしても不思議ではない。

何にせよザハトはまだ、念願していたであろう王位には就<sup>つ</sup>いていないということだ。

入口の扉が開く音がしてアイオナが入ってきた。

「あらホイヤムと話していたの？」

アイオナはイデラ語で話した。ホイヤムはローゼンディア語を話せないからだ。

ダーシュはホイヤムの助けを借りて上体を起こした。背骨が鳴る音がして、ホイヤムが驚いて動きを止めた。

「痛くはないから心配するな」

「そうよ。この人がそう簡単に死ぬものですか」

聞き慣れた冗談を耳にして気持ちよかった。

アイオナは笑っている。

目覚めた時に泣かれるかと思ったがアイオナは泣かなかった。

その強さがいい。その強さは自分に喜びと力を与えてくれると思った。

部屋の中にはスイサの姿もあった。

「旦那様！」

「ああ」

もう旦那様ではないのだがなと思いつつ返事をした。

「ご無事で！ よくぞご無事で！」

スイサはとても興奮してしまい泣きだした。それを見ているホイヤムも涙ぐみ始めた。

左右から泣かれては堪<sup>たま</sup>らない。ダーシュは困ってアイオナを見上げた。

アイオナは吹き出した。

「その状態では逃げるわけにもいかないものね」

「ああ、助けてくれると嬉しい」

「どうしようかしら」

アイオナは考えるように腕を組んだが、無論、振りだろう。

「俺を介抱してくれたんだ。介抱ついでにそれくらいしてくれてもいいだろう？」

とりわけ情けない顔を作ってアイオナに頼むと、アイオナは明るい声で笑った。

「さあさあ。ダーシュはまだ病<sup>や</sup>みあがりよ。急がないでも後で幾らでもお話は出来るんだから、今は、二人きりにしてちょうだい」

アイオナは途中僅<sup>わず</sup>かに言葉に詰まった。それを

ダーシュは聞き逃さなかった。

二人きりにしてくれ、と言う代わりに何か言おうとしたのだ。

それは何だったのか。夫婦水入らずにしてくれと言うつもりではなかったのか。

都合の良い解釈かも知れない。

だがそう思うのも悪くはない。不快だとは思わない。

アイオナが二人を部屋の外に出すのをダーシュはじっと見ていた。

「……何見ているのよ」

「お前は素晴らしいと思ってな」

「それを言うなら美しいでしょ？」

「そんな当たり前の言葉は言っても意味が無いさ」

一瞬アイオナはきょとんとした。意味が解らないという様子だったが、すぐに顔を赧<sup>あか</sup>らめた。

「……きゅ、急にお世辞を言ってどういうつもり？」

「世辞ではない。お前は素晴らしい」

不思議と素直な言葉が出てきた。心が語るべき言葉、それを口から自然に出している感じだった。

アイオナも次の言葉を待っている。ダーシュは自分の心に任せて、そのままを口にするつもりだった。

「アイオナ……」

「元気になって何よりです。話せますか？」

いきなり扉が開いてヒスメネスが入ってきた。ずかずかとダーシュの傍そばに歩み寄ってくる。

「目は死んでいませんね。話をしても大丈夫そうですね」

ヒスメネスの背後でアイオナが口をぱくぱく動かしている。

あまりの急展開に、何か言おうとしているのだが言葉が出てこないといった様子だ。

それが妙にももしろいのでダーシュは笑った。途端にアイオナはむっとしたような顔になった。怒ったのだろう。

「どうしました？」

ヒスメネスが振り返って尋ねた。

「……なんでもないわ」

「そうですか？ ひょっとして何か大事な話をされていませんか？」

「いいえ！」

アイオナは強く否定した。そのままそっぽを向いてしまう。

何だか気の毒だったが仕方がない。今はヒスメネスを相手しなければならない。

「よく俺の前に顔を出せるな」

開口一番、ダーシュは文句をぶつけた。

実際文句はあったのだ。自分と手を組むような態度でいながら、いきなりザハトに寝返ったのだから。

「出しますとも。あなたを助けたのは私とお嬢さんなんですから」

「俺をザハトに売っただろう？」

「ええ」

ヒスメネスは悪<sup>わる</sup>怖れもせずにあっさりと認めた。

「ですがよく思い出して下さい。あなたが逃げられるように監視は緩めておいたはずですよ」

「門の所で護衛に取り囲まれたぞ」

「それは正門から堂々とするような真似をされるからですよ。代わりに日々あなたが屋敷を脱け出すのは随分と楽だったと思いますが。まさか本当に屋敷周りの警備に手抜かりがあったとお考えになられているのではないでしょうね？」

「では駱駝を連れて行ったのは何故かな？」

「それはザハト殿への手前、ある程度の誠意は見せておかなければなりませんしね。仕方のないことと割りきっていただくしかありませんね」

ヒスメネスはにこやかに言い切った。

「何故俺を見限った？」

「見限ってはおりませんよ。見限っていたらあなた

を助けたりはしません」

そう言われてダーシュは言葉に詰まった。

「あの状況ではザハト殿に協力するしか道がなかったのはあなたにもお解りのはずです。あなたもまた、アンケヌ市内を歩き回って情報を集めておいでだったのですから。私は店が無事に生き残ることを最優先したまでです。その意味ではあなたを裏切ったわけでも、ザハト殿にお味方したわけでもありません」

しゃあしゃあ

洒々という。初めて会った時から感じていたことではあるがこれで確信した。

自分とヒスメネスとは反りが合<sup>そ</sup>わない。

どうにもこの男の考え方、行動が気に入らない。

始めから筋が通っているだけにますます気に入らないのだ。

「お前は嫌な奴だな」

溜息と共にダーシュは言った。

「あなたに好かれようとは思っていませんのでご心配なく」

「二人ともそれくらいにしといたら？」

アイオナが割って入った。

「ヒスメネスも一言くらい謝ってもいいんじゃないくて？　ダーシュとザハトを天秤に掛けたのは確かなんだし」

「天秤に掛けたのではなくて、今現在掛けていますよ。お嬢さん、間違わないで下さい」

「こういう男だ」

ダーシュは親指でヒスメネスを指した。

「俺としても謝罪を求めるつもりはない。お前の言い分も解るしな。何よりお前に謝られても気分は霽れん。霽れるどころか不安になる」

「だからダーシュもやめなさいよ」

アイオナに言われてダーシュは軽く両手を上げた。降参を示した。

「そうですね。ただのお喋りならばダーシュ殿が完全に癒えてから幾らでも出来ますからね」

「それで何の用なの？」

「ええ。ダーシュ殿も目覚めたことですし、次の手を打ちましょう」

「あなた何か考えがあるのね？」

「はい。ですがこれにはお嬢さんにもご協力していただくかねばなりません」

「協力するわよ。もちろん」

「おい、迂闊にこの男にそんなことは言わない方がいい……」

小さな声でダーシュは口を挟んだが、アイオナには聞こえてないらしい。

「ご協力いただけますか。では早速準備を始めま



す」

「それで、何をするのに？」

「ダーシュ殿の葬式です」

ヒスメネスは澄まして言った。

## 終章 契約延長

確かにダーシュが死んでしまえば暗殺者は追って来なくなるだろう。

ザハトも何か企むことはなくなるはずだ。

だがこの計画には大きな欠点がある。

それは……自分が未亡人になってしまうということだ。

実際には結婚もしていないのに、それを飛び越していきなり未亡人にされてしまうというのは、どうも納得出来ないものがある。

しかしこの計画が有効なことは理解出来る。素晴らしい計画だと言ってもいいだろう。

「お前が嫌なら断わってもいいんだぞ」

ダーシュはそんな優しい言葉を掛けてくれた。

目覚めてからのダーシュは優しい。単にまだ力が出ないだけかも知れないが。

結局、アイオナはこの計画を受け入れることにした。

「偽の葬式ですからね。あまりお金を掛けずに済ませたいところですが、曲がりなりにもお嬢さんの夫ですからねえ……あまり簡略に過ぎるのも問題ですし」

ヒスメネスは葬式の注文書を作成しながらそんな

ことをぼやいていた。

ホイヤムとスイサにも事情を説明した。二人は納得したし、口も硬いだろうから大丈夫だ。商会の使用人たちにも事情を話して協力してもらったが、こちらはヒスメネスに任せた。

もちろん全ての事情を説明しはしなかっただろう。

商会の者たちは皆、信用出来る。大丈夫だ。この計画は上手くいく。

「計画が上手くいったとして……俺はどうすればいいのだ？」

「一旦、ディブロスを離れた方がいいかも知れないわね」

死んだ人間が市内を彷徨うろっしているというのは、いかにも始末が悪い。

「わたしも一度マンテッサに帰るつもりだし……よければあなたも一緒に来る？」

勇気を振り絞ってそう言うと、ダーシュは真面目な顔をして頷いた。

「有り難い。そうさせてもらおう」

素直なのは嬉しいが拍子抜けしてしまうのも確かだ。

だが話が簡単に進むことに喜んでばかりもられない。

ダーシュを連れて行くとなれば、父や母に会うことも考えなくてはならないからだ。

無論自分がではなくてダーシュがだ。

正直不安ではある。偽装とはいえ結婚もしていた相手を紹介するというのは勇気が要る。

けれどこのままダーシュをディブロスに置いておくことは出来ないし、一騒動を覚悟で遣り遂げるしかない。

しかしそれから程無くして、アイオナのそうした心配事を一挙に解決させる出来事が起こった。

葬式の準備が始まった日の昼のことだった。店に早荷が届いたのだ。

「お嬢様にお手紙が届いてますよ」

使用人がそう言って蜜蝋で固められた手紙を持ってきてくれた時に、もう嫌な予感がした。

案の定父の印章が捺してある。蜜蝋を剥がして中を読むと、予感は確信に変わった。

手紙を右手に握り締めて、早足でダーシュの部屋に向かった。

ダーシュは相変わらず寝台に横になったままで、日がな一日自分やホイヤムと話したり、本を読んだりしている。療養らしい生活をしているのだ。

まだ目覚めて何日も経っていないのだから当たり前だが、日、一日と元気になってきている。

「ダーシュ！ ちょっといいかしら？」

アイオナは勢いよく扉を開けて中に入った。

「……どうした？ そんなに慌てて」

「父様が来るわ」

自分でも慌てているのは分かっていたが、他に言いようがない。

「それがどうかしたのか？」

不思議そうにしているダーシュに対して激しいもどかしさを感じた。おそらくそれが顔に出てしまったのだろう。

「お前の父親は悪霊か何かのように娘に嫌われてるのか？」

ダーシュは<sup>あき</sup>呆れたような顔をした。

「冗談を言ってる場合じゃないわよ。あの父様がディブロスに来るのよ？」

「ふむ……そんなに大変な事なのか？」

アイオナは天を<sup>あお</sup>仰いだ。豪華な天井画が目に入る。海神ゼーフル、その勇ましい姿が目に入る。だけど助けにはならない。

そうなのだ。ダーシュはまだ一度も父に、ファナウス・メルサリスに会っていない。

そのこと自体には幸も不幸もないのだが、今の状況を考えると父がこの商館にやって来るのは非常にまずいと言わざるを得ない。

「父様は……常識や何かを蹴倒<sup>け</sup>して生きているような人なのよ」

「ああ、それはお前を見ていると何となく判るな」

アイオナはダーシュを怒鳴りつけたい気持ちを抑えた。

「……とにかく、わたしが偽装結婚をして、そのあげく偽装未亡人になろうとしてるなんて知れたら大変な事になるわ」

「そんなに恐い父親なのか？」

「恐くはないわ。凄<sup>すご</sup>いだけ」

ダーシュは首を捻<sup>ひね</sup>った。理解できぬらしい。

ああ、ダーシュと父を正面から向き合わせてみたい。全ての事情を話した上で。

きっと大変なことになるだろう。

砂漠には時に隊商を吹き飛ばすほどの竜巻が起こることがある。

だけどそんな竜巻も去ってしまえば大気は爽<sup>さわ</sup>やかになり青空も広がる。灼熱の日射しは決して優しくはないけれど、頭上に広がる青一色の天空の清<sup>すが</sup>しさは何物にも代え難い。

それは素晴らしいことではないだろうか。

危険な誘惑が頭をもたげてきたが、アイオナはそれを振り払った。

竜巻は過ぎ去った後が爽やかなだけで、通過中は

とんでもないことになるのだ。

人が死に、駱駝が死に、荷物は吹き飛ばされ、口の中は砂にまみれる。それはとんでもないことだ。

「……えーと、あなた本当に死んでみる気はない？」

葬式が本物になってしまえば全てが隠蔽できるではないか。

「お前自分が何を言っているか解っているのか？」

ダーシュが心配そうな目を向けてくる。

確かに混乱している。落ち着かなければならない。

アイオナは額に手を当てて考えを<sup>めぐ</sup>回らせた。

「……なあアイオナ」

「何よ。今必死で考えてるんだから邪魔しないでちょうだい」

「俺に考えがあるんだが」

アイオナはダーシュの方を見た。意外な提案だと思った。一体ダーシュにどんな考えがあるというのだろうか？

「俺と結婚するんだ」

その言葉が心に<sup>し</sup>しみ込むまでに少し時間が掛かった。

理解すると顔が<sup>あか</sup>赧くなるのを感じた。

「ばっ、馬鹿じゃないの!? これから葬式をしよう」と

いう人間が何をっ……！」

「まあ聞け。お前の父親が来ると言ってもまさか葬式の最中に来ることはあるまい。葬式をさっさと切り上げて、その後は俺を夫として紹介すればいい。店の連中に口止めをすれば誰にも暴露ばれないだろう。いい考えだと思うがどうだ？」

アイオナはぽかんとしてダーシュを見た。

嫌味も何もなく、あまりにも直接的な提案に釈然としないものを感じる。ダーシュらしくない。やはり寝込んでいたために弱っているのだろうか？

「そんな疑わしそうな目で見ると……俺だって恩義は感じるさ。お前には世話になった。こころで一度恩返しをしておかないと寝覚めが悪い」

「……心を入れ替えたわけではないのね」

「どういう意味だ？ とにかく俺に出来ることなら協力するぞ」

アイオナはじっとダーシュを見た。父の船が着くまであと一週間から十日はかかるだろう。いや場合によってはもっとかかるかも知れない。何せあの父なのだ。

その間にダーシュは歩けるくらいには快復するかも知れない。いや快復するだろう。

するとこの計画は上手くいくかも知れない。

「……つまり、契約の延長をするというわけね？」



「そう取ってもらっても構わない」

お互いに、相手を見つめるのを避けていた。アイオナは照れ臭くてダーシュをきちんと見られなかったし、ダーシュの方でも視線を窓の外に逃がしているようだった。

「……そうね、それがいいかも知れないわね」

「なら決まりだな」

ダーシュは得意そうに頤<sup>あご</sup>を反<sup>そ</sup>らした。

「安心しろ。お前が恐れてるような事態にはならんさ」

「だといいのだけれど……」

「必ず役に立ってみせるぞ」

ダーシュはやけに乗り気である。やはり目覚めてから変だと思う。あの毒には人の性根を叩き直す薬でも混じっていたのかしら？ そんな風に考えてしまう。

「ではさっそく夫婦らしくなるように打ち合わせをしなくてはな」

「その前に葬式の準備よ」

アイオナは疲れたように言った。まずは葬式。

<sup>せいぜい</sup>精々悲しんで年若い未亡人を演出して見せなくてはならない。それだけでも面倒臭いのに、その後に竜巻が来る。

「また変な動物を連れてきたらどうしようかしら…

…」

「お前の父親は動物を飼うのが趣味なのか？」

「ええ、<sup>あまた</sup>数多ある趣味の一つね」

アイオナは乾いた笑いを放った。

「夜中に<sup>ひょう</sup>豹に鼻面を舐められてご覧なさい。寿命が三年は縮むわよ」

「猛獣を放し飼いにするのか。それはいかんな」

「ええ、ぜひ本人に言ってちょうだい」

どうせ無駄だろうが。母でさえ無理だったものが他の人に出来るわけがない。

アイオナの知る限り、母ほど父の<sup>ききょう</sup>奇矯な振る舞いを改めさせるべく努力してきた人はいないが、いまだ目的を達成するには程遠い状態にある。

また、商会の人たちは父の奇行を一向に<sup>や</sup>止めさせるつもりはないらしい。

どう見ても被害者なのに何故放置しているのか理解に苦しむが、そこは父の不可思議な魅力の為せる<sup>わざ</sup>業なのかも知れない。

「なに安心しろ。見事にお前の……その、夫の役を務めてみせるさ」

ダーシュは鼻の頭を搔きながらぼそぼそと言った。そんな自信無さげな言い方では<sup>かえ</sup>反って不安になるではないか。

「とにかく力を合わせてこの危機を乗り越えましょ

う。わたしたちのためだけではなく、商会の皆のためでもあるわ」

アイオナはダーシュの手をしっかりと握った。  
ダーシュも握り返してきた。

今ごろ竜巻はミスタリア海の船上にあるだろう。

海上に砂嵐というのも変な話だが、その砂嵐は東を見つめ、娘に会うことを楽しみにしているだろう。

……会いたくないわけではないが、やっぱり、災害は災害なのだ。

第一部・了  
第二部へつづく



## 奥付

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などとは、一切関係ありません。

※この作品を、個人的に楽しむ範囲を越えて、無断で、複製、転載、配布、改変、販売等を行うことを禁じます。

=====

=====

■作品名：偽装の結婚 第一部

■著作者：琴乃つむぎ / WordsWeaver

■初版：2006-04-01

二版：2007-04-30…196枚加筆修正、新規エピソード追加

三版：2008-06-20

四版：2008-07-27

五版：2009-06-04

六版：2013-11-25

七版：2013-12-11

八版：2013-12-13

九版：2013-12-14…誤字修正

十版：2013-12-18…誤字修正

十一版：2013-12-20…誤字修正

十二版：2013-12-23

十三版：2014-01-08…62枚加筆修正、新章として  
「第十九章 地下通路」追加

十四版：2014-01-09

十五版：2014-02-06

十六版：2014-07-27…誤字修正

十七版：2014-09-04

十八版：2015-02-01

十九版：2015-03-17

二十版：2015-03-19

二十一版：2015-04-02

二十二版：2015-05-31

二十三版：2015-06-02

二十四版：2015-06-08

二十五版：2015-06-18

二十六版：2015-06-23

二十七版：2015-07-03

二十八版：2015-11-23

二十九版：2016-03-14

三十版：2016-08-05

■ 掲 載 サ イ ト : WordsWeaver

<http://wordsweaver.com/>

=====

=====